

ガールズ&パンツァー 独眼車長の奮進

綾春

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中学三年生の大会で、双子の妹と右目を同時に失った少女、三城夏紀。自然と遠ざけていた戦車道に、ある目標を掲げて再び舞い戻る。

目指す舞台は3両対3両で繰り広げられる『三叉戦』をルールとする新たな大会『冬季杯』の決勝戦。そして冬季杯をキツカケに、夏紀は再び戦車にのめり込んでいく。

※現在改訂中です

目次

突撃！アウトバーン女子学院

過去の話です！ | 1

決断のときです！ | 9

戦車部の仲間です！ | 20

練習試合です！ | 33

歩兵戦車です！ | 46

終わりは始まりです！ | 59

ライバルたちです！ | 65

新たな戦いです！ | 72

開幕！『冬季杯』！

嵐の前の静けさです！ | 83

高機動戦術です！ | 93

『熱い』戦いです！ | 102

戦の手練たちです！ | 112

第2回戦、そして未来です！ | 119

ホワイトアウトです！ | 127

ボレー作戦です！ / 未来のヴィ

ジョンです！ | 140

ブリティッシュ・スナイパーです！

151

最後の戦いです！ | 162

源流です！ | 170

ドッグ・ファイトです！ | 181

姉妹です！ | 189

炎が消えるときです！ | 202

再編！戦車道チーム！

次の目標です！／道場破りです！

210

『見島流』です！

誇りです！

復讐心です！

新学期です！

戦いの予感です！

知波単学園です！

一転攻勢です！

新戦力です！

海を往く戦車隊です！

デルタ攻略戦です！

クロスカウンターです！

激闘！試錐学園！

試合の余韻です！／始動！試錐戦車

隊です！

3年間です！

重たき荷物です！

思惑です！

強固なる戦車隊です！

反撃の狼煙です！

大物喰らいです！

決戦の海岸です！

終止符の試合です！

313

303

291

280

269

262

251

241

233

217

325

478

461

444

429

413

399

379

354

337

突撃！アウトバーン女子学院

過去の話です！

チャイムの音が鳴り響く。憂鬱な授業は終わり、学生たちはその苦悩から開放される。もちろん私もそうだ。4限目が終わったたまたた今から、私たちのつかの間の休息、昼休みだ。

「夏紀さん、今日は食堂ですか？」

そうおしとやかに聞いてくるのは、私の親友、四条 華蘭さん。優しそうな笑顔はどことなく育ちの良さを予感させる。金髪のボブカットは生まれつきで、外国人とのクォーターなんだとか。

「いや、今日はお弁当持ってきてるよ。華蘭さんは？」

「私もです。母が珍しくお弁当を作ってくれたので」

「そっか。じゃあお弁当食べよっか。どこで食べる？」

私の通うこの学校：『アウトバーン女子学院』は非常に規模の大きい高校で、広い敷地には様々なエリアがある。この学園棟エリア、少し歩けば花壇や池、噴水などのある庭園エリア、逆に歩けば飛行甲板から海を一望する展望デッキもある。

「そうですねえ……今日は、こいで」

「ん、じゃあ机くつつけよっか」

彼女は私の前の席に座り、机を前後反対に向けて私の席にくつつけた。そして向かいの席に座り、弁当を広げる。彼女のお弁当はいつもに増して豪華。今日はサンドイッチをメインにした洋風の弁当らしく、色とりどりの野菜や肉、卵などが目に鮮やかだ。私の弁当はいったって普通のもの。この学園艦の名産品である『しそわかめふりかけ』をふりかけたご飯、それに焼き魚やサラダなど、和のテイストを含んだ弁当だった。

「いただきます」

二人でそう言い、弁当に手を付ける。いつ食べてもこのふりかけは美味しい。そんなことを考えていると。

「あ、そういえば……気になる記事を見つけたんです。読みますか？」

「へー、なになに? 見せてー」

そう言って彼女がカバンから取り出したのは、雑誌。戦車道の専門誌、それも学生をメインとする『月刊 タンクガールズ』だ。いろいろな高校の活動実績や戦績などを月替わりでインタビューして回る「突撃! 隣の戦車道!」が人気を博しており、その他戦車道を題材とした漫画や、関係用品の販促などがある。

……そんな人気の雑誌だが、私はその表紙を見た瞬間、手から力が抜け、箸を落とし

てしまった。

「ご、ごめん… やっぱいいや」

「… そうですか。ごめんなさい、嫌なことを思い出させてしまって…」

「い、いいのいいの。気にしないで？」

私は、戦車道にトラウマがある。戦車を見るだけで気分が悪くなるほど、とびきりキツイトラウマが。

「とにかく食べようよ。時間が無くなって食べれなかった！とかじやもつたいいし」

「そうですね。もつたいいですよね」

そう言って彼女もサンドイッチに手をつけた。

それは一年半ほど前のこと。中学三年生の夏の出来事だった。

私は地元の中学校『維新中学校』の戦車道部、その隊長として、公式戦の決勝戦で戦っていた。相手はソ連戦車を中心とした部隊を組むライバル校だった。戦闘開始直後、私

のミスで敵に包囲されてしまう。そして数を10両から4両まで減らした私たちは、何とか敵の戦車：T-34を10両から6両まで減らし、撤退に入っていた。

多少のリスクは覚悟でガケを行く道を選択、出来るだけ早く市街地へとたどり着こうとした。しかし、その戦略はまたも命取りとなり、後続の2両が次々と撃破され、私の乗るフラッグ車「M4中戦車」と、妹：夏摘の乗る副隊長車「M3中戦車」のみになってしまう。

副隊長車は山道の途中にある、若干道幅の広くなっている離合場所で機動戦を展開、敵二両を撃破して私に続いた。そのとき、敵車両の榴弾が副隊長車の至近に着弾。ガケを挟りとり、M3中戦車は宙へと投げ出された。

「夏摘っー!」

その叫びは轟音にかき消されたが、妹の口が『諦めないで』と動いたのがはつきりと感じた。私は諦めてはいけない。そう思い、ガケに吸い込まれるM3中戦車を背に退却を急いだ。

市街戦に持ち込み、敵2両をなんとか撃破。しかし、敵2両がM4の前後を取った。その時点で車内に隠れなければならないのだが、私は妹の一言を胸に、最後の賭けに出た。

砲塔を回転させ前方のT-34に指向しつつ、車両を斜めにして『昼食の角度』を取

り、T—34の高火力主砲をなんとか凌いだ。そして前方のT—34の砲塔の境界部に徹甲弾を打ち込んで撃破。後方のT—34を狙おうと車両を旋回させた。その瞬間、砲塔前部に徹甲弾を被弾。装甲こそ貫通しなかったが、私は顔面に鉄片の直撃を貰った。顔面から血をだらだらと流しながら、T—34に突撃を敢行——敵戦車の状況が見えないため、確実に撃破できる接射を指示した——し、撃破した。

私たちの勝利で戦闘が終わると、私は救急車ですぐに病院へと運ばれたらしい。そこからは記憶がなく、目が覚めた時には試合から3日後の病院のベッドだった。そこで母親から『妹が行方不明だ』という一言を聞いたのだった。その日は一日中泣いたのを覚えていいる。翌朝起きてようやく気がついたのだった。——右側の視界が真っ暗な事に。

そして私は『戦車恐怖症』になった。妹の行方は今でも分かっておらず、戦車道協会からの慰謝料は貰ったが、金で解決することではない。妹の命はもう……

そんなことを考えていると、5限も6限もともに授業を受けられなかった。震えだす体をなんとか押さえ込み、溢れようとする涙を必死に堪えた。苦痛の午後を終え、私は家へと急いだ。いつもは華蘭さんと寄り道をすることが多いが、今日はそんな気分にはなれなかった。

家に帰ると、まるで死んでいるかのように机に突っ伏せていた。あらゆる感情のネットワークを遮断して、何も考えず、ぼーっと……

午後7時過ぎ。すっかり暗くなった時間に、携帯が震え、メールの着信音が鳴る。そのメールの差出人は、中学時代、同じ戦車の砲手をしていた、山野さんだった。

『こんばんは！いきなりメールしてごめんね。早速本題んだけど、今月のタンクガールズ読んだ？気になる記事があつてね。もしかしたら三城さんの妹さんじゃないかって……間違いだったらごめんね。また今度遊ぼうね!』

私は椅子を鳴らして立ち上がった。昼休み華蘭さんが見せようとしていたのはその記事だったのだろうか？

いてもたってもいられず、家を飛び出した。向かった先は街の本屋。そこには絶対にタンクガールズを置いている。そう思ったからだだった。しかし、私の予想に反して、タンクガールズは売り切れていた。こういう時に限って何故売り切れなのだろうか。街に書店はここだけだ。ここに置いていない本は取り寄せてもらうか、通販で買うか、接岸した時に丘に買いに行くしかない。

「……そうだ、華蘭さんの家に行けば」

私は本屋を飛び出して、走った。華蘭さんの家はそんなに遠くない。全力疾走で5分くらいの場所だ。

たどり着いたそこは、大きな和風の家。門の奥には彼女の母親が乗っていたという『八九式中戦車』が置いてある。インターホンを鳴らすと、彼女の母親が応答した。

「はい、四条ですが」

「華蘭さんの…… クラスメイトの…… はあつ…… 三城です…… つ。あのつ…… 華蘭さんは」

「…… 少々お待ちくださいね」

それから30秒ほど経った。ほんの30秒だが、今の私にはとてつもなく長く感じられた。

「…… どうしました？こんな時間に……」

「華蘭さん…… つタンクガールズ、見せて！」

「…… いいですよ。どうぞ、上がってください」

彼女について家にお邪魔する。木の匂いのする廊下を進むと、突き当たりの障子の向こうに彼女の部屋があった。かなり広い。

「はい、今月のタンクガールズです」

今週号の表紙は、聖グロリアーナの車両たちだった。そこからパラパラと流すように読んでいく。すると…… あった。中程のページ、『突撃！隣の戦車道』のページだ。そこで『シャーマン ファイアフライ』のキューポラから顔を出している少女。私によく似

た顔立ちの少女は、寸分の違いもなく。

「……夏摘……？」

私の、妹そのものだったのだ。

決断のときです！

……成長した妹の顔を見た。最後に見たときから2年半しか経っていないのに、妙に大人びた表情をしていて、なんだか自分が妹になったような気分になった。

雑誌の写真に写る彼女の名前は『四十伽よととぎ夏摘なつみ』。そこに『三城』の名前はなかった。

「四十伽って誰なんだろ……」

「恐らく、今養ってられている親の苗字ではないでしょうか。それから察するに、妹さんは……」

「多分、記憶を失っている……」

落下したガケ。そこは相当な深さの谷だった。M3中戦車は途中で岩に引つかかり止まったが、恐らく夏摘はそのまま転落し、谷を流れる激流に吞まれてしまったのだろう。確かにそれなら記憶を失ってもおかしいことはない。

「とにかく会ってみないと話は進みませんね」

「どうやって会うか……何かいい方法はないかなあ」

「なら……これなんてどうですか？」

そう言って華蘭さんが見せてくれたのは、タンクガールズの別のページ。そこには大

きな橋、並べられた三両の戦車、海が写った写真。そして華蘭さんが指をさしているのは、その見開きページの右上『冬季杯』という文字だった。

「『冬季杯』って何…?」

「冬季杯っていうのは…夏紀さん、戦練專って知ってます?」

「知ってるよ。例の新設校だよね」

戦練專。同じ山口県の下関市に本拠を置く高校で、今年できたばかり。なんでも武道のプロを育成するための学校なんだとか。もちろん戦車道とて例外ではなく、これからの全国大会において相当な驚異となることは明らかだった。

「はい。その戦練專が運営する新しい大会で、3両対3両で対戦する『三叉戦』トライデントというルールを採用しているらしいです」

「へえ…三叉戦ねえ…それだと高機動戦車が有利になるんじゃない?」

「そうですね。だからこそ、これがチャンスなんですよ」

その一言に、私はピンと来ることはなかった。疑問だらけで首をかしげていると、彼女が続けた。

「『源流』の高機動戦術に、このルールはピッタリじゃないですか」

「…ああ!」

源流。それは私の先祖たちが継承してきた戦車道流派。もちろん私も、妹も受け継い

でいる。源流は第二次対戦終戦直後の日本で生まれた流派で、戦争で減った日本の戦車で大量に輸入されてきた海外製の強力な戦車を相手するため、自然に出来上がったものだった。日本の戦車の利点である『軽さ』これを活かし、敵を翻弄し、キリングレンジまで近づく。そうすれば小口径砲でも敵装甲の貫通が期待できるのだ。

しかし、今ではチューニングによつて日本戦車と海外戦車の差は埋まったし、遠方から引き上げてきた戦車や、試作段階で終わっていた戦車なども加わったことで数の少なさもカバーされ、源流はその存在意義を失ってしまった。今ではその伝承者は私たち三城家だけとなり、絶滅の危機に瀕している流派なのだった。

つまり、高機動戦術を得意とする源流は、三叉戦をルールとしている冬季杯にはもつてこいなのだ。

「……これをキツカケに、戦車道、始めませんか」

私は迷った。恐怖に震えたことを思い出して。悲しみに涙したことを思い出して。傷ついて苦しんだことを思い出して。

でも、私は前に進むしかないのだと思つた。それが源流の教え。『起死回生の流派』である源流は、最後の最後まで諦めてはいけけない。

『諦めないで』。夏摘が、そう背中を押してくれているような気もした。

「……私、やるよ。冬季杯に出て、夏摘と戦つて……そしてまた、一緒に暮らすんだ」

そう決意を固めると、華蘭さんは微笑んだ。どこか、したり顔で。

「なら私もやります。夏紀さんを支えるのが、私に今できる事ですから」

心底驚いた。彼女は戦車道を経験したことがない。確かに母は戦車道履修者だったが、彼女には戦車の知識はあれどテクニクは一切備わっていないのだ。しかし、一人で飛び込むには広い世界。誰かが隣にいてくれるのは、とても心強いことだった。拒否できるはずもない。

「…ありがとう」

私は、彼女をぎゅつと抱きしめていた。感謝を込めて。また、これからの戦車道に対する不安も込めて。

翌日、私達は校舎の外れにあるガレージを訪れていた。

「おつ、キミが期待の新入部員だね。会長！新入部員ちゃん来たよ！」

そう言うのは黒のショートポニーにぱつっん前髪が特徴の…確か生徒会書記の

樹たつきりっか 葎花りっかさんだつたか。樹さんが呼んだ『会長』はすぐ来た。樹さんとは対照的な、長いポニーテールの美しい女性。生徒会長の樹本きもと 花夏かなつさんだ。

「いらつしやい。あなたの事は先生から聞いてるわ。戦車道への復帰、歓迎するわ」
会長は私に握手を求めてきた。手を握ると、戦車乗りとは思えない艶やかな肌の感触が伝わってきた。

「よろしくお願ひします。少しでもチームの力になれるように頑張ります」
「…うん。よろしく頼むよ」

時間が経ち、ある程度人が集まった午後5時。会長は部員全員を招集した。

「今日は新入部員を紹介するわ。こちらの、三城 夏紀さんと、四条 華蘭さん」

「よろしくお願ひします。」

二人で揃って頭を下げた。目の前には10人ちよつとの部員が一行に並んでいた。

「じゃあ、自己紹介をお願いできるかしら？じゃあ、四条さんから」

いきなり名指しされて驚いたのか、ぴくりと反応したあと、一步踏み出して華蘭さんは自己紹介を始める。

「2年B組、四条 華蘭といます。趣味は戦車とジグソーパズルです。これからよろしくお願ひします」

自己紹介が終わると、全員から惜しみない拍手が送られる。彼女は照れたように一歩

下がる。次は私の番だ。硬いコンクリートを踏みしめて一步前に出る。

「同じく2年B組、三城 夏紀といっています。中学三年まで戦車道をしていましたが、色々な事情があつて離れていました。経験を活かして部の役に立ちたいと思つています。よろしく願います」

そう挨拶をした。皆、眼帯をした私のことを怪訝に思うでもなく、華蘭さんの時と同じように拍手をしてくれた。：。しかしただひとり、ほかの人とは違う目で私を見る人物が居ることに、私は気がついた。

一通り私たちの歓迎が終わつたあと、その人物は私に話しかけてきた。三つ編みのおさがが印象的な少女で、赤いアンダーリムのメガネをかけている。

「：。壱崎 幹葉つていいいます。あの：。もしかして、中学校全国戦車道大会優勝者の、三城さん：。ですか?」

少し内気そうな彼女、壱崎さんは、そう問うてきた。中学戦車道のことまで知つているなんて、相当なマニアだろう。

「：。そうです。無様な戦いを見せちゃいましたかね：。アハハ」

適当にごまかしておこうと思つたのだが、彼女は私の予想とは真反対の言葉を口にした。

「：。凄かつたです、あの試合：。特に最後、たった1両で4両も、しかも性能的に劣る

M4でT-34を……」

「そ、そんなこと……あの試合、私にとっては失ったものが多すぎました」

「……もしかして、なんですが……今月のタンクガールズを見て、急遽入部したんじゃない……」

完全に凶星を突かれた。まさかそんなことまで知っているなんて。固まる私を見て確信したのか、さらに突っ込んだ話題を振ってくる。

「やっぱり、ですか。ということとは、目標は、冬季杯……？」

「……うん。モニュメントバレーの隊長、どう見ても私の妹で……もう一度逢いたくて、戦車道に戻ってきたんです」

「……なら、私に協力させてください！貴女が隊長なら、私はより強い砲手になれる……そしたら、親だって……」

彼女には、彼女なりの事情があるのだと悟った。それなら、私も頑張らなければならぬだろう。

「わかりました。一緒に頑張らしましょう……いや、頑張ろうね、幹葉さん」

手を差し出すと、彼女はぱあっと明るい顔になり、笑顔とも泣き顔とも取れない顔を見せた。

「はいっ！もちろんです！」

私の今までの経緯とこれからの目標を話すと、会長はそれに賛同してくれた。

「なるほどね、冬季杯……実のところ、出場は考えてはいたんだけどね。隊長を誰にするかが決まってるなくて」

「え？それなら会長がやればいいんじゃないや……」

そう返すと、会長は首を横に振った。

「私は砲手だからね。それに作戦立案には自信がないわ。だから、誰に頼もうかと思つて……いいところに来てくれたわ、ホント」

会長は私の肩に手を置いて、頼むように、それでいて高圧的にお願いをしてきた。

「チームの隊長をやってもらえないかしら」

「で、でも……新入部員が隊長なんて、厚かましいですよ」

「それは大丈夫。ほかに適任がいらないんだから、貴女しかないのよ。ねえみんな。そうでしょ？」

私たちが話しているガレージの隅の机から会長がみんなに問うた。するとみんなは一斉に『いいよ!』『もちろん!』と声を上げてくれた。

「……と、言うこと。大丈夫だから、心配しないで」

「は、はあ……なら」

こうして、半ば強引ながら、私はアウトバーン校の隊長を務めることになったのでした。

——高知県沖 学園艦『モニユメントバレー』甲板上——

轟音が鳴り響く。キャタピラーが地面を踏みしめる音、砲が吠える音。砂埃を上げながら、二両の戦車が疾走している。等間隔に置かれたパイロンの間を、左右に旋回しな

がら通ってゆく『スラローム』という練習の最中だった。それを少し離れた位置から眺めているのは、隊長である四十伽 夏摘。

「もつとスムーズに。パイロンから離れすぎです」

走っている戦車は、二両ともチャーフィー軽戦車。非常に良好な足回りは不整地でも40km/hという高速を実現し、少し高価だが偵察車として社会人チームや大学チームで重宝されているらしい。

そのうち、左のレーンを走る2号車の車長、三年生のキャセロールが言葉を返した。

「超新地旋回が出来る車両ならまだしも…流石にこれ以上は無理だよお」

「もうすこし。あと5cmだけでも詰めてください」

まるで生糸のようなどても長い銀髪を揺らして、キューポラから顔を出したキャセロールは、いつもどおりカン口飴を舐めていた。ババくさいというと殴られるから言わないようにしないといけない。

「…まあ、車長には伝えとくよ〜」

すると、次の一本は確かに5cmほど詰まっていた。

「3号車は…いい感じですね」

3号車のチャーフィーはいいライン取りでスラロームしていた。

「ホント? やったーホメられた!!」

3号車の車長は茶髪のウエーブが特徴的な三年生。トルティーヤと名乗っており、いつもハイテンションだがさらにテンションが上がると口笛を吹き始める。

「ホメたのは操縦手であつて車長ではありませんよ」

「んまあ……知つてるけどさ」

ノルマを達成したので練習が終わる。ガレージに4両の戦車が並んだ。M24チャーフイー軽戦車が2両、オープンヘッドのM18の砲塔をM36ジャクソンの物に換装したスパーヘルキャット、そしてシャーマン・ファイアフライ。その4両の前で、乗員15人が集合する。

「年末には冬季杯が控えています。私たちは他の公式戦に参加出来る車両がありません。ですから冬季杯に全力を注ぎたいと思つています……目指すはもちろん、優勝です」

夏摘は揺るぎない目でそう言った。もちろん部員の表情にも驚きはない。

「高機動戦術・高機動戦車、それに追従出来る高い練度……この三つが揃つていれば、負けはありません。頑張りましょう！」

優勝候補の一角として、雑誌に特集ページを組まれるのは、この少し後の話だった。

戦車部の仲間です!

「…えっ? 戦車、無いんですか?」

それは唐突だった。この戦車部には戦車が存在しない、と会長から告げられたのだ。た。

「いや、無いって言っても一時的によろしく返ってくるわ。修復に出してるだけだから」
以前、千葉県にあるとある高校の戦車道チームと練習試合をしたという。勝利こそしたが、敵の日本戦車は相当なチューニングがされており、ギリギリ勝てたという。その直後に部員が二人抜けて、今に至っていたという。

「どうせ3両程度も動かせないんじゃない、どこも練習試合組んでくれないし、公式戦にも出れないし…」
ってことで、長期のメンテナンズに出してたの。まあ、あと1週間は返ってこないわ」

「そう…ですか…」

戦車がないんじゃない練習も出来ない。まだ時間こそたっぷりあるが、私たちがこうして足踏みをしているうちに、他の高校はどんどんレベルアップしていつてしまう。特に戦練専なんて、毎日みっちり戦車道をしているわけだから、新設校とはいえ私たちとは

比べ物にならないほどの練度を持っているはずだ。

「戦車って何があるんですか？それだけでもわかれば戦略くらいは組めるんですが…」
そう尋ねてみると、会長は奥の棚からファイルを取り出した。

「…これが、ウチの車両リストだね」

それを見て、私は驚いた。いや、戦車道経験者…もつと言えば戦車好きなら誰でも驚くであろう光景がそこにはあった。

「…6両中5両が…自走砲!？」

見開き1ページに1両のスペックや特徴、特有の戦法などがリストアップされているのだが、書いてあるのは3両だけ。さらに回転砲塔を搭載しているのはただ1両だった。

「うーん…まあ、ティーガーとかもいた事にはいたらしいんだけど…売ったらしくてね」

長く、黒いもみあげを弄りながら会長は言う。ティーガーは高校はおろか大学や社会人クラスでも通用する強力な重戦車。しかしそれは既にリストにはなく、あるのは中戦車1両と、自走砲5両だけだった。

「あつ、でもパンターはいいですね。強力ですし」

V号戦車 パンター。重戦車並みのスペックを持ちながら、中戦車相応の機動力を持つ、ドイツ製の傑作中戦車だ。

次のページに書かれているのは、IV号突撃砲。パンターの前身にあたる、IV号戦車を自走砲に改装したものだ。どちらかと言えばIV号駆逐戦車の方が人気だが、IV突の方が機動性・操縦性に優れると聞く。

「…で、これは何ですか? III突…?」

「いや、これは『10・5cm突撃榴弾砲42』。私たちは略して『10突』って呼んでる」

つまり、III号戦車をベースとした自走砲、III号突撃砲に、10・5cm榴弾砲を搭載したものだ。榴弾は戦車戦においても非常に有用だが、必須かと言われれば、そんな事はない。

「…なるほど。パンター1両、IV突3両、10突2両、ですか」

「ええ。煮るなり焼くなり好きにしてくれたいわ」

とにかくこの異常に偏った編成は早急にかしななければならない。何両か売って、新しい車両の購入を検討する必要があるだろう。

「とりあえず、この状態で編成を考えてみます」

「うん。頼んだよ」

ガレージの隅に置かれた机に向かい、ペンを握った。

デスクワークに疲れた私は、散歩がてら本校舎に設置されている自動販売機を目指していた。グラウンド周辺に無いわけではないが、私の好きな炭酸飲料『ミスター・ペッパー』は本校舎の自販機にしかない。疲れた頭がミスペを求めるので、少し遠いが、私は本校舎に行かなければならなかったのだ。

校舎までの道のりの途中、テニスコートの脇を通る。テニスコートでは、今は部員数減少により活動停止中の軟式テニス部の皆がテニスをしていた。彼女たちは一時的に戦車部に所属しており、今の計画では10突に乗ってもらうつもりのチームだ。

「寿璃さん！」

私から見て右側のコート、ネットに近い前衛のポジションを守るのが、元部長、現在は車長の松岡 寿璃さん。幼い頃から戦車道をやっていて、優秀な指揮能力を持っているという。

「あ、なつちゃん隊長！どうしたの？」

この特徴的なあだ名は、テニス部全員が使っている。こんなあだ名で呼ばれるのは始めてなので最初は戸惑ったが、今では何も感じていない。

「ちよつと自販機に。皆さんはなにを？」

「見てわからない？ テニスだよテニス！ 休止中もウデがなまらないようにしないとね！」

ソフトテニス部は廃部にはなっていない。いつ復帰となっても良いように、練習は欠かすことができないという。

「大変ですね。頑張ってくださいね」

「うん、なつちゃん隊長こそ、がんばれー！」

大きく手を振ってテニス部の皆と別れる。道をさらに進み、校舎の裏へ。そこには沢山の生徒が利用するため、大量に設置された自販機がある。その中で、唯一ミスペを置いている自動販売機の前へ。ボタンを押すと、魅惑的なメタリックレッドの缶が吐き出される。プルタブを起こして一気に煽ると、特徴的な香りが喉の奥の奥まで染み渡っていく。

「美味しい？ それ…」

『うげえ』という声が出そうな顔をしながら話しかけてきたのは、同じ戦車部の二葉 琴音さん。いつもテンションが高く、チームのムードメーカー的役割をしている。

「え、美味しいよ…？ 何か変かなあ」

「なんか、すごい独特な味がしない？ それ」

「それが良さだからね」

ミスペはアメリカ生まれの飲み物。ジャンク的な風味を持つこの飲み物は日本人の口にはなかなか合っておらず、美味しいと思ってくれる人が少ないことも事実だ。

「・・・飲む？」

「いらない」

即断された。押し付けるつもりもないのでそのままにしておこう。

「じゃあアタシは戻るよ」

「戻らなくてどこに？」

そう尋ねると、上を指さした。上には視聴覚室があるため、多分そこだろう。一体何をしにいくのか。気になりはしたけれど、聞かないことにした。

ミスペをゴミ箱に投げ入れて、ガレージに帰ろうとした時にふと思い立ち、靴を履き替えて校舎へと入った。校舎は比較的新しく、整備も行き届いている。広さも異常な程であり、流石は学園艦の象徴といった感じである。

そんな校舎の3階に、私の目的地はあった。大人数が収容できる、超大規模なコンピュータールーム『情報室』。そこは1クラスはおろか、1学年も入ってしまう恐ろしい程の広さで、その人数分のパソコンが用意されている。最新機種・・・とはいかないもの

の、現代のソフトウェアやアプリケーションを使うにあたって差し支えない程度の性能を持ったものだ。

放課後になると自由に使用することが可能となるその部屋には、まばらではあるが生徒の姿があった。同級生や上級生は私を見たってなんとも思わないが、入ったばかりの下級生たちは、黒い大きな眼帯をしている私を横目で追っているのがわかった。やはりこの眼帯は目立つのだろうか……。?いつもするものだから少しでもおしやれなものを、と思ったのだが、かえって厨二病のように見えているのだろうか。

……とまあそんなことを考えながら、中央あたりの席についた。既に起動されていたパソコンのキーボードを叩いて、なんでも知ってる物知り先生に質問を投げかける。

開いたサイトは『Panzer.NET』。戦車道にまつわる様々なニュースの他に、戦車の詳細情報、中古車両、大会の開催予定などを調べることができる。私はそのうちの中古車両情報を開いた。

「えーつと……。どこかな……。あ、あったあった」

検索ワードは『ドイツ 偵察車両』。冬季杯に必要で、安価で、あつかいやすい車両といえれば軽戦車だろうと考えたのだ。アウトバーン校はドイツ戦車を主力としているため、ドイツで揃えたかったということもあり、ドイツに絞り込んだの検索とした。

「……ほう」

検索トップに表示された戦車。小さなその戦車を見つけ、私は直感的に『これしかない』と思った。

すっかり日が落ちた頃。ガレージに戻ると、皆が集合していた。

「三城さん、待ってたよ。…皆にお知らせがあります」

会長は左手に持っていたクリップボードに挟まれた紙を、皆に見えるように突き出した。

「…私立ブリテン高校との練習試合が決まりました」

「…えっ？」

皆の声が揃った。あまりにも唐突で、状況が飲み込めていないのが原因であろう。

「場所は私たちのホームグラウンド、萩市街地。試合形式は、三叉戦で行われます」

「三叉戦ってことは、冬季杯と同じ…」

「ええ。冬季杯に向けた練習だと思ってくればいいと思うわ」

萩市は、アウトバーン校学園艦が母校として、仙崎港のすぐ近くにある街だ。歴史的価値のある建造物も多く、なかなか戦車道で使用する事が認可されなかったが、今

回始めて使用出来ることとなったようだ。

「でも、今戦車ないですよ。？」

「大丈夫。戦車は一週間後には返ってくるようになったわ。練習試合は2週間後だから」

幹葉さんの質問に、会長はそう返したが、全然大丈夫ではない。逆に言えば練習時間は1週間しか無いのだから。その1週間、死に物狂いで練習する必要があるだろう。

「そういうことだから、皆、心の準備と予定を空けておくことを忘れないようにね。じゃあ、解散」

「ありがとうございます！」

その日の帰り道は、同じ車両に乗る仲間と一緒に帰路についていた。

私、華蘭さん、幹葉さん、琴音さん。そして非常に優秀な操縦手で、プリン色のセミロングヘアが特徴的な五樹 涼子さん。過去には『タンク・アタック』という戦車のタイムアタック大会で総合優勝を成し遂げたことのある凄腕ドライバーだとか。

「ブリ校ってどんな学校だったけ？」

琴音さんの質問に、学生戦車道マニアの幹葉さんが答えた。

「ブリ校はイギリス歩兵戦車を主力とするイギリス流の学校です。グロリアーナのような品さではなく、奇抜で、変わり者の多い学校だという印象が、強いですね…。」

「強いのか？」

「…はい。それなりに。特に主力たるブラックプリンス歩兵戦車の装甲と火力は、下手すればティーガーやISに匹敵するほどの驚異となりますね」

ブラックプリンス。チャーチルの装甲を強化、砲塔を換装し、英国の傑作戦車砲、『オードナンスQF17ポンド砲』を搭載した歩兵戦車。グロリアーナのチャーチルも相当速かったから、多分ブリ校のブラックプリンスもチューンナップでかなりの速度を発揮するのではないかと予想がつく。

「やっぱりあの装甲を抜くのは大変だと思う。でも機動力では勝ってるから、うまく回り込んで弱点を狙いたいところだね…。」って、そっか、自走砲ばっかなんだった…。」

「大変ですね、隊長は…。」

華蘭さんが私の頭を撫でる。くすぐったくてすぐに手を振りほどいた。

「…そんなことより、どこかに寄って帰りませんか？」

「アタシはお腹が空いたよ…。」ファミレスいかない？」

「私は：： 戦車道ショップが：：」

「私はどこでもついていくよ」

皆の意見がバラバラで全くまとまっていなかったもので、皆の視線が私に注がれた。『決めろ』という意思表示に見えた。

「：： なら、私もお腹すいたからファミレスに行こうよ」

そうして、私たちはファミレス目指して日の落ちた帰路を歩くのだった。

1週間半後：： 仙崎港

仙崎港に、一際大きな：： 仙崎の街を優に超える大きさの船が入港してきた。イラストリアス級空母に良く似たその船には、グレートブリテン国旗に良く似たユニオンフ

ラッグの中心に『B. H. C』と書かれた校旗が立てられている。この船は、『私立ブリテン高等学校』の学園艦である。

甲板上、学園の中に存在する豪華絢爛な部屋。そこは生徒会室で、生徒会活動とは無縁に思える天蓋付きのベッドや、玉座などが置いてある。その天蓋付きベッドに寝ている銀髪ウェーブの少女と、それを起こそうとしている銀髪ツインテールの少女。

「起きてください隊長〜！もう仙崎港につきましたよ〜！」

「…もう着いたの…？早いね、まったく…」

実は既に10分ほど前から起こしていたのだが、全く起きる気配がなかった。今ようやく起きたのだった。あちらこちらが跳ねている隊長…ヴィヴィアンの髪を、彼女の世話人のようなポジションである、砲手のバーバリーが櫛でといている。白のネグリジェ姿のヴィヴィアンは、眠そうに目をこすりながら、外の景色に目を移した。見えるのは海と山。それだけが、それでいて美しい街だ、と彼女は思っていた。

「…さて、アウトバーン校…どんな学校なのかしら…歯ごたえがあればいいのだけど…ふわあ」

「きつとそれなりにはやってくれますよ。何せ中学大会の覇者を擁するチームらしいですし」

今はほぼ絶滅した機動戦の流派『源流』の伝承者が率いるチーム。どんな作戦を展開

してくれるのか、ヴィヴィアンは、珍しく自分がわくわくした気持ちを抱いていることに気がついた。

「： さて、積み込み開始。さっさと市街地に行っちゃいませよ」

練習試合です！

重い鉄の音とともに、アウトバーン女子学院の学園艦は、仙崎港に接舷した。隣にはアウトバーン校学園艦よりも幾分と背の高い学園艦が。

「これがブリ校の学園艦：： 大きいですね」

「そうね。縦の大きさは空母型ならこんなものよ。私たちの船が特殊なだけ」

艦艦をベースとしているアウトバーン校学園艦は、艦橋やマスト以外のあらゆる場所が低い。弊害として塩害が空母型よりも出やすいことがあるが、利点として旋回性能の高さや、乗り降りの便の良さがある。

「：： あ！見てくださいあれ！」

幹葉さんが指さした先には、長いトレーラーに搭載された戦車たち。トレーラー1台につき1両しか搭載出来ないため、その非常に長いトレーラーは全部で6両もある。明らかに港の運搬車輛等の走行を妨げる場所に停車してあるが、いいのだろうか：：？

「あれは18トン重ハーフトラックです！でもパンターも載せれるなんて、かなりの改造がされてますね：：」

「幹葉さんって、戦車だけじゃなくてトレーラーもいけるんだね：：」

後部甲板横に接続されたステップを、戦車部の部員を乗せた2両のハーフトラック『マウルティア』が下っていく。自動車科の実習で用いられたものを譲り受けたもので、戦車部の主な移動手段となっている。半装軌事故に乗り心地こそ良くないが、多少の重量物なら運べることから、弾薬・修復用具等を積み込む戦車部には必要不可欠とも言えるものになっているのだ。

ステップを降りると、ハーフトラックの運転手：：恐らく戦車ショップのオーナーであろう、中年の男性が声をかけてきた。

「へえ、アンタが新しい隊長さんか。前の隊長も優秀だったって聞いたけど：：アンタにも期待してるよ」

「はじめまして。隊長の三城です。：：早速なんです、車輛の搬入を：：」

パンター・IV突・10突を各1両ずつ引き連れて仙崎港を後にする。残りの3両はステップを上がって学園艦へと収められていった。

私たちを乗せたマウルティアは、海の見える国道を走る。曲がりくねった峠道で、山の澄んだ空気と海が運んでくる潮風が爽やかな空気となって私たちを包んでいた。

「：：久しぶりだね、この空気も」

「いつもは潮の香りしかしませんからね。森の香りも、いいですよね」

華蘭さんはそう言いながら、グレーのパンツァージャケットを身につけていた。グ

レーをベースに黒と赤のラインが何本か入ったシンプルなものだが、戦車乗りらしい引き締まった印象を与えていた。

「… あっ！」

重要なことに気がついた。

「パンツァージャケット… 忘れた…！」

正確には忘れた、というよりは元から無かったのだが。華蘭さんが着ているパンツァージャケットは、先輩のお古。注文し、完成するまではお古のジャケットを着ることになっていた。しかし私は背が小さく、サイズの合うジャケットが無かったのだ。

「どうするの？もう引き返すような時間は…！」

涼子さんの言うとおり、もう萩市街地は目と鼻の先だ。すぐに到着するし、到着次第試合の準備に入る。対外試合をする時はジャケットを着るのが礼儀であり、蔑ろにすることは出来なかった。

「どうしよう…！」

「… 中学校の時のジャケットを使ったらどう？」

「それだ!!」

「… でも、一人だけジャケットが違うって、いいのかな…？」

「大丈夫なんじゃない？よくあることだよ、隊長だけデザインが違うなんて」

確かに今から対戦するブリ校もしかり、結構そういう高校は多い。実業団とかプロになるとより増えてくる。

「…じゃあ、ちよつと実家に寄ってもらえますか？取ってくるので…」

「ほーい」

私たちの乗車していたマウルティアを運転する、テニス部チームの伊達 陽子さんにそう伝え、家の詳細な位置も教えた。すると彼女はルートの指示をせずとも路地にすいすい入っていき、私の家に着いた。

「…じゃあ、ちよつと待っていてください」

マウルティアの荷台から飛び降りると、目の前に実家があった。西洋風のそれなりに大きな家で、庭には機銃で装甲がボロボロにえぐられたI号戦車があった。今はエンジンが降ろされており走行することは出来ないが、過去には母の愛機として、野山を駆け回っていたそうだ。

そんな庭を抜けて、玄関のインターホンを押す。しばしの沈黙の後、重たい音を立ててドアが開かれた。

「… ただいま」

「… 入りなさい」

そこには少しやつれた表情の母がいた。声音に表情は出ていなかったが、少なくとも

怒っているとか、悲しんでいるような声には聞こえなかった。

家の中は私がいた頃と変わらず整理整頓が行き届いていて、母の好きな花が沢山並んでいた。ガーベラ：：中でも青いガーベラが好きで、母の日に父がいつも買って帰っていたのを、今も覚えていた。

「お父さんは？」

「仕事よ。夜には返ってくるわ」

それだけ言葉を交わして、私は2階へと駆け上がった。2階は家族の寝室があり、両親の部屋、私の部屋、そして妹の部屋があった。

「：：夏摘」

ドアをそつと撫でる。今は遠くに居る妹。今年中には、きつと会える。

自分の部屋のドアを開けると、部屋は何も変わっていないかった。私が持ち出したから荷物は減っているが、小さい頃から好きだったクマのぬいぐるみとか、思い出の写真とかは、埃をかぶりながらも、未だそこにあった。

壁の衣紋掛けに目をやる。中学校の制服、もう入らなくなった小学校の時の浴衣：：思い出の服が沢山かかっている。その中で、異彩を放つ迷彩色の服を手取る。

黒をベースに、迷彩色を各所に配色した維新中学校戦車道部のパンツァージャケット。非常に悔しいが、中学校からまったくもって成長していないため、恐らく余裕で入

る。

「… 私を守ってね」

襟に少しでも血のついたジャケットを手に、階段を駆け下りた。

「時間があれば、紅茶でも飲んでいかない?… って、夏紀、それは…?」

私が脇に抱えていたパンツァージャケットを指差し、母は不安そうな顔をした。

「… 私ね、戦車道、やることにしたんだ」

母は、声にならない声を上げながら泣き崩れた。… こうなると知っていた。母の気持ちも理解できる。たった1日にして最愛の娘と、娘の五体満足な体が奪われたのだ。私が母でもきつと、こうなる。

「… 目標が出来たの。とっても、とっても大切な目標が」

母に合わせてしゃがむ。そしてゆっくりと手を背中に回して、ぎゅっと抱擁をした。母の涙は暖かくて、親の温もりを痛感する。だからこそ、私はもう、母を悲しませることはできない。

「… じゃあ、行ってくるよ」

「な、夏紀…!」

玄関のローファーを履き、玄関を開けた私に、母があるものを手渡してくれた。それは米軍の階級章を模したワッペンで、夏摘が制服につけていたものだった。今はアレン

ジが施され、キーホルダーになっていた。

「…必ず、帰ってくるわよね？」

元戦車乗りとして覚悟を決めたのだろう。今までの不安げな顔を一変させ、キリリと引き締まった顔になった母は、1人の上官として、私にそう問うたのだろう。

「わかつてる。絶対元気で帰ってくるから」

笑顔で返すと、母は安心した表情を見せて、笑顔で見送ってくれた。

我が家を、母を背に、私はパンツァージャケットを羽織る。

時刻は午後2時。私たちは萩市の中心にある中央公園に集合していた。戦車はここではなくスタート位置に配置しており、ここにやって来たのは車長だけだ。

遅れてこの中央公園に、軍用車・オースチンK5に乗って入ってきたのはブリテン高校の隊長格2名。隊長であるウェーブした銀髪が特徴のヴィヴィアン、そして同じく銀

髪のツインテールが特徴的な、副隊長のバーバリーだ。

「初めまして。今年から隊長に就任しました、三城夏紀です。今日はよろしく願います」

「ん… よろしく… 正々堂々ががんばろうな」

眠たげな声と顔。この隊長、寝不足なのだろうか？

「すみません。隊長つてばいつもこんな感じで… 今日にはよろしく願いますね」

バーバリーは頭を下げて後ろに下がった。するとヴィヴィアンが右手を差し出し、握手を求めてきた。断る理由もないので握手をしておく。

「まあ、今日は頑張ろうね…」

そう言うヴィヴィアンも後ろに下がった。試合の開幕だ。現役自衛官が試合開始を宣言するのが、定番となっている。

「ただいまより、アウトバーン女子学院 対、私立ブリテン高等学校の練習試合を開始します！互いに、例！」

「「おねがいます!!」」

その後、私たちはマウルティアに乗って、スタート地点である萩ウエルネスパーク駐車場まで来ていた。ウエルネスパークは田舎としては大きなスポーツ施設。野球場と多目的グラウンドが併設されている。そこには私たちの戦車、パンター・IV突・10突が綺麗に横一列に並んでいた。

「準備出来てますか？」

そう尋ねると、各隊ばらばらに返事が返ってくる。

「テニス部チーム、OKです！」

「生徒会チーム、大丈夫よ！」

「アタシらも大丈夫だよ！」

「では、戦車に乗り込みましょう！」

戦車の中は、熱くて狭くて暗い。パンターは大きいボディ故にそれなりに広いが、乗り心地は快適には程遠く、慣れていないときついものがある。

「やっぱり、狭いですよね…！」

華蘭さんと幹葉さんは戦車に乗るのが始めてなので、少し窮屈そうだ。

「でも、戦車の中ってワクワクしますよね！」

生粋の戦車バカである幹葉さんはとても楽しそうだ。実際私も少しワクワクしている。しかし、それ以上に不安が大きかった。私自身ドイツ戦車に搭乗するのは初めてだ。勝手もわからないし、限界も知らない。しかも一年半ものブランクもある。未だ恐怖を克服できた訳でもなく、実際敵車両と対峙した時にどうなるか、それも想像すらつかなかった。

「今回は三叉戦ルールです。ショッピングモール駐車場が陣地になってて、敵車両を2両以下まで減らした状態でそこで停止し続けていれば、占領することが可能です。まあ、なかなか難しいですけど」

三叉戦は陣地を奪うことでも勝利できる。条件は敵より自軍の車両が多く、尚且つ敵が2両以下まで減っている状態で、30分間陣地に留まり続けること。その間はエンジンを停止、移動は不可。車両を降りることも可能だが、その場合は全員が陣地の外に出ることが条件となる。

「まあ、無難に敵を全滅させるほうが早いよね。今回はそのつもりだし」

腕時計を見て時間を確認。スタート時刻である3時まで、あと1分を切った。作戦概要を説明する。

「今回の作戦は、まず背後を取るところから始まります。街を大回りに回って、敵の後方に出ます。そこからは、行き当たりばったりで」

「作戦名はどうします?」

作戦名。まったく考えていなかった。そもそも重要なことだと思っておらず、考えようとも思っていなかった。

「じゃあ... ストッキング作戦、なんてどうです?」

「... どういう意味?」

「相手の背後から回り込み、密着して機動戦で撃破する... 脚を包み込んで、密着するストッキングみたいじゃないですか?」

「... ああ。じゃあそれで」

納得したのかしていないのかイマイチわからない幹葉さんの反応を受けた瞬間、空に赤い信号弾が上がった。試合開始の合図だ。

「では行きます! パンツァー・フォー!!」

私の1年半ぶりの戦車道。これは小さな一歩だが、きつと夏摘と会うためには避けることのできない道だ。勝って、この道を突き進む。戦車に通れない道は無いのだから。

暗い部屋。3台並んだパソコンは全て違う映像を映していた。一番右からSNSのタイムライン、全国ニュース、そして戦車道の試合だ。戦車道の試合は強豪である私立ブリテン高校と、名前も聞いたことのないアウトバーン女子学院。車両の編成バランス、性能、戦術的にもブリ校の勝利は見えていたが、結構楽しみにしていた試合の一つでもあった。こういう弱小校が勝つ、というのはドラマ的で面白いし、ブリ校は『冬季杯』に出場してくる予定だし、恐らくアウトバーン校も出てくるのだろう。この練習試合が三叉戦であることも、そう予想させる原因の一つだった。

茶髪のセミロングヘアを弄りながら、モニターを眺めていたときのこと。アウトバーン校のフラッグ車、パンターから顔を出す隊長であろう少女の顔に見覚えがあったのだ。

「……一体どこで……ん〜」

とても見覚えがあった。あのショートポニーの茶髪も、あのパンツァージャケットもだ。

「……分かんないや」

まあどうでもいい事だ。特に親密な人でもないだろうし。なんて考えていると、部屋

のドアがノックされる。ヘッドホンを外して、『どうぞ』と言うと、ドアを開けて入ってきたのは私の母だった。実際には養母で、海を漂流していた私を拾ってくれたという。それ以来娘として接してきたし、記憶のない私には、彼女が母であるとしか認識出来なかった。

「夏摘、練習試合の中継始まったよ……って、もう見てるのね」

「うん。まだ始まってないけど、もうすぐ始まるよ」

「ならいいわ。よく見ておくのよ。役に立つことがきつとあるわ」

「うん」

母はそれだけ言うのとドアを閉めて出て行った。

スピーカーから響く炸裂音。信号弾の音だ。練習試合が開幕したらしい。

「さて、どうなるかな」

これからの戦いに期待しながら、モニターに目を向けた。

歩兵戦車です！

砂浜を踏みしめ、黄色の砂塵をまき散らしながら走行する、3両の戦車。私立プリテン高校の、チャーチル歩兵戦車だ。

「… 予定通り前進、陣地を構築したらそのまま待機…」

睡魔の残る目を擦りながら、隊長のヴィヴィアンが伝える。城下町である萩市に合わせ、白く塗装されたチャーチルは、よく見ると隊長車のみが違うモデルである事が見て取れる。特徴的な、低く構えた砲塔。前方に長く、長く伸びるのは、名機 オードナンス QF17ポンド砲。俗に『スーパードチャーチル』と呼ばれた、ブラックプリンス歩兵戦車だ。さらに装甲も強化され、歩兵戦車の極めつけとも言えるであろう戦車となっている。

鈍い白の3両は、路地に突入し、右折と左折を繰り返す、ある程度進んだ広場で停車した。ここがブリテン高校戦車チームが最初の戦場を選んだ、病院のエントランス。後方や頭上に壁があることで警戒範囲が減り、周りが警戒しやすいことや、狙いをつけにくくできることなどから選んだ場所だった。ここは開会式が行われた中央公園のすぐそばで、広場に面していることから、敵と遠距離での撃ち合いになる可能性があり、そ

こでも17ポンド砲を搭載するこちらが有利になるだろう。

「敵はどう出ますかね？」

銀のツインテールを揺らし、バーバリーが問う。

「…恐らく真正面からは来ない。回り込むか、そもそも来ないか…」

真正面から撃ち合つては、歩兵戦車の装甲には勝てない…いや、パンターなら可能性は無きにしも非ずだが、なかなか難しいことだろう。

「仮に偵察をよこすなら、そろそろ…」

試合開始から35分が経過。戦闘はそろそろ動いてもいい頃だ。

アウトバーン校は、パンターが先行し、偵察を行っていた。阿武川沿いを下り、砂浜まで来たところで、ある事に気が付く。

「…履帯跡がついてる」

砂浜にくつきりと履帯の跡が、6本。その履帯跡はそのまま市街地へと続いていた。

「二班、三班は市街地へ。SP地点へと向かってください。くれぐれも姿は晒さないよ

うに」

「了解」

生徒会チームの二班とテニス部チームの三班には潜伏地点を指示し、私たちは尚偵察を続ける。履帯跡を追って、城下町の名残が残る市街地へと足を踏み入れていく。城下町らしく路地は十字に交差しており、一本一本が非常に狭い。まるで毛細血管のように街中に張り巡らされた路地から正解を導き出すのは容易いことではなかった。しかし、まるで「ヘンゼルとグレーテル」かのように随所に散りばめられた痕跡を頼りに進んでいく。履帯跡は既に消えていたが、壁にぶつけた跡がある。恐らく履帯カバーの先がぶつかって出来た傷だろう。旋回してその先へ進んでいく。

「そろそろ注意してね。敵がすぐ横にいてもおかしくないから」

こういう市街地の怖いところは、発見が遅れるとすぐにピンチに陥ってしまうことだ。車長として責任を持って周りに気を配ることで、チームを危機に陥れないようにしなければならぬ。

教会前を右折し、ゆっくりと細い路地を進軍していく。目の前には病院。その向こうが開会式のあった中央公園だ。病院の間を通る路地をすり抜けて、大きな道に出る……

「あつ」

二人の車長の声が重なる。パンターの真左に、ブラックプリンスの姿があった。

しばしの沈黙。お互いが固まっていた。様子見とかではなく、完全に思考停止だ。

「全速後退！急いで!!」

「追撃しろ！2号車、急げ！」

最大速度で下がっていくパンター。ブラックプリンスの脇を通り前進、パンターを追うチャール2号車。

「こちら一班！SP地点北病院エントランスにて敵発見！一班は撤退します！発見されないよう心がけながら、援護射撃を！」

その頃二班と三班は中央公園南の茂みの中に陣取っていた。

「交戦始まったのか！」

「援護するよ！砲撃よーい！」

「こちらから射線が通るのは一箇所だけ。建物と建物の間から見えるチャール姿を、しっかりと視界に捉えていた。」

「撃てッ!!」

ブラックプリンスとチャーチル3号車の装甲に弾丸が当たったのはその直後のこと。片方は弾かれて病院の支柱に直撃。片方は榴弾だったようで、そのままブラックプリンスの側面で爆ぜた。

「目の前……2両いるね……照準、前方敵戦車。2号車はあまり深追いするな。帰ってこい」

撃破の知らせがないということは、パンターの機動力に撒かれたのだろう。無理に追っても背後を取られてぶち抜かれるだけだ。それならさっさと陣地に戻ってきて、援護射撃に加わってくれる方が戦力になる。そうして再び3両は病院前エントランスに集結。突撃砲2両との殴り合いへと発展する。鉄の甲高い音とともに、敵の砲弾が弾かれる。相手は偽装工作をしているのだろう、なかなかこちらから見つけることはできない。

「……もう、面倒くさい。前進よ、付いてきなさい」

ブラックプリンスを先頭に、病院前エントランスを出て、中央公園へとなだれ込む。

装甲を頼りにしたゴリ押しとも言える突撃戦法。『装甲』という簡単かつ決定的な裏付けがあつての突撃だ。どこぞやの千葉の高校の特攻まがいの突撃とは違う。突撃砲の強力な砲でも弾けるといふ絶対の自信の表れとも言えた。事実、弾いているし。

「歩兵戦車の戦いを見せてあげる」

ヴィヴィアンがキューポラから体を乗り出す。それはやる気の現れであり、気分が高揚している証拠だった。

「…絶対に潰してやるから」

「向かってくるよ!」

「… もうちよつと、もうちよつと耐えるのよ」

会長が砲撃を続けつつ言う。まだ気づかれた風には見えない。もう少し攻撃していても大丈夫だ。

『まもなく地点到着です! 移動の準備を!』

「了解。待ってるからね。砲撃止め!」

砲撃の手を止めて、すぐのことだった。チャーチルの後方に、鈍い銀色の影が見えた。

刹那、砲撃の音とともに、最後尾にいたチャーチル3号車が走行不能となる。比較的薄い後部装甲を撃ち抜かれたのだった。

「なっ… またパンターか！2号車は前進、敵の発見に努めろ！私たちがフラッグを殺る！」

「了解。そちらは任せました！」

ブラックプリンスはその凶体に似合わない旋回速度ですぐに旋回し、前進。図書館の影に隠れながら来た道を戻り始めた。

「ブラックプリンス来ます！引きずり込みましょう、後退！牽制射撃を！」

全速で後退しつつ牽制射撃。行進間射撃、しかも全速加速時の命中は期待出来ないが、牽制にはなる。射撃しながら後退していく。ブラックプリンスは挑発… いや、挑戦というべきであろうそれに乗ってきた。パンターの後を追って、市街地を縫うように進んでいく…

「来るぞ！躲せ！！」

「そんなに適当なこと言われても… ツ！」

と文句を言いつつもちゃんと躲すのが操縦手、伊達陽子のいいところだ。三班は皆優れた腕を持つ。とりわけ回避、行進間射撃などの走行に関する能力に長けていた。砲手の錦織麗は行進間射撃が上手く、装填手の沢松紀奈子も、激しく動く車内でも問題なく装填できる腕の持ち主だった。

「…このままじゃ2両一緒にやれてしまう… だったら、賭けてみるか？」

「賭けるって何をですかー!？」

部長が言う『賭ける』はいつも無茶だった。きつと今回も無茶な作戦を考えているのだろうか。

「合図と同時に左急旋回！全速後退で敵の後ろを取るぞ！」

「はい!!」

「陽子ちゃん!そこはいつていうところじゃ無いからね!？」

そうこう言っているうちに、チャーチルの装填が終わる頃だ。射撃に警戒する。

「… いけッ！」

「はい!!」

チャーチルの射撃と同時に左に急旋回。ドリフトもといスピしながら射線から外

れる。そして姿勢が元に戻る頃、ギアをバックに入れて全速後退。チャーチルの背後を取る。

：：： ところまではよかった。

ガシャンという音とともに履帯が外れ、止まらなくなってしまった。そのまま後ろにカッ飛んで行き、縁石に乗り上げて停止。当然射撃もできずチャーチルの的になってしまった。

「：：： あ」

テニス部皆の声が重なると同時に、10突の上部から白旗が上がったのだった。

「とりあえず、陣地形成は完了ね。敵はすぐ来るわ、気をつけて待ちましょ」

IV突の二班が陣取っているのは、遠い昔に城があった、萩城跡。石垣の上から砲を覗かせ、松の葉を被せて偽装している。先代部長はこういった待ち伏せが得意で、車両編

成の都合からもよく使っていた。その名残で、偽装工作や伏撃が得意になっているのだ。

「恐らく、チャンスは一発ね。撃って仕留められなかったら終わりと思うべきだわ」

「……なんで？」

「逃げ場がないからよ。後ろに下がってもルートの都合上敵の目の前に出るしなくなるんだから」

橋を渡つてすぐに右に入った高台に陣取っているのだが、行き止まりになっているため、橋を渡つてこられると非常に困る。逃げ場が無くなると装甲に劣るこちらに勝機はない。だから一撃勝負なのだ。

……刹那、チャーチルが顔をのぞかせた。それと同時にIV突の75mm砲が火を噴いた。撃ち出された砲弾は確実にチャーチルの上面装甲後部に命中し、火災を発生させた。

「……良しー！」

着弾箇所も狙い通り。装甲が薄い上にエンジンのある箇所なので、当てさえすれば防ぐことのできない場所であることはわかっていた。

しかし、それには一つだけ誤算があった。

衝撃。そして白旗。確実に撃破したはずで、まだ炎上中のチャーチルが、こちらを撃

ち抜いていたのだった。直後に、チャーチルからも白旗が上がる。… エンジンを破壊こそしたが、撃破判定が出なかったのだ。エンジンが完全にお釈迦になるまでほんの10秒足らず。しかし、確実に10秒もの時間が存在したのだ。

しかし、これでも十分な戦果だ。あとは1対1。隊長車同士のドッグファイトに全てが懸かっていた。

シヨッピングモールの駐車場で、2両は熾烈な争いを繰り広げていた。高機動を活かして動き回るパンター。四方八方から飛んでくる75mm砲を、絶妙な被弾経始で弾いていき、17ポンド砲で撃ち返す。それをパンターが躲す。その繰り返しだった。

「決着がつかない。…こうなったら、回り込んで接射するしか」

敵が車体を傾けて防御するならば、被弾経始が意味を成さないほどに近寄ってしまえ

ばいい。しかし、17ポンド砲の威力は絶大な上、近くなればなるほど躲すことは難しくなる。

「涼子さん、一発躲したら一気に近づいてください!」

「了解!」

17ポンド砲の装填が終わるタイミング。そろそろ来る。必殺の一撃が。

重たく、ボディブローのような音とともに撃ち出された砲弾は、パンターの正面装甲をかすめるように通過した。

「前進!横に回り込んで!!」

半ばドリフトのように旋回しつつ前進し、ブラックプリンスの懐に潜り込む。長砲身の75mm砲がブラックプリンスの脇腹を捉えた。

… 勝った。そう、確信した。

砲撃の熱、煙。カシャっという軽い音で、どちらかの撃破判定が出たことがわかる。
『勝者、私立ブリテン高等学校！』

終わりは始まりです！

試合結果に、私は一瞬何が起こったのかわからなかった。

あの射撃姿勢、距離、角度。間違いなくブラックプリンスの装甲は貫通できているはずだ。側面は硬いとはいえ旧式戦車のそれであり、被弾経始は全くもって考慮されていない。パンターの75mm砲を垂直に撃ち込めば確実に撃破できるはずなのだ。

煙が晴れ、視界を取り戻した時に、その疑問は解決された。

「…してやられた」

このタイミングを狙われていたのだ。パンターの75mm砲の砲身は側面装甲ではなく砲塔に照準を合わせていた。それはブラックプリンスの17ポンド砲が、こちらの砲を叩いて照準をずらしたことが原因と考えられる。対する17ポンド砲は正確に側面を照準しており、着弾点はぶすぶすと黒煙を上げていた。

つまり敵の車長であるヴィヴィアンの描いた筋書き通りに踊らされ、予定された未来に向けて誘導されていたわけだ。戦略を読めず、弱点を晒す戦略に打って出た、車長である私のミスだ。

「ごめんなさい… 砲を叩かれて、照準が」

幹葉さんが申し訳なさそうに言う。しかし彼女に責任はない。照準は狂いなく敵側面を狙っていたし、砲撃タイミングも間違っではいなかった。

「いや、今回は私のミスです。…相手にまんまと誘導されました」

「そんな気負わない方がいいって。アレしか私たちに取れる戦法は無かったと思うよ」
琴音さんがそう言う。確かに側面へ回り込むしかなかった。そう言われて、気が楽になった気がしないでもない。

「とりあえず降りましょうよ、ススだらけになっちゃいますよ」

「…そうだね」

気に病んでも仕方がない。とにかく前を向こうと決めて、撃破されたパンターから降りた。

「危なかったよ。…いい戦いだった」

試合前とは別人のように活性化したヴィヴィアンさんと握手をして、健闘をたたえ合
う。

「…読んでたんですね、最後」

「ん…まあ、いくつかある戦術のうち、一番上手く決まるであろう戦術を考えた結果だよ」

その選択を瞬時にできる能力や、それを先読みし実行に移せる行動力。それがヴィヴィアンさんの強さなのだと思います。

「じゃあ、また会いましょ…。冬季杯でね」

ブラックプリンスに乗り込み、キューポラから手を振るヴィヴィアンさんに、手を振って別れる。

「私たちも帰ろうか、皆の元に」

私たちはドラゴントレーラーに乗せられた戦車たちの前で集合し、反省会を行っていた。

「… 今回の敗北は、戦車性能の差、そして戦術の稚拙さがあったと思います。フラッグで一对一なんて、今考えれば無謀だったかもしれません」

「そうね。やはり自走砲2両という偏った編成は良くないと思うわ」

「そうです。会長の言うとおり、今の編成は偏りすぎです。ですから、何両か売却して、

新たに偵察戦車を買うことにしました。これに関してはテニス部チームに乗ってもらおうと思っています」

10突も確かに有用かつ強力な戦力だ。しかし自走砲が3分の1を占める現在の編成では冬季杯のような厳しいステージで戦い抜くことはできない。戦術の幅が狭まりワンパターン化してくると、戦術が研究されやすくなり、試合を重ねるごとにどんどん不利になってしまうのだ。

「どんな戦車を？」

「それは……学園艦に戻ったら多分わかりますよ」

オーバーホールをお願いしていた会社と同じところに委託してあるので、そんなに遅くはならないはずだ。

「戦術は、これからアウトバーン校に合わせたスタイルを確立していこうと思っ
ています。冬季杯までには、必ず……」

ぎゅつと手に力を込めた。チリチリと痛む右目に、夏摘と過ごした過去の情景が映る。

その時、私の握りこぶしにいくつも手が重なった。それは同じ一班の皆の手。暖かくて、安心できる温度。

「……この試合はまだ始まりに過ぎません。頑張っていきましょう！」

皆の頼もしい返事に、気が付くと私は笑顔になっていた。

「…お、情報出てる… いつもどおりのメンバー… ん？」

夏摘が見ていたのは高校戦車道全国大会のエントリーリスト。そろそろ始まるのでトーナメントまで組まれている。常連校たちに加えて今回は見慣れない名前があった。

「大洗女子学園…？初めて見る名前だな。どれどれ…」

前情報によると、強豪校、聖グロ相手に善戦した新興校なんだとか。何でもあの『西住流』家元の娘である西住みほが車長を務めるチームらしい。編成は今までに見たことがないようなものだった。統一性はゼロ。戦力としても頼りがいのないもので、IV号、

M3、Ⅲ突、38(t)はまだいい方だ。第一次大戦時の骨董品である八九式中戦車なんてものまで引つ張り出しているのだから、もはや戦力として成り立っているのかも怪しいところだ。

「初戦の相手はサンダースかあ…可哀想に」

戦車の質も量も違いすぎる。勝ちが絶望的と思われる。

他に面白そうな情報もないので、SNSを開いて情報収集に勤しむ。するとまとめサイトトの広告に気になるものを見つけた。

『冬季杯にダークホースキタ——(。▽。)—!!』

「やっぱり注目するよね…ブリ校相手にあそこまで善戦するなんて誰も考えてなかっただろうし」

私立ブリテン高校は優秀な戦車と優秀な車長を擁する強豪校だ。金銭的余裕が無く大規模な大会には出てこれないが、参加車両5両以下の小規模戦等では無類の強さを発揮する。それに対し自走砲2両、中戦車1両で善戦したアウトバーン校は非常に優秀な高校と言える。特に車長の指揮能力には目を見張るものがある。

「面白くなりそうだね…楽しみだな」

冬季杯申し込み期限まで、残り1週間を切った頃。季節は梅雨を終えて夏に入ろうとしていた。

ライバルたちです！

下関市街地の荒廃したアスファルトを踏みしめてゆつくりと進む1両の重戦車。特徴的な形状の前面装甲はアイロンのような三角形を描いており、限界まで被弾経始を突き詰めたデザインであることが伺える。この戦車は、ソ連が終戦間際に完成させた、重戦車の決定版とも言える戦車、『IS-3』。IS-3以降のISシリーズに大した進歩が無かったことを考えると、IS-3こそがソ連の考える重戦車の最終系であるとも言えるのだろう。

そんなIS-3の前に路地を左折して飛び出してきたのは、全面に渡り傾斜装甲が採用された中戦車。側面に取り付けられたシウルツェンが特徴的な『T-44』、その100mm砲搭載モデル『T-44-100』だ。ボディサイズに見合わない長砲身を持つ車両で、中戦車とは思えない高火力が特徴だが、その砲の反動をボディが受け止めきれないという欠点を持つ。しかし高い機動力、傾斜装甲とシウルツェンがもたらす防御力、100mm砲による高火力を持つT-44-100は、優秀な中戦車と言えた。

半ばドリフトするように飛び出してきたT-44に照準を合わせ、IS-3が発砲する。122mm砲は強力な火砲で、直撃すれば中戦車など一撃で屠る威力を持つ。しか

しT-44はボディを微妙に傾斜させシウルツェンを以て受け止めた。そして急減速から後方に回り込んで一撃。だがIS-3の乗員の練度も相当なもので、車両を旋回させ、後部と比べて頑強である側面装甲で受け止める事に成功した。

「落ち着いて対処！全速力で旋回しながら再び敵の後部をとります！」

T-44のキューポラから身を乗り出して指揮を執るのは、隊長の越前 紀伊。変幻自在の戦術を持つ優秀な指揮官だ。茶色のツインテールを揺らしながら、下ブチメガネを通してIS-3をしつかりと見据えていた。

「押さえ込むわよ！絶対後ろを晒さないことっ！」

IS-3の車内で指示を出すのは車長の志摩 伯耆。銀髪に映える赤のカチューシャがトレードマークの少女で、仲間思いの良い車長だ。冷静な判断を持ち味とするクールな少女でもある。

「… もう一発凌いだら離れて一撃。いいね？」

「うん。任せて〜」

場の空気になじまないゆるい声で答えたのは砲手の伊賀 上総。黒髪は激しく遊んでおり、ふわふわしたイメージを受けるが、砲撃のウデは行進間射撃の命中精度80%オーバーを誇る驚異のものだ。

「… 撃て！」

旋回で後部を取ったT-44。100mm砲はしつかりとIS-3の後部を捉えていた。

激しい砲撃。土煙を上げて着弾する。しかし、IS-3はそこにはいなかった。急速で砲撃を躲したのだ。

「ホント… 無茶苦茶なんだから…！回避！」

T-44は持ち前の機動力を活かしIS-3のキリングレンジから逃げる。しかし、上総はそれを許すほど生半可な腕ではない。

「出番よ、いつでも撃ちなさい！」
「了解」

先ほどの空気は何処へやら。キリツと引き締まった返事に続き、殆ど照準時間を取らない高速の砲撃。その砲弾は確実にT-44の側面装甲…シウルツエンを弾き飛ばした部分に着弾していた。無論、T-44は走行不能。

直後、IS-3の後部で砲弾が弾ける。音、爆発、煙ともに相当なものだ。かなりの大口徑なのだろう。

IS-3の遙か後方には、大口徑砲を持つ自走砲がいた。大質量弾で敵の装甲を『叩き割る』、SU-152自走砲だ。それなりの機動性、前面傾斜装甲による防衛性能、そして言わずもがな152mmの徹甲榴弾が生み出す超高火力。火力支援能力を求めら

れる自走砲に必要とされる能力の全て揃った優秀な自走砲だ。

彼女たちは、冬季杯における優勝候補筆頭『戦練高等専門学校』。強力なソ連戦車と優秀な指揮官を有する新興校だ。この下関市街地演習場を保有しているのは戦練専だし、冬季杯の運営もそうだ。とにかくこの戦練専という高専は、非常にお金持ちなのだ。それ故にこれだけ強力な戦車を揃えることができた。それに専門学校であるために練度が高く、今年設立だが練度では黒森峰やプラウダのそれに匹敵できるであろう。これらが怖い高校でもある。

下手な国際規格コースより大きなサーキット。ここは『吉森工業高等学校』学園艦の甲板上に設けられた施設で、生徒たちの練習場として利用されている。

70km/h前後の高速で走っているのは、BT-7快速戦車。この学校が戦車道の他にもタンク・アタック等のタイムアタックイベント、不要装備を外し極限まで軽量化してのタンカスロンなど、様々な用途に仕様する車両で、整備科の実習車両として多数

を保有している。

彼女たちはこの高校で車両整備を学んでおり、特に戦車においては進路でも有利になっている。プロ戦車チームや戦車ディーラーにも多数の卒業生を排出しており、それらのコネを用いて強力な戦車を何両か手に入れていく。

「2コーナーインに付けてないよ！もつと寄せろー！」

無線を通してそう叱責するのは隊長であるマクラレーン。オレンジの髪が特徴的で、非常に男勝りな性格をしている。

「そんな」と言われてもこれ以上はムリっすよー！」

そう返したのは今B T 7をドライブする、隊長車の操縦手、ロータス。どこぞやの Pasta の国の高校にも似たような性格、口調の副隊長がいたような気がしないでもないが……。まあそんなことはどうでもいいところだ。

そんなサーキットにもう一両戦車が入ろうとしていた。カモフラージュ塗装：『サイケデリック・ペイズリー』と呼ばれる渦状のモノトーンカラーで塗装された、パンター中戦車だ。

「お、アレもロールアウト終わったんだね……。ロータス、もう帰ってきていいよ！お化けが入ってきたから」

「了解ー！」

B T-7はその周回の最後にピットレーンへ。それと時期を同じくしてパンターが甲高い音を立ててコースインする。

「：アレは、有効な戦力になると思うね。断言できるよ」

練習試合が終わる頃、一台の18t重ハーフトラックが輸送船から仙崎港に降り立とうとしていた。その18t重ハーフトラックの荷台には、鈍色の軽戦車が乗せられていた。

「：それにしても、なんでコイツなんだか。II号とかじゃダメなのか？」

戦車リペアショップの代表がそう呟く。それもその筈。この戦車は非常にマイナーであり、誰も見向きもしていなかったものだからだ。決して弱くはない。しかしマイナーさから倉庫の奥で眠っていたのだ。それを先日レストアして、今日持ってきたの

だ。

「ま、何かしらの理由があるんだろう。コイツの活躍を、楽しみに待っとくかね」
隊員たちへのお披露目まで、あと数時間となっていた。

新たな戦いです!

疲れきって、皆眠りについた帰路。私はマウルティアの最後部から離れていく萩市の風景を見ていた。私が生まれ育ったこの街は、同時に私の心の傷全てが詰まった場所なのだ。だから私は学園艦のあるアウトバーン校に入学することで全てを忘れようとしていた。そんな恋しくも憎らしい街は、半月の湾と白壁の映える綺麗な風景をしていた。

「… 妹さんに、会えるといいですね」

車内から声が聞こえた。それは幹葉さんのささやくような声。

「… そうだね。そのために、もつともつと強くならなきゃ」

今日の負けは、明日の教訓。もつともつと強い敵と戦つても勝てるようになるためには、私たちが強くなるしかない。それは簡単な道ではないだろう。だが、そんな苦難の道こそが、『源流』が輝くに相応しいステージなのだ。

「… 諦めたら、ダメだもんね」

「… ですね」

マウルティアは峠へと差し掛かる。萩市の町並みは森の中へと消え、どこか切なくな

る。

「だから私、ついていきます。そしてきつと隊長の『目』になってみせます！」

私の失われた右目に、鮮やかな情景が映る。昔の記憶だ。夏摘と走り回り、じゃれあつた日々。そんな遠く懐かしい景色はすぐに色を失い、再び半分の視界は黒に染まる。しかし、昔のようにそれだけで涙するような人生はもう終わりだ。もう、すぐに会えるのだから。

「…うん。私も頑張るよ。だから、着いてきてね」

私の差し出した手を、幹葉さんはそつと取った。

仙崎港。綺麗に整備された港に2台のマウルティアが到着した。既にブリ校の学園艦は仙崎港を発っており、そこにはほつりと低く構えたアウトバーン校学園艦の姿があつた。

「…お、アレがなつちゃん隊長の言つてた…」

「ああ、届いてたんですわね！」

港には戦車が二両置いてあった。塩害対策だろうか、白いシートが被せられている。

「……では、お披露目したいと思います。我々の新しい戦車を！」

私はその車両に歩み寄り、シートを縛っている紐を解く。そしてシートに手をかけて、一気に引き剥がした。

「パンター……？」

寿璃さんが呟いた。それも無理はない。縦横比や砲塔形状を除くあらゆる部分がパンターに酷似しているためだ。前面に傾斜装甲を採用した近代的なシルエツトで、如何にもドイツ戦車といった感じを受ける。大型化に伴う重量増加も強力なエンジンを搭載することで解決されており、非常に高い機動力を誇っている。

非常に大きな転輪や履帯は悪路走破性や加減速、旋回に役立っており、敵軽戦車はもちろん、ヘルキャットなどの高火力戦車にも対応できる足回りは他の軽戦車には無い強みと言える。

総じて言うなら、この戦車は『強行偵察』に向けた車両と言えるかもしれない。

「この車両は、『VK16.02 レオパルト軽戦車』です！」

レオパルト。現代戦車にも受け継がれた『豹』の名を持つ軽戦車だ。モックアップが作られ、部品の生産まで終わっていながら生産される事の無かった幻の車両。目の前に

あるこのレオパルトは、その部品を流用、或いは設計図と同様の物を作成して組み立てられた精巧なレプリカだ。

「レオパルト：でも、戦車道のレギュレーション上では大丈夫なんですか？」

幹葉さんが心配そうに尋ねる。確かにそうだ。厳密には『試作車が作成された』車両が参加できる戦車道大会。そこにこんな車両を持ち込んでも大丈夫なのか。それは誰しもが思う疑問だろう。

「大丈夫ですよ。購入に当たって戦車道連盟にも許可を頂きましたし」

戦車道連盟に電話で尋ねたところ、『設計図とパーツが揃ってればよし』との事だった。案外適当なんだな、なんて思いながらも、しめしめといった感じで購入へ踏み切ったのだった。

「レオパルトはテニス部チームに乗ってもらいます。10突も使うかも知れないので、大変だと思いますが両方のトレーニングをお願いします」

「了解です！根性だぞ、皆！」

「おー！」

元気なテニス部チームの掛け声を聞き、私はほっと胸をなでおろした。

「じゃあ、帰りましょうか」

2台のマウルティアは、新戦力であるレオパルトと共に学園艦へ続くステップを登っ

ていく。

10月末。下関市街地に8校の学校、7隻の学園艦が集まった。『冬季杯』の組み合わせ抽選会のためだ。

言わずもがな、主催校である『戦練高等専門学校』

冬季杯開幕前から注目を集める『モニユメントバレー田園高校』

私たちが敗戦を喫した『私立ブリテン高等学校』

高い整備力と強力な戦車を持つ『吉森工業高等学校』

日本の古き良き心を大切にする『太井社大学附属相模女子学院』

小規模だが優秀な隊長を擁するカナダ系の『スタンレー中等教育学校』

陽気な校風を持つイタリア系の高校『私立カレン商業高等学校』

そして私たち『アウトバーン女子学院』。

どれも強い特徴と高い戦闘力を持つ高校で、流れと当たり次第ではどこが優勝してもおかしくはなかった。3両という少数での戦闘になるので、どこの高校も強力な戦車を手に入れることが出来る、というのも流れを読みにくくする要因といえる。

会場となっているホール。そのステージ上には大きなボードとトーナメント表、その下にA～Hのアルファベットが打たれており、そこにくじを引いた高校の名前が入れられていく仕組みになっている。

まずは最初、主催校である戦練専。茶色のツインテールを揺らし、下ぶちメガネの少女が壇上へ上がる。席に向かって一礼し、箱に手を突っ込む。ごそごそと漁った後、手を引き抜き、手に持ったボールをこちらに見せた。

『戦練高等専門学校、C枠』

左から三つ目、C枠に戦練専は収まった。相手のデータの分からない初戦から当たるのは怖い。Dにはなりたくないものだ。

続いてブリ校の番だ。壇上に上がるのは副隊長のバーバリーさん。… まあヴィヴィ

アンさんはあの感じだと壇上にかかるのは少し無理そうだし、そんなものか。

『私立ブリテン高等学校、G枠』

右から二つ目にブリ校は入った。一度手の内を知っているためリベンジを兼ねて戦いたいとも思うが、やはり初戦から当たって嬉しい相手ではない。できれば違うブロックがいい。

… こうしてクジはどんどん引かれていき、次はモニュメントバレー校の番。

壇上上がる少女は、茶髪のセミロングヘアを揺らして現れた。その顔立ちは少し優しげでどこことなく憂いを帯びていた。その表情こそ私の知るものではないが、あの顔、体型、スタイルは私の知る夏摘そのものだった。

「… 夏摘」

ぼそつと声が漏れてしまった。静まり返った会場ではその小さな声でも周りに聞こえてしまう。隣にいた華蘭さんが手をそつと取った。

「… もう少しの我慢ですよ」

「… うん」

いつの間にか震えていた手が、暖かさに包まれる…。 もう少しだ。待っててね。

夏摘が箱に手を突っ込む。残る枠は二つ。どちらかが私たちだ。Bか、F。どちらにせよモニュメントバレーとは決勝戦まで当たることはない。

『アウトバーン田園高校、F 枠』

F 枠。初戦の対戦相手は日本戦車を駆る相模高校。生半可な相手ではないが、きつと勝てるだろう。

「じゃあ、私たちの最初の対戦相手は……」

A 枠に収まっている名前は、『吉森工業高等学校』。戦車整備や操縦に長ける高校で、高機動戦車を用いた連携戦術を得意としていると聞く。

「……生半可な相手じゃないですね」

「うん。十分な準備をしないと、初戦から負けることになる……そんなの、絶対に嫌だ」
左を見ると、席に座る皆の顔がこちらを向いていた。皆で顔を見合わせて、頷いた。

会場を出て、広場を集まる。

「初戦の相手は、高機動戦術を得意とする吉森工業です。主力戦車はBT-7だと聞いていますが、恐らくより強力な戦車が導入されていることと思います。くれぐれも油断の無いよう、万全の準備をして行きましょ…… あっ」

私の決意表明は、後ろを通り過ぎた少女によって中断された。匂いや、雰囲気かわかった。

「……夏摘！」

「ちよ、ちよっと、隊長!」

私は集合している皆の輪から離れて走り出した。皆のことなんて今は考えていられない。

肩に手が触れる。制服越したが妹に触れられて嬉しさがこみ上げる。

「…… ああ、アウトバーンの隊長さんの」

その返事は素っ気ないものだった。それも致し方あるまい。私のことを覚えてなどいないのだから。

「…… ごめんなさい。いきなり混乱させるような事を言うんだけど」

「? どうぞ、何でしょうか」

疑問符を頭に浮かべる彼女に、私はいきなり本題を投げかける。

「…… アナタは、私の妹…… だと思おうの」

私はこの言葉は適当にあしらわれるものだと思っていた。しかし、私が思っていた反応とは少し違う物が返ってきた。

「…… 貴女が私の、姉…… それは、本当なんですか?」

真剣な表情で返してきた。風が吹いて、木の葉がぱらぱらと舞う。

「…… うん。どう見ても私の妹。顔も、声も、全て」

彼女はしばし迷ったような表情を見せた。それは仕方ないことだろう。私が彼女でもこうなる。いきなり自分の姉を名乗るものに声をかけられたら。

「：：：でしたら、戦車でそれを示してください。私の姉だと言うなら、きつと私より強い」

そう言うのと、夏摘は右手の手袋を外して、右手を差し出した。

「冬季杯の決勝で会いましょう。そこで、私が決める」

ぎゅつと握ったその手は暖かかった。いや、私の手が冷たいだけなのかもしれないが。

「：：： 健闘を祈るわ。是非とも決勝まで来てくださいね」

手を離し、再び手袋をしてその場を立ち去った。

「：：： きつと証明してやる。：：： 姉より優れた妹なんて、この世にいないんだから。：：：！」

振り返ると、戦車部の皆がいた。優しい笑顔で、皆がこちらを見ていた。

「：：： という訳です。私はもう、負けるわけにはいきません。」

皆の真剣な顔。鋭い視線が私に向けられる。

「勝ちましょう！私が全力で勝利へ導きますす！」

「はー！！」

これから始まる戦いへの決意。勝利を、寒空に誓った。

開幕！『冬季杯』！

嵐の前の静けさです！

冬季杯の開幕戦は、いよいよ明日に控えていた。私は最後のねぎらいとして、パンターを隅々まで洗車していた。傍から見ていると分からないような、キズや汚れが至るところに。しかし、これも私たちの練習によつてできたキズだ。誇れるものだろう。

「戦車を洗車。ダジャレみたいだね」

そこには操縦手の涼子さんがいた。スポンサーロゴが所狭しと並んでいるレーシングスーツを着ているということは、戦車レースの練習の帰りなのだろう。ツナギ状になっているスーツの上半身だけをはだけて黒のキャミソールが丸見えになっていた。汗で下着のラインが浮いて、見てる私も恥ずかしい。

「うん。ずっと酷使してたから、戦いの前に綺麗にしてあげようと思って」

「…だね。私も洗車しようと思って来たんだけど、粗方終わってそうだね」

そう言うのと彼女はおもむろに靴を脱ぎ、濡れたままのパンターによじ登る。

「何するの？」

「操縦桿にグリップ巻こうと思って。あれ手痛くなるんだよね」

急発進、急制動による回避行動や、360^{サフロック}ターン、ドリフト等の曲芸走行、さらには被弾経始を応用した防御術、拳句の果てには体当たり等のチャージングといった様々な技術を用いて近接戦闘を繰り広げる。それが源流戦車道の一番の特徴であり、操縦手の技量が近距離での戦闘能力に直結するとも言っても過言ではないのだ。それ故に、源流戦車道においては操縦手は忙しく、疲れやすい。操縦性の面でも、グリップを巻く等の小改良は推奨したいところである。

「そうだね。だってただの鉄パイプだもんね…。」

加えて言うなれば、パンターの弱点が操縦手にさらなる苦悩を強いている。アウトバーン校で運用しているパンターは、D型をA型仕様に改造したニコイチ仕様である。問題を抱えたエンジン周りや足回りを全てA型仕様に換装したことで機械的信頼性を上げたが、資金不足に悩まされ最大の泣き所である変速機がそのままになっているのだ。壊れやすく、デリケートなソフトワークが求められる上に、長時間の機動戦闘には適さず、強力なパンターにおける最大の泣き所となっているのだ。

「トランスミッションも換装しないとね。涼子さんにこれ以上負担を強いるわけにはいかないし」

「まだ前線で戦えるだけマシってもんだよ。私はIV突の改良を優先するべきだと思うな」

IV突にはアップデートプランがいくつか存在する。それを優先するべきか、パンターの改良を優先するべきか。それは一回戦が終わってからでも問題はないだろう。

「ともかく、ただ速いだけが取り柄の私に戦い方を教えてくれたのは夏紀さんだよ。ありがとうね」

グリップを巻きながら涼子さんが言う。こう改めて言われると、なんだか気恥ずかしい。

「いえ…優秀な乗員なくして源流は成り立ちませんから。私だけでも、涼子さんだけでもダメなんですよ」

磨き上げられたパンターを見上げる。私より1メートル半くらい高い相棒は、薄暗いガレージの中で、差し込む陽光を受けていぶし銀の車体をぎらぎらと輝かせていた。

7.5cm砲は勇ましく天に掲げられている。

「私は家の戦車にずっと乗ってきたんだ。II号、BT-2、ジャクソン…でも、パンターが一番好きかな。硬くて、速くて、強い。やっぱりそれが戦車の本質だと思うから」『戦闘装甲車両』。今ではレースをしたり、移動手段として活用されたりと、足として使われることも多い。しかし戦ってこそその『戦車』だ。走るだけでは、その勇ましい砲も、たくましい装甲も全てがただの重石だ。

グリップを巻き終えた涼子さんは、ハッチから出て伸びをした。ちらりと覗く健康的

な腹筋は、レーザーというものの過酷さを物語っているようだった。

「明日も頑張ろうね。私も全力で走るからさ」

「… うん」

その日の夜。下関とは関門海峡を挟んで対岸に位置する、門司に来ていた。下関と比較しても活気にあふれている…。とは言っても、下関市街地は既に私有地だ。活気がある方がおかしいのだが。

ここは門司にある倉庫街。レンガで作られたそこは観光スポットにもなっていて、多くの人が集まっていた。お目当てはその倉庫を彩るイルミネーションだろう。愛し合

うカップルや、仲のいい友人同士で華やかなイルミネーションを見て、感動を目に浮かべていた。私にもそれは綺麗に見えたが、右側の視界の無い私の目には、きつと少し華やかさは劣って見えているのだろうな、なんて思っていた。

気温は氷点下にもなった寒い夜。私は温かい缶コーヒーを飲みながら歩いていた。待ち合わせをしているのだ。そろそろ時間なので来るはず。

「ごめん。待ったかな」

ゆるやかにウエーブした長い銀髪が黒いダッフルコートに映える。今日は睡眠が足りているのか元気そうな私立プリテン高校の隊長、ヴィヴィアンだ。

「いえ、全然。それより用ってのは？」

「まあ、場所を変えようよ。おいで」

ヴィヴィアンさんについていくと、そこには銀色の乗用車、ロールス・ロイス 40 / 50 HP シルバーゴーストが。その目立つ車に若干困惑しつつも、助手席に乗り込む。

「じゃ、行くよ」

100年以上も前のクルマとは思えない、軽やかなエンジン音を立てながら、シルバーゴーストは路端から発進。国道に合流して、なめらかに速度を上げていく。

「ごめんね。ちよっと話がしたかっただけなんだ。君の、その… 決意？ みたいなもの

が」

夜の国道は結構な混み様だった。信号が赤になるたびに行列が出来上がる。赤いランプの列に照らされながら、私たちは少しずつ夜道を進んでいく。

「決意：：ですか。そんなものは特に無いですよ。ただ、目的のために戦うだけです」

「目的ね：：聞かせてもらっていいかな、その目的ってやつを」

私の目的。あまり人に話したい内容ではないが、ヴィヴィアンさんになら話す事にためらいを覚えなかった。それは、彼女の母性というか、人として寛容な面がそうさせたのだろう。

「：：妹を連れ戻すためなんです。ずっと探してたんです」

「そっか：：」

誰か、とか何故、とかは聞かれなかった。ただ私の心を浅く理解し、深くまで踏み込まない。そういう大胆に見えて遠慮がちな姿勢は、不思議と居心地がいい。

料金を通過して、しばらく進んだ先は、大きな橋。関門海峡にまたがる関門橋を渡る。ドアや窓がない上に海拔60mの高所にかかる橋だ。風は非常に強く、冬の寒さも相まって体を冷やす。

「寒いね：：」

「そうですね：：」

するとヴィヴィアンさんは、来ていたダツフルコートを脱いでこちらに手渡した。

「貸してあげるから着るといいよ。風邪ひいちゃいけないし」

きつと彼女が男性だったら惚れていた。お言葉に甘えて、ダツフルコートを羽織ると、人肌ほどの暖かさを感じた。

関門橋からは関門海峡に面する二つの街が見える。色とりどりの光に彩られて輝く門司と、その光を反射して僅かに輝く下関。まるで太陽と月のようだ。

「…綺麗」

「昔はもっと綺麗だったよ。海をはさんで互いの街が光り輝いててね。海がそれを反射して黄金に輝いてた」

景色が頭を過る。想像してみると、非常に絵になる。

「…私の目と、同じですね」

向かって左の門司は輝き、向かって右の下関はくすんで見える。

「だったら、キミの右目はまだ何かが見えているんだね」

「…え？」

私の右目は黒の眼帯で覆われていて、何も見えない。見えるはずもない。彼女の言った言葉の意味が、私には理解出来なかった。

「下関の街は、既に街として機能していない。でも、まだこうして少しだけ輝いてい

る」

下関の街にそびえ立つガラス張りのタワー、ゆめタワーは、門司が発する人々の営みの色を反射して、様々な色に輝いている。既にランドマークとしても、展望台としても機能しないが、確かに私の心に『綺麗』と思わせるものだった。

「キミの右目もそう。目として機能しなくても、きつと何か別のものが見えてるんじゃないかな。キミの心が、目の代わりに何かを見ているんじゃないのかな」

時々見える鮮やかな情景。ふと思い出したように映るのだ。それは、私の心を見せていた虚像。

何故か涙がこぼれていた。雫がほたり、ほたりと革のシートを濡らした。ヴィヴィアさんは私の頭を撫でてくれていた。母のようなその暖かさに、私の涙は滴り続けた。

試合当日。水族館跡のすぐ横で開会式が行われた。

相手側の隊長が一步步み出てくる。オレンジに輝くツヤのある長髪を即頭部のピンでまとめた特徴的な髪型の、マクラレーンさんだ。

「アタシは隊長のマクラレーンだ。正々堂々と勝負しよう」

オーブンフィンガーの手袋を外して握手を求めてくる。私も右手を出してそれに応じる。

「隊長の三城です。全力で臨みますので、いい試合をしましょうー」

ぎゅっと握り締められた手からは、戦車乗りとも違う、独特のザラつとした感触が伝わってくる。これが整備熱心な吉森工業の特徴なのだろうか。

『只今より、吉森工業高等学校 対 アウトバーン女子学院の試合を開始します！互いに、礼！』

『『お願いします!!』』

——
いよいよ始まる。私の、忘れられない戦いが。

高機動戦術です！

下関の中心市街地のすぐそばにある小さな漁港。そこが私たちのスタート地点だった。到着次第戦車の整備、搭載物資の最終チェックなどを行う。重量増は出来るだけ控えたい。それはたった1kgでも見過ごすことはできない。重量物を車内に置くと重心が上がり、機動性が悪くなるからだ。まあ、パンターにそれが関係あるかと言えばそうでもないが。

ぎらぎらと陽光を弾いて輝く海を背に停車している3両の戦車。依然と殆ど変わっていないが、一部変わっている場所があった。それはボディ側部。まるで大洗女子学園の戦車隊のように、動物のパーソナルマークが描かれているのだ。

パンターの砲塔側部にはデフォルメされた勇ましさを残る『虎』の絵が、レオパルトの砲塔側部には虎にも猫にも見える可愛らしい『山猫』、IV突のボディサイドには誰が見てもそうと分かる、潮を吹く『クジラ』が描かれている。これらは全てアウトバーン戦車隊がそれぞれを呼称する際『一班』『二班』などでは寂しいからという理由でつけたもので、戦術的意味は殆どない。むしろ迷彩による隠蔽という面で言えば、戦力の低

下を招いているだろう。

「山猫さん、各種物資搭載完了、全兵装準備OKです！」

「クジラさんも弾薬類積んだよ！機関も砲も、各種装備は問題なし！」

「虎さんも大丈夫です。いつでも行けますよ」

それぞれ寿璃さん、菫花さん、華蘭さんの報告。これでいつでも戦える。

「では、戦術の最終確認をします。今回の相手は高機動戦車ですが、まずは斥候として前進してくるであろうBT戦車から潰します。相手の『目』を潰して、それからフラッグの護衛を潰し『腕』をもぎ取ります。後は丸裸のフラッグを一方的に叩き潰せる。以上が今回の作戦『ダルマ作戦』です。何か質問はありますか？」

ハイ！と元気の良い返事とともに手を挙げたのは山猫さんチームの寿璃さん。

「偵察中に敵本隊と出くわした時にはどうすれば？」

「出来れば一撃離脱を。危険だと思えば撤退してください。とにかくやられないように気をつけて」

「分かりました！」

他に手は上がらない。やはりアウトバーンの隊員は物分りがよくて助かる。

「では、みなさん戦車へ！」

海の光を反射して銀色に輝く三両の戦車は、暖気の終わったエンジンを唸らせスター

ト地点についた。

開会式が行われた水族館前の広場。そこには吉森工業の戦車が並んでいた。

「隊長、少しいいですか？」

「何だよこんな時に……トラブったか？」

その中でも背の高いパンターの後部ブロックを開いて、車長のケータハムが悩んだような顔をしている。

「いえ……この車両の運用についてです。敵にも同様の車両がいると思うのですが……」
「アレとコイツは別物だと思え。何せ馬力が違うからな。ちょこまかと旋回する格闘戦^{インファイト}は避けて、大きく動きながら戦う機動戦^{ドッグファイト}で行け。そっちの方がコイツのエンジンの特性が活かせる」

パンターのV型12気筒ガソリンエンジンとは違い、特徴的な細長いエンジン形状をしていた。気難しく、ちよつとでもゾーンから外すと機嫌が悪くなる。そんなエンジンを

だが、機嫌さえ損ねなければ確実にV12に勝るスペックを持っている。

「さあ、Start Your Engines!!」

レースでお決まりのセリフと共に、戦うクルマたちの心臓に火が灯る。勝負はもうすぐ始まる。

「バンツァー・フオー戦車前進!!」

掛け声と同時に3両の戦車はコンクリートの地面を蹴りつけて前進する。まず先行したのは山猫さんチームのレオパルト。先んじて市街地に突入して、敵編成を確認し、戦術の解析に役立てる。それが少数戦闘における基本で、情報を制する者が戦を制する、と言っても過言ではないのだ。

冬季杯では、諜報行為の全てが禁止されている。というのも、3両という少数故に編成がバレてしまうと戦闘が一瞬で終わる可能性だつてある。『強行偵察』という戦闘の第一歩から始めるのがこの冬季杯のやり方だ。

レオパルトは、線路の高架をくぐって中心市街地へ突入した。田舎の割にはビルや店舗が多く、見通しは思ったより効かない。市街地西側は入り組んだ路地と、蜘蛛の巣のように張り巡らされた陸橋が特徴で、店舗などの大きな建造物が多い。道路は高規格で非常に走りやすく、速度の乗る高速戦車が有利になる傾向がありそうだ。

国道を外れて、駅前のバスターミナルを通過する。一本逸れた裏道に入って全速で走りながら敵を探す。60 km/hの速度で走る戦車のキューポラから体乗り出すのは思いのほか怖い、相手前衛のスマッシュをボレーで返す時に比べればこんなものは朝飯前だ。150 km/hに迫るボールを眼前に構えたラケットで返すのは恐怖以外の何物でもない。

「そろそろ見えてもいい頃なんだけどなあ……」

BT-7 快速戦車は、履帯を外した装輪走行が可能になっている。その際の最高速度は80 km/h程で、いくらレオパルトといえど追従することは出来ない。その足を持っているのだから、そろそろ鉢合わせもおかしくないのだ。

目前にゆめタワーが見える。ヤシの木とタイル張り舗装が特徴的なこのリゾート風の道路。このあたりが下関市街地のちょうど中腹あたりになる。ゆめタワーの根元に陣地が存在し、そこを中心に立体駐車場などの戦術的に利用できる建造物が点在している。ここが冬季杯における戦闘の中心になるだろう。

建物の影から飛び出した瞬間、右側の交差点に敵戦車の姿を捉えた。BT-7だ。持ち前の動体視力で確認したが、やはり履帯は外しているようだ。

「敵車両！BT-7です！Eラインを西進！」

『そのままやり過ごして敵本隊の発見に尽力してください！くれぐれも撃破はされないように！』

「了解！さらに深部に入ります。オーバー！」

レオパルトはBT-7をとりあえずスルーして、敵本隊を探す。敵のBT-7も同じ行動をするだろう。当分裏をかかれる心配はない。しかし発見されてしまった以上単純な動きでは見透かされてしまう。少しややこしく、右折と左折を繰り返しながら前進していく。さらに進み、警察署の付近で、敵本隊に出くわした。

「敵本隊と思われる車両を発見！見る限り：センチュリオンとパンターですね。どちらも立体駐車場で停車しています」

「センチュリオンですか：。分かりました、撤収、合流しましょう。Cラインを西進してください」

「了解！」

センチュリオン重巡航戦車。初戦から強力な戦車のお出ました。それに随伴もパンターという強力な布陣。戦闘能力では間違いなくこちらが劣っている。だからこそ、数

の優位を作り出すことが大切になる。

Cラインを西進、下関駅前まで本隊と落ち合った。

「とりあえず動きまます。BT-7を早い段階で仕留めたいのでともかく前進しましょう。クジラさんは控えめな行動を心がけてください」

装甲の脆いIV突をパンターの背後に隠して前進する。今度は敵の撃破が目的なのでゆつくりと進んでいく。BT-7はこちらをまだ発見していない。出くわさないとおかしい。

立体駐車場の影からBT-7が飛び出してきた。打ち出された45mm砲弾はパンターの正面装甲に弾かれる。

「山猫さん、追撃してください！本隊も追尾します！」

「了解！やっぱ忙しいよね！」

軽戦車は忙しい。こういう超高機動戦車に対しては軽戦車を出すしかないのだ。

レオパルトはBT-7のあとを追って国道に飛び出した。直線的ではあるがうねっており高低差もある。ドライバーの腕が試される。ふわりと浮くような挙動を見せつつも、タイヤで走るBT-7にしつかりと追従していく。それだけの走行性能が、レオパルトには備わっていた。

「でもおかしい……なんでBT-7が離れないんだ……？」

最高速度はチューニング込で85km/hだとパンターの操縦手、涼子ちゃんから聞いている。それなのに最高速度60km/hのレオパルトがついていけるのは…

「…誘い込まれてる!？」

気がついたときにはもう遅かった。後方にパンターの姿を捉えた。同時に発砲。行進間射撃故に当たりはしないが、これで見事に挟み撃ちにされたわけだ。

「こちら山猫! 敵に挟まれました!」

『敵はパンターですか!?!』

「そうです!」

『分かりました! そのまま引きつけてください! 頑張つて!!』

敵の戦力の実に70パーセント弱を私たちが引きつけているのだ。そう思うとなんだか心に火が付いた。

「皆! まだたつたアドバンテージ取られただけだよ! 氣イ引き締めていくよ!!」

「はい!!」

虎さんとクジラさんはその報告を受けて即座に動いた。敵フラッグが丸裸のうちに捉えようというのだ。報告のあつた地点に全速で向かった。

その時、なにか気配のようなものを感じた。直感的に、危険を察知したのだ。

「まずい、停止!!」

パンターが急制動をかける。履帯が火花を散らしながら抵抗を生み出す。停車した瞬間、正面装甲を17ポンド砲の砲弾がかすめていく。

報告のあった立体駐車場。そこには、コンクリート壁で身を隠したセンチユリオンが、砲塔だけを突き出して待ち構えていたのだ。

「さて、最初の優勢は、こっちがもらったよ…!」

『熱い』戦いです!

「次の路地左折!振り切るよ!」

山猫さんチームは、パンターをBT-7の猛攻を蛇行運転でなんとか躲していた。しかしそれも時間の問題。いずれは敵の弾道も収束し、捉えられてしまう。それより早く敵を振り切らなければ撃破は免れないだろう。

履帯のグリップ能力が遠心力に負けスライドする。ドリフトしつつもしっかりとレオパルトは進んでいく。BT-7はそのまま通過したが、パンターは追ってくる。

「… なにかおかしい」

甲高いエンジン音。まるで耳鳴りのようなそれはどう聞いてもアウトバーンのパンターのそれとは違う。形式だとかチューニングの違いはあれど、ここまで極端に変わることがあるのだろうか。ドライビングもそうだ。その重量級なボディを振り回してまるで、露骨にエンジン回転数を維持しようとしている。それには何か理由がある。おそらくは…

「… エンジンが怪しいな。こちら山猫、敵パンターのエンジン音や挙動が怪しいです。」

甲高い音がするんですが、何か理由は考えられますか」

「：： 甲高いエンジン音ですか。幹葉さん、何か分かりますか？」

重厚かつ官能的なV12ガソリンエンジンの音が響く車内。砲手の幹葉さんに質問する。彼女の知識なら何かわかるかも知れない。

「パンター：： エンジン：： もしかして」

国道から一本北に入った路地。一応2車線あるが戦車には幾分狭く、非常に走りにくい。そんな中、一旦突き放した後方のパンターは猛然と速度を上げてくる。

「は、速っ!?! どうする：： えーつと：： 停止! 停止!!」

それはもう時速100km/hに迫ろうかという速度だった。このまま最高速合戦をしても勝ち目はない。それなら後方に回り込んで、一発お見舞いして撤退しようと考えた。重量が軽いレオパルトに比較して、パンターは重たい。故に制動距離が伸びてしまい、遙か前方へ。しかしその体勢から360°ターンして素早くこちらに砲を向けてくる。7.5cm砲の餌食になる前に撤退する。左折、路地から国道へ。

「やはりパンターは凄い速度です! 読みが当たってるかと」

左折直後、そのままスピンのようにレオパルトを滑らせて、後方から路地へ進入しすぐに停車。直後、パンターは交差点を曲がってこちらへ。目の前を通り過ぎた直後に路地を飛び出して後ろを取った。

「所詮は中戦車！ 抜けるはず！ 行けっ殺人スマッシュユ！！」

5cm砲が火と煙を吹く。貫徹力の高い砲だが、当たり所が悪く貫通とはいかなかった。パンターはその場で減速し転回、こちらを追おうと動くが、その動きは緩慢で、先ほどまでの俊敏さを感じない。山猫さんチームは、それをしっかりと目に焼き付けて路地へと戻っていく。

「おそらく予想は正しいですね。回転数が落ち込んだ時のパワーダウンが激しいです」

その直後、無線を通して乾いた音。

『アウトバーン女子学院、レオパルト軽戦車、走行不能！』

B T-7からの狙撃のようだ。やはりB T-7が残っているのは怖い。あちらを先に倒すべきだったかもしれない。

しかし现阶段、フラッグ車は敵フラッグであるセンチユリオンとのにらみ合いが続いていた。迂闊に動くことはできない。相手は上手く弱点を壁に隠しているが、それはこちらも同じ。陸橋を撃って崩壊させ、即席の遮蔽物を作ったのだ。

「ここににらみ合いを続けているうちはクジラさんはフリー…どう動かすか」

将棋をしているような気分だ。敵の王将はすぐ近く。しかし、詰ませるにはどうも手が足りず、まだまだ時間がかかりそうだ。

「クジラさんは回り込んで右方に展開、おそらく合流を狙うであろう敵増援を阻止してください！」

IV突を、建造物を大きく回り込むように動かして、敵の合流直前を狙う。上手くいけば美味しく1両撃破、悪くすれば残存はフラッグ1両になってしまう。博打のようなものだ。

しばらくの静寂。それを撃ち破ったのは、パンターの砲撃。それはセンチリオンが潜む立体駐車場の上部を狙ったもので、2階を倒壊させてセンチリオンからの射線を塞ぐ狙いがあった。即座に装填。装填完了とほぼ同時にパンターは飛び出す。

「敵来たよ！2両かたまってる！」

IV突の火砲が火を噴き、BT7の正面装甲を捉える。大きく弾き飛ばされたBT7は壁に激突して白旗を上げた。こちらもパンターを追撃しようとしたが、敵パンターはパチンコ店跡に突入してこちらの射線から逃げた。そのため急遽目標を閉じ込めたセンチリオンに変える。懐に飛び込んでの近接戦闘なら装甲厚は関係ないし、立体駐車場のような挟所では戦車の取り回しに慣れている方が有利になる。攻め込むなら今だろう。

「壁を踏み破って突入してください！敵の伏撃に注意して！クジラさんは安全を確かめつつ敵パンターの位置を掴んでください！」

コンクリート壁を踏み破って突入すると、センチュリオンはこちらに砲塔を向けた。戦う覚悟を決めたようだ。

「いざ尋常に、勝負！」

「シナリオとは違うが… やってやるさー！」

センチュリオンとパンターが、17ポンド砲と7.5cm砲の鋒を向けて一度停止。お互いの動きを読んでいるのだ。

轟音と共にばらばらとコンクリート片が落ちてくる。17ポンド砲の砲撃による衝撃が老朽化した駐車場をゆっくり崩壊させているのだ。

その17ポンド砲の砲撃はパンターの側面装甲を撫でるように通過。源流戦闘術の一部である『緊急被弾経始』。装甲の柔らかい部位でも、浅く角度をつければ弾くことができる。砲弾重量故に装填に時間のかかる17ポンド砲。機動力を活かし、回り込んで後方を狙う。7.5cm砲が火を噴くが、センチュリオンはこちらの動きを真似たのか、超信地旋回で緊急被弾経始を行ってこれを防いだ。

「…やるね…！」

「敵しいが……行けそうだな……ッ！」

ぐるぐると旋回しながら交互に砲撃を行う。全力旋回中にまともな照準ができるはずもなく、お互いの射撃は見当違いの場所に飛んでは駐車場の壁や柱を削っていく。

「次っ！敵のドテツ腹に一発！」

「思いつきり助走つけて、行くよ!!」

2両の距離が離れる。センチュリオンは大きく膨らむように距離を取り、パンターは一度離れてUターンをするように離れた。

再び2両の距離が近づく。正面衝突しそうなほどに近くまで。

センチュリオンは左に舵を切り、砲塔を旋回させた。

「……貫った!!」

その進行方向に合わせてパンターが思い切り舵を切る。車体後部に、50トンの車重を思い切り乗せた、衝突攻撃^{ラムアタック}。センチュリオンは柱に叩きつけられる。そして柱はその衝撃に耐え切れずに折れて、2階建ての駐車場が倒壊し始める。

「全速後退！突き破って脱出して！」

パンターは全速力で脱出。倒壊に巻き込まれることはなかった。

「とにかく動け！潰されるぞ！」

「右動力系が……！動けません！」

センチュリオンは既に行動不能になっていた。倒壊する駐車場に巻き込まれて押しつぶされ、戦闘不能となる。

『吉森工業高等学校、センチュリオン巡航戦車、走行不能！』

脱出した虎さんチームはその足でパンターの捜索に当たる。クジラさんチームが探してはいたが、やはり簡単には見つけれられない。

パンターを探して走り回っていると、どこからともなく甲高い音。

「これが、寿璃さんの言ってたパンターのエンジン音じゃ……？」

華蘭さんの指摘に、私は耳をすませた。バリバリと何かを踏みしめて走る音、甲高いエンジン音、履帯音。目の不自由な私は、変わりに他の感覚が研ぎ澄まされているように、耳は結構いいほうだ。パンターの場所の、おおよその見当をつけて進む。予想地点は、先ほど突っ込んでいたパチンコ店だ。

パチンコ店前に到着。敵はやはりパチンコ店から姿を現した。確かにそのエンジン

音はこちらのパンターとは似ても似つかぬものであり、加速感も、最高速も全く違った。「やっぱり幹葉さんの読み通り、ガスタービン試験車なのかな?」

「ですね。旧型ガスタービンを手に入れるだけでも大変だと思えますけど…。よくぞここまで手入れたものですね」

敵は速度を上げて逃走を開始した。追いきれる速度ではないが、様々な武装や連携を駆使して追い詰めていく。機銃で誘導したり、IV突で道を塞いでみたり…。すると敵は諦めたようで、こちらに向き直ってきた。おそらくタイマンがしたいのだろう。

「… 受けて立つよ。機動戦なら、負けないからね」

「とにかく車両の優位を活かして、確実に決めていく。それしかない」

ガスタービン試験車のキューポラから顔を出すケータハムは、ひどく疲れていた。というのも、元々ガスタービンエンジンを搭載する設計になっていないパンターは、これを搭載するに当たって様々な問題をねじ伏せてきている。その一つがこの熱害。車内も車外も非常に熱く、それは戦いを続ければ続けるほど顕著なものになっていった。

「前進! 懐に飛び込んで!」

「脇を通って大通りへ!」

虎さんチームが道を塞ぐが、それを躲してガスタービン試験車は大通りへ。こういう高速セクションでは虎さんチームのパンターA型改はガスタービン試験車には遠く及

ばない。まず格闘戦に持ち込む必要があった。

「クジラさん！応援お願いしますー！」

「了解。任せて！」

その声とはほぼ同時に、ガスタービン試験車の直前にIV突が躍り出る。パンターはそれをどうにか躲すが、回転数の落ち込みで著しく速度が低下したところで虎さんチームが追いつく。そして後部をプッシュすることでスピンさせ、強制的にインファイトに持ち込むことができた。

低回転領域ではガスタービン車の良さは半減……いや、10パーセントと活かすことはできない。何とか7・5cm砲の直撃こそ避けているが、ボディの至るところに擦り傷ができていく。もう撃破は時間の問題だった。

その時、ガスタービン試験車の後部から炎。そして白旗。私たちも車両を止めて消火作業に入る。

原因は、エンジンの加熱によるオイルへの着火。戦闘終了直前のパンターのエンジン温度はかなりのもので、陽炎が揺らめいていた。

『吉森工業高等学校、パンター中戦車・ガスタービン試験車、走行不能！よって……』

『アウトバーン女子学院の勝利!』

戦の手練たちです！

傷ついた戦車たちが回収されていく。全国大会等では一旦会場に集められるが、冬季杯ではすぐそばに学園艦があるので直接運び込む方式を取っている。18tハーフトラックに引かれてパンター、IV突、レオパルトが運び込まれていった。

「… いやあ、戦車の質では勝ってたのに、まさか負けるとは」

マクラーレンが橙の髪を揺らし、握手を求めてきたのでそれに応じる。確かに、センチュリオンやパンター・ガスタービン試験車など、予想以上に強力な戦車を擁していた。「ガスタービン車は、戦車道には厳しかったかもしれないですね。レースにはいいかも」

「… それいいね。参考にさせてもらおうよ」

彼女たちがパンツァー・ジャケットの代わりとしている学校指定の防火ツナギからメモ帳を取り出して手早くメモを取ると、身を翻してこう言った。

「… 次の戦場は『タンク・アタック』だから。負けないよ」

そのひとは、涼子さんへの挑戦状だった。

「… ああ。今度も勝つのは私だけどね」

そう言うと、彼女はB T 7に戦車跨乗タンクデサントして学園艦へと帰っていった。男勝りな校風故に勇ましい戦いをする高校だったが、特殊な戦車の運用など彼女たちにしか無い強みがあり、これからが楽しみな戦車道チームであると私は評価をした。

「次の試合も見て行きましようか」

「いいね。賛成！」

S 　という流れで、私たち虎さんチームの面々で第二試合、スタンレー中等教育学校　V
戦練高等専門学校の試合を見ることになった。

下関から対岸へ渡り、門司港へ。関門海峡にUボートを模した潜水艦が浮かべられ、そこに大型のモニターが設置されている。ここがライブビューイングの会場だ。

スタンド席より少し後ろ、高台の上にマウルティアを停めて、観戦を始める。ちょうど挨拶が終わり、試合開始場所への移動が始まったところで、モニターにはもぬけの殻と化した下関市街地が映し出されていた。

「いい席空いててよかったねえ」

「こんな所誰が来るってのよ」

見やすい位置が取れて満足げな琴音さんと、面倒な道を走らされてゲンナリとしている涼子さん。私はそんな二人のやり取りに苦笑を浮かべながら、回りを見回した。確かに誰もいない…

…いや、いた。そこに見えるのは、小豆色のIV号戦車。大型のシウルツェンや長砲身を装備していることと、桃色の魚類をデフォルメしたパーソナルマークが描かれていることから、どこの高校の車両かはひと目で分かった。

「…大洗のフラッグ車だ」

「え、うそそう?!どこ?!」

「ほら、あそこ」

車両の上に座って画面を見ているのは乗員の5人だ。

変幻自在、奇想天外な戦術を得意とする『大洗の軍神』、西住みほ。

全国大会でも指折りの精度を誇る砲手、五十鈴華。

ドリフトする車内でも装填出来る装填手、秋山優花里。

軍神の指揮で入り乱れる部隊を纏める通信手、武部沙織。

激しく動き回る機動戦を容易くこなす操縦手、冷泉麻子。

全員が全員、トップクラスの練度を誇る超人軍団だ。どんな人物なのかとても気になるが、話しかける勇氣は私にはなかった。

「じゃあ、私行ってくるよ」

「え、琴音さん!？」

私の表情を読み取ったのか、彼女たちに向かつて歩き出す。一人で行かせる訳にもいかないので、私もついていくことにした。

「こんにちは。大洗女子学園戦車道チームの方ですよね？」

「あつ、はい。大洗女子学園戦車道チームの隊長をしています、西住みほです」

彼女はIV号から降り、私に礼を返した。噂から伝わってくる怖いイメージとはかけ離れた優しい声と礼儀を持った女性という第一印象を受ける。

「やっぱり。お会いしたかったです。私はアウトバーン女子学院、隊長車装填手の二葉琴音です。こつちが…。」

「隊長の三城夏紀です。初めまして」

「ああ、さっきの方ですね。一回戦突破おめでとございます」

先ほどの試合を見ていたようだ。私もあまり自信のない試合だったので、どのような印象を与えているのか気になる。

「どうでしたか？見苦しいものを見せてしまいましたかね…。」

「いえ！とても参考になりました！」

西住さんはそう言ってくれた。その表情からはお世辞や嘘は感じ取れない。裏表の

ない人物なのだろう。

「…… 試合、始まるぞ」

冷泉さんのひとことで、私たちはモニターに向き直った。

最初に映し出されたのはスタンレーの戦車隊だ。M4戦車のライセンス生産車であるグリズリー巡航戦車が2両と、フラッグは長砲身の『グリズリー・ファイアフライ』。机上の計画はあったものの実際に作られることは無かったが、ほぼ無改造でファイアフライの砲塔が搭載できた事から戦車道連盟の公認を受けることができたという。

隊長であるヴェクトリアは、機動力を活かし先に陣地を構築することで、偵察に来た敵戦車を機動防御で袋叩きにできる、という戦略を立てているのだろう。彼女は陣地を構築しての防御戦術においては高い技術を持つと聞く。陣地の構築を許してしまえば、それを突き崩すのは非常に難しいだろう。

「…… どう来ますかね、戦練専は」

「正面突破は難しいでしょうから、機動力を活かして迂回ですかね」

中戦車とはいえグリズリー・ファイアフライは17ポンド砲を持っている。並大抵の

装甲では弾き返すことは不可能だ。

そうこうしているうちに、スタンレーの戦車隊は建築物を撃ち崩し、遮蔽として陣地を構築した。得意の戦場を作ったことで、彼女たちはよりやりやすくなっただろう。

そこに戦練専がやってくる。重厚なキャラピラの音が6つ。3両固まっているようだ。

… 曲がり角から現れた戦車の姿に、戦場に立つ者だけでなく、私たちも思わず声を上げる。

「… スターリン… 3… ！」

IS-3重戦車。大戦最末期の重戦車で、世界が築き上げてきた重戦車ドクトリンの決定版といえる。徹底して被弾経始を追求したボディは装甲厚以上の防御力を持ち、122mm砲の火力は自走砲に匹敵するものがある。それに随伴の車両もT-44-100中戦車、SU-152自走砲と、重火力、重装甲の超強力な戦車たちだ。

ファイアフライの砲も、IS-3の装甲に尽く弾かれ、SU-152の砲弾に弾き飛ばされ、T-44-100の砲弾が貫徹し、IS-3の砲が火を噴くと、勝負はあつという間についてしまった。

『… スタンレー中等教育学校、グリズリー・ファイアフライ、走行不能。よって、戦練高等専門学校の勝利！』

哑然としていたのは、私だけではなかった。回りの皆も、大洗の人たちも皆、口を開け、『現実を受け入れられない』、といった表情をしていた。

「.:. ソ連戦車とは聞いてたけど、まさかあそこまでとは.:.」
あんなものが私たちの次の対戦相手だなんて、冗談じゃない。勝てるわけが無いじゃないか。

「.:. 頑張ってくださいね。必ず、勝機はありますから」

西住さんの言葉。IV号という至って普通の戦車で、ティーガーやIS—2を相手してきた彼女が言うのだ。きつとそうなのだろう。

「帰ろう。戦略を考えないといけなくなった」

「そうだね。帰ろうか」

マウルティアの心臓に火を灯し、帰路につく。

第二回戦は明後日。考えている時間は無くなりつつあった。

第2回戦、そして未来です！

途方もなく広い部屋。多数のデスクトップPCの置かれたそこは、アウトバーン校の情報教室。大人数用に広く作られているため、5人で使うには広すぎる。

「IS-3の攻略法、思いつきませんね」

華蘭さんが言う。私たち虎さんチームは、来る2回戦の相手である戦練専への対策を練っているのだ。

「うん：： 正面は硬すぎるし、回り込もうにも機動力が高いから厳しいかな」

速く、硬く、強い。走攻守が高いレベルでまとまっているIS-3は非常に強力だ。こちらの砲ではなかなか貫徹は見込めないだろう。

「IS-3だけじゃないよ。T-44も、SU-152もこちらにとつてはかなりの驚異だ」

涼子さんの言う通り、残りの二両も強力な戦車だ。問題を抱えているとはいえ、高い火力と機動力を持つT-44。傾斜装甲による高い防御力と、152mm砲の規格外の破壊力が強力なSU-152。

「乗員の練度も凄そうです。特に隊長の越前さんは、『島田流』の門下生だったらしいで

すよ」

「島田流：：か」

島田流は、西住流と並び称される、日本の戦車道流派だ。変幻自在の戦法を得意とし、基本を尊びつつも、常に変革し続ける。そんな島田流は、逐一変わり続ける高速戦闘において有利であるとも考えることが出来る。

「：： そうだ、『大洗紛争』の映像を見ようよ」

そう言ったのは琴音さん。どこからか取り出したUSBをPCに差し込み、ファイルを展開した。

戦闘は、島田流の後継者、島田愛里寿の駆るセンチリオンが本格的に戦闘に介入しはじめた後半から始まった。

「超信地旋回での緊急避弾経始：： 島田流にもあるんだ」

ぐりぐりと車体をその場で旋回させながら、車体旋回速度で砲塔旋回速度を補う。弾丸を弾き、生まれたスキを利用して高威力の砲弾を叩き込む。

「：： すごい：：： これが、島田流：：」

それは圧巻の一言に尽きる。良好な足回りを生かした日本戦車たちの連携攻撃を捌ききり、奇襲や裏取りで敵を殲滅してゆく。

「：： ちよつと待って」

幹葉さんが言う。映像を止めて、彼女の言葉の続きを待つ。

「さつきからさ… 奇襲ばっかりしてるよね」

「…！」

確かに言われてみれば、車両性能を活かした大立ち回り以外は、味方の取りこぼしや敵の失策のスキをついた奇襲が多い。それが島田流の特徴なのだろうか。

「不意の接敵に強いのは、おそらくゲームメイクが上手いからだよ。味方から提供される情報を元に敵がいるであろう場所に駆けつけてるんだ」

「成程… 接敵機動と遭遇戦の繰り返しで撃墜を稼いでるわけか」

敵の未来位置を予測、その場所に急行し、奇襲気味に敵を突き崩す。それが島田流ということだろう。

「後手後手の西住流と、先手を取る島田流って感じかな？」

「… だったら、やりようはあるか…」

「何か思いついたの？」

琴音さんの問に、静かに頷く。

「相手が私たちの先を取るなら、私たちがその先を取ればいいんです」

日も暮れた下関。ガレージの中で、ツインテールの少女はボディに不釣り合いな程に長く太い砲身にそつと手を触れた。

「紀伊ちゃん、何やってるんだい?」

声の主はIS-3の車長、志摩 伯耆。銀髪のショートヘアに赤いカチューシャの映える少女だ。

「換装した砲の最終チェック…かな」

黒い下ブチの眼鏡のずれを直して、越前 紀伊は答えた。

ここは戦練専の校舎にあるガレージだ。T-44の他にもIS-3、SU-152、その他少数の工作車や輸送車などが置かれている。

「わざわざこのタイミングで換装作業しなくたっていいのにね…。ただでさえ扱いにくい車両なのに」

LB-1 100mm砲は非常に高いスペックを見せていた。シャシー性能が足を

引つ張り照準精度は劣悪であるが、その火力は殆どの車両の装甲を問題なく貫通できる。

「… どう考えても、オーバースペックだよね」

そもそも敵を遠距離から撃破するだけの性能は、IS-3とSU-152で事足りているのだ。T-44は市街地戦に適した軽量の砲が求められるのだが…

「これをどう使うかが『課題』って事なのかな」

戦練専は武道を学ぶ学校だ。公式大会すら、実習の舞台として活用する。前回の課題は『如何に短時間で決着できるか』だった。このオーバースペックなシロモノをどう活かすか… それが今回の課題だと考えた。

「相手の主力は。パンターだったよね…」

「まあ、パンター以外は恐るるに足りないかね。レオパルトなんて豆鉄砲もいとこよ」

「ははは、まあね…」

しかし、紀伊はレオパルトを警戒していた。

「あの隊長… いったいどんな戦術をとるのかしら」

戦術次第では軽戦車でも重戦車を仕留められることを、彼女は知っていた。

「四十伽くん、この書類も頼むよ」

「あ、はい…… わかりました」

学園艦は書類上は『飛び地』として扱われる。地元に戻る機会が少ないため、学園艦上には各行政機関の出張所があり、市役所や税務署などと同じ役割を担うことが出来る。

四十伽 畔は久留米市役所 学園艦出張所の戸籍管理を担当していた。学園艦の全ての人の戸籍を管理し、出入りや出生の全てを管轄する部署のトップだったのだ。

「…… 全く。今日も残業ね」

うずたかく積まれた書類の山にやる気がジエンガの如く崩れたところで、デスクの上に置いた写真を見た。

「…… 頑張らなきゃね」

そこには娘、夫と共に撮った最後の写真。それを懐かしむ暇もなく、業務に戻るのだった。

かつて、私には夫と娘があった。

若くして結婚し、子宝にも恵まれた幸せな家庭だった。小さいながらも家もあり、働きだったが娘にもそれなりの生活をさせてやれていた。

しかし、ある日。旅行へ出掛けた夫と娘を見送った後、テレビを見ていた私はあるニュースに目を疑った。

『今朝、福岡を出航した連絡船が、瀬戸内海で沈没したとの…』

その船は、私の夫と娘の乗る船だったのだ。

私は泣きながら2人の帰りを待った。しかし、2人が帰ってくることはなかった。

ようやく手に出来た幸せが手から零れ落ちてゆく。掬っても、掬っても、するりするりと逃げてゆく。

1人取り残されて絶望していた私は、学園艦の母校である博多湾から遠くの海を眺めていた。

その時、見つけたのだ。テトラポットの上にぐったりと項垂れる少女の姿を。

運命としか思えなかった。娘によく似た少女が、海から帰ってきたのだ。別人だとは

分かっていた。それでも、彼女に縋ろうと考えてしまった。

そして関係を偽り、今に至る。娘である夏摘も高校生だ。既に私が本当の母でないことは分かっているだろう。いずれ私の元を離れていくこともわかっている。それでも、今を生きるためには、夏摘の存在が必要だった。

「……よし、今日も頑張った……!」

既に終業時刻はとつくに過ぎていた。まあいつもの事だ。

いずれ話そう。そう何度も思いながらも、その機会を見つけられずにいる自分。情けなさに苛まれながらも、明るい表情で家に帰る。

「ただいま」

「おかえり」

ホワイトアウトです！

「皆さん整備は完了しましたか」

水族館の前に並ぶ3両の戦車。ジャーミングレーに塗られていたその車両たちは純白の雪原迷彩に塗られていた。

「山猫さんチーム、オツケーです！」

軽戦車としては大柄な部類に入るレオパルトは、白色に塗られた事により今まで以上に大きく見える。勇ましく伸びる5cm砲には頼りがいを感じる。

「クジラさん、準備終わったよ」

IV突には大きな改良が加えられていた。目に付くのは大型のシウルツェン。それに正面装甲の一部に追加されたコンクリート製の装甲、400mmに拡張された履帯幅も相まってより平べったく見える。最後期型のIV号突撃砲を模した『IV号突撃砲 後期仕様』へと改装されたのだ。

「虎さん、砲弾の積み込み完了」

パンターにもアップデートが施されている。問題を抱えていた変速機を改良型とし、

顎付きの防盾、車体側面のスカートなどを装備した『パンター中戦車 D型改G型仕様』だ。ハッチや覗き窓はD型のままだが、単純な戦闘能力という点では大きな進化を遂げている。

「…今回は正直、かなり厳しい戦いになると思います。ですが、皆さんの協力があれば勝つことは可能です」

圧倒的戦力差。練度でもあまり差はないし、地の利は向こうにある。おまけに潤沢な資金から整備も行き届いていると考えられるし、厳しくなることは目に見えている。それでもここを勝利しないと次なんてない。私の目的も達成出来なくなってしまう。

「今回は偵察力が私たちの唯一のアドバンテージです。そこを活かして常に敵の先手を取っていきましよう」

「… 私たちがカギになるってことですね」

琴音さんが言う。その言葉には責任や不安といった様々な感情が見えた。

「はい。連絡を密にお願いします」

「分かりました。… 皆、気合入れて行くよ」

「はい!!」

「クジラさんは基本的に後方からの待伏せや援護射撃をしてもらいます。孤立しないように、すぐに援護を受けられる位置にいるように心がけてください」

「了解。前衛は任せたらね」

会長はポニーテールを揺らして自信有りげに応えた。IV突は今のところ地味な役回りしかないが、今回はかなり働いてもらうことになるはずだ。

「虎さんとはかく敵の注意を引きます。こちらに3両のターゲットが絞られた時が私たちの最大のチャンスです。クジラさん、山猫さんは私たちが作ったスキを利用して、まずはIS-3かT-44のいずれかを倒します」

これが私の考えうる最も成功率の高い作戦だ。もちろん隊長車を犠牲にするという点からかなりリスクであることは言うまでもない。指揮系統の混乱は勿論のこと、自分で言うのもなんだが、作戦立案力的大幅な低下もあるだろう。

「虎さんは十中八九生きては帰れない作戦です。我々が撃破された後の作戦指揮は……会長、お願いできますか」

「…… 葎花じゃなくていいの？ 私砲手なんだけど……」

「突撃砲はそんなに連射する車両でも無いですし、普段から指揮に慣れている会長の方が適役かと思えます…… 不満でしたら変えますよ」

会長は葎花さんに視線を向けた。葎花さんは何も言わず左手で「どうぞ」とジェスチャー。

「…… わかった。出来る限りのことは、させてもらうわ」

「お願いします」

「… その他作戦はその場その場で連絡します。皆さん柔軟に対応をお願いします」

「はー!!」

皆の勇ましい瞳。闘士のみなぎった顔つきに、私は少し安心した。敵の脅威に気が滅入っていないだろうかと心配していたのだが、杞憂だったようだ。

「Panzer Vor!」

力のこもった声で、号令するのだった。

「… 霧が、出てきたわね」

それなりに年齢を感じさせる顔つきとキツくウエーブのかかった茶髪のロングヘアが特徴の女性。かつて「西日本の戦神」の異名を欲しいがままにした戦車乗り。今は娘の身を案じて観戦に駆けつけた一人の母親。名を三城 葉月と言う。

「そうですね。これがどう勝負に影響するか…」

その横に座っているのはまだ若い女性。まだ20代に見える。短く切られた髪は澄み渡る黒。黒をベースに迷彩色を差したパンツァージャケットを纏う彼女は横井麗子。指導者として維新中学校を率いている女性だ。

「今日になっていきなり雪原迷彩に変更なんて……この霧を読んでいたんですかね」「でしようね。霧はある程度なら予想できるもの……でも、博打だったわね。霧が出なかつたら返つて目立っていた」

そう言うと彼女は小さく微笑んだ。

「……我が娘ながら、博打打ちなトコロは私ソツクリで笑つちやうわ」「ですわね」

麗子は葉月と共に『源流』を学んだ。10年ほど葉月が先輩だったが、子供ながら葉月のリスキーな戦術には恐怖にも似た感情を抱いていた。そんなところを含め、彼女の魅力ではあつたが。

「……そうだ。この前仰つてたアレ、学園艦に送つておきましたよ」
「そう……ありがとう。苦勞をかけるわ」

幅広の履帯がアスファルト舗装を踏みしめる。低く構えた3両の戦車は、街に向かって進行中だ。

「今回も1回戦と基本的には同じように行く…。まあ、そう簡単な相手ではないが」

風にツインテールがなびく。T-44のキューポラから顔を出す紀伊は、今回の相手をそれなりに警戒していた。圧倒的性能は持っているものの状況適応力に欠ける我々の戦車は、臨機応変な敵の戦術に翻弄される可能性があるからだ。それまでに敵の隊長の指揮能力には舌を巻くものがあつた。

「接敵したらパンターを最優先に狙え。指揮系統を混乱させればこちらの勝ち揺るがない」

「そうだね。今日もウチらが前衛でしょ?」

「… そうだな。頼むよ」

そう言うと、IS-3がT-44の前に躍り出る。重装甲の戦車を先頭に立てて突っ込む。いつもどおりの開幕だ。

「霧が濃いね。これじゃなかなか前が見えないよ」

予想していたより遥かに霧が濃い。敵の発見に時間を要するかもしれないと考えて

いた時。

砲声。同時にIS-3の車体正面で激しい音と火花が飛び散る。

「敵発見！2時の方向！」

「フラッグ隠せ！砲撃用意！」

IS-3はT-44の2時に方向に展開。SU-152は車体の右半分をT-44からのぞかせた状態で射撃体勢を取った。

・・・100mほどの距離。敵が・・・

「見えた！撃てッ！」

射撃は敵が盾にしていた建造物に吸い込まれた。敵はもう一度射撃すると撤退を開始した。

「・・・いい判断ね。そのまま戦っても戦力的劣勢で一方的に殴られるだけ」

交差点を曲がり路地に入ると敵の後ろ姿が霧に消える瞬間だった。見たところ3両揃っているようだ。

「機銃掃射」

IS-3が機銃を放つと、霧の中から音が聞こえた。装甲に機銃弾が弾かれた音だ。

「・・・撃て！」

音と火花を頼りに撃つ。しかし直撃とはならず、その砲弾は遠くの海に着弾し水柱を立てた。

「… まあいいか。今じゃなくても、いつだってチャンスはある」

その後もアウトバーン戦車隊はじりじりと後退を強いられていた。

「やっぱり強い… IS—3!」

「きついけど… まだやられる訳にはいかないからね」

霧が出る事を見越して現地で雪原迷彩に塗装したのには十分な意味があった。敵がオリーブ色の通常色であるため、発見出来る距離が違うのだ。こちらが一方的に見て撃つ、なんてことも出来ないことはない。

「敵来ます! 2ブロック後退!」

敵砲弾は周囲の建造物に当たって爆ぜる。その狙いは少しずつ、確実に良くなってきた。いる。

「… そろそろ仕掛けなきや。こつちが先にやられたら作戦が崩壊する…!」

実行しようとしている作戦は、こちらの車両が全て揃っていないとまず成功しない。

そのためには兎にも角にも車両を生かしておく必要があるのだ。

「山猫さん、クジラさんはポイントへ移動！」

「了解。虎さんの健闘を祈るわ」

IV突とレオパルトは建造物の陰に消えていった。

「…皆、行くよ」

無意識に呟いたそのひとこと。それに皆は答えてくれる。

「大丈夫。この霧なら相当の距離までは見られることはありませんよ」

「撃てと言われれば撃ちます。撃ったら絶対、外しません」

「緊張するねえ… あんなバケモノ相手に大立ち回りなんて」

「兎に角撃破されないように立ち回るから… 指示、よろしくね」

「… 吶喊!!」

じわじわと濃くなる霧の中、戦練専は尚も進軍を続けていた。前が見えないのはお互

い様であるから、建造物の中や木の陰などに十分な注意を払いつつ、ゆっくりと進む。「：：そろそろマップの中央部か。敵もこれ以上下がってはないと思うんだが。：」

中央より東側は比較的直線的な道が多く、広場が増える。逆に立体駐車場などは減るため、敵にとって地の利はないからだ。私が相手の隊長ならそうする、と紀伊は考えていた。

「きつと仕掛けてくるぞ。気をつける。次の路地、左折。：：」

その時。

霧をかき分けて、巨体が姿を現した。V-12の空気を震わす鼓動が、さながら虎の唸り声のように聞こえる。

「突っ込んできた!? 射撃用意! 返り討ちにしてやれッ!」

しかし、その指示をした時には既に敵は懐に潜り込んでいた。鶴翼の陣形を取っていた戦練専戦車隊の中央を突破し、フラッグの後ろで急旋回。こちらの尻を取る気だ。

「まだ。：。まだ待つて。：。撃てッ!」

パンターの砲が火を噴く。それはT-44の旋回より早く、側面に直撃する。シユル

ツェンに砲弾が当たって爆ぜる。右側面のシウルツェンがエネルギーを吸収し、弾けとんだ。

「榴弾!?まさか最初からシウルツェンの破壊を狙って…!」

パンターは速度を上げ、T-44の側面を通過した。

「こちら二号車!フラッグが射線上に居て撃てない!」

「クソツ、盾にしているのか!」

IS-3からの射撃は望めない。SU-152は固定砲塔であるため、移動目標への射撃はもとより不得意だ。撃破を望むのは無茶というものだろう。

「パンターを追い!集団から追い出したら追い回してオシマイにしてやる!」

IS-3の左側面を通過したパンターは、そのまま集団を脱出して逃走を開始した。T-44の射撃は見当違いの場所に着弾してしまう。

「チツ…これだから100mm砲のままで良かったんだ!122mmなんてコイツに積むにはデカすぎる!」

先日の改装でT-44は得物を100mm砲から122mm砲へと換装していた。100mmでも照準がブレて当てにくかったというのに、指導部からの指示で122mm砲を搭載してからは、それが更に顕著なものになっている。

パンターは路地を右折した。IS-3を先頭に立てて、戦練専もそれに続く。

ちやうどゆめタワーを直上に望む路地だ。パンターは立体駐車場に進入した。当然、我々もこれを追う。

「よし、追い詰めた!」

IS-3は入口で停止し、パンターに狙いを定めていた。

「待て! 周囲を警戒して!」

その時、SU-152の正面を砲弾が叩く。この先の交差点に潜んでいたIV突からの砲撃だ。

「チツ! あつちは2両で叩く! 二号車はパンターを食ったら追ってこい!」

「了解! 撃て!!」

パンターは予定通り撃破できた。砲塔とボディの隙間を狙った完璧な砲撃だ。

しかし、キューポラから顔を出している少女は。

「!?! 何故、笑っている!?!」

直後、無線から声。

『上だ!』

乾いた音と共に、IS―3の上面に砲弾が叩きつけられる。

『アウトバーン女子学院、パンター中戦車。戦練高等専門学校、IS―3重戦車、走行不能!!』

ボレー作戦です！ / 未来のヴィジョンです！

紀伊は驚愕していた。まさに開いた口が塞がらなかつた。

「…何だ、それ…」

レオパルトが、立体駐車場の二階からワイヤーでぶら下がっていたのだ。総じて戦車の弱点である天板に、垂直に砲弾を撃ち込んだのだ。それならどんな車両でも仕留められる。

「停止！三号車はIV突を見張つてろ！まだ行くなよ！」

T-44が旋回するとはほタイミングを同じくして、レオパルトはIS-3の上に落ちた。恐らく重量制限を超えたワイヤーを使っていたのだろう。そこまで計算ずくだったのだろうか。

レオパルトは降りると同時に煙幕を展開。霧と相まって視界はほぼゼロになる。定常円旋回で煙幕を撒き散らしたところでT-44に突撃する。

「上手く行ったね！でも、まだ仕事は終わってないよ！」

煙から飛び出し、T-44の横を通り過ぎて、SU-152を追い越して路地を左折

する。すると敵はそれに続いた。

SU—152はレオパルトを追って前進した。全速力のまま交差点を左折し、射界が開けると思った瞬間。

霧の向こうから現れたのは、IV突の正面装甲だった。

「なっ…!!」

IV突とSU—152の正面と正面がぶつかる。火花と衝撃。

「…撃て！撃てーッ！」

152mm砲が轟音と共に火を噴いた。霧が吹き飛び、IV突とSU—152の周囲の視界が開ける。

「…運が、悪かったわね!!」

IV突の75mm砲が唸りを上げると、SU—152の正面装甲を貫通し白旗を上げた。

IV突の正面装甲に、大きくえぐれた場所がある。先ほど152mm砲の砲弾が着弾した箇所だ。そこはコンクリートの増加装甲が盛られた場所であり、コンクリートが割れる事により衝撃を受け止めたのだった。

「山猫さん、T-44が来るわ！かく乱して逃げる時間を稼いでくれる？」
「了解！任せてください！」

レオパルトが霧を突っ切って元来た道に戻っていく。そして交差点でT-44と鉢合わせになった。

「牽制でいい、撃てるだけ撃て！」

時計回りに旋回しながら1発、2発と撃つ。しかし敵は正面をこちらに向け続けるため撃ち抜くことが出来ない。

「5cm砲なんて怖くないのよ！いい加減に…観念しろッ！」

T-44がレオパルトに軽く体当たりすると、レオパルトは姿勢を崩してスピンする。122mm砲がレオパルトを見据えている。なかなか撃たないのは砲精度が悪いため、的を絞っているのだろう。

「前進！」

レオパルトはその間に前進。『大洗の首狩り兎』よろしく懐に突っ込んで砲で照準できないうようにしているのだ。

「小癩な…ッ！押し返してやりなさい！」

馬力的には拮抗しているためか、押し合いになってもあまりレオパルトは押されていない。両者の履帯が地面を掴みきれずに空転し、アスファルトがばりばりと剥離していく。

「行くぞー！『ボレー作戦』！」

琴音はハッチを開けると、砲塔の上に立って、発炎筒を敵の車両正面に投げ込んだ。白い煙があたりに充満し、かろうじて見えていた視界をゼロに変える。

「マズっ… 兎に角動いて！全速後退！」

全速で後退して敵のレンジから脱出する。5cm砲が正面装甲を叩くが、貫通とはならない。

「何も… 見えない…！」

前も後ろも視界が効かない。最早どこに何があるのかすら分からない。どこに行けばいいのか、どこに撃てばいいのかも、何も。

衝撃。後方の何かにぶつかったようだ。よく見てみれば、ビルがそこにはあった。

「… ああ」

右側面をIV突の砲が貫通。白旗を上げた。

「すごいですよ会長！最後の指揮は流石でした！」

「…運が良かっただけよ。SU—152を仕留められたのは運意外の何物でもなかったわ」

SU—152がもし少しでも外側を通って曲がっていたら。SU—152の射撃がもつとしっかりと狙ったものだったら。それだけで今回の試合の結果は違う物になっていただろう。

「テニス部の皆さんも、いい活躍でしたよ」

今回の山猫さんチームの活躍は勲章ものだ。全ての車両の撃破に寄与し、動き回り、最大の脅威であったIS—3を排除した。火力が不足しがちな軽戦車でこの活躍は全国を見ても稀なものだろう。

「それを言うなら虎さんチームも凄かったですよ。普通あの集団の中に突っ込んで無事

には帰って来れませんでした」

「そうね。あれが無ければ最後の撃破も無かったわ」

そんな会話をしていると、霧の中をかき分けて走ってきたのは軍用ハンヴィー、M1151。戦車道救護者の規定に合わせて増加装甲とカーボンコートが施された特殊仕様だ。側面には弓・刀・戦車の描かれた戦練専の校章。戦練専の車両であることがわかる。

降りてきたのは隊長の越前。悔しそうな、それでいてどこか吹っ切れたような表情でこちらを見ている。

「…今回は、私の完敗だったよ。戦術で劣り、対応力で劣り…そちらの戦略に、呑まれ続けていた」

「そんなこと無いですよ。こちらだってパンターを犠牲に差し出さないと撃破のキツカケすら作れませんでしたから」

本当はもっと簡単に行くと思っていた。パンターはもしかしたら囿にしなくてもIS-3は撃破できるのではないかと。しかし蓋を開けてみればその圧倒的防御力と火力に完封されてしまったのだった。

「…私は、少し調子に乗っていたのかもしれないわ。もう一度一から勉強しなおすことにする」

くるりと身を翻すと、ツイントールが螺旋を描く。

「… そしたら、また戦ってくれるかな」

「… ええ。当たり前じゃないですか」

「そう… ありがとうね」

ただそれだけ言うと、彼女はM151に乗り込んで霧の中へと消えていった。

「… 次は、決勝ですよ」

華蘭さんが言う。——決勝戦。いよいよだ。いよいよ夏摘と対決できるのだ。

「… そうだね。ようやく来たね」

下関に立ち込める純白の霧が晴れてゆく。それはさながら、私の心のようにだった。

試合が終わり、疲れきった体で学校へと帰ってきた。浅い眠りから目が覚めて、マウルティアの荷台からガレージを見ると、ガレージの前に見慣れない赤黒いコンテナが置いてある事に気がついた。

「：：？なんだろう。何も聞いてないけど…」

停車したマウルティアから降りて、コンテナに歩み寄る。そこには宛名と他、様々な書類が貼り付けてあった。

「：：送り主：：維新中学校… まさか!？」

カギを開けて、ドアを開く。重たい鉄の扉が音を立てて開くと、そこには私が見慣れた戦車があった。

「なになに?…これは…」

歩み寄ってきた華蘭さんや琴音さんも、驚いたような表情をした。

「：：M4… 私の… M4だ…」

涙がじんわりと溢れてきた。中学校時代の私の愛機、M4シャーマン中戦車だ。砲塔側面に貼り付けられた日の丸と『維』を象った校章は、紛れもない維新中学校の車両であることを示す証拠だった。

よく見てみると私が載っていた頃とは違う。足回りに改良が加えられ、砲塔を換装され、その他装甲等にマイナーチェンジを施した『M4A3E8 イージーエイト』仕様となっているようだ。

「：：一つ、お願いがあるんだけど… いいかな」

「言ってみてください。出来ることなら、何でも」

「決勝…これに乗って戦ってもいいかな」

「…ちよつとそこに座ってくれるかしら」

母に言われ、私、夏摘はリビングの椅子に座った。

「よく聞いて。貴女のこれからの人生に関わることだからね」

母は私に紅茶を差し出すと、自分もカップを取りそれを啜った。私も一口口に含む。

「…貴女は私の子供じゃないわ。知ってるかもしれないけれど」

「…うん。何となく、わかってた」

そう言うと、母は「やっぱり」と呟いてため息をついた。

「貴女は私が偽装した偽りの娘…本当の母は、別にいるわ」

「…それは知らなかったかな」

私の人生を左右する大事なことを聞いているのは分かっているが、驚きや焦りのよう

なものではなかった。それどころかどこか非現実みを帯びて、『なんだ、そんなことか』と思ってしまうていた。

「……ここからが大切なんだけどね。私は貴女を本当の母の元に返すつもりでいるわ。それはいつでもいい……。夏摘は、どうしたい？」

「……私は……」

言葉が続かない。本当の母もわからないし、私がどこに帰るのかも分からない。だけど、今やるべきことだけはわかる。

「……私はお母さんに恩返しをしてから帰るよ……。戦車道でね」

『……隊長！』

「隊長つてばー！」

肩を叩かれて目が覚めた。

……夢を見ていたようだ。夢の内容は昨日の母との話。

「……どうしたいか、か」

「どうかしましたか？」

「… 何でもないよ。さあ、行こうか」

ファイアフライの履帯がアスファルトを踏みしめて進み始める。

「… Go ahead！」

準決勝 モニュメントバレー田園高校 Vs 私立ブリテン高等学校の試合が幕を
開ける。

ブリテイッシュ・スナイパーです！

激しい金属音と火花。鉄粉が風に舞い、灰色の空に消えてゆく。深い黒、長身の戦車。ブラックプリンス歩兵戦車は、激しい砲撃を浴びながらもゆっくりと前進していた。

「……また待伏せか…… 足が遅いのも考えものだな」

歩兵戦車はその鈍足故に戦況の変化に置いていかれがちだが、冬季杯ではそれが顕著に出ている。1回戦はイタリア豆戦車を主力とするカレン商業だったが、敵の機動力についていけず決め手に欠けていた。やはり抜本的な改革が必要なのだろう。

「路地左折。逃げるぞ」

ブラックプリンスは射撃の間隙を縫い、速度を上げて路地を左折。追撃しようとするヘルキヤットに後続のチャーチルが牽制を入れてブラックプリンスに続いた。

言うなれば、ブリテン高校は劣勢だった。お互いの火力はほぼ同等。モニュメントバレーは機動力に優れ、ブリテンは装甲に優れる。逆に言えばモニュメントバレーは装甲が薄く、ブリテンは足が遅い。

市街地戦である冬季杯では、機動力が重要視される。陣地転換のしやすさや射線の通

しやすさ、逆に射線の通されにくさや遮蔽の取りやすさなど、様々な利点があるからだ。

「となると、敵の先の先……いや、もつと先を取らないといけないか。バーバリー」

「なんですか？」

「……ちよつと、難しいことを頼んでもいいか」

「……次はここを通るはず。少なくとも、私ならそうする」

立体駐車場の2階。遮蔽を取って少し遠くの路地を狙っている。敵が逃げた方向、目的の地にするであろう場所などから推測するに、ここが一番狙いやすいポジションのはずだ。

「火力はどっこいなんだけど、速度差があるからね。こうやって陣地転換しながら砲撃し続ければ安全……ってことだよな？」

「……はい。こちらは比較的軽装甲ですから、狙われない立ち回りが前提になってきます」

別働隊として斥候に出ているチャーファイが敵を視認したら、その情報を元に未来位

置を押さえる。そしてやってきた敵を攻撃して移動。それが今取っているスタイルだ。「でもやつぱり、そろそろ見破られちゃうんじゃない？」

キャセロールの心配ももつともだ。こちらが未来位置を予測して陣地転換している以上、相手はこちらの思考を読んで更に一手先を取ることもできる。

「敵、見えました。チャーチル2両だね。フラッグは別行動みたい」

「…フラッグを別行動にする意味が分からない…でもまあ、出てきた得物は食って損しないだろうし。目標、先頭チャーチル。射線が通り次第発砲自由」

チャーチルが見えた。同時に発砲煙が二つ。砲弾は貫通し、撃破判定が出る。

「移動しよう。次の場所はE-22地点…」

その時、爆ぜる音と共に後続のヘルキャットがエンジンから火を吹いて行動不能となる。

「…な…つ?!射線は通らないはずじゃ…!」

ヘルキャットに砲撃を当てるためには、少なくともビルを貫通させる必要がある。もちろんそんな貫通力は砲弾にはないし、仮に貫通できたとしても立体駐車場に受け止められてしまうだろう。

「…もしかして」

ハッチから大きく身を乗り出して、砲弾の飛来した方向に注視する。すると、ビルの

窓のうちの 하나가割れていることが確認出来た。

「: : : まさか、向かいの駐車場から窓を抜いて: : : !?」

そんな技、全国大会でも見たことはない。サンダースのナオミ、プラウダのノンナ、大洗の華の全国大会も強でさえも、そんな芸当は成し得なかったのだ。

「: : : どんな技術なの: : : 」

驚愕していると、いつもは寡黙なジャンバラヤが口を開いた。

「: : : クルマ、停めてください」

「動くぞ。そこ降りて」

チャーチルの長大な履帯はそもそも塹壕やクレーターを乗り越えるためのものだ。それ故に走破性能は高く、チューニングにより向上したエンジンパワーも相まって段差に対する耐性は非常に強い。それを活かして段差を降りようとした時に、砲塔正面で砲弾が爆ぜる。

「： 同じことをやり返してきたのか： 向こうもバケモノだな」

しかし防盾は頑丈だ。本体はビクともしていない。予定通り段差を降りて、別の射撃地点へ移動する。

『機動力』とは、それすなわち最高速度ではない。旋回性能や走破性能を含めての機動力だ。その点ブラックプリンスは非常に優れた機動性を持つていと言えた。チューンナップによりギヤ比が変更され、低速域でのトルクが増している。これにより優れた加速力を持ち、登坂性能も高い。幅広の履帯は旋回性能にも寄与しており、下手な高速戦車よりも『速い』のだ。

ブラックプリンスは段差を上り、立体駐車場の2階へ。同じことを別の場所ですうとしていくのだ。

「2号車、どうだ」

「： 見えました。敵チャーファイ、E-28地点」

「了解。下がっていいぞ」

射線は通っていない。しかしながら、たった一本だけ、射撃が通せる場所がある。

そう、窓だ。窓を貫くことで貫通力の減衰を最小限に抑えて狙撃ができる。その他にもシャッターなども貫通させやすく減衰しにくい。

17ポンド砲が吠える。チャーフィーの側面に直撃し、吹き飛んで壁に叩きつけられた。

しかしながら、それと同時にこちらのチャーチルの側面にも17ポンド砲が撃ち込まれ、撃破判定が出てしまう。

「… もう私たちだけになつたな」

「ええ」

静寂。ベドフォード製の二機のV6エンジンが調和して唸るだけの空間に、冷たい風が吹いた。

「… 降りようか」

ブラックプリンスはエンジンを唸らせて路上へ降り立った。敵の残存、ファイアフライを仕留めるために。

「相手はきつと路上を進軍してくる。だから私たちは上から攻めよう」

根拠はある。ブラックプリンスは車体が大きく隠しにくいことや、装甲という利点を

活かすため、または機動力に勝るこちらを牽制するためにスペースの広い路上に居たいであろうと踏んでのことだ。

最終射撃地点を離れて、ゆめタワーの下、陣地の中にファイアフライを停車した。ここは目の前が広場で射線を通しやすく、高台のため見渡ししやすい。左右がビルで遮蔽になっっているのも利点だ。

静かな空間に空っ風が吹く。曇天の空は灰色から白に色を変え始めていた。

ブラックプリンスがやってきた。遙か遠く、正面を晒してこちらを睨んでいる。

双方の砲が吠える。ブラックプリンスの砲はファイアフライの少し前、斜面に。ファイアフライの砲はブラックプリンスが車体を傾けたために弾かれた。

「…突っ込んでくる…!?!」

撃てども撃てども、側面で、砲塔で、正面で弾かれる。これが歩兵戦車の装甲。大戦末期まで最前線で戦った重戦車だけはある。

「行くぞ、夏紀の妹！お前の腕を見せてみるッ！」

「…負けるもんか、いや勝っ!!」

ファイアフライは前進をかけた。ブラックプリンスの17ポンド砲は緊急被弾経始で弾かれる。

距離が縮む。ほぼ同時に放たれた砲弾は、お互いの頬を掠めた。

ファイアフライがドリフトで懐に飛び込む。ブラックプリンスもそれに追従して旋回する。

煙と火花。激しく躍る二両は、爆音と共に黒煙に包まれた。

乾いた音と共に、撃破判定が出る。

「ブラックプリンス歩兵戦車、走行不能。よって、モニュメントバレー―田園高校の勝利」

公用車のマウルティアに一人乗り込み、夏紀が向かった先はブリテン高校の学園艦。先ほどヴィヴィアンさんから届いたメールに従いやつてきたのだ。

ぱたぱたと音を立てて走る。洋風な町並みだが所々に日本らしさの混じる、異端的な雰囲気だ。そんなことを考えていると、アスファルト舗装の道路がレンガ造りに変わる。艦橋に近づいてきたからだろうか。

マウルティアを停めて艦橋に足を踏み込む。ミルクのような香りの漂う空間に少しくらつとしながらも、エレベーターに乗り込み、上層階へ。

扉が開くと、そこは赤と白、そして金で彩られた豪華絢爛な部屋。マンガの中でしか見たことがないような、玉座や天蓋付きのベッドが鎮座している。

「いらつしやい。待つてたよ」

どうぞ、とジエスチャーするヴィヴィアンさんに促されて椅子に座ると、彼女は私に紅茶を一杯注いだ。

「いきなり呼び出してすまない…。私自身、なんで呼び出したのかイマイチ理解していないんだけどな」

礼儀正しい彼女は珍しく、肘を立てて紅茶をすすっている。

「：： すまない、困らせてしまうような事を言ったな。きつと、ただ話したかっただけなんだ」

彼女はカップを片手に椅子から立つと、窓枠に腰掛けて足を組んだ。彼女の後ろに広がる満天の星空は、きつと彼女の心とは正反対の情景なのだろう。

「：： 私はきつと、夏紀と戦うのを楽しみに冬季杯を戦っていた。でももう、叶わなくなってしまうたな」

横顔しか見えないが、その顔は少し哀愁を帯びていて、なんだか私も悲しくなった。勝者の裏には敗者がいる。自分もそれには紙一重なのだ、今まさに実感した。

「また、戦いましょうよ。まだ引退には早いですよ」

「：： そう言って紅茶を啜る。香り高く、フルーティーな味だ。」

「：： 私はもう戦車には乗らないよ」

「：： えっ?」

彼女の言葉に耳を疑った。まだ引退までは少しある。その間に練習試合でも組みればと思ったのだが、

「決めていた事だ。決勝まで登れなかったら、私は今日引退しよう」と

彼女の瞳には、うっすらと涙が浮かんでいた。未練はある。でも、決めたことだから。

そんな葛藤が、彼女を苦しめているのだろう。

「…握手、しましよう」

振り向いた彼女の瞳から、ひとしずくの涙。月の明かりに照らされ、輝いて落ちた。手と手が触れる。彼女の冷たい手が、じんわりと暖かくなつてゆく。

「…ありがとう」

彼女は、私を強く抱きしめた。

最後の戦いです!

雪が降っていた。しんしんと降り積もる白雪は、ふんわりとした純白の絨毯となって野山を埋め尽くす。

そんな新雪の積もった山を、1両の戦車がゆつくりと走る。深緑の、全高の高い戦車だ。

正面走行はなだらかな傾斜を描き、側面、背面と可も不可もなく綺麗にまとめられている。砲塔は本来はこの車両の物ではなく、この形式になってから搭載されたものだ。防盾から勇ましく伸びるのは、M1A2 76.2mm戦車砲。全体的に角ばったボディは、洗練されたスタイリッシュさを感じる。

M4A3E8。シャーマンイージーエイトと呼ばれるこの戦車では、アウトバーン戦車隊のフラッグとして戦うために、乗員の慣熟訓練が行われていた。

「涼子さん、どんな感じかな?」

「そうだね。走行性能はパンターと変わらず、って感じかな。操作性って部分ではこっちのほうが一段上かも」

M4はアメリカ軍のベストセラー。どこで誰が使っても容易に動き、何にどう使って

も壊れない。そんな安定性がM4の良さであり、戦後も長らく使い続けられてきた理由だ。それは操縦に関してもそうであり、何かと気を遣うドイツの精密機械とは良くも悪くも正反対のようだ。

「目標、3時の方向。射撃用意」

あらかじめ設置しておいた的が見えた。合図と同時に模擬弾が装填され、砲塔が指向、照準する。

「…撃て！」

発砲。炎と煙を従えて76.2mmの模擬弾が撃ち出され、的を射る。

「命中。続いて8時の方向。射撃用意」

砲塔と車体が旋回されると、揺動が収まるのも待たずに幹葉さんは発砲。雪の山を弾丸が掠めて純白の煙幕を形成する。煙幕が晴れると、そこには大穴を穿たれた的があった。

「おおー、お見事！」

ここのとてころの幹葉さんの成長は目を見張るものがある。砲塔旋回にクセのあったパンターに慣れていたのに、M4に乗り換えても即座に順応したし、今のような曲芸とも言える射撃もこなすようになった。

「練習したから…まあ、まだまだだよ」

そう言うのと彼女は再び照準器を覗いた。照れ隠しなのだろうか。そんなことを考えて微笑んでいると、遠くの丘の上が巻き上げられた雪で白くなっているのが見えた。

直後、発砲煙と共に模擬弾が撃ち出され、車体に直撃する。模擬弾なので貫通はしなかったが、衝撃が車内を襲う。

「いったあ… おデコ打っちゃったよ」

涙目で額をさすりながら琴音さんが言う。今の射撃は…

「…クジラさんだね」

クジラさんチームの車両は、また二回戦の時から更に変化していた。それも今度とはとびつきりにだ。

側面のシウルツェンは金網のトーマ・シールドに。低かった全高は高さを増し、代わりに旋回砲塔を手に入れた。このジャーマングレーの戦車は、『IV号戦車J型』。IV号突撃砲の車台をベースに、逆ドイツ式の改造を行って作り上げたものだ。

「やっぱり75mm砲はかなりの火力ですね… ドイツの主力を担っていただけはあります」

華蘭さんの冷静な分析。主砲はIV突から変わらず、機動性や汎用性、耐弾性は向上。車高が上がったことと整備性が下がったことがネックだが、市街地戦を前提としていれ

ばあまり関係は無いだらう。

「……そろそろ10時だね。一発撃ち込んで帰ろうか。転進！4時の方向！」

イージーエイトは雪を踏みしめて旋回。IV号J型のいる方向へと呐喊する。

「来た！……つちも行くよ！」

IV号は斜め前方へ前進。トーマ・シールドを盾に一気に詰め寄るつもりだろう。

「敵の動きをトレース！未来位置を取るよ！10時の方向！」

小ぶりな岩を踏み越えて、更に前進。敵の未来位置を押さえる挙動で、敵に思い通りの動きをさせない狙いがある。

「……撃て！」

IV号J型の砲弾は白煙となりイージーエイトの後方に着弾。イージーエイトの砲弾は、IV号J型の砲塔側面を強く打ち据えた。

時刻は午後10時。日付は12月31日。大晦日である。

学園艦アウトバーンの甲板上、アウトバーン女子学院のガレージの前。4両の戦車が並べられていた。

「……えー、今年一年、お疲れ様でした」

目の前に並ぶ戦車部の皆。その顔は真剣だったり、笑顔だったり人それぞれ。

「……いよいよ冬季杯決勝戦です。今年の練習の成果を十分に発揮し、勝利できることを願っています」

皆の顔が引き締まる。これは忘年会であり、同時に決起集会なのだ。

「……では、乾杯ッ!」

「かんぱーい!!」

星空に掲げられたコップ。私は自然と頬が緩んでいた。

「隊長」

「… ああ、キャセロール」

手渡されたビンのコーラを開けて一気にあおると、炭酸と甘味で口の中がリフレツシユされていく。

「… 元氣無いですねえ。どうしたんです？」

長い銀髪を揺らして首をかしげる。いつも彼女には敵わない。私の心の中身も、考えていることもお見通しだ。だが、今日ばかりは私が読めないらしい。

「… 実は、相手の隊長、私の姉かもしれない… らしい」

「… なるほど。確かに似てますもんねえ」

「… そう、なのか」

実感はないがそうなのだろう。確かに身長も体つきも、顔つきもどことなく似ている気がしないでもない。

「まあ、深く考えなくても… 姉なら姉で、妹になればいいんじゃないですか」

「… へ？」

確かに私は、『あの人私の姉』という感覚はあっても『私はあの人妹』という感覚が無い。そうか、姉ができるということは、自動的に妹になるということなのか。

「隊長のお姉さんなんです。きっと優しい人ですよ」

「… かもね」

：私は今決めた。冬季杯で優勝したら、家族のもとに帰ろうと。これ以上心配をかけるわけにもいかないだろう。

「：だが、今一番大切な家族は、皆：隊員の皆だから」

ワークキャップを深く被り、踵を返して歩き出す。

「分かってます。付いていきますよ、隊長」

風が吹く。甲板上を攫う空つ風は、まるで心をかき乱すようだった。

1月1日の朝8時。6両の戦車が神社の下に並べて停車していた。神主が振るう幣が、6両の車両に加護を振りまく。これからその戦車の手となり足となる少女たちにも、同じように加護を与える。

これから始まる戦いが、より安全に、そしてより激しく、中身のあるものであるように。

今年の始めの戦いが、今年一番の戦いが、始まろうとしている。

「只今より、モニュメントバレー田園高校 対 アウトバーン女子学院の試合を開始します。互いに、礼!!」

「「お願いします!」」

互いが互いの思いを胸に、力と力をぶつけ合う。

源流です！

水族館の前には、アウトバーン校の戦車道に携わる皆が集まっていた。力を合わせて冬季杯を戦い抜いた、私の頼れる仲間たちが。

「… いよいよ決勝戦です。私事は抜きにしても、絶対に勝ちたい試合です。三年生の皆さんは、最後の公式戦ですしね」

この冬季杯を最後にクジラさんチームの皆さんは引退となる。虎さんチームも山猫さんチームも1年生と2年生で構成されているから誰も引退しないが、チームを引っ張る生徒会の皆がいなくなってしまうのは、チームとしても、一人の隊員としても辛いものがある。

「私たちも精一杯やるよ。まだ慣れないクルマだけど、何とか乗りこなしてみせる」
会長は胸に手を当て言う。その自信なさげな言葉とは裏腹に声音や表情には自信が見える。

「私たちも全力でサポートします！」

寿璃さんは笑顔。その笑顔は自信の表れであろう。テニス部の皆も同じような表情でこちらを見ている。寿璃さんの下で扱かれただけあって、流星に肝が据わっている。

振り返ると、いつもより穏やかに流れる関門海峡をバックに、共に戦った3両の戦車。
「…夏摘」

こここのところ感じなかった右目の痛み。私の乗機だったM4が手元に來てから頻繁に起こるようになった。やはりトラウマのようなものなのだろうか。

もう一度皆の方に向き直ると、虎さんチームの皆がすぐ近くに來ていた。

「大丈夫。私たちがついてます」

皆の笑顔。その頼もしさに、私の右目の痛みはすつと消えた。そこに残ったのは、大きな自信と、強いやる気だった。

「行きましょう。パンツァー・フォー!!」

号令と共に動き始める鉄の獣。先頭を往くファイアフライはその磨き上げられた深

緑色のボディを輝かせ、市街地の入口である高架をくぐった。

「……私は負けられない。私を救ってくれた、母さんのためにも」

本当なら私は今生きていない。あれだけ長時間漂流して尚生きていられるのは、彼女のおかげだろう。そんな母に恩返しをする。そのために私は優勝という称号を手にしなくてはならないのだ。

…… なんてあれあの人は私の母であり、守るべき人だ。

「……でも、本当にあの人は隊長のお姉さんなんですか?」

「分からない。だけど、その可能性が高いとは思ってる」

彼女は私によく似た戦いをする。高速車両を重きに置く機動戦術、緊急被弾経始等の技術。普通の流派ではやらないような事だ。

「……それは今は置いといて、私たちの仕事をきっちりこなそう」

「わかってるよ、隊長」

チャージャーが速度を上げ、ファイアフライを追い越していく。初期偵察は機動戦の初歩。これが出るのと出来ないのでは今後の作戦展開が大幅に変わってしまう。

「3号車はフラッグより2ブロック後方を進行。援護の体勢を整えておいて」

「了解。任せて」

トルティーヤは車両を減速させ、ファイラフライと距離を取った。さて、これで展開

できた。後はチャーファイーからの偵察情報を元に作戦を構築、持ち前の足を活かして先を取り続けるだけだ。

「でも、まさか相手がM4に乗り換えてくるとは」

パンターを相手する事を前提に作戦を考えていたから、事前に立てた作戦は使えない。それを骨組みとして、細部を更新して対応するしかなさそうだ。

「…敵、見えました。数1、レオパルトですね」

「敵発見！チャーファイーです！」

「やっぱり斥候を出してた…そりゃあそうだよ。だつたら…」

相手の先を取る。簡単なことではないが、上手くいけば相当な優位が取れる。ここからの展開が重要になる。幸い相手はこちらと同じ流派。自分ならどうするかを考えれば、自ずと相手の行動が把握出来る。

「クジラさんは虎さんに付いてきてください。山猫さんは敵の索敵範囲から撤退、街を

大きく迂回して後方へ回り込んでください」

「了解!」

「了解しました、やってみます!」

レオパルトが街を飛び出して山側の裏道へと入っていき、イージーエイトとIV号は海側へと展開していた。視界の開けている海側を進軍し敵の注意を引くことでレオパルトを安全に進行させることが出来るし、逆にレオパルトと一緒にいない事から敵を警戒させることも出来る。もちろんどちらにも博打だが。

「ファイアフライの利点を生かすためにはロングレンジの射撃を狙ってくるはず。そこを釣り出して、仕留められれば…」

餌を見せて釣り出す短期決戦。それが私の出した答えだった。

「敵本隊、発見しました。海岸を全速で西進しています」

キャセロールからの報告を受け、ファイアフライとヘルキャットは陣地転換を開始する。今までと同じように高所を取り、一方的射撃を敢行する。

「了解。そつちは敵の後方を脅かす準備をしておいて。ヘルキャットは予定変更。A—

11地点へ移動を」

「了解」

レオパルトの動きが見えないのが不審だ。偵察行動をしているなら、同じく偵察を任務としているチャーフィーと再び接敵するはず。となると、レオパルトは別行動していると思われる。やるとすれば、裏取りだろう。それを封じるためにヘルキャットを展開させた。

「… 作戦を破綻させるのが先決。相手が作戦を立て直しているうちに一気に畳み掛ける」

「こちらもこちらで、短期決戦を狙っている。」

銀のボディに黒のラインが入っているピックアップアップタイプのトラック。荷台部に書かれた『アサギ・パンツアーク』の文字が示すとおり、同社の社用車だ。

運転席から降りたのは銀色の髪をなびかせる女性。ヴィヴィアン… いや、麻木 美

穂子というのが正しいだろう。

「……この勝負、どう見てるの? アナタは」

「さあ。正直分らないですね。私としてはアウトバーンに勝ってほしいですが」

助手席から降りたのは茶髪のツインテールを揺らすメガネの少女、越前 紀伊。彼女たちが一緒にいる理由は単純。友人だからである。

「……同感ね。私も……ふああ……アウトバーンに勝ってほしいわ」

眠たげに欠伸を一つ。紀伊にうつり、彼女もまた可愛らしく小さな欠伸をした。

「でも驚きましたよ。まさかセンパイがアサギ技研のご令嬢だったなんて」

「ご令嬢だなんて。私は親が体にムチ打って続けてた仕事を引き継いだだけよ」

アサギ技研は戦車専門に旧式部品の製造、中古車の斡旋、資料の収集など戦車に関わる全般的な事業を行う中規模な会社だ。決して大きくはないもの、お客様のニーズに的確に答える運営は好評だったという。

「……私がアウトバーンに勝ってほしい理由はまあ、商売的な意味合いもあるね。あのIV突改を作ったのもウチだし」

夏紀は私の会社だってこと知らないんだけどね、と笑顔で言う美穂子。

「この勝負で彼女たちが勝ったら、スポンサーになつてあげようと思つてね。勝つてくるとメディアへの露出が増えて、宣伝の機会も増えるしね」

賢い人だ。そう思いつつも、遠くの街を見る。海岸では、今まさに砲火を交えようかという状況が展開されていた。

爆音。それと同時に建造物の崩れる轟音。射撃ポイントは遠い。どこか…

「見えた！立体駐車場の上！」

立体駐車場の上には、煙ののぼる17ポンド砲をこちらに向けているファイアフライが見えた。恐らくアレが私たちを狙い撃ったのだろう。

「遮蔽を取って！ここで交戦します！」

ファイアフライに対し遮蔽物を挟み射撃の体勢を作る。攻撃力で劣るが、こちらは2両。手数で勝負だ。

17ポンド砲が建造物を叩き、音を立てる。こちらの砲も敵を捉えることが出来ずにいた。

「…もしかして、当てに来てない…？」

相手の砲手の腕なら、停止状態のこちらを狙い撃つことなど造作もないだろう。だと

すれば、我々をここに釘付けにするのが目的のはずだ。となると、狙っているのは……
「挟み撃ちか!全速前進ッ!」

遮蔽を飛び出し、前進する。敵チャーフィーやヘルキャットに挟み撃ちにされると、一気に劣勢に立たされる。下手をすれば二両同時撃破、ということも有り得るだろう。ファイアフライに正面を晒し、広場に出る。出来れば避けたかったが致し方ないだろう。こうして体を晒している以上、敵もこちらの撃破を狙ってくるはずだ。

「……後ろ!チャーフィー!防御体勢ッ!」

車体を斜めに構えて防御体勢を作る。しかし今度はファイアフライがこちらを狙おうとしている。きつとタイミングを合わせてくるはずだ。

発砲音とほぼ同時に、IV号がイージーエイトの側面……ファイアフライとの間に滑り込む。トーマ・シールドに浅い角度で当たった17ポンド砲は、斜め上へと弾かれた。チャーフィーの砲も、45度ほどに傾斜させた側面装甲で防ぐ。

「ファイアフライとのインファイトに持ち込みます!立体駐車場へ!」

「了解!ついて行くよ!」

装填の合間を縫って、立体駐車場へと入っていく。

立体駐車場の2階。下ってきたファイアフライとの交戦が始まる。

IV号に正確に狙いを定めていた17ポンド砲を、イージーエイトの砲塔で押しつけて照準をズラす。そのスキにIV号が懐に飛び込むも、ファイアフライはそれを体当たりでいなす。イージーエイトの砲撃は被弾経始によつて弾かれた。

「支援に来たよ！撤退するなら今のうちに！」

チャーファイが増援として2階へ。ファイアフライは2両を押しつけて1階へと撤退を開始。イージーエイトがこれを負った。IV号もそれに続いて追撃を開始しようとしたところ、チャーファイからの砲撃を砲塔に受ける。

「…なる程。ここで仕留める必要がありそうだね」

チャーファイとIV号は、立体駐車場にて交戦を開始。イージーエイトはファイアフライを追つて立体駐車場を脱出した。

「…よし。街に入るよ。兎に角主力からの情報があるまでは後方待機かな…」

高架を潜り、西側から街へ。敵の背後を脅かすべく待機する。

『…こちら虎さんチーム、山猫さんはE-21地点で合流をお願いします』

「了解。行くよ、皆」

車体サイズの割に幅広の履帯がアスファルトを踏みつけて前進する。E-21地点はそれなりに距離があるが、レオパルトの俊足ならすぐに到着出来る。

駅前のロータリーを通過し、海沿いの大通りに出ようとしたとき、脇道から突然の射撃を浴びる。かろうじて当たらなかったものの、当たっていたら撃破は免れなかっただろう。左方の建造物に大穴が穿たれていることが何よりの証拠だった。

「な、何?」

見ると、こちらをヘルキャットが睨んでいた。私たちが回り込むことを予見していたようだ。

「…いいよ。相手したげる!」

猫が猫に牙を剥く。こうして戦況は三ヶ所で1vs1の戦いが展開される事となった。

ドッグ・ファイトです！

コンクリート片が飛び散り、埃が舞う。視界は灰色に染まり、敵戦車は辛うじて視界に捉えられる程度にしか見えない。

そんな危険な状況においても、戦況を見極めるべくIV号J型のキューポラから顔を出す律花は、顔を塵に汚しながらもしっかりとチャーファイを見据えていた。

「敵、3階に上がったよ！奇襲に注意して！」

チャーファイがどこから降りてくるかは分からない。軽量で高速、それでいて砲火力に優れるのはアメリカ車の特権。こういう視界が効かず、更に起伏の激しい戦場での戦闘は余りにも不利だ。

「…上！」

塀を壊して身を乗り出し、3階から2階を狙撃しようとしているチャーファイを発見した。車両を傾けて、砲塔側面のシウルツェンを晒す。するとチャーファイは射撃を止め、下がっていった。

「無駄弾は撃ちたくないってことか……じゃあ、こっちから行くか」

IV号は移動を開始する。受身の戦いをやめ、攻めに移ろうというのだ。じやりじやりとコンクリートの破片を踏みしめて、後期生産型の太い履帯が回転を始める。

「IV号は短期決戦がしたいみたいね。じゃあ……乗ってあげようか」

キャセロールの指揮で、チャーファイはIV号が来るであろう方向に旋回し、移動を開始。すれ違いざまの一撃に勝負をかける。

塵をかき分けて二両の戦車が疾駆する。音だけ。音だけが霞む視界の向こうから聞こえてくる。コンクリートを踏みしめる音。履帯がパワーを伝えきれず空転する音。エンジンが最大出力で唸る音。

さほどの速度は出ていない。しかしながら視覚的閉塞感で体感速度は3倍にも4倍にも膨れ上がる。

灰色の膜を突き破って、IV号が正面に現れた。

「回り込んで！」

「撃てッ！」

二人の車長の号令は、正反対のものだった。IV号の砲撃はチャーファイアの僅かに横を通り過ぎた。チャーファイアはIV号の後ろに回り込み、確実に仕留めるつもりだ。

火花と煙。チャーファイアの履帯がコンクリートと擦れ合い、激しい光を放つ。

「……もらった！」

その時。チャーファイアは履帯を停止させたが、減速する気配がない。履帯がスリッパしているのだ。

「な……何?！」

慌てて地面を見ると、そこには2枚の金網。それが履帯の下に入り込んで摩擦係数を減らしているのだ。

予定より多く滑ったチャーファイアは射撃をIV号に命中させることに失敗した。ここに留まることは危険だと判断したキャセロールがチャーファイアを走らせ、立体駐車場を脱出する。

「…… 私たちも追おう。逃がしたらいけない。そんな気がする」

「停止!」

火花を散らしながら減速をかけるレオパルト。その直前を90mmの砲弾が掠めていく。レオパルトは軽戦車の中では良好な装甲性能を持つが、そうは言っても軽戦車。90mm砲などどこに当たっても貫通だ。

「やっぱりすごい…… 駆逐戦車だけあって、命中精度が段違いだね」

M18はオープントップの回転砲塔を持つアメリカの駆逐戦車だ。それに大型の蓋付き砲塔90mm砲を搭載したものがこのスパーヘルキャット。70km/hを超える速度を発揮でき、搭載砲は90mm砲。装甲は紙ほどもないものの、総じて優秀な性能を持つ。

「でも…… 攻略法はある。あの俊足の猫を捉えてみせる」

「…… すばしっこいねえ」

人のことを言えたものではないが、レオパルトの機動力は流石だ。パンターの足回りを周到した大型の脚と大出力のエンジンは、その25トンほどの車体を軽々と動かす。

しかし、その機動力はこちらの方が上だ。レオパルトを中心に半円を描くように不規則に動き、遮蔽を取りながら射撃。先ほどからこれを繰り返している。相手もこちらの動きを読み始めており、反撃をもらう回数が増えてきた。遮蔽が取れているため直撃はしていないが、そろそろパターンを変える必要がある。

その時、二号車から無線が飛び込む。

『こちら二号車！IV号に追われてまーす！』

「……救援に行くべきか？いや、難しいか……」

IV号は車体機銃を持っている。たった1.2cmの装甲では、当たり所によつては貫通しかねない。遠距離からの支援射撃に限つてなら可能だろう。

「こちら三号車。E-20地点におびき出してくれれば援護が可能だよ」

『了解ー！やってみまーす！』

「……それまでどうやって時間を潰そうか」

次の展開を考えようと思つてしていると、レオパルトがこちらに突つ込んできた。既に反撃出来る距離にはないため、回避行動に移る。エンジンを吹かすと、履帯が地面を蹴つて急発進。レオパルトの側面に展開し、時計回りに旋回。相手の旋回が間に合つていないうちに離脱を図る。

しかしレオパルトは予想外にも軽い体当たりでこちらの姿勢を崩しに来た。ドッグファイトに持ち込むつもりだろう。トルティーヤは心の昂ぶりに任せ、戦略を変更する。

「：： 相手にノってやろう。装填と操縦、気合入れていくよ！」

「はー！」

ぐるぐると回りながら、砲撃を交わしていく。どちらの砲撃も加減速で回避され、決定打はなかなか出ない。

「：： 撃てー！」

レオパルトの砲撃は背後の建造物を崩した。ヘルキャットの行く先を塞ぐ狙いだ。しかしヘルキャットはその瓦礫の山を登って見せる。

「：： なんて登坂力：：すごい」

ヘルキャットとレオパルトの履帯が擦れ合い、火花を散らす。それほどまでに近く、それほどまでに激しい戦いが繰り広げられている。

星型エンジンが不協和音にも似た音を奏でて出力を上げる。ドリフトしながら砲をこちらに向けるヘルキャットに対し、斜めの角度を取って着弾に備える。

発砲。激しい衝撃と炎に身をすくめたが、レオパルトのボディを衝撃が襲うことはなかった。寿璃は安堵したが、すぐにその安堵が間違いだったことに気がついた。

『クジラさんチーム、走行不能です！』

その報告にハツとなつて振り返ると、ヘルキャットの90mm砲は通りすぎるIV号の側面——それもトーマ・シールドを吹き飛ばされた一部分をピンポイントに貫いていた。今のは外したのではなく、狙ったのだ。

しかし、ヘルキャットはその間スキだらけだ。一度下がり、距離を取って発砲すると、容易に撃破することができた。

『モニユメントバレー田園高校、スーパーヘルキャット、走行不能！』

「どう見ます？この勝負」

「そうだね……お互いにM4が1両と随伴の偵察戦車が1両……どれだけ偵察を上手く

扱えるかで勝敗は簡単に動くよ」

あずき色のIV号戦車のキューポラから顔を出す少女、西住みほは戦況をそう分析していた。チャーフィーもレオパルトも非常に優秀な偵察戦車であり、その偵察をどう動かすか、三城姉妹の隊長としての手腕が試される戦局であり、敵の数が少ないがゆえに慎重な駆け引きが求められるだろう。

「：： それにしても、二人共面白い戦い方をするね。ぶついたり、傾斜させて砲撃を弾いたり」

「源流ってというのはそういう流派らしいですよ。なんでも機動戦に特化した高速戦闘専門の流派なんだとか」

くるくると毛先の遊んだ少女、秋山優花里は調べた情報をみほに伝える。するとみほはまるで戦闘狂のような、狩りをする肉食獣のような、好奇心をむき出しにした顔を見せた。

「：： 一度戦ってみたいな」

「機会はいくらでもありますよ、きつと」

決勝戦は折り返し地点を迎えていた。残存は互いに2両だ。

姉妹です！

両チームとも、一度戦鬪を切り上げて2両が合流した。戦鬪を仕切り直すのが狙いで、ここからもう一度自らの思い描く作戦に敵を取り込もうと考えている。

「ともかく、ロングレンジでの狙撃合戦だけは避けたいね。こちらとしては懐に飛び込んでの格闘戦がしたい」

「相手も恐らくその作戦には乗ってくれないだろうね…。車両の差を活かして戦いたいと思ってるはずだし」

寿璃さんの言うとおり、そんな生半可な相手でないことは私が一番知ってる。昔から一番近くで見えてきて、一番手の内を知っているからこそ言える。

「ここちから攻め込むしかない…。切り込むチャンスを作ります。協力して貰えますか」

「…わかったよ」

その言葉の意味を、寿璃さんはよく分かっているはずだ。

「相手は中距離で強さを発揮する。出来るだけ遠距離で戦いたい…。」

「そうはいかないと思うよ… お姉ちゃん、隊長より強いんでしょ?」

「どうかな。少なくとも私が戦ったことある人の中では一番強かった… 気がする。記憶が曖昧だけどね」

失っていた記憶が、会うごとに、戦うごとに鮮明になっていく。未だ彼女が私の姉であるという確証を得るには至っていないが、非常に濃密な時間を共に過ごしたことは覚えていいる。

「…ともかく。作戦としては、チャーフイーを陽動に出して、手間取ってる敵をこっちがロングレンジからスナイプ…で、いい?」

「いいもなにも。私は隊長をとて信頼してるから」

頼られる。それは幸せなことだが、同時にその人の命を預かることでもある。私は彼女たちを囿に使うこの作戦に迷いを感じていた。しかし、それしか私は勝つ方法を見いだせなかったというのも事実だ。

「じゃあ、行こっか」

「…はい」

星型エンジンがノイズ混じりに唸る。それは再び戦の火蓋が切られることを示す、号砲になる。

レオパルトは、イージーエイトと共に市街地へと侵入していた。作戦を実行するには、軽戦車の取り柄である速さを殺してでも、イージーエイトと共にいる必要があるからだ。

「そろそろチャーフィーが攻め込んでくるはず。大きく迂回して敵の中枢に殴り込むよ」

「…はー」

市街地の中心部を大きく回り込んで、接敵を避ける。こちらの所在がバレてしまうことは私の望むところではない。出来るだけ見られず、妨害もされずにファイアフライの元に二両無事にたどり着く。それが今一番の目的である。

今のところ敵に発見されているようには見えない。ここからどう出てくるか。こちらの動きを読んでいるのだとすれば、見つからずに進軍するのは至難の技だろう。

「…なる程。市街地を回り込んで私を狙う気ね。チャーフィーはこっちに戻って」

「ファイアフライは位置を変更。狙撃に向けたポイントを押さえる。」

「…さて、上手く決まるかな」

敵は見えない。しかしその砲は、何かを精密に照準していた。

「…撃て！」

轟音と共に砲弾が発射される。しかし音がしたのはビルの向こう。こちらに当たるとはならない…

「…いや、当ててくるはずだ。」

「停止！」

火花を上げ、履帯が軋む。停車したイージーエイトの眼前には、地面に穿たれた大穴があつた。

「……窓抜き……ということとは、私たちはチャーフィーに見られてたつてことね」

窓を撃ち抜いての狙撃。常人の技ではないけど、それができるといふことは私たちの位置がよくわかつているということ。しかし、今の射撃は位置を推測するには十分な情報だ。

「……山猫さん、先行してください！」

「了解。任せて」

レオパルトがイージーエイトの前に躍り出る。本来装甲が薄い車両は厚い車両に守られて進軍するものだが、今回ばかりは違う。レオパルトは先回りして位置取りを行う必要があるのだ。

レオパルトが路地に隠れる頃、イージーエイトは全速で前進していた。ファイアフライを予測位置から逃がすわけにはいかない。立体駐車場から降りる前に射程圏内に捉えなければ。

交差点を通った時、ふと左にチャーフィーを見つけた。3つ路地をはさんで並走しているようだ。速度は当然相手の方が上。回り込まれてしまうかもしれない。

「……お願いね、山猫さん」

祈るように一言呟いて、私は前を見据えた。

「……わかった。D-05ラインね」

ファイアフライは立体駐車場を降りる途中、2階部分で狙撃体勢を取っていた。私が相手なら、降りてくる敵の頭を押さえるべく急行する。それを待ち構えているのだ。

『目標地点到達まで、推定10秒!』

チャーファイーからの報告。イージーエイトのものだろう。エンジン音が少しずつ大きくなってきた。そろそろ来る。

……見えた。

「撃て!!」

17ポンド砲が唸りを上げ、必殺の砲弾が打ち出される。空を切つてM4に吸い込まれたその砲弾は、車両に直撃し……

『レオパルト軽戦車、走行不能!』

「なっ…!?」

路地から飛び出してきたレオパルトが盾になり、イージーエイトは無事だった。イージーエイトは予め旋回させていた砲を射撃して、チャーファイを討ち取った。

『チャーファイ軽戦車、走行不能!』

「…なんてことだ… ツ! 陣地転換! 急いで!」

作戦が大幅に狂った。先にイージーエイトを仕留め、指揮の混乱したレオパルトを、確実に仕留める。仮にファイアフライかチャーファイがやられても、残った方で仕留められる。そう考えていたのだが…

「… まあ、こうなっちゃったら、私たちの一騎打ちか…」

後ろを振り向くと、こちらを見据える夏紀の姿。その姿にどこか懐かしさを感じて、頬を雫が伝う…

「… 隊長、しつかりしろ」

ジャンバラヤが言う。そうだ、私はどうかしていた。今は戦いが優先。あの人が姉であらうとそうでなからうと、私はこの戦いに勝つんだ。

「…仕切り直そう。B地点まで逃げるよ」

ファイアフライは延々と逃げ続け、ついには試合会場の東端にたどり着いた。そこはかつて県内最大だった唐戸市場跡。建造物が多く、遮蔽が取りやすい上に高低差があり戦いに幅が出る。恐らく真つ向から戦うと車両設計の差で不利が出ると考えたのだから。

「…さて、どう出るか」

なんにせよ、きつとここで決着がつく。立体駐車場へと入っていくファイアフライを見て、私はその隣に立つ立体駐車場に車両を乗り入れた。

砲撃。コンクリートが剥がれ落ちる。こちらからも砲撃。轟音と共に柱が折れる。立体駐車場を登りながら、撃つて、撃たれて。一進一退の攻防が続く。

屋上に出たとき。ふとファイアフライのキューポラから夏摘が乗り出しているのが見えた。

「私は貴女に勝つ！負けるわけには、いかないの！」

震える声で叫ぶ夏摘。その声には、怒りでも悲しみでもない。深い思いやりを感じた。その声に、私は答える義務を感じ、キューポラから体を乗り出した。

「…… 全力で来なさい！私が全部、受け止める！」

しばしの沈黙。風が二人を撫でた時、キューポラが閉まる。

不意打ち気味の砲声。互いの弱点を的確に狙った狙撃は、緊急被弾経始で後方へと逸らされる。そして二両は下りながらの射撃戦へ。コンクリートの破片が、発砲煙が、視界を満たしていく。

このままではいつまでたつても距離が詰まらない。この距離で交戦しては、不利なのはこちらだ。そう悟った私は、涼子さんに指示を出す。

「次降りたら左折。全速でね」

「左折……左折?!……りよ、了解!」

スロープを降りる。左を見るとファイアフライも同じタイミングだった。イージーエイトは全速のまま左折。煙を上げながら……

「……行っけええええ!!!」

空を飛ぶ。2棟の立体駐車場の間、その距離まさに15mほどだ。

着地。火花を散らしてイージーエイトが到着したのはファイアフライの一階下、2階だ。そしてスロープを上り、ファイアフライとインファイトに持ち込む。

スロープを上がると、ファイアフライは待ち構えていた。撃ち出された砲弾は、停止したイージーエイトの正面装甲を斜めに叩く。

「突撃ッ!」

ファイアフライの正面に組み付く。履帯同士が擦れて火花を飛ばす。車体が触れ合

い鉄粉が飛ぶ。煙が充満し、排気が立体駐車場1フロアを埋め尽くしていく。

「このツ… 邪魔なのよ！」

ファイアフライが少し下がる。17ポンドの凶弾は、左に動いたイージーエイトの動きを追いきれずに駐車場を叩く。イージーエイトは回り込み側面を狙うも、ファイアフライの体当たりで照準がズれる。

二両が一度離れる。互いの間合いを計っているのだ。そして速度を乗せて、もう一度懐へ。

ファイアフライの砲が吠える。直撃コースだ。しかも砲塔と車体の境界線。被弾経始を駆使しても防げる場所ではない。

「マズイ… っ」

その時、幹葉さんが驚くべき行動を見せた。

射撃。発射された砲弾はファイアフライとは見当違いの地面を照準していた。しかし、その砲弾は『飛来する砲弾の右側面を叩き』、弾道をずらしたのだ。

「… やった！」

「ナイス幹葉さん！今だよ、突っ込んで！」

スキが生まれた。今から懐に飛び込んでも装填時間には間に合うはずだ。

「…ブリテンの時は失敗したけど…今度こそ!」

右旋回しつつ、全速で懐に飛び込む。ファイアフライはこちらの後部をプツシグするが、涼子さんがその場の判断で逆に旋回。衝突の反動を活かして左に急旋回する。

履帯が弾けて切れる。当然だ。ここまで酷使したのだから切れない方がおかしい。幹葉さんが照準する。ファイアフライはこちらの動きに合わせて旋回しているが、幹葉さんは車体を狙っていない。狙っているのは…

砲声。炎と煙。コンクリートが剥離して、白い塵があたりに舞い上がる。

めらめらと、炎が燃える。さながら、戦いの余韻のように。

『シャーマンファイアフライ、走行不能。よって…』

『アウトバーン女子学院の勝利!』

炎が消えるときです！

塵の幕が晴れると、そこには煙と炎を上げるファイアフライの姿があった。

イージーエイトの砲撃は砲塔と車体の境界部……被弾経始を用いても防ぎようのない弱点を的確に撃ち抜いていた。対するイージーエイトは、ファイアフライの最期の一撃を被弾し、辛うじて残っていた左の履帯を切断された状態で、柱に叩きつけられて停止していた。

ススと埃で顔を黒く汚した夏摘が、力が抜けたようにキューポラにもたれる。その姿に、私も体に入らなくなり、背中をもたれた。

「……全部、思い出したよ」

夏摘が言う。この戦いに過去の記憶が蘇ったのだろう。私も過去の練習や試合を、夏摘との生活を思い出して右目の疼きを抑えられずにいた。

「……そっか」

私はそれ以上の言葉を思いつかなかった。

「やりましたね、夏紀さん」

華蘭さんはそう言い、ハイタッチを求めてきた。私はそれに応じて、ぱちんとハイタッチ。

「… なんとか、なりましたね…」

汗をだらだらと流し、息を切らしているのは幹葉さん。彼女はそもそも体が強くな、今回の戦いは相当な負担だっただろう。

「お疲れ様。『砲弾撃ち』には驚かされたよ…」

幹葉さんの起死回生の一撃、砲弾による砲弾撃ち。常人には不可能というより、常識的に考えて人間のスペックを凌駕している。

「もう一度同じことをしろと言われても、きつと出来ないな…」

疲労困憊ながら笑顔を見せる幹葉さんに、私は笑って返した。

「最後の一発は燃えたねえ… 私も久々に興奮したよ」

琴音さんはドリフトする車内でもスムーズに装填を行ってくれた。それも普通ではないのだが、彼女の働きあってこそその勝利であったとも言える。

「… あー… 腕撃るかと思つたよ… まあ、勝つて良かった」

涼子さんはハッチから顔を出して言う。最終局面では、被弾経始にドリフト、180

度ターンに緊急停止と、涼子さんにただならぬ負担を強いてしまった。… まあ、これくらいもそうなるだろうけど。

「… そうだね」

私は心地よい体の火照りと心の高鳴りに、自然と笑顔がこぼれていた。

水族館前の広場に戻ると、チームの皆が拍手で迎えてくれた。皆笑顔で、中には涙している人もいた。私はそんな彼女たちに笑顔で答える。

「凄かったよ、隊長。惚れ惚れする戦闘だった」

会長がそう言う。今回、IV号は早々に戦線を離脱することになってしまったが、序盤の分断状態を作るには、クジラさんチームの協力が必要不可欠であっただろう。

「いえ。今回の勝利は、皆さんの健闘があったからこそです。本当にありがとうございます。ました」

私は深々と頭を下げた。すると先程よりも大きな拍手が注がれた。… 勝利の味を、久々に噛み締めることができた。実に、3年半ぶりだろうか…

運び込まれてきた私たちの戦車は、どれも満身創痍で、傷だらけ。その傷は私たちの勝利の代償であり、勝利の勲章だった。私はその光景に、滴る雫を抑えきれなかった。

『優勝、アウトバーン女子学院！』

旗を高く掲げると、私たち戦車隊とその戦車に惜しみない拍手が送られた。歓声や指笛などの音もちらほらと聞こえる。

旗には雪の結晶を象った紋章の上から、十字に交差した道路を象ったアウトバーン女子学院の校章が描かれていた。

こうして、初開催となる冬季杯は、アウトバーン女子学院の勝利に終わったのであった。

私は門司で借りた赤のトヨタ・86に乗り、下関は壇ノ浦パーキングエリアへと足を運んでいた。真つ暗な下関市街地は、後夜祭の屋台や展示の明かりに照らされていた。そんな私の隣に、青のスバル・BRZが停車する。クーペボディの長いドアを開いて降りたのは、私によく似た少女、夏摘だった。

「：： お疲れ様」

「：： お疲れ」

こうして待ち合わせたはいいものの、何と声をかければいいのか、お互いに迷っていた。切り出しにくいし、話しにくい。

「：： 夏摘はさ、これからどうするつもりなの？」

単刀直入に話題を振ることにした。こうして黙りこくついてもなにも始まらないから。

「：： 私はモニュメントバレーに残って、今のお母さんに恩返しをしたい。お母さんに勝利を送ったら、私も帰るよ」

「……そっか」

正直、冬季杯が終わってすぐに帰ってくるなんて思っではいなかった。彼女も私たちの元に帰ってくる気があるようで、今のところ安心したというのが私の気持ちである。「お母さんは、私の命を救ってくれた恩人なんだ。だから、私が出来る一番の恩返しをしたい」

夜景を見ながら、夏摘は言った。

「……成長したね」

「……伊達に年取った訳じゃないよ」

夏摘が試合の直後に言ったとおり、確かに昔の記憶を取り戻しているようだ。それが嬉しくて、私は夏摘を強く抱きしめていた。

「……おかえり」

「……痛いよ、お姉ちゃん」

二人の瞳から同時に雫が滴る。夜の壇ノ浦は、私たちの涙で濡れた。

冬が明けた。3学期の授業が終わり、温まってきた春の陽気に心も体も脱力しきつていた頃。実家でニュースを見ながら紅茶を飲んでいた。

「……へえ…… 戦練専の学園艦、完成するんだー……」

「前からニュースでやってたわよ。夏紀は本当にテレビ見ないのね」「目が疲れるし、私はテレビより新聞派なの」

そんな他愛もない会話をしていたとき、ふとインターホンが鳴る。

ドアを開くと、そこには私のようで私ではない人物が立っていた。

「ただいま」

再編！戦車道チーム！

次の目標です！／道場破りです！

2月末。肌寒いガレージの中で、私は顎にペンを当てて逡巡していた。

「どうしたんですか？ 思い悩んで」

机の上に置いたプリントを覗き込む金色のボブヘア。華蘭さんだ。

「なになに……戦力増強、ですか？」

「うん。やっぱり今のままじゃ数足りないし……後輩たちを、全国大会にも行かせてあげたいしね」

「そうですね。3両で全国大会なんて、流石に無理がありますからね……具体的には、何両ほど？」

「8両は欲しいよね。大洗と同じ数」

正直、大洗に負けて覚醒した大御所たちに勝てる気はしない。しかし、私たちの練度のまま8両に増車出来たなら、いい勝負ができるのではないかという期待も持っていた。

「ただ、現実には甘くないよ……私たちって選択授業じゃなくて部活でしょ？だから部費がカツカツで……」

「練度向上の事も考えると、私たちがいるうちに増車したいですよね。可能な限り早急に」

「だね。今年の夏頃が目処かな」

新人の教育期間と、車両への慣熟期間も必要だ。それらはせめて半年は欲しい。諸々を考慮したうえで夏までなのだ。

「何とかしてみるよ。いろんなツテでさ」

私の拙い情報網で、何とか5両を集めるのだ。

……そう考えると、自信が無くなってくるのだった。

「… おはよー」

「ん、おはよ」

可愛らしいうさぎ柄のパジャマに身を包んでリビングに入ってきたのは妹の夏摘。春休みの間だけ実家に帰省しているのだ。

「おはよう夏摘。ご飯出来てるわよ」

そう言っつてリビングに食欲をそそる香りを立てる朝食を運んできたのは、母の葉月。既に出勤した父を除けば、これが三城家の全員ということになる。

「そーいえば、知ってる? 『道場破り』のウワサ」

「… 道場破り?」

聞いたことがない。武道などではありがちな物だと聞いたことはあるが、実際に起きたという例は見たことがない… 戦車道は特に。

「このあたりで最近多発してるらしいわ。戦車道の道場に殴り込んで、勝利したらその道場の看板を剥ぎ取って帰るらしいの」

「… ひどいね。何もそこまでしなくても…」

道場の看板というのは、その道場の歴史を物語る勲章の一つのようなものだ。それを

剥ぎ取ってしまうなんて、同じ武道をする者として許しがたいことだ。

「……も、いつ来たつておかしくないわ。気をつけるのよ」

「…… うん」

源流は、小さいながらも道場を持つ。他の流派と違って、区画整理時に格安で売り出された土地を買い上げただけのものだが、だからこそ実践に近い練習が出来る。私たちもその道場…… というより訓練場で練習を重ねてきたのだ。

「…… やらせてたまるもんか。源流のプライドは、傷つけさせないよ」

「…… ええ。頼んだわ」

母のその顔つきは、真剣そのものだった。

それから3日程が経った。私は自室で、図書館で借りてきた本を読んで暇を潰していた。

「… んう… 目が疲れたなあ」

3時間ほど読み続けていたから、疲れが溜まっている。窓を開けて新しい空気を取り入れよう。そう思つて窓を開けた瞬間だった。

スタンツ！

という音と共に窓から何かが飛び込んできた。その何かは部屋の壁に突き刺さつて… いや、吸盤で張り付いていた。おもちゃの矢のようなものだが、今の速度から推測するに実際の弓矢を用いているのだろう。

その矢には紙が括りつけられていた。古風な『矢文』というやつだろう。

「… もしかして」

紙を開いて、目を通す。

「… 挑戦状…！」

その紙は、巷で噂の『道場破り』からの挑戦状であった。

すっかり日が落ちた午後7時。真つ暗な峠道に、2両の戦車が停まっていた。

1両は角ばった車体に、同じく角ばった砲塔の乗った、中型の戦車だ。排気口カバーがまるで乗用車のウイングのような雰囲気醸し出すスポーティな車両、クロムウエル巡航戦車。

もう一両は、菱形の砲塔を持ち、鉄板を貼り合わせたようなデザインのもの、同じく中型の戦車。砂漠迷彩に塗られた車両は、クルセイダー巡航戦車だ。

「……今日の狩りは楽しやねえぞ、海荷」

海荷と呼ばれたのは、栗色のショートヘアの少女、大島 海荷。前髪に隠れた左目からは、優しさと厳しさが双方が見受けられる。

「……そうだね、舞花ちゃん。源流、どんなものだろうね」

舞花と呼ばれたのが、金髪のツインテールを揺らす少女、相島 舞花。彼女こそがチームのリーダーであり、クロムウエルの車長である。

「どんなヤツが来ようと、『見島流』は天下無敵だ。負けるわけ無えよ」

そんな二人と2両を、白のヘッドライトが照らす。軽やかな履帯の音を響かせて、2両の戦車が停車する。

「Ⅲ号… H型か? あれは… それと、Ⅱ号G型だな」

「… 楽しみなの?」

舞花の顔には笑み。それも悪巧みをする子供のような、好奇心に溢れる笑顔だ。
「ああ、勿論。県内最強は確実にこいつらだろうからな」

「… だからこそ、戦う意味があるんだ」

夜の山の中で、『見島流』と『源流』の戦いが始まろうとしていた。

『見島流』です！

停車したⅡ号、Ⅲ号戦車から降りてきたのは車長ふたり。今や全国に名を轟かせる、三城姉妹である。

「……来てくれたってことは、受けてくれるんだろ？」

「……ええ。売られた勝負は買う。勝負の世界の常識でしょう」

白いライトが照らす二人から、後光を受けているかのような圧迫感を感じる。彼女たちは歴戦の戦士だ。放つオーラが違う。

「……改めて確認するが、勝負は1対1の2回勝負。互いに副将と大将を出して、副将を1pt、大将を2ptとしたポイント制で、先に3ptを取った方の勝ち。勝負は勝ち抜きだ。いいな？」

ルール確認の言葉に頷くと、彼女は自己紹介をする。

「私は三城 夏紀。源流宗家の後継者です」

「三城 夏摘。その妹です」

「相島 舞花、見島流の正当後継者だ」

「大島 海荷、見島流門下生よ」

4人の車長たちが目を合わせる。各々の目の奥に映る感情は、情熱、好奇心、優しき、覚悟。成分は違えど燃えるような赤。

「始めようか」

「… 夏紀さんが主将じゃなくてよかったですか?」

「いいんだよ。私も夏摘も能力にそんなに差がある訳じゃない。それに…」

「それに?」

「… 夏摘は、源流に忠実な子だからね」

V型12気筒のガソリンエンジンが調和の取れた音色を奏でる。そんなエンジン音に混じって、腕時計のアラームがか細い音で予定時刻を告げる。

「行きましょう。パンツァー・フォー!」

虎さんチームの皆を私事に巻き込んでしまったことを後悔しつつ、号令をかける。III号は緩やかに加速を始める。

「『見島流』って初めて聞く流派なんだけど……どんな流派なの？」

琴音さんが問う。知らなくても当然だ。源流よりも小規模で、離島で育まれた流派であるため、知る人ぞ知る……いや、知る人しか知らぬ、という表現が正しそうだ。

「見島流は萩市の沖にある見島で生まれた流派だよ。その特徴は地形を生かした戦術。『地を知り天を知れば百戦危うからず』を基礎に戦術を組み立てるんだって」

「地を知り、天を知れば、百戦危うからず……」

地形の起伏、遮蔽物、茂みや雑木林、泥濘、そして天候。全てを知り、それを戦術に組み込むことができれば、確かに強い砲や頑丈な装甲よりも強力な武器となり得る。

「最初の予測地点に変更なし。このまま峠道を前進するよ」

「了解」

山を貫く一本の峠道。規格は高く、十分な幅員のある2車線の舗装道路だ。急勾配とはいえ、路上であれば35km/hは堅いIV号。しかしながら、峠道では相手のクルセイダーに利があるだろう。

「なんせパワーウエイトレシオが違うからね……予定地点は少し手前になると踏んでおくべきじゃない？」

涼子さんの言う通り、この2両の最も違うポイントは出力重量比だ。重量はⅢ号の方

が重く、出力はⅢ号の方が小さい。故障率が違うとはいえ、十分に整備が出来る戦車道の環境では重要なポイントにはならないだろう。

「：：：そうですね。：：：予定地点を300m西にずらします。皆さん、戦闘の準備を十分に」

「了解！」

その頃、峠を越えたクルセイダーは、舗装路を最高速で下っていた。

「もう接敵してもおかしくない。警戒しないと」

海荷は、開いたクルセイダーのハッチから体を取り出して警戒していた。夜は敵が見えない。こうして前照灯を点灯して走行している以上、一方的に見つかる可能性が常に付きまとう。先に陣地を構築したものが有利になれるが、その前に最前線をはつきりさせておかないと、こちらが待ち伏せをするのにどこを狙えばいいかが分からなくなってしまう。つまり、最初はこの峠道をお互いに駆け上がり、そこが交戦地点になると踏んでいるのだ。

急勾配が20tの鉄の塊を位置エネルギーで引きずり下ろそうとする。速度はスベック上の最高速度を上回り、景色が後ろに吹っ飛ぶように流れていく。

その時、雑木林の向こうにちらつく光。敵だろう。

「射撃用意」

砲塔が指向される。恐らく敵もこちらを見つけている。すれ違いざまの撃ち合いになる。

「撃てー！」

砲撃音が二つ。こちらの砲撃はⅢ号の防盾に、あちらの砲撃はフェンダーを斜めに叩いた。

「反転して！もう一度！」

後ろを振り返ると、Ⅲ号も同じく旋回中だ。お互いに速度を殺さぬようドリフトでターンし、再びすれ違いざまの撃ち合い。お互いに車体正面の予備履帯を弾き飛ばした。

「敵は……そのまま行くのね。追うよ、反転！」

再びドリフトで転身したクルセイダーは、逃げるⅢ号が残す白の光跡を頼りに、峠道を下っていく。

「逃がすもんか…… 捕まえてやるんだから」

「やっぱり少し速度差があるね。じわじわ詰められてる」

「捕まったら勝ち目はない…… なんとかちぎらないと」

「…… ちよつと、任せて貰ってもいい？」

涼子さんが言う。その声音からは自信が見えた。

「…… いいよ、任せる」

「少し協力して欲しいことがあるんだ。いいかな」

「…… 何なりとどうぞ」

「…… という訳だから、もう少し交戦しよう」

涼子さんの作戦は、彼女のスキルと私のタイミングが噛み合う必要がある。操縦手と車長のチームプレイ。

「ともかくまずは交戦だね。合図と同時に急制動、お願いします」

「了解、車長殿」

リバティーエンジンの音が近づいてくる。確実に詰められている。

「…… 今……」

Ⅲ号は殺人的なブレーキで急制動。クルセイダーは勢い余って履帯をロックさせ、慣性に従い前方へと滑る。

「撃てッ！」

砲撃は車長のとっさの判断か、アクセル全開のスピンターンで回避され、ドリフトしながらの相手の砲撃は、後方のガードレールを弾き飛ばした。

クルセイダーはⅢ号の横を通り過ぎて山の中へと入っていった。Ⅲ号はそれに続く。

「ここからは敵のフィールドだと思ってかかってください。距離を詰めすぎないように」

「了解！」

「R1、L1、R3スリップ、オーバークレスト100!」

ラリーのコ・ドライバーの応用で、ペースノートを読み上げていく。要領はラリーとほぼ同じだが、数字は角度を示している。例えば、『R1』の場合は『右方向 10%旋回』という意味だ。

右に左に切り返し、腐葉土の溜まった滑りやすい路面をドリフトしながら右へ。雑木林をそうやってかき分け、先の見えない坂を登りきると100mの直線区間。

「皿号はついて来てる。：さすが、タンクアタックの優勝ドライバーね」

こういう段差やスリッピーな路面の多い森の中では、クリステイマー式の優れたサスペンションを持つクルセイダーの方が少し上手だ。それに相手にはペースノートもない。それでもついてくるのは、単に車長との連携と、操縦手のウデだ。

「：。仕掛けるよ。見島流のいやらしさ、思い知るがいいわ」

再び先の見えない坂を上る。少し車体が飛び跳ねて、着地する。転輪が半分程埋もれてしまうような、柔らかな腐葉土の路面。これが海荷が最初に張った『天然の罭』であ

る。

「…今！」

「次、坂だよ！」

「オーバークレストね、あいよ！」

涼子さんは楽しそうだ。彼女の本業はサーキットであり、ラリーではない。だが、その操縦は熟練者のそれであり、練度の高さをうかがわせるものだった。

坂で視界が効かなくなる。そしてスピードを乗せたまま斜面から飛び出した瞬間、目に入ったのは…

「…土ッ!？」

巻き上げられた土煙。枯葉や木屑が混じったこの土は、恐らく腐葉土。湿っていて重たいため、本来ここまで巻き上がるはずのないものだ。

「……罨だ!!」

飛び上がったⅢ号の下。腐葉土の煙幕を突き破って出てきたのは、砲塔を後方に指向した状態のクルセイダーだった。

「着地と同時に回避を!」

「くっ……任せ……てッ!」

着地。細身の履帯が腐葉土に沈みきる前にトラクションをかけて、Ⅲ号は右方向に急旋回。何気なくやっているように見えて、繊細なレバークワークが要求される高等テクニクだ。

クルセイダーの砲撃は辛うじて砲塔側面を擦るにとどまった。そして反転したクルセイダーを追って再びⅢ号は加速する。

「そろそろ仕掛けたいね。どうにか前に出ないと……」

「……任せて」

そう小さくいうのは幹葉さん。その目と声は、冬季杯決勝の舞台上で砲弾を撃った時のそれと同じだ。

「……お願い」

海荷は、先ほどの煙幕からの立体交差射撃で仕留めるつもりでいた。そのため次の戦略を組み立てるのに時間を要していた。

「どうしようかな。道路に誘い出してまた遊撃か。いや、ここは第二ポイントに誘導しよう」

そんなことを考えていると、後方から発砲の音。ほぼ同時に着弾音が右前方でした。爆発音があつたことから榴弾であろうと推測出来る。

「…なんで榴弾なんて撃つたんだろう。足を止めるつもりかな」

この時、次の作戦を考えることで頭がいっぱいになっていた海荷は、単純なことに気が付くことがなかった。

「車長、前ッ！」

砲手からの報告で、非常事態にようやく気づく。そして、先ほどの榴弾の意味も。

こちらに倒れ掛かってくる大木があつた。当たれば、撃破は免れないほどの大きさだ。

「どうする……。そ、そうだ、榴弾を使えば……ッ！」

海荷は榴弾を装填した。砲手はその意図を汲み取り、照準する。

衝突を避けるため、操縦手は減速をかける。榴弾が放たれ、大木を叩く。榴弾が爆ぜると大木は二つに叩き折られ、吹き飛んだ。

木片の幕を抜けると、舗装路に出た。ダム湖を囲む道路だ。

「ここまで来れば、パワーウエイトレシオの差で引き離せる……！」

その時、進行方向の道路に土煙が立つのが見えた。先ほどの大木の余波だろうか。そう思っていると……

「……さ、Ⅲ号……!?なんで!?!」

煙の中からⅢ号が現れたのだ。先程までⅢ号は確実に後ろに居た。大木に時間を取られたことを考慮しても、前に出られるようなミスはしていない。

「……まあいいか。追う立場つてのも、悪くないからね……」

Ⅲ号は、大木を叩き折った直後に驚くべき行動に出た。

「行くよ！歯食いしばってね！」

涼子さんは、車体を120度旋回させ、アクセル全開のまま、左後方から倒した木に突っ込んだ。すると左右履帯が大木に乗り上げ、履帯のグリップを生んだのだ。

オーバルコースのバンクを使ったコーナリングのように、倒木を使って車体を傾斜させることで、擬似的にコーナリングフォースを作り出す。それに、腐葉土の地面より木の繊維の方がグリップ力が高いことも味方した。それにより、高いコーナリング速度で旋回し、立ち上がりも非常に鋭いものになった。

「前が取れたー！」

「・・・よしー！」

飛び出した場所はクルセイダーの進行方向上。予定通りだ。

「じゃあ、『ニンジャ作戦』行くよ！」

「了解！」

Ⅲ号は加速。クルセイダーに8車身ほどの差をつけて走行中だった。

「捉えるよ・・・次のポイントまで待たなくてもいい！」

クルセイダーは発砲を開始。地面にぼつり、ぼつりと穴が穿たれていく。

その時。

茶色い煙が視界を奪った。先ほど私たちがやった事と同じ、腐葉土を用いた煙幕だ。しかし今回は、袋に詰めた腐葉土を投げつけるという単純な方法だ。

「…煙幕程度、こんな平坦路で何の役に立つ…!?」

煙を抜けた瞬間、目の前にあったのはⅢ号の正面装甲。そして、5cm砲…

乾いた音と共に、クルセイダーの砲塔から、白旗が上がった。

「…やるね。まさか負けるなんて…」

「いえ、こちらこそ。もう少しでやられてました。危なかつたですよ」

お互いの車両は土と木屑で茶色くなっている。

「地形を使った戦法を得意とする私が、地形に翻弄されるなんて…まだ見島流の境地には程遠いつてことね。でも」

「彼女なら負けないわ。絶対にね」

クロムウエルの砲塔に立つ少女。相島舞花は、不敵な笑みを浮かべていた。

「次はアタシが相手だ。そっちは手負いだが…きつちりと仕留めさせてもらうぜ。そ

れが『狩り』だからな」

「：： 望むところです。負けないですから」

2両の戦車は、再び試合開始地点へ。第二戦、副将・大将戦が始まろうとしている。

誇りです！

銀色の戦車が、とんでもない速さでダム湖の外周を回る舗装路を走っている。その速度は75 km/hに迫ろうかというもので、とても大戦中の戦車とは思えない。それは単に彼女たちの思い入れが成せる技である。

「：：源流、かぁ」

源流は、三城姉妹は、私の憧れだ。消滅寸前の小規模流派を、たった一年で西住流や島田流とまではいかないまでも、大流派と肩を並べる存在にしまったのだから。

しかしながら、見島流が源流に劣っているとも思わなかった。戦いの影にちらほらと見える、アラヤミス。『私ならここはこうする』といった箇所が何箇所もあった。

「だから、勝って誇りを取り戻すんだ」

小さな流派だろうが、ネームバリューがなかろうが。『強さ』を顕示することで、再び大舞台に昇ることが出来る。

「私たちは：：」

… 私たちは、勝つことが使命だ。

「敵はクロムウエルのMk. Vです。火力は恐らくこちらより上、機動力も、装甲も、出力重量比も厳しいですね」

「どこを突いたものか…」

正直な話、このクラスでタイマンとなると、装甲厚はあまり関係がない。結局クロスレンジでの撃ち合いになるだろうし、どちらかという機動力が重視される。

「その点、このルールは源流にとって有利な条件ですよね」

「1対1、こちらのホームステージ、機動力重視。私たちにとって不利な条件は殆どないと言っても過言ではないだろう。」

「… ただ、車両性能差がキツイですね。同じ機動力をウリにする戦車で、相手が完全に上位互換となると…」

「兎に角真つ向から殴りあうのはダメだね。回り込んだり、待ち伏せたりしないと」

「… 車両を隠しましょう。その岩陰に停めてください」

少し盛り上がった岩の陰。Ⅲ号を停車させると、砂や枝、葉を被せて偽装する。ともかく敵の動きが知りたい。こちらの動きを悟られぬように、相手の動きを大まかにでも察知できれば……

「……ヘッドライトの光かな。かなり遠い……ダム湖の方だ」

「動きますか？今のうちに有利な陣地を取ったら……」

「それも多分、相手は計算ずくだと思う。だからあえてここで待つ。一方的に撃てる状況を作ってから交戦しよう」

風に、森がざわめく。黒い陰に埋め尽くされた森の中は、如何なる光も通さない、夜の闇だった。

「これなら気づかれる事は無いだろうが……相手がどこにいるのか分かんねえからなあ」

クロムウエルは先ほどとは一転、ライトを切って、低速で森の中を進んでいた。ライ

トOFFでは木や段差が見えず、飛ばすのは危険だからだ。ライトを切っているのは、勿論発見されるのを防ぐため。

「ともかく、予定地点はそろそろだ。警戒しとけよ」

キューポラの上に立ち上がり、舞花は周囲の確認をする。ミーティアの軽快なエンジン音以外に音は聞こえない。光も見えないし、不自然に盛り上がった地面や人為的に折られた枝なども見受けられない。

「…予定地点に到着、かあ…いないな。やつば見透かされてたか」

狙撃に適した地点を狙撃出来る地点。見島流がまず押さえるポイントだ。狙撃地点を押さえるよりも効果的であるからだ。しかしながら、相手も歴戦の強者。そのくらいはお見通しだということだろう。

「…ん? あれは…」

遠くに、一瞬きらりと輝いた何かが見えた。双眼鏡を覗くと、そこにはこちらを同じく双眼鏡で見る敵車長の姿。

「見つけた! 砲撃用意!」

砲塔旋回。あちらも遮蔽になっている岩を盾に撃ち合いを演じるつもりだ。

こちらは稜線を使ったハルダウン、あちらは岩を使ったハルダウン。お互いに弱点を撃ち抜くことが出来ない。

「……じれつてえ。突っ込むぞ！」

しびれを切らした舞花は、突撃をかける。

「こいつの機動力なら当たりやしねえ！キツチリ蛇行しろよ！速度落とさずに！」

急斜面を蛇行しつつ下る。当たり前のように披露しているが、これも難易度の高い技術である。

「突っ込んできたよ！」

「……仕方ない。合図で飛び出して！機動戦に持ち込もう！」

今から逃げても間に合わない。背を向けるのは避けたいから、増加装甲の活かせる機動戦に持ち込むことにしたのだ。

「……今！」

Ⅲ号は急発進。枝や葉を撒き散らして、岩陰から飛び出す。

「撃て！」

5cm砲と75mm砲が同時に火を噴く。5cm砲は砲塔正面で受け止められ、75mm砲はⅢ号の正面装甲に施されている追加装甲が辛うじて受け止めていた。

2両は反転して再び組み合う。砲が火を噴き、履帯が火花を散らす。アスファルトにくつきりと履帯の跡を残しながら、2両はまるで踊るように撃ち合う。

その時、クロムウエルが見当違いの場所に砲弾を撃った。何か戦術的意味があるものだと思い、そちらを向いたスキに、Ⅲ号の後方をクロムウエルがドリフトしつつ、ベサ機関銃を掃射しながら通過、それを追従すべく砲塔と車体を旋回させるが…

「間に合わない…!」

「…:… いただき!」

クロムウエルの75mm砲が火を噴いたとき、Ⅲ号の砲塔からは白旗が上がっていたのだった。

敵の大将車、Ⅱ号戦車が開始地点につくまで、私はひとりで昔のことを思い出してい

た。いつも道場破りをする時は、待ち時間にこうして過去を振り返ることになっている。

：私はまだ、小さかった頃の話だ。とは言っても、小学生であったが。

見島流の門下生として育てられていた私は、熱心に師範である親の指導を受けて、自分で言うのも何だが実力のある車長になっていたと思う。

そんな時、『西住流の門下生』を名乗る高校生たちが、見島に乗り込んできた。そして突然試合を申し込んだのだ。しかし、こちらは私たち子供を含めて動く戦車はたった3両。相手は10両を投入してきた。

勿論勝てるワケもなく、一方的な負けで試合は終わった。そして彼女たちは見島流の看板を剥ぎ取ると、私たちの目の前で真つ二つにしてみせたのだ。

『こんな弱小流派、流派を名乗る資格もないわ』

その言葉を私は忘れない。奴らに対する復讐心が、私を駆り立てているのだ。

「：。負けない。アタシは負けられない」

見島流の誇りを守るために。一度は奪われた誇りを取り戻すために。

戦うんだ。戦わなくてはいけないんだ。

アームが鳴る。握りこぶしを解き、リラックスして。

「…行こう」

けたたましい音と共に、地面を蹴る。

『源流』と『見島流』。互いのプライドを賭けた大一番が始まろうとしていた。

復讐心です！

「お久しぶり。よろしくね、夏摘さん」

確かこの人は……五樹涼子さんと言ったか。

「うん、よろしく。ちよつと負担をかけると思うけど、頑張つてね」

言葉を交わすと、二人はⅡ号戦車G型に乗り込む。本来は3人乗りだが、通信手を必要としないため涼子さんと私の二人で戦う事になる。こうやって話すのは初めてだ。緊張もするが、楽しみでもある。

「さて、今回はどんな戦術で？車長どの」

「……真つ向から戦つていては間違いなく負けるから、回り込んだり、奇襲したりでチャンス伺おう」

「了解。じゃんじゃん指示してね」

彼女は恐らく全国的に見てもハイレベルな技術を持つ操縦手だ。順応性、戦闘力は勿論のこと、車両をいたわったり負荷を減らしたりと、故障を減らすような立ち回りも出来る。

「……時間だね。全速前進、まずは山を突つ切つて敵が通るであろう位置を押さえよう」

「おっけ、任せてよ」

Ⅱ号は地面を蹴って動き始める。小型軽量な車体に高出力のエンジンを与えられたこのⅡ号G型は、Ⅱ号L型やレオパルト等に似たものを感じる。私は昔から乗り慣れていくからいいが、涼子さんが慣れるのには時間がかかるはず。だから接敵まで時間がかかるであろう山を通り、予定地点へ向かうのだ。

比較的新しく硬い土が広がる麓。急な坂ではあるが、その地盤を蹴る足はその硬い土を蹴りグイグイと車体を引っ張る。

「…なる程、トルクは並、出力は高くないけど車重か軽い…か」

こういう起伏の激しい地形には非常に適した車両である。出力は高くないものの軽く、登りよりも下りで真価を発揮するだろう。

「…さて、どのあたりで鉢合うかな」

対するクロムウエルの舞花は、山の中を全速で下っていた。ライトが僅かに照らす木

を躲しながら、速度を殺すことなく急斜面を駆け下りていく。

「急ぐぞ。相手も機動力はかなりのもの。一度逃すと面倒だから」

II号G型の機動力もさる事ながら、操縦手のウデも確かなものだ。冬季杯の戦闘でそれは確認済みであったし、先ほどの戦闘も操縦手の高等技術があつてこそそのものだ、と海荷も言っていた。

「… 車両性能は圧倒的に優つてるが、インファイトになると少し厳しいかもな」

機関砲とはいえ、こちらの装甲厚を考えると正面以外は抜かれてしまうだろう。そうになると単発のこちらの砲よりも連射できる機関砲の方が有利と言える。対して、こちらのアドバンテージは距離減衰の小ささ。近づかれる前に撃破できなければ厳しくなる。

「… どこかに陣取ろうか」

ライトを消し、クロムウエルは森へ。

じやり、じやりと音を立てながら、II号は傾斜の緩くなつた斜面を登っていた。

「そろそろ接触してもいい頃なんだけど…」

「見えないね。おかしいな…」

茂みや樹木の向こうに光が差すのを見逃さないように、目を凝らしていると…

耳元を掠める轟音。直後、激しく体を揺さぶる、風と音と熱。

「攻撃!?!見られてる!全速前進!」

「了解!」

エンジンの音が一層甲高く変わる。

「発砲の方向から推察するに、敵は3時方向…」

土煙を巻き上げながら、30kmほどの速度で木と木の間をすり抜けるようにスラロームしていく。当たり前のように見せつけるテクニクだが、簡単なことではない。動体視力と瞬発力。並外れたそれらがこの動きを可能としているのだ。

「近づいてきてる… たった一発の砲弾からこっちの位置を推測したつてのか」

舞花は驚愕と共に、笑顔を浮かべていた。如何に敵が強くとも、こちらがそれを凌駕すればいい。ただそれだけのことなのだ。

「… 前進!すれ違つてすぐ転進だ!」

クロムウエルはハルダウンに使っていた岩を踏み越えて前進。II号との距離を詰め

ていく。

「…撃て！」

停車と同時に車体を斜めに向けるクロムウエル。土煙を突き破って両者の砲弾が飛び交う。75mm砲弾はII号の前にそびえる樹木を叩き折り、7・92mmEW141対戦車銃の射撃はクロムウエルの傾斜された正面装甲を叩いた。

クロムウエルがドリフトで転進する頃、II号も同じく旋回していた。灯台の灯りのように周囲をぐるりと照らした前照灯が再び向き合う。そして再び、砲火が交えられる。

75mm砲はII号の左フエンダー部を叩き、ひん曲がったフエンダーが履帯に巻き込み火花を上げて千切れ飛ぶ。II号はすれ違いざまのドリフト旋回からクロムウエルの後方を取る。

「させるな！旋回！」

対するクロムウエルはその場でスピントーン。巻き上げられた土煙に7・92mmの連射が加えられると、吹き飛んだ煙の隙間からヘッドライトの光が差す。クロムウエルの正面装甲は貫通を阻止された機銃弾がめり込んだままで、痛々しい見た目となっていた。

「森を抜けるぞー!全速前進!」

逃げるクロムウエルを追って、II号も森を抜ける。

「… 逃がすもんか!追うよ!」

「分かつてる、任せて!」

II号のエンジンが唸りを上げる。グイグイと速度を増していくクロムウエル。第二次大戦中最速の異名を取るだけあって、無茶苦茶な速度だ。クリスティー式の足回りが地面をしっかりと捉え、舗装路の上ではこちらが追いつけるはずもない。

… 普通なら。

「… よし、追いついてる!」

じわじわと距離が詰まっていることを確認すると、夏摘は車内に戻る。射撃の用意をするためだ。

「… 信じてるよ、お願いね」

「大丈夫。スピードだけなら絶対に負けないよ」

クロムウエルが減速し、コーナリング。対するⅡ号はコーナーに入る手前からドリフトの姿勢を作り、コーナーの出口を向いたまま進入、加速しながら抜けていく。

「…追いつくよ！」

「回り込んでッ！」

クロムウエルより半車身前に出たⅡ号は、右にドリフトするように旋回し、クロムウエルの前に立ちはだかる。Ⅱ号の砲が虚空を撃ち抜いたとき、クロムウエルの砲手は反射的に引き金を引いていた。

「バカ、今撃つたら…！」

ベルトリンク式の給弾機構を持つ7.92mm対戦車銃に対し、クロムウエルは75mmの戦車砲。装填時間は無防備である。

「行っけえええエ!!」

「チイっ！プッシュしろ！抜け出すぞ！」

Ⅱ号が急斜面でドリフトしながらクロムウエルの後ろを取ろうとする。クロムウエ

ルはⅡ号の後方をプッシングしてスピンスせようとするが…

「外された!?速すぎる!」

姿勢を崩したクロムウエルの後方にピタリと付けるⅡ号。次に7.92mm機銃が火を噴いた時は、クロムウエルの砲塔から白旗が上がる時だった。

警報と共にダムが放水を始める。小さな飛沫とマイナスイオンを浴びながら、両チームは向かい合っていた。

「負けたよ、完敗だ。まさかここまでとは…」

「源流は機動戦の流派。舗装路に持ち込んだ時点で勝負は喫していたのかもね」

「…はは、成る程。戦術組立ての差ってことか」

クロムウエルに体を預けた舞花。力を抜いて目を閉じると、過去の情景が思い出されるようだった。

「…復讐なんてガラじゃなかったんだ。ただ認めて欲しかったただけだったんだ、きつと」

「復讐…？」

彼女の戦う意味。その全てを聞いた。恨みと誇り。彼女はそれに囚われただけの少女だったのだ。

「…誇りなら、守れたんじゃないかな」

夏摘が言う。私はそれに合図を打ち、続ける。

「あなたが持っているその心。それが誇りでしょ？」

「…そうかもな」

復讐心。それは自分を、自分の流派を誇らしく思うが故のもの。守りたい誇りは、彼女の中でずっと守り続けられてきたのだ。

「…ありがとな。まさか励ましてもらえるなんて思ってたよ」

ハツラツとした笑顔を見せた舞花は、クロムウエルの砲塔に飛び乗った。

「また今度な。今度は一緒に戦えるのを楽しみにしてるぜ」

舞花の隣に立っていた海荷もクルセイダーの車内に戻る。2両の巡航戦車は、破裂音

のような機関音を立てて演習場を後にした。

「……悪い子じゃなかったね」

「うん。彼女は彼女なりに、守るもののために戦ってたんだ」

最後に見せたあの笑顔こそが、彼女の心からの笑顔なのだ。直感的に伝わった。だとすれば、私たちは彼女の心の曇りを晴らした事になるのだろう。

「……帰ろっか」

「ご飯食べて帰ろうよ!」

「いいねえ、賛成!」

春の夜。まだ肌寒い森で繰り広げられた戦いは、こうして幕を下ろしたのだった。

新学期です！

白のブラウスの袖に腕を通す。柔軟剤の香りが鼻を抜けると、気持ち切り替わる。灰色のブレザーを羽織り、リボンを結ぶ。黒の眼帯も忘れずにつけて、スクールバッグとエナメルバッグを持って、アパートを出る。

歩きながら新調したりボンで髪を結ぶ。ローファーの踵が鳴るたび、気分が高まるのを感じる。

階段を降りると、皆が待っていた。無論、虎さんチームの皆である。

「おはようございます、夏紀さん」

「おはよう、新学期だね、新学期！」

「……おはようございます」

「おはおは。いい天気だねえ」

皆がそれぞれの性格に溢れる挨拶をしてくれる。

「おはよう、皆」

…… ああ、いつもの日常だ。

「… お、今年は私たちが同じクラスかあ」

「よろしくね、隊長!」

「ぶ、部活以外の時に隊長はやめてよ…。」

クラス替え。今年は涼子さんと琴音さんが同じクラスだ。

「私はお隣です。違うクラスですけど、遊びに来ますね」

「うん。いつでもおいで」

華蘭さんは手を振って隣の教室へ。私たちも自分の教室へ入る。

窓際の自分の席に座る。隣の席には偶然琴音さんが入った。

ふと窓の外から見ると、今日行われる入学式に出席する親や1年生たちの姿が見える。

「皆初々しいねえ」

「私たちにもあんな時期があったんだね」

微笑ましく思いながらぼーっと眺めていると、ふと違和感のある光景が見えたように感じた。

「……あ、あれって！」

「クルセイダーと……クロムウエル……まさか!？」

仮にそうだとして、入学初日に戦車で登校するとは。分かつてはいたが大胆な少女たちだ。

窓から顔を出して見回してみると、グラウンドを歩く舞花と海荷の姿が見えた。二人もこちらに気づいたようで、手を振っている。乗員たちも一緒だ。

「……心強い仲間が増えるね」

入学式も終わり、部活のみんなと練習の準備をしていると。

「センパイ！お久しぶりです！」

舞花だ。海荷も一緒にいる。

「お久しぶり!何歳なのかと思つたら高一だったんだね」

「そうつすよ。驚かそうと思つて言わなかつたんすけど」

「よろしくお願いします。先輩方」

彼女たちが続いて、2両の戦車がぎゅらぎゅらと音を立ててガレージの前に止まった。

「コイツたち、持ってきたのはいいけど置き場がないんで、ここで使つてもらつていいつすよ」

「え、ホント?いいの?」

「ハイ!差し上げるってワケにはいかないつすけど、使つてもらう分には一向に構わないつす」

「ありがとう!じゃあ: : そのまま、皆の乗機つてことでいいね」

予想外のところで戦車が増えた。まあ、それはそれで結果オーライ。ラッキーだと思つう事にしよう。

これで5両。目標の8両まで、あと3両だ。

ガレージにクロムウエルとクルセイダーを入れるスペースを作り、入庫したところ

で、ガレージの入口からひよこつと顔を覗かせる少女たちの存在に気がついた。

「：：あれ？ 茜ちゃん？」

「先輩！ やつぱり先輩だ！」

私に駆け寄ってきた初々しさの残る少女たち。彼女たちは私の出身校、維新中学校の出身で、半年間だけだが私と共に戦ったチームメイトだ。その中でもよく懐いてくれていた5人が、この学校に入ってくれたようだ。

「お久しぶりです！ 戦車道に復帰したって聞いてビックリしましたよ！」

茶のシヨートヘアに、グラスコードの付いた茶ブチのメガネを着けたこの少女は、各務原 茜。中学校の時は車長をしていた。見ての通り明るく、優しい心の持ち主だ。

「うん。夏摘と再会するためにね。そっちはどうだったの？」

「まあ、なんとかなつてましたよ。大会も準優勝まで行きましたし」

そう答えたのは黒のシヨートヘアに太めの眉毛が特徴的な少女、一宮 真知。中学校では装填手をしていたか。冷静であるが案外子供っぽい趣味のある可愛い後輩だ。

「へえ、やるじゃん。隊長は誰が？」

「私です私！」

「茜ちゃんが：：頑張ったね。ちなみに優勝はどこだったの？」

「今年も出雲付属中です：：やつぱりあそこは強いですね」

出雲高校付属中学。私が隊長として戦った時も、決勝の相手は出雲付属だった。

「……何はともあれ、皆にはIV突に乗ってもらおうかな。部員の整理が出来次第すぐに練習は始めるから。それまでは部内の雰囲気馴染めるように頑張ってみて」

「はい!頑張ります!」

「……驚きましたねえ」

「そうだね。まさかこんなに……」

道場破りの二人が率いる2チーム、それに私の後輩たち、更に加えて被服科チームと自動車科チーム、そして美術部の兼部チームと、6チームが組めるだけの人数が集まったのだ。

「……何はともあれ、これで人数に困ることはないわけだ。あとは車両が用意出来れば……」

合計8チーム。フル稼働させないと勿体無いし、溢れたメンバーが可哀想だ。

そんな時、机に置いていた携帯が着信音と同時に震え始める。

「…はい、三城です」

『こんにちは。元氣してる?』

電話の相手はヴィヴィアンさん、もとい美穂子さんだ。アサギ技研の部長を任されて、日本中を飛び回っているとかなんとかか。

『…この前言つてた戦車の件なんだけど、アテが出来たわ』

「…本当ですか!?!」

『ええ。でもタダとはいかない。実力を見せてもらおうわ』

実力を見せろ、とは。アサギ技研のワークスチームとの練習試合?公式戦の出場?

『…「知波単学園」と練習試合を組んであげるわ。あそこは今戦いに飢えている』

「知波単…ですか」

知波単学園。突撃と撃沈を繰り返す哀れなドクトリンを持つ学校であったが、今年度からはそのドクトリンを一新。西住みほに強く影響された変幻自在の戦術を基本とするチームになっているという。

『勝てば戦車を2両ほど援助してあげる。負けたら勿論ナシ。それでいい?』

「…はい!ありがとうございます!!」

電話を切り、小さくガッツポーズをした。

「……どうしたんですか?」

「皆を集めて!すぐに!」

ガレージに部員全員が集められた。新入生を含めてだ。

「えーつと……早速だけど、練習試合が決まりました」

皆が驚いたような顔を見せる。それも当然だろう。入って初日で練習試合など、どこかの部活で有り得ようか。

「相手は千葉の知波単学園。時間がありませんので、戦車道経験者だけで試合には臨みます」

「知波単……簡単な敵では無さそうですね」

「はい。知波単は戦術に大きな革命を起こしました。未熟ですが、故に驚異です」

華蘭さんが言う。突撃だけの知波単は消えた。進化した知波単の戦闘力は未知数だ。

「私たち虎さんチームと山猫さんチームに加え、クロムウエル、クルセイダー、IV突の5両で臨みます。乗員はより一層練習に励むようにしてください」

決意を新たに、拳をぎゅつと握り締める。

「…パンツァー・フォー！」
新生アウトバーン戦車道部の始動だ。

爆音と共に撃ち出された砲弾は、遠くに設置された的を確実に撃ち抜いていた。

『下村、お見事！』

「私にはもったいないお言葉です。砲手のおかげですのぞ」

無線で与えられた言葉に返し、下村と呼ばれた少女は操縦手に指令、車両は再び進み始める。

斜めに削り出したかのような無骨な車体に搭載される、角形の鑄造砲塔。そこから伸びるのは五式七糎半戦車砲。75mmの新型砲だ。

「目標、11時方向。車両停止」

車両が停車すると、移動する目標を照準し、砲塔がゆっくりと旋回する。

「…撃て！」

他国のものと比較して、まるで拳銃かのように甲高く気味の良い音を立てて砲弾が打ち出される。その砲弾は寸分違わず的を射ていた。

「……すごいな、あの車両は」

メガネをかけてタブレットを見ているのは、知波単学園、隊長の西絹代。軍人らしい勇ましさと、お嬢様らしい淑やかさの双方を兼ね備えた文武両道の少女だ。

「……隊長! お電話が入っております!」

隊員の一人が一世代前の携帯電話を持ち駆け寄ってきた。西はそれを受け取ると保留になっていた電話をつなぐ。

「お電話代わりました、知波単学園隊長の西でございます」

『もしもし。お久しぶりです。アサギ技研の麻木美穂子です』

「おお、ヴィヴィアンさんでしたか! お久しぶりでございます!」

「……その呼び方はやめてくれるかしら。ところで……」

「……成る程、練習試合ですか。分かりました。早速準備に入ります」

電話を切ると、彼女は無線で練習中の各車に連絡をする。

『こちら西。全車、至急ガレージに帰投せよ』

無線を切った西の口元には笑み。まるで獲物を狩る狩人のような……

「……アウトバーン女子学院。相手にとって不足は無し！」

戦いの予感です!

新学期が始まり少しの時が経ったある日。アウトバーン女子学院戦車部は、山口市の奥地にある演習場に行き来していた。過疎化が進み人口が著しく減った地区をアウトバーン女子学院が買い上げたもので、普段は畜産業や農業などの実習場となっている。ぎゅらぎゅらと鉄と鉄の擦れる音を立てながら田の中をゆっくりと進むのはIV号突撃砲。1年生たちの乗り込んでいる車両だ。

「ここからなら射線が通るね……あぜ道に上げて」

IV号突撃砲があぜ道に乗り上げる。ずしりと質量を感じさせる音を立てて大きく揺れる車体から顔を出したのは車長の茜。ずり落ちたメガネを整えると、辺りを見回した。

「……いない?……いや、何処かにいる。絶対に……」

双眼鏡を当てた瞬間、目の前の家屋の影に敵影を見た。パンターだ。ジャーマングレーのボディには可愛らしくも勇ましい虎のエンブレムが描かれている。

「後退後退！」

しかし時既に遅し。練習弾の当たったIV突は激しい衝撃に揺られる。

「いたた… 皆大丈夫？」

「大丈夫だよ。やっぱり射線の通る場所に出るときには先に確認しないとダメだね」

「そうだね…」

真知の冷静な分析。彼女は昨年までは装填手であつたが、今は砲手に転向している。そもそも彼女は集中力の高さが持ち味であり、装填手にはあまり向いていない部分があつた。そのため砲手となつたのだ。

『田畑の真ん中で戦うのはあんまり良くないね。戦うにしても茂みだとか家屋を盾にしないと、装甲の厚くないIV突じゃ抜かれちゃうよ』

「は、はい…」

『じゃあ、今日の練習はここまでで。戻ろうか』

5両の戦車が18t重ハーフトラックに引かれて峠道をゆつくりと走る。牽引力向上のチューニングが施され、ティーガーなど重量のある車両も余裕で牽引できるようになっており、緩やかな傾斜を描く峠道も難なく登っていく。

「いやあ… 回転砲塔がないってキツイですねえ」

18t重ハーフトラックの後ろについて走るマウルティアの荷台で茜が言う。彼女たちの中学時代の乗機であったM3中戦車も主砲は固定だ。しかし副砲は回転砲塔に搭載されており、牽制や軽装甲車両への攻撃にも用いることが出来た。敵の撃破は難しいが、あるのと無いのでは大違いである。

「そうだね。まあそれにはゆつくり慣れてもらおうしか無いかなあ… 車両がもう少し増えればIV突の良さも発揮しやすくなると思うんだけどね」

IV突の良さは主砲の攻撃力と車高の低さにある。敵を待ち伏せて攻撃するのに適した防戦向きの車両であり、必然的に攻めの姿勢にならざるを得ない現状では少し厳しいものがあるのだ。

「… ちょっと飲み物買いたいからコンビニ寄ってくれる?」

『了解、ちょっと遠いけど我慢してね』

30分ほどで到着したコンビニ。あまり広いとは言えない駐車場に、5両の戦車を牽いたトレーラーと大型の装軌トラック。圧巻の一言であった。

「……いや、正確にはもう一両、アウトバーン以外の学校の車両が見受けられた。トヨタ製KC型トラッククシャシをベースに四輪駆動とされたKCY型トラックだ。そのドア部には歯車にボアリング機で杭を打つようなエンブレムが描かれている。」

「……あれは……試錐学園の公用車ですかね」

試錐学園。広島県に本拠を置く高校で、建築と工業を主に学ぶ事が出来る。少々学園艦の治安が悪いが、学力は非常に高く就職率も良好。地元周辺企業から引っぱりだこののだとか。

「それにしても……試錐の人がこんな所に何の用ですかね」

それはそうとて喉が乾いた。私はマウルティアから飛び降りて、コンビニに入る。ドリンクのコーナーで品定めをしていると、横から聴き慣れた少女の声が。

「……あら、誰かと思つたら三城サンじゃない」

「……あつ、誰かと思えば……！」

黒髪のツインテールに青の下ブチメガネ。私は彼女を知っている。中学校時代のライバルで、決勝戦で戦つた出雲付属の隊長。越前カンナだ。

「頑張つてるらしいわね。弱小チームでよくやるわ」

「… 何よ。アンタこそこの3年間口々に表舞台にも上がってこなかったくせに」

「準備期間よ。私たちは今年、全国を総ナメにしてみせるわ」

その目は冗談でも言い訳でもなく、本物の信念に満ちていた。彼女は間違いなく強くなっている。

「… そのために優秀な戦車を集め、優秀な人材を育成した。負けなど有り得はしないわ」

「優秀な戦車と優秀な人材があつても、優秀な指揮官がいなければ勝利など有り得ないけど、そこはどうなの？」

高飛車な彼女の性格。久々に少し遊びたくなって煽ってみる。

「しろしい！ウチだって頑張っちゃよるんじやけえ！ぶち強うなつて見返したろーつて… よいよ苦労したんよ！… つて、何言わすんよ！」

彼女は怒ると方言が出る。島根県の出雲付属出身の彼女だが、生まれも育ちも山口県。だからその名残があるのだ。

ちなみに、今のを訳すと『うるさい！私だつて頑張つてるんだから！滅茶苦茶強くなつて見返してやろうと… すごく苦労したんだから！』である。

「… と、兎に角。私は負けないわ。少なくとも、アナタにはね」

「… もしかして、試錐学園に…？」

「そうよ。私たちは強い。試錐の名を全国に轟かせる。凝り固まった全国大会に、第二の杭を打ち込んでやるわ」

彼女は、コーラを一本手に取ると身を翻して歩き出した。…第二の杭。第一の杭は恐らく大洗のことだろう。

「…また今度、戦いましょう。次こそ勝つわ」

「うん。楽しみにしてるよ」

心地よい電子音と共に自動ドアが開き、カンナは店を出た。

「教えておいてあげる。私は『パイル』。試錐学園の隊長よ」

格好良くKCY型トラックに乗り込んだ彼女に、店員が駆け寄ってくる。

「お客さん、お会計がまだですが」

「…あ、すみません」

…パイル。大丈夫なのだろうか。

その頃。下関の街に大きな学園艦が接岸した。乾ドックで建造中の戦練専学園艦の隣に停泊したそれは、航空母艦赤城を模したものだ。

「荷物の積み下ろし急げー！鉄道ダイヤ開けて頂いてるんだから、時間には遅れられないぞー！」

隊長の西の指示の元、知波単学園戦車部隊の荷物がコンテナとして積み下ろされる。『九九』や『九九新』と大きく書かれたコンテナには戦車が積み込まれている。

「来たねえ……」

海と山が寄り添うように存在する海辺。澄み渡る空気を深呼吸で胸いっぱいに取り入れる。

「……楽しみだなあ……いよいよかあ」

新型車の車長、下村遥は緊張と待ち遠しさが高い次元でバランスを取った、一種の高揚感に胸を躍らせていた。初めての試合で、ここまで緊張せずに戦えるというのは幸せなことであろう。

手にしていた缶コーヒーを飲み干して手近なゴミ箱に投げ込むと、ブラウスの袖を捲って歩き出す。目指すは一路山口市。今や強豪の一角に名を連ねるアウトバード女子学院との試合だ。

知波単学園です！

山口駅。恐らく県庁最寄駅の中で最も小さいであろうこの駅は、鉄道ファンならきつと堪らないであろう光景があった。

K2型蒸気機関車とC57 1蒸気機関車が2番・3番ホームに並んでいる。K2型蒸気機関車は知波単学園のもので、C57 1蒸気機関車は『SLやまぐち号』として運行されているものである。

「山口へようこそおいでませ。アウトバーン女子学院隊長の三城と申します」
「手厚いご歓迎ありがとうございます。知波単学園の西と申します」

互いに固く握手を交わす。礼儀正しい人だとは聞いていたが、確かにその通りのようだ。彼女が深々と頭を下げるから、私もしっかりと頭を下げておく。

「今回の戦闘区域はこのあたり一帯です。今日は下見をされては如何でしょうか」
「良いのですか？ありがとうございます、でしたらお言葉に甘えて」

西さんは近くにいた隊員……玉田さん呼び止めると、その旨を隊員に通達するよう指示した。流石この辺は出来る女性である。

「私、恥ずかしながら突撃ばかりでまともな戦術を考えたことがございませんでした。まだ不器用な戦術ですが、ご期待に添える戦いが出来るよう努力させて頂きます」

「いえ、私こそ。正々堂々、よろしくお願いしますね」

再び固く握手をすると、西さんは駅前ロータリーに隊員が回したトヨタA A型乗用車に乗り込むと、小さく会釈をして走り去っていった。

アウトバーン戦車隊のうち、今回の練習試合に参加するメンバーは、ファミレスに集まっていた。

「さて、今回の作戦は皆の案が聞きたいんだけど……どうだと思う?」

知波単の戦いは未知数。練習試合では『強い』という印象しかなく、映像を見返しても神出鬼没で何が何だか。

「兎に角敵を先に補足して、先回りして……じゃないかな」

舞花が手を挙げてそう言う。確かに一理ある。市街地で追撃戦は、相手に挟まれる危険がある。受身の姿勢で戦うほうがやりやすいだろう。

「市街地戦は待ち伏せがやりやすいですからね。逆に言えば知波単の得意分野でもあるかと」

対大学選抜戦では大洗の八九式との共闘で待ち伏せと接射を繰り返してパーシングを翻弄した。あれをされると辛いものがある。

「でしたら、2両以上でまとまって行動するべきでは？お互いをカバーし合えば接射も防ぐことができます」

華蘭さんのその意見も最もだ。2両を同時に仕留めるのは至難の業。2両でまとまっているだけで、相手の大立ち回りを防ぐ効果があるだろう。その点大学選抜は連携が足りていなかった。

「じゃあ、偵察隊と本隊に分けて戦うべきかと！」

寿璃さんが言う。彼女たち山猫さんはどっちみち偵察に出してチームの目として使うつもりであったから、彼女が乗り気なのはいい事だ。

「：：では、こうしましょう。パンターとクロムウエル、レオパルトとクルセイダーの2両小隊を編成、IV突は後方支援をしてもらいます」

「成る程。主力・偵察・支援の3つに分けるんですね。でも、戦力の分散はあまり良くないのでは？」

「だから、連携が必要になるんです。小隊として個々に動きつつ、一つの部隊として連

携する。離れすぎず、カバーしあえる範囲で行動する。これが必要になります」

難しい話だ。更には言えば結成して間もない私たちでは不可能に近いかも知れない。しかし、個々の能力は確かにある。何とかなるのではないかと考えた。

「では、それぞれの小隊を、『カニさん』『ヒツジさん』『サソリさん』と呼称することにします。… 難しい作戦ですが、何とか纏めるので頑張つて付いてきてください」

「はい!!」

皆の笑顔。やる気と自信に満ちていた。不安な顔などどこにもない。ただ信じ、ただ戦つてくれる。… つくづく、私はチームメイトに恵まれている。幸せな隊長だ。

「… 頑張ろうね」

砂煙の舞う広場。ここは山口市街地の奥にある採石場だ。練習試合のスタート地点になつている。近くにはダム湖と峠道がある。… が、まあこの周辺で戦うことはないだろう。相手の戦法から考えても、交戦は主に住宅街などの市街地になる。

「兎に角連絡を密に。お互いの位置を把握出来なくなったら勝ち目はなくなります」

空に赤い花が咲く。信号弾、開戦の合図だ。

「……行きましょう。パンツァー・フォー！」

5両の戦車が、砂利を蹴って進み始める。部隊から飛び出して先行したのはヒツジさんチームの2両、クロムウエルとレオパルトだ。

「ヒツジさん小隊は先行してS G地点付近まで偵察をお願いします。接敵した場合はすぐに退避を」

『ヒツジ、了解！行くよ、海荷ちゃん』

『分かっています。頑張りましょう』

ヒツジさん小隊は榎野川の川沿いを全速で下っていく。どちらも速く、巡航65km/hほどだ。

「どの辺りで接敵しますかね？」

海荷の問いに、寿璃は少し首をひねってから

「そうだね…… S G地点までは行けないと思う。行けて精々S G—82地点くらいじゃないかな」

川沿いから離れて旧国道へ。大学前を通過して国道との立体交差周辺にたどり着いたとき。

「……居た！敵発見、九五式軽戦車！多分斥候だと思う！」

『了解。他に敵影は見えませんか?』

寿璃と海荷は体を大きく乗り出して周囲を見回すが、敵戦車の存在は確認できず。

「…居ないみたいだよ!」

『分かりました。発砲を許可します。敵本隊と合流する前に仕留めてください!ただし、何処かに誘い込もうとするような挙動には十分に注意してください。生き残ることを最優先に!』

「了解。何とかしてみるよ…。行くよ、海荷ちゃん」

九五式は速度を落とすことなくこちらに接近してきている。こちらも速度を乗せたまま近づいていく。

「…撃て!」

射撃。九五式は減速してそれを躲す。九五式の37mm砲も極至近で発砲されるが、相手は車体が激しく揺動していた。狙いは外れて陸橋の橋脚に当たった。九五式は引き返さず立体交差を通過。こちらも追撃のために引き返す。

「敵は東へ逃走中、こちらから本隊方向へ追い込む!」

『了解です。こちらでも速度を上げて合流を目指します』

行進間射撃では当てるのは難しい。こちらの本隊と挟み込むことで撃破を目指す。

「こちらヒツジ。本隊は今何処に?」

『本隊はY C地点前です』

「だつたらすぐに到着します。射撃用意を！」

…
捕まえた。そう思つた瞬間の事だつた。

隣を走るクルセイダーの砲塔後部で砲弾が爆ぜる。ほぼ同時にクルセイダーからは白旗。

「な、何?!何処から!?!」

見えない。敵などいない。どこからの射撃なのか、全くもって分からない。前方の九五式はスピンターンで方向転換し、そのまま田んぼに突つ込んで退避を始めた。こちらは位置不明の砲撃への恐怖から、九五式を追跡することが出来なかつた。

「…こちらヒツジ。クルセイダーが撃破された!本隊に合流するね!」

『…
いったい何処から…
了解しました』

「… 上手くいった」

旧国道にかかる橋の上。そこには角ばった砲塔の日本戦車。

75mmの凶弾は確実にクルセイダーの後部に直撃し、撃破した。私たちが新生知波単の初撃破だ。

『ナイス下村！引き続き狙撃を頼む！』

「了解です。誘導をお願いします」

アーチを描く橋の、敵チーム側から死角になる車線に退避する。先ほどはここで待ち、前進して狙撃した。次はどちらへ向かえばいいのだろう。

「… じゃんじゃん来てくれないと、面白くないよ」

自信に溢れる瞳が、獲物に飢えた狼のような目に変わる。

「狙撃出来るとしたらこの橋の上……ここ以外じゃ無理だと思う」

地図を見ながら緊急の作戦会議。こうしている間にも敵は陣地形成を進めているわけだ。時間はない。

「私も同意見だね。でも、そうだとどうするか……」

「ここを陥落させない事には勝利は無いから……せめて相手の車種が分かれば」

幹葉さんが唸る。知識のある幹葉さんでも、絞りきるのは無理らしい。

「……狙撃要員として使っているという事は、恐らく軽装甲な戦車なんだと思う。そして高火力……だとすると、砲戦車とかかな」

ホニ皿、ホイ車などだろうか。その快速具合から推測するに確実に重戦車ではない。それでこの火力であれば、恐らくそうだろう。だとすれば。

「……山猫さんは別動で橋の敵を撃破してもらいます。こちらで敵の攻撃を引き付けますから、そのうちに橋に駆け込んで撃破を狙ってください」

「了解。そうと決まれば早速動くよ」

レオパルトは住宅街へと入っていき、バイパス道路を目指す。こちらはじわじわと前進し、橋の敵の注意をこちらに引く。

敵がいると分かっている場所へ向かうのは怖いものがある。しかも相手はこちらの正面装甲を垂直に叩ける位置にいる。下手すれば一発で貫通だ。

… 正面装甲の先を、角度をつけて晒すと、敵は撃ってきた。装填の間に撃ち込んでやろうと前進するが、敵は既に遮蔽をとっている。何度もそんな堂々巡りを繰り返すが、チャンスはやってこない。だがそれでいいのだ。本命はそろそろ到着する。

『こちら山猫、バイパスに到着!』

「こつちもいつまで持つか分からないから、早めに仕掛けて!」

『おつけー、行っちゃうよ!』

レオパルトはエンジンを唸らせて疾駆。最高速まで速度を載せて橋へ。

『… あれ?』

… だが、何か様子が変だ。

直後、砲弾が放たれる轟音と、地を揺らす爆音。着弾の音だ。

『うひゃー危ない! 相手は回転砲塔持ちだよ! 多分中戦車!』

「… 回転砲塔… サイズはどのくらいですか?」

『うーん… パンターより一回り小さいくらいだね』

パンターより一回り小さく、中戦車。火力から推察するに75mm砲以上のクラスだ。となると、四式か五式。サイズがパンターより一回り小さいということは、同クラスは違う…

「… チト車か!」

「ですね。敵の新型はチトだったんだ……」

四式中戦車チト。高い対戦車能力を求めた日本軍が生み出した高火力・高速の中戦車だ。装甲こそ並みであるが、その火力は日本車の中では高く、バランスよくまとまった車両だと言えるだろう。

「……作戦を立て直します。山猫さんももう一度合流を」

『了解、すぐ行くよ』

戦局はアウトバーンの不利から始まった。ここからどう戦うか。隊長の手腕が試される。

一転攻勢です！

ぎゅらぎゅらと、鉄と鉄が擦れ合う音を立てながら一両の装甲車両が走る。低く構えたフォルムの車体から伸びるのは7.5cmの凶弾を放つ長身の砲。両脇にシウルツェンを構えるその様はまるで馬鎧をまとった軍馬だ。立体交差をモチーフにした校章を掲げるその車両は、IV号突撃砲。前生徒会チームの乗機であり、現1年生チームの車両だ。

「ここら辺でいいかな。止まって」

車両が停止し、旋回。町を見渡す高台にある空き地で、大学の私有地である。そこで射撃体勢を取り、敵を照準する。

「…見えるね。チト車」

橋の上には大型の砲塔を乗せた中戦車・チトが見える。チトが橋の上に居座り通せんぼしているせいで先輩たちがYC地点に釘付けにされている。このままでは良好な足を持つ敵遊撃部隊に回り込まれ、殲滅される可能性もあった。

「ちよつと距離がありすぎるかも。当たっても貫通できない可能性があるね」

真知の冷静な分析。かなりの距離がある上、敵はそれなりの装甲を有する中戦車。車体にキツチリ当てても貫通できない可能性は大いにあった。

「でも、威圧にはなるでしょ？あそこから退いてくれるだけでいいんだよ」

「…それもそうだね」

そう言うと、真知は照準器に額を当てた。昨年まで装填手だったが、ちよつとしたケガから砲手に転向した彼女は、少しの練習ですぐに頭角を現した。そんなじよそこの砲手よりは狙撃の腕はあるはずだ。

「…次、物陰から出てきたら撃つよ」

「おつけー。射線が通り次第発砲自由」

コトコトとエンジンの振動が伝わる車内に、しばしの沈黙。

風が吹き抜けるのと時を同じくして、衝撃と爆音がIV突の車内を揺らす。撃ち出された75mmの凶弾は、チトに吸い込まれるように飛び…

近くに着弾。チトには当たらなかつた。

「目標から2mくらい左にズレてるね。風の影響かも」

指先をぺろりと舐めて、天に掲げる。ゴルフなどでもたまに見る光景で、風を観測するのに良い。指先を舐める風は、確かに左方向へ向かっていた。

「やっぱり。風が強いみたい」

「分かった。次は当てる」

再び照準器に額を当てた真知が、驚いたような声を上げた。

「敵中戦車、砲塔指向中！」

「構わないで、射撃用意！」

この低いIV突、更にハルダウンしている上にこの距離だ。当たるわけがない。

「……撃て！」

こちらの射撃とほぼ同時に敵も発砲。緩やかに左に逸れながら飛翔した砲弾は、チトの砲塔正面を叩く。対する相手の射撃は、こちらと同じく風に流されてか、左側先端のシウルツェンを一枚弾き飛ばして見せた。

「……やるね」

真知は感嘆の声を上げた。こちらは2発目だが、相手は初弾だ。おまけに地理的有利はこちらにある。相手の砲手は相当な腕だ。

「動くよ。お互いの実力は見せ合ったから、相手も多分動くはず」

その予想通り、チト車は橋を下っていく。ここで撃ち合うと利益がないという事に気付いたのだろう。それがこちらの狙いであったから、この作戦は成功と言える。

「敵のチトが動きました。橋の上はクリアです」

「……了解、みんなありがとう」

『いえ。支援部隊として、当然のことをしたままでですよ』

そんなマセた返事にクスリと笑って、咽頭マイクに手を添える。

「前進します。チトの射線が通っている可能性があるので、十分警戒してください」

『了解！』

パンターを先頭に、クロムウエルとレオパルトが続く。数的不利が顕著になってしまったが、質では劣っていない。少数精鋭であるこちらの部隊の特徴を最大限に活かして、フラッグを直接叩くしかないだろう。

「……舞花、お願いね」

『任せてくれよセンパイ。なんとかするからさ』

につ、と歯を見せて笑う舞花の後ろ、車体右後部には青色の旗が揺れる。この試合のフラッグ車であることを示す旗だ。機動力と自衛力のバランスの良いクロムウエルにフラッグを任せることで、生存能力をあげる狙いがあったのである。

「：： 今から敵陣に突っ込みます。総員、生き延びることを最優先に行動することー！」
速度を上げて、部隊は次の目標地点、SG地点へと進む。

住宅街に入る。敵車両の姿は依然見えず、待ち伏せへの不安が募る。知波単は2両以上の複数車両で繰り広げる機動戦に定評があるらしく、この市街地でもそう動くことが予想された。しかし、今のところ待ち伏せされている様子もなく、難なくSG地点へとたどり着いた。

『：： 妙だね。そろそろ来てもおかしくないのに』

「うん：： まだ2両しか見えてないですもんね」

相手の車両はチトとハ号しか発見できておらず、恐らく全てチハであろう残りの8両は所在不明のままだ。その中には勿論フラッグ車も含まれており、発見しない限り戦況は動かない。

SG地点：： 自衛隊駐屯地の門をくぐる。そこには既に旧式となった61式や74式といった陸上自衛隊の戦車が不動状態で展示してあったり、戦闘ヘリや高機動車といった陸自の戦車以外の装備などが置かれている。

「：： 居た！チハ2両発見！」

右側宿舎の裏にチハ2両を発見した。フラッグはいなさそうだ。二発の砲弾はどちらもパンターの砲塔に弾かれる。

「ここに敵が陣取っている可能性があります。ゆつくりと追撃し、フラッグを炙りだします—！」

パンターを先頭にチハをゆつくりと追っていく。チハはあからさまにこちらを誘導しており、待ち伏せされていることが伺える。

「山猫さん、出来るだけ広場に出ないように警戒しつつ、敷地内の偵察をお願いします」
『了解』

山猫さんがパンターを追い越して前進していく。敵の射撃を受けながらもそれを躲し、懐に飛び込んでゆく。主力部隊もそれに続き、宿舎裏を出て敵の射線に出る。

『敵フラッグ発見！施設反対側の宿舎裏だよ！』

この駐屯地は、中央グラウンドを挟んで2つの宿舎がある。そのうち南側、すなわち私たちが展開している側と反対側の宿舎の影に、敵フラッグは潜んでいたという。

「ありがとうございます。こちらでも交戦開始しました。なんとか逃げ切つて戻ってきてください—！」

『がんばりま—す—！』

そう言っている間にもチハたちとの交戦は続く。あからさまな足止めで、何か他に狙いがあると見ていいだろう。

「ひー…ふー…みー…よー…5両しかいないですね」

「…残り3両のうちフラッグが1両…2両が遊んでる状態だね」

華蘭さんと幹葉さんが言う。確かに目視圏内には5両しかおらず、残り2両の所在が気になるところだ。

「…フラッグを叩きに行きましよう。パンターを先頭に突っ込みますので、クロムウエルは正門から脱出、山猫さんはもう一度フラッグにまわりついて足止めを。IV突は今何処にいる?」

『SG到着しました!どこに向かえばいいですか?』

「南側宿舍裏が撃てる場所に向かってください!」

『了解です!』

相手の砲火力では貫通が見込めないことは分かっているが、それでも呐喊するのは怖いものがある。それもフラッグを後ろに連れてだ。

「…行きます!」

「こちら西車！敵レオパルトと交戦中！援軍を要請する！」

『池田車、了解！すぐに向かいます！』

『玉田車も了解であります！』

弱い弱いと言われるチハではあるが、流石に軽戦車に負けるわけにはいかない。お互いの砲弾を弾き合う。

「……のままではまずいな」

相手は軽戦車とはいえ、同格の性能を持っている。このままではいずれ殺られてしまう。

『こちら下村車。自分が行きます』

チト車からの無線。しかし先ほどチト車はこちらとは逆方向へ走ったはず。もう到着するのだろうか。

耳をすませば、レオパルトのガソリンエンジン、チハのディーゼルエンジンの他に一つエンジン音がするのがわかる。南側、住宅街の方からだ。

「頼む……みんな、もう少しの我慢だ！」

乗員を励まして、敵に向き直る。砲の向きと動きを見て、次の弾道を予測する。そし

て操縦手の肩を蹴り、砲弾を躲し、弾いていく。

チトのエンジン音が、少しずつ近づく…

その時、乾いた音とともにアナウンスが流れる。

「アウトバーン女子学院、パンター中戦車、走行不能！」

「あつ…!?」

舞花は思わず声を上げる。目の前でとんでもない事態が起きたからだ。

展示されている61式の影から飛び出してきたチハが、パンターの側面に体当たりを敢行した。その際に砲が履帯に巻き込まれ、履帯が外れた。相手のチハも撃破判定が出たが、逆側から飛び出してきたチハの砲撃によって、パンターは撃破されてしまった。

「…そんなの、アリかよ… ツ!？」

砲弾の雨を回避しつつ、正門を飛び出す。相手のチハと、待ち伏せしていたであろうハ号が合流してこちらの追撃にかかってくる。もう長くは持たないだろう。

「頼むぞ… 皆！」

揺れる旗。フラッグを任された責任が、額から冷や汗を滴らせた。

どれだけ撃ち合えど、決定打が打てない。お互いに援軍を待ち、戦いは持久戦の様相を見せていた。

「IV突はまだ!？」

『そろそろ射撃位置につきます!』

「下村! まだか!」

『すぐに到着します!』

火花が散る。チハとレオパルトがぶつかり合う。

西と寿璃の目線が合う。お互いに真剣そのものの表情。これ以上なくらいに緊迫

した空気が流れる。

見えた。すぐ南側の交差点にチトの姿。同時に東側体育館の陰からIV突が現れたのも見えた。

更には宿舎の西側・東側両方からチハが現れる。後はもう、運に身を任せるのみだ。

「…お願い!」

祈りながら、レオパルトはエンジンを唸らせて最大速で前進した。正面装甲がチハの側面にめり込み、チハを宿舎の壁に叩きつける。刹那、車体を揺さぶる3つの衝撃。レオパルトから白旗が上がる。

その直後、IV突の砲撃によって、チハからも白旗が上がったのだった。

新戦力です！

風がよく通る日陰で、2両の戦車が白旗を上げて停車している。かたやアウトバースのレオパルト、かたや知波単のチハ旧砲塔だ。旧砲塔チハには青い旗が掲げられており、この試合のフラッグ車であることがわかる。

「…勝った…か」

寿璃はキューポラにぐったりとうなだれる。決して長い試合ではなかったが、密度の濃い試合だった。チハを見ると、知波単の隊長、西も同じように疲れきった表情をしていた。

「…勝った…んだ」

同様に、5両のチハを相手に逃げ惑っていたクロムウエルは、喉元に47mm砲を押し付けられた状態で停止していた。左右をチハに固められ、壁に叩きつけられたところで後ろから密着されたのだ。

「… 危なかったよ、全く」

『ごめんね、舞花。無理させちゃって』

「… いや、構わないよ、センパイ」

へへっと笑ってみせる。今回は以前に比べて大胆さに欠ける戦いだったとは思いますが、それでも間違った指揮はなかったと思う。

煙を噴くパンターをそつと撫でて、ため息を吐いた。

「… やられちゃいましたね」

「うん。まさかあんなところで…」

側面でもそれなりに距離があれば貫通される事はないと踏んでいたが、まさか突進で履帯をやられるとは。

「まあ、勝てたし結果オーライなんじゃない?」

「… そうですね」

勝負は時の運。今日、勝負の女神が微笑んだのは、私たちだったのだろう。

「ありがとうございます。途中まではいい感じだったんですがね……」

「そうですね……我々も、少し稚拙な戦術を見せてしまいましたかね」

あはは、とお互いに苦笑いする。西は頭を掻きながら続けた。

「……あそこで足止めをしている間に別働隊で挟んで、という計画だったんですが……何がいけなかったんですかね」

あそことは、きっと北側宿舎裏の待ち伏せポイントだろう。あそこで我々が交戦している間に自由に動かせる別働隊を使って挟み、フラッグを獲るつもりだったのだ。

「そうですね。少し誘導がわからさま過ぎましたかね。足止めがしたい、という意思が透けて見えてました」

「成る程。勉強になります！」

「いえいえ。私も勉強させていただきました」

差し出された手を取り、ぐっと握手した。こうして、知波単学園との練習試合は、アウトバーン女子学院の勝利で終わった。

春が過ぎ、夏に差し掛かるうかというところ。じわじわと気温も上がってきたアウトバーン学園艦上でのこと。

「久しぶり、夏紀ちゃん。元気してた?」

「お久しぶりです、美穂子さん。こっちはなんとかやってますよ」

長い長い銀髪を揺らす美穂子さんは、私の手を取り固く握手した。

「知波単との練習試合、見事だったよ。もっと苦戦してくれるかと思ったのに」

「いえ。見えてないだけでだいぶ苦戦しましたよ」

美穂子さんは昨年までの眠そうな印象とは打って変わって、出来るOLのような雰囲気醸し出していた。実際頭も冴えるし知識もある人だし、頼りにできる人だ。何を考えているのかよく分からないが。

「…約束通り、戦車は手配してあるよ。もう少しでくるんじゃないかな」

美穂子さんが空を見上げる。遠くから、ジェットエンジンと思しき音が聞こえてきた。少しして、強まる風とともに現れたのは、超大型の輸送機。

「： C—5 ギヤラクシー： ですか」

盛大な逆噴射の音を立てながら甲板上に着陸したのは、アメリカの大型輸送機、C—5A ギヤラクシーだ。着陸したギヤラクシーの後部ハッチが開けられると、そこから現れたのは、予想もしていなかった2両の戦車であった。

1両は非常に小さな戦車だ。濃い緑色の車体は非常にコンパクトで、垂直部分と曲面部分の複雑に入り混じったデザインの装甲が、多数のリベットで接合されている。砲塔はかの九七式中戦車チハのもので、ループアンテナが取り付けられている。

『四式軽戦車ケヌ』。帝国陸軍が少数を生産し、本土決戦に備え温存していた車両のうちの1両であり、高速戦車として偵察や陽動に駆り出すことが出来そうだ。

もう一両は、対照的に非常に大きかった。隣に並んでいるのがケヌ車であるということもあるだろうが、砲塔が、車体が、あらゆる箇所が大きい。長身の砲は高い火力を予感させ、分厚い防盾や丸みを帯びた砲塔は優れた防御性能を発揮しそうだ。

『T29重戦車』。アウトバーン女子学院にとって待望の重戦車であり、初めて得た敵重戦車と真つ向から殴り会える車両である。

「: : : こんなにいい車両、頂いちゃっていいんですか? : : ?」

「大丈夫。この子達はガレージの奥に眠ってたスクラップを、社員たちが趣味でレストアしただけの、いわばタダの車両よ。ありがたく受け取っておきなさい」

「: : : ありがとうございます!」

深々と頭を下げると、美穂子さんは「まあまあ」と顔を上げるよう促す。

「ところで、今年の全国大会には出るの?」

「いえ: : : まだ練度不足ですし、私たちは今年度の冬季杯を見据えていますから」

「: : : そっか。ちよつと面白い話を小耳に挟んだんだけど: : : 出ないなら関係ないわね」

思わせぶりな言葉が少し引つかかるが、関係ないと言うなら関係ないのだろう。

「: : : じゃ、頑張つてね。また困ったらいつでも連絡してね」

「色々ありがとうございます!」

美穂子さんはウインクすると、ギヤラクシーに便乗して飛び立った。滑走路に残された2両の戦車を見て、私は感情の昂ぶりを覚えた。

時々ギヤが噛み合わずに不快な音を立てながら、グラウンドを走り回るケヌ車。乗り込んでいるのは戦車部の一員で、美術部との兼部で所属している巖島さん率いる美術部チームである。

『隊長！この戦車難しくないですか!?!』

「だから練習して貰ってるんだよ。頑張つて！」

『は、はぁ〜い!』

椅子に座つて、その微笑ましい光景を見ながらタブレット端末を弄っていた。今後の計画を立てているのだ。

「あと一両ですね。何かアテがあつたりするんですか?」

「んー…。今度ウチの学校と提携する学校の話、聞いている?」

「ああ、知つてますよ。えーつと…。『巴拉トン水産技術学院』…。でしたっけ?」

巴拉トン水産技術学院。漁業・船舶・海洋科学の3学科をメインとした学園艦で、日本近海には殆ど居らず、基本的には遠洋に向いて漁業を行っているという。そんな巴拉トン水産が、アウトバーンに対して姉妹校提携を持ちかけ、こちらが受けた、ということらしい。

「ところが、去年から戦車道やってるらしくて。もしかしたら…：くらいに思ってる」
戦車の提供を持ちかけて、受けてくれればラッキー、程度ものだ。

そんなことを考えていると、カバンの中でスマートフォンが鳴動している事に気がついた。取り出してフリックし、電話を取る。

「もしもし、三城です…。はい、お世話になります」

噂をすれば何とやら、相手はバラトン水産の戦車道チーム隊長であった。

『バラトン水産戦車隊長、北島 千尋と言います。三城さんに一つご相談があつてお電話させて頂きました』

「私が力になれることでしたら、何でもお伺いしますよ」

『… 私たちと、練習試合をしては頂けないでしょうか』

… 来た！またとないチャンスだ。

『貴女方が戦車を探しているという話を聞きました。こちらから一両提供させて頂く代わりとしては何ですが…』

「分かりました。受けて立ちます」

少し食い気味に返答する。戦車までかかつては最早断る理由が無い。

『… ありがとうございます！では…』

日取りなどを話し合い、電話を切る。胸元で小さくガッツポーズをした。

「……練習試合が決まったよ！」

「……え？」

こうしてはいられない。全員集めてすぐに作戦会議だ。

「えーと……ここのとこ何度も組んで申し訳ないんだけど、練習試合が決まりました。相手はバラトン水産技術学院。何でもハンガリー軍の戦車を使うんだとか」

「ハンガリーって……またマイナーな」

ハンガリーは、小国ながら自国生産の戦車を多数保有していた。そしてそれらはそれなりの性能を有しており、数さえ揃っていれば大戦中期のドイツ軍並みの戦力は持てていたかもしれない。

「例えばどんな車両があるんだ？」

舞花が言う。確かにそこは気になるところであろう。

「そうだね……IV号っぽいのか、38(t)っぽいのか、III突っぽいのか……」

「分かりやすいような、分からないような……」

実際そんな感じだ。火力も、装甲も、走行性能もだいたいそんなもんだから、この例えはほぼ的を射ていると言えると思う。

「今回からは美術部チームと自動車科チームに加わってもらいます。車両は美術部がケ
又車、自動車科がT29で行こうと思います」

自動車科チームのリーダー、瀬玲奈さんが親指を立ててみせる。

「戦車の運転には慣れてるからさ、任せてよー」

この学校の自動車科には、なんと『戦車専攻コース』というコースがある。これは新旧問わず様々な戦車の知識を身につけるための学科で、自衛隊や戦車ドライバーへの道が拓けるといふ。

「はい。ハンガリー戦車は、高い火力を持つ車両も少なくありません。必然的に重戦車の重要性が上がってきますので、頑張ってくださいね」

「おうよー」

「では、作戦会議に入りましょう！」

竿を引くと、針に引つかかかったカツオが宙を舞い、甲板に叩きつけられて生簀へと流れていく。針をもう一度海面に投げ込むと、すぐさまカツオがかり、また竿を引く。

この学園艦で「へのり」を務める私、北島千尋は、カツオ遠洋漁業班のリーダーであり、同時に戦車道チームのリーダーも務めていた。授業の間、戦車道の事が頭から離れず、今日は何度もミスを犯した。

カツオのかりが渋くなった所で今日の操業が終了。放課となった。

「ちーちゃん、オツカレ」

「あ、ゆーちゃん。おつかれ〜」

私のことを『ちーちゃん』と呼ぶのは彼女、瀬戸優奈ただひとり。私の唯一無二の親友であり、私がただひとりあだ名で呼ぶ人物であった。

「今日は元氣ないね。どーかした?」

「んー… どうかしたって程じゃないんだけど、ちよつと戦車道が気になって授業でミス連発しちゃって」

「そっか。まあそんな日もあるよ。じゃあ、戦車乗って鬱憤晴らそうよ」

「……そだね」

ゆうちゃんといると、どんな悩みも些細なことに思えてくる。そんな包容力が彼女にはあった。

ガレージのシャッターを開けると、そこには我が学園の戦車と、その戦車に乗り込む仲間たちの姿があった。

挨拶をしてくれるみんなに挨拶を返しながら、私は自らの乗機へと近づく。

リベット留めの車体。長身の主砲を装備するためにかさ増しされた砲塔上部。設計は少々古臭いものの、その戦力はホンモノである。『トゥランⅢ重戦車』。重戦車とは言うが、実態はⅣ号H型等と同じ高機動・高火力の中戦車といったところだ。

シウルツェンは装備しておらず、若干古臭く見えるボギー式のサスペンションがむき出しになっている。迷彩色に塗られたそれは、長砲身も相まって勇ましさを醸し出しており、頼りがいを感じる。

「……今日も、行こっか」

練習試合は2週間後。アウトバーン女子学院のホームグラウンド、萩市街地で行われる。

海を往く戦車隊です！

広い太平洋の海原を往く大型の船舶があつた。潜水母艦剣崎をモチーフにしたこの学園艦は、バラトン水産技術学院の学園艦である。

これまで様々な企業や学園に渡つてきたこの船は、巡り巡つてバラトン水産の学園艦となつている。その発端は内陸国であるハンガリーが海洋技術に興味を持ち、『飛び地』として公認の取れる学園艦を欲したことにある。ハンガリーが買い取つたこの船舶を、日本の企業と共同で学園艦バラトン水産として運用しているのだ。それ故に、この船はハンガリー国籍で、ハンガリーの所有地なのである。

……しかしながら、生徒も日本人、教員も日本人、寄港する港も日本となると、必然的にハンガリーの要素は薄くなるもので、残つたのは船乗り魂だけであつた。

「……よいしょよ……っつ」

おっさんのような声を上げてダンボールを抱える。その指は長く、雪のように白い。髪は艶やかな茶髪のロングヘアであり、『綺麗』だとか『美しい』という表現がよく似合う容姿をしていた。

バラトン水産の海洋技術科に所属する瀬戸優奈は、研究用機材の詰まったダンボール

を抱えて教室を出た。

海洋技術科はの活動は、波力発電や海流発電などの自然エネルギー利用を始め、微生物や深海生物の調査、魚類などの生態研究など多岐にわたる。私はその中でも海流発電を主に学んでいた。

バラトン水産の学園艦は、施設の多くが屋内に配置されている珍しいタイプの学園艦である。というのも、他の学園艦が学校と居住区を丸々移設したような構造であるのに対し、バラトン水産は企業とその研究施設を一つそりと船に乗せたような設計のためで、つまるところ、この艦内研究スペースは全て企業のファクトリーという事になる。

そんな艦内ファクトリー施設に含まれる、潮流研究用の大型プールに、ひとりの少女の姿を見た。小麦色というには少々焼けすぎな肌。水に濡れ艶やかに輝く、黒の短髪。競泳水着で泳ぐその少女は、紛れもなく我が親友であった。

「ちーちゃん、何してるの?」

「お、ゆーちゃんおつかれ!何って...泳いでるんだよ」

健康的に焼けた肌から推察できる通り、彼女は運動神経に優れる。水泳とて例外ではなく、まるでイルカのように泳ぐ彼女の姿に見とれてしまう。

「...程ほどにね。海技も授業終わったから、先生来るかもよ」

「あ、そっか!やばいやばい」

前述の通り、ここは研究用プールである。遊泳は基本的に禁止。先生に見つかるこつぴどく叱られる。プールを上がったちーちゃんは体を拭くのも程々に更衣室に駆け込んだ。

数分後に更衣室から出てきたちーちゃんは水色のブラウスと紺色のスカートからなるバラトン水産の制服に着替えていた。ただし湿った髪はどうしようもなく、これでは先生に見られたが最期である。

「仕方ないなあ…。ほら、早く部室行くよ」

「ほいほーい、あ、私持つよ」

そう言っただけで私が抱えていたダンボールを颯爽と奪い取った。

「大切に扱ってね？」

元氣印の我が隊長に、苦笑いを送るのであった。

少しじめつとした、コンクリート打ち放しのガレージで、私はドライヤーの生暖かい風を浴びていた。

「こら、動かないの」

そう言つて頭をぐいっと押しさえつけられる。

「ドライヤーつてあんまり好きじゃないんだもん」

「もしかして、いっつも自然乾燥なの?」

「うん、そだよ」

耳元で、はあ、とため息が聞こえた。

「…よくもまあ、それでこの髪質維持できてるね」

「何でなんだろうね?」

自分でも分からない。これだけ潮風を浴びて、適当にケアしている髪なのに何故か他の人よりサラサラだ。たまにこうして羨ましがられることがある。

「私の努力はいつたい…」

「ゆーちゃんだつて髪綺麗じゃんか。私よりはサラサラだよ」

「頑張つて手入れしてこれなの… ちーちゃんが羨ましいよ… はい、できたよ」

「ん、ありがと」

私は椅子から飛び上がると、ガレージの奥へと小走りで向かう。そこにはバラトン水産戦車道チームの保有する戦車10両が堂々と鎮座していた。

バラトン水産の保有戦車はハンガリー国産戦車とハンガリーが使用していた戦車で

ある。隊長車のトゥラインⅢの他にも、ズリーニイやトルデイⅢなどもあり、高次元でバランスの取れた戦車隊であると自負している。

「……よし、全員揃ってる？練習始めるよ」

集まったメンバーの姿を見て全員揃っていることを確認する。

「さて、じゃあ皆戦車に乗って！今日は昨日言ったとおり、紅白戦やるからね！」

メンバーが各車両に続々と乗り込んでいく。私とゆーちゃんも例外ではなく、自らの車両に乗り込む。私が車長を務めるトゥラインⅢも、エンジンに火を灯し、コンクリートを踏みしめてじりじりとガレージから歩みを進める。

そしてあらかた車両が動き出して、最後の車両。それはこの戦車隊の中で最も強力かつ、最も完成度の高い車両であった。

切り立った正面装甲。幅広の履帯。分厚い防盾に守られた砲塔。そこからそびえるのは、数々の連合軍兵器を屠った長身の名機だ。

「いい？相手が誰だろうと、やるからには勝つよ！」

隊員たちの威勢のいい返事を聞き、千尋はニヤリと口角を上げた。

練習を重ねるごとに隊員たちの技術は確実に上昇していた。自動車科チームも美術部チームも、各々が最大限に努力し、創意工夫でじゃじゃ馬を乗りこなそうとしていた。「……何描いてるの?」

「あら、隊長。描いている……というほど大したものではありません。ただの落書きですから」

あはは、と笑ってみせる彼女、巖島 花凜の手元にあるスケッチブックには、得体の知れぬ混沌が広がっていた。

「これは抽象画と言ってますね、何かを具体的に描いたわけではない絵画なんです。心象世界をそのままキャンバスに書き写すような絵画です」

よく見るとそれは、幾何学的模様をいくつも積み重ねたような精緻な絵画であり、何度も何度も上塗りを重ねられて、炭素で黒く染まった部分にもうつすらと模様の影が見える。

「戦車に刺激を求めてこの部に入部しましたが、戦車も戦車で楽しいものですね」

最初彼女たち美術部が兼部の申し込みをしてきたときには心底驚いた。皆大人しそうで、戦車とは無縁の雰囲気だったからだ。実際無縁だったようで、入部理由は『自分の芸術に刺激が欲しかった』だそうだ。

「……私が今までその抽象画の良さを知らなかったように、まだ知らない刺激がいつばいあるってことですな」

「ええ。自分の知らない自分。誰も知らない自分。一番近くにありながら、一番見えにくいものですな」

「灯台下暗し、ですか」

とりとめのない話をしていると、グラウンドの奥の人工林から戦車のエンジン音。甲高い音を立てるV型12気筒のガソリンエンジン音はじわじわと近づき、林から飛び出した。

草木をまき散らしながらグラウンドに現れたのは、我が校待望の重戦車、T29重戦車だ。キューポラから顔を出す瀬玲奈さんが停車の号令をかける。揺動が収まり105mmの主砲が飛鳥さんの操作により火を噴く。我が校における最大火力である105mm砲は、グラウンドの端に置かれたターゲットを木っ端微塵に粉碎した。

「……流石。カタログ値はティーガーIIより上だからね」

装甲・走行性能・火力。全てにおいてティーガーIIを上回るためにアメリカが開発し

た本気の重戦車は、本当にティーガーIIを凌駕した。しかしパーシングと同じく戦場には間に合わず、導入される前に陳腐化してしまった悲運の戦車でもある。

『どうです隊長!見えました?』

「うん、見えたよ。その感じで本番も出来れば文句なしです」

そもそも重戦車はあんなに走り回って撃つ車両ではない。T29は特にそうで、とんでもなく砲塔が頑強なため、砲塔だけを出して停車したまま真つ向から撃ち合うのがベストではないかと考える。

「……この感じなら、心配いらなかな」

私のビジョンは、既に練習試合でなく、全国大会へと進んでいた。

7月上旬。大洗の奮闘をキツカケに参加者の増えた全国大会は、必然的に地区予選を開催することとなった。

そんな地区予選、中国大会での出来事である。

『中央、突破されます!』

「何としても阻止して!じゃないと...!」

『こちらIS-3!左右履帯破損!移動不能!』

「...くっ...」

越前 紀伊は歯噛みした。自らを圧倒する敵に。そして、自らの不甲斐なさに。

『こちら中央集団!敵に突破されました...きやつ!』

垂直に切り立った、それでいて頑強な装甲を持つ駆逐戦車隊が、こちらの主力部隊:

IS-3やSU-152、T-34/85などを含むそれを突破、遊撃部隊を突入させ前後から袋叩きにされみるみる数を減らしていく。

救援に向かう私のT-44も、もはや間に合わないのは目に見えていた。

諦めかけた紀伊の前に現れたのは、壁。異形の戦車がこちらを見つめていた。その超大口径の砲で。

「...お姉ちゃん...」

吹き飛ばされたフラッグ車から上がった白旗が、無慈悲にも戦練専の敗北を告げたの

だ
っ
た。

デルタ攻略戦です！

萩市街地。風情ある白壁の城下町は、最近になって世界遺産に登録された。そんな萩市街地の中心にある中央公園で、私たちは練習試合の相手を待っていた。

「相手はどんな戦車を持つてると思う？」

「トウラーン、トルデイ、ズリーニイは確定ですかね」

「でもその3両もバージョンによって戦闘力が全然違うからね… トウラーンⅢ、トルデイⅢ、ズリーニイが脅威かな」

相手は今まで一度も公式戦に出たことがない新興校だ。それ故に編成が全く分からず対策に苦労している。幹葉さんが例に挙げた3両はそれぞれのバリエーション車両の中で最も高い対戦車攻撃能力を持ち、油断ならない戦闘力を秘めている。装甲こそ薄めであるが、それでもあの足回りと火力は十分に脅威だ。

「…あ、来ましたよ」

中央公園に乗り入れてきたのは、水色の乗用車、スズキ・ビターラだ。日本ではエスクードの名で販売されるこのSUVはスズキのハンガリー現地法人、マジヤールスズキが生産し、スズキが輸入したものである。

そんな水色のビターラから降りたのは、健康的に日焼けしたボーイッシュな少女と、対照的に雪のように白い少女だ。水産学校であるためか、パンツァージャケットはセーラーを模したもののようだ。

「今日は練習試合を受けていただいてありがとうございます。バラトン水産隊長の北島千尋です」

「三城です。今日はよろしくお願いします」

その小麦色の手を取って握手する。手のひらに感じるザラつとした感触は、彼女の手のひらにできているマメだろう。そこから彼女が真つ直ぐで、努力家なのだと判断した。

「今日の練習試合で、三城さんの技術を少しでも吸収出来るよう頑張ります!」
「そうですね。お互いのいいところを盗み、悪いところを正していきましょう」
そう返すと、彼女はぱあっと明るい笑顔を見せて、「はい!」と返事をした。

「ここは一度、ブリ校との練習試合で使ったことがありましたよね」

華蘭さんの一言。私が隊長になって初めての試合、私立ブリテン高校との練習試合で萩市街地を使用したことがあった。あの時は街の真ん中に位置する中央公園を挟んでの交戦から、敵隊長車のブラックプリンスとの一騎打ちで決着がついた。

「だけど、今回は敵の数も多いし、編成も分からない。偵察から始めないと」

敵の情報がほぼ無い今回の試合。下手に序盤から攻めに回ると痛い目を見る。幸いこちらは高速車両が多数いる。戦力を均等にバラけさせて、ステージをくまなく偵察しておきたいところだ。

空に赤い花が咲く。信号弾の炸裂をもって試合がスタートとなる。

「バンツァー・フオー戦車前進！」

戦車前進の号令を合図に、7両の戦車が砂を踏みしめスタートする。そのうちレオパルト、クロムウエル、クルセイダー、そしてケヌ車が隊列を飛び出して各々に散っていく。

「おお、練習の成果出てるじゃん」

日本戦車に共通する操縦の難しさから最初は車両が壊れんばかりの異音を上げていた美術部チームのケヌ車だが、今はスムーズに速度を上げていつている。これも彼女たちの猛練習の賜物だ。

「偵察車両各車は、各持ち場に到着次第偵察を開始してください。安全を最優先に」
『了解！』

指月山を背にする菊ヶ浜を飛び出した瞬足の戦車たちは様々な方面へと別れて偵察を開始する。

そのうちの1両、深緑、緑、黄土色の3色で構成される迷彩を纏った小さな戦車。美術部チームの乗り込むケヌ車だ。

「私たちの任務は偵察、そして最前衛車両の援護です。あまり無理はせずにいきましょう」

操縦手にそう伝えて、自身はハッチを開いて身を乗り出す。新鮮な空気をうんと吸い込んで、その柔和な印象を与えるタレ目で前を見つめた。

萩市街地は、日本海に面する三角州を中心に成り立つ街だ。ざっくりと構造を説明するなら、北は海。三角州は古い町並みの残る城下町、その東は比較的平坦で新たに開発された場所が多く、西は比較的開発が進んでおらず田畑などの開けた場所が多い。

ケヌ車はそのうち西側の最も北を走行中であつた。敵から最も遠いこの位置は隊長からの指定であり、恐らく経験の浅い私たちをじっくりと戦闘に慣れさせるための配置だろうと思えた。

「先行の松岡さん。状況はどうなつてらっしゃいますか？」

『まだ敵は見えな…。敵発見！2両！』

どうやら接敵しようだ。

『編成を教えてください！』

隊長の声。敵の偵察部隊の車種を知っておきたい。まあ当然のことだ。

『トルディⅢと、アンサルドです！』

ハンガリーの主力軽戦車トルディの最終系、トルディⅢと、イタリアのCV35を輸入し改良を加えた豆戦車、35Mアンサルド。どちらも高速だが火力には難のある戦車であつた。

『：：了解しました。出来ればそこで仕留めてください。深追いはしないように』

『了解！』

私たちが走つてきた山陰本線沿線の県道64号と、国道262号が交差する地点で、レオパルトは敵と交戦を開始していた。

「止めて。停止射撃で確実にいきましよう」

262を萩市街地に向かつて走る2両の前に、レオパルトが飛び出して交戦が開始する。

流星は機動戦を得意とする源流直伝の高速戦闘術である。2両を相手取りながらもそれを圧倒する立ち回り。操縦手もそうであるが車長の判断力は凄まじいものがあるだろう。

しかし、そうは言っても2対1では分が悪い。相手の攻撃は当たっていないが攻撃のチャンスもない。こちらからの援護が必要だろう。

「援護するわ。どちらから狙えばいいかしら」

『あ、ありがとう。じゃあトルデイを狙ってくれるかな』

「わかった。あまり期待はしないでいてね…温存しても仕方ないし、初っ端から使っちゃおうか」

手に取ったのは成形炸薬弾『夕弾』。正確には『夕弾のスペックを忠実に再現した連盟指定の実弾』であるが、まあそんな細かい事はどうでもいい。この近からず遠からずの距離なら、夕弾の効果が弱まる高速で着弾することもあるまい。

絵しか描いてこなかった手にはずっしりと重い弾を砲に込める。閉鎖機の閉まる音が、発射可能な合図になる。

照準器に額を押し当て、敵をしつかりと照準する。狙うはどことなくチェコの香り漂

う軽戦車だ。

拳銃のような乾いた音とともに夕弾が発射される。我ながら良い狙いだ……と思つたのだが。

レオパルトとの衝突を回避しようとしたトルデイは、予想外に急制動と急旋回を行った。虚空を打ち抜いた夕弾は、そのまま向かいの店舗の看板に突き刺さった。

「あ、あわわ……こ、後退！」

ケヌ車は装甲が薄い。存在を知られたからにはここに居続けるのは危険。そう判断したが。

『敵が撤退を始めました！どうやら262を使つての侵入は諦めたかと』

「……ほつ。助かりました」

悲劇の初被撃破を免れ、ひとまず胸をなでおろした。

「んー……大丈夫なのかなあ」

『大丈夫なんじゃないかな?それより早く行かないと。陽動部隊が目を引いてくれているとはいえ、もう撤退しちゃったからすぐに来るよ』

「分かつてる。じゃあ行こう。ゆーちゃん、先頭お願い」

『分かつてるよ』

三角州を成す二つの川のうち西側の川、橋本川。阿武川から分岐した直後にある固定堰のすぐ下流側。すなわち水の少ないコンクリート舗装の部分を、バラトン水産の主力部隊は進んでいた。今発見されたら大惨事に成りかねないが、そもそも橋を渡つても結果は同じだ。

さらさらと流れる清流を、12両の鉄馬が進行する。かなり水深が浅いため流されるだとか立ち往生だとかの心配こそないが、これほど堂々と渡っているのだから発見される心配が大きい。

：：： 心臓が弾けんばかりに緊張した川渡りだが、何とか発見されずに市街地に侵入することができた。

「：：： じゃあ、後は予定通りにいこう」

大まかなプランは考えていた。本当にプラン通りに行けば勝利は間近なのだ。

「：：： まあ、そんなに甘くはないだろうけど」

そのくらい分かつてる。たとえ後手後手に回ってくれたとしても、対等くらいまでは挽回されてしまうだろう。

「…と、ともかく。せっかく優勢が取れたんだ。上手く使わないとね」

今はともかく、敵の発見と撃破だ。青い旗のたなびくトゥラインⅢのキューポラから身を乗り出して、索敵を始めるのだった。

フラッグ車であるパンターは、比較的後ろに陣取って偵察部隊からの情報を待つていた。

「…しかしだ。」

「…おかしいな」

連絡がない。つまりは発見していないということだ。

『あー、こちら山猫。偵察車は敵スタート地点にて全車合流しました』

「…え？」

『敵がいなくていいことは、もしかして…』

… ！
… ！
… ！
… ！
… ！

「ぜ、全速で戻ってきてください！」

『了解！』

まずい。今三角州の中にいるのは私たち虎さんとクジラさん、そしてT29だけなのだ。

「ともかく移動します！もっと支援の受けやすい場所に…！」

今いる萩東中学校の施設内から出て、支援の受けやすい南側の川岸にたどり着いた
い。

しかし。

『敵です！6両！』

出口付近に陣取る自動車科チームからの連絡である。

「車種は？」

『トウラインⅡ3両、Ⅳ号H型2両、Ⅲ号J型1両！』

グラウンドのネットのむこう、確かにシユルツェンを装備したトウラインⅡ、砲塔の

みシユルツエンを巻いたIV号H型、そしてIII号がいた。

「とりあえずそのまま交戦を開始してください」

『了解。足止めでもいいの?』

「いえ、撃破を目指してください」

『わかったよ』

しっかりとボディを隠していたT29が、重苦しいエンジン音を響かせてのそつと動く。その大きさといい音といい動きといい、圧力をかけるにはかなり適した戦車である。

それに、その性能は圧倒的。いくらハンガリー戦車が弱くはないとはいえ、ドイツの猛獣をも退けるこの重戦車を相手取れる車両など有りはしないのだ。

105mm砲が火を噴く。最前衛を進んでいたトゥランIIが打ち抜かれ、大きく吹き飛ばされる。

それを見た敵は焦ってか散り散りになる。そこをIV突とパンターで攻撃。75mm砲の連撃は、III号とIV号1両を仕留めた。

流石にこのままではまずいと分かったのだろう、敵部隊はそのまま撤退していった。

「……動きまじょうか。ここじゃ危ないですし」

萩東中学を出て、北へ。目標地点はそう遠くない、灯台のモニュメントが目立つ飲食

店だ。

「あちゃー、やられちゃったかあ…」

『当たり前だよ。相手にT29がいるって情報は掴んでたじゃない』

鼻屑にしてもらっている港の運送業のお兄さんが言っていた。頭でつかちな戦車を運び込んでる船がいたというウワサ。

「…ま、これで多少警戒を促すことはできたね。まずは…」

我ながら、今は怖い笑顔を見せていると思う。楽しくて、楽しくて、仕方がない。

「その頭でつかちをいただいちやおう」

クロスカウンターです！

「兎に角、建物を背に防衛戦を展開して、敵を逆に挟み撃ちにできればベストかな」

国道191号を北へ進むアウトバーンの戦車隊。灯台のモチーフが特徴的な飲食店『萩心海』の駐車場を目指していた。

T29を先頭に弘法寺前交差点に差し掛かった時、左方向：：西側の通りに敵を発見した。

『敵発見！トウラーンⅢとⅢ突です！』

「出たな、フラッグ：：！交戦します、地下道の陰に」

地下道入口の陰に車体を隠し、T29の頑強な砲塔のみを露出させる。敵のトウラーンⅢとⅢ突も、同じようにホテルの陰に身を隠して射撃体勢を取った。

「砲撃開始！」

互いの砲が火を噴く。相手の砲弾はT29の砲塔に難なく弾かれ、こちらの砲撃はホテルの壁面に大穴を穿つ。T29が少し下がり、パンターとⅣ突も同じように砲撃を行う。

：しばらく砲撃の応酬が繰り返された。互いに素晴らしい対戦車攻撃力を持ちながら、防御姿勢を崩す事が出来ずに決定打が打てない。

その時だった。

敵車両が居座るホテル前の交差点よりひとつ前の交差点……私たちのすぐ目の前から、1両の戦車が飛び出してきた。

カラーは敵のトゥラン等と同じ深緑。切り立った正面装甲と防盾、長く延びる砲身、大柄な車体と幅広の履帯。

「ティ：： ティーガー：：！」

ドイツの猛虎、ティーガーI。装甲・火力ともに申し分なし。その割に走行性能も高く、様々な国の兵士を阿鼻叫喚に陥れた強力な重戦車である。

ちょうどT29はトゥランに対して砲撃を行った直後であった。装填手も全力で装填するが、105mmの砲弾はそう簡単には装填できない。半ばドリフトするようにこちらに接近してきたティーガーIは、IV突の至近での砲撃を躲しT29に肉薄。その

アハト・アハトを喉元に突きつけた。

炸裂音、そして白旗。T29重戦車はその火力の代償を支払うこととなったのだつた。

『よっし、うまくいったよちーちゃん』

こちらもうちはしていられない。前進して、敵偵察部隊が帰ってくる前にケリをつけたいところだ。

「行くよ、前進一杯！遊撃隊及び支援部隊は頭を押さえる用意を」

『了解！』

火力支援につけていたⅢ突は離脱して支援部隊と合流させる。こちらはゆーちゃん、のティーガーと合流し敵フラッグを叩く。追いかけて追いかけて、味方支援部隊の網の中に追い込む。

『定置網作戦』行くよ！」

状況は優勢。このまま数的有利を活かして押し込めればベストだ。

アウトバーンの偵察部隊は、集合して三角州の西側を走行中だった。

「早く援護に行かないと……何処から侵入しようか」

「262は多分警戒されていますよね。一番北側なんてどうでしょうか」

最も北側に位置する橋は、河口にかかっているため最も長い。しかしながらこちらの開始地点方面の奥深くであるため、敵が陣取っている可能性は薄いだろう。

「おっけー。じゃあそうしよう」

偵察部隊長を任された寿璃さんの指揮で、偵察車は北へと走る。窮地に陥ったフラッグを救援できるのは、私たちしかない。

IV突とパンターは広い中心市街での戦闘を避け、味方偵察部隊との合流を迅速にすべく北側への退避を目指した。

「何とかして合流しないと、この状態は……」

まずい。まずすぎる。後ろから迫るのはこちらと同等の機動力を持つトゥラインIII、足こそ及ばないが装甲と火力で溝を開けられているティーガーI、それにIII突。こちらの背面装甲など有って無いような物。どの車両の砲撃でも貫徹されてしまうだろう。

「フラッグ、次右折します。クジラさんは次の路地右折」

『了解』

2両を別々に動かすことでこちらの動きを読みにくくする。『もしかしたら』の可能性を増やすことで、敵の作戦行動の自由を奪うのだ。

「でも……市街地に入ると待ち伏せされる危険性が高まります。相手の支援部隊は全車両健在ですから……」

「それでも、だだっ広い場所を進むよりはマシだよ。数的不利はこつちのほうが和らぐ」
白壁の町並みに、ジャーマングレーの戦車が2両進入していく。それにオリーブ色の戦車たちが続いた。

変な気配だ。川沿いを北側に全速で進む偵察部隊に対して、一切の妨害が加わらない。

「……考え過ぎか」

どう考えても、今市街地に戦力を集中投入し、一気に決める方が現実的だ。

「こちら偵察部隊、北端に到着。敵影は無し」

『了解！十分に警戒しつつ、三角州へと移動してくださいー！』

北端の橋は、河口にかかっている分ほかと比べて長い。身を晒す時間が長くなるのは喜ばしくないが……

「行かなきゃ仕方ないよね」

レオパルトを先頭に戦隊がゆっくりと移動を開始したときのこと。

轟音。煙とアスファルトの破片が、砲撃を受けていることを瞬時に理解させた。

「対岸に敵影！数は少なくとも3以上！」

着弾はほぼ同時に3発。そしてすぐさまもう3発、後方より撃ち込まれた。

『後方に敵！トルデイII a、トルデイIII、35Mです！』

「挟まれた!？」

攻撃を行ってこなかったのはこの決定的チャンスを得るため。もはや偵察部隊は絶体絶命であった。

『松岡さん!?!どうしますの!?!』

「く……っ、このまま橋を突破します！全車、全速前進！」

無謀だった。しかし、今は1分、1秒でも早く市街地に戦力を届ける必要がある。それほどに切迫した状況に陥っていた。

各車、陣形を無視して最大速で橋へとなだれ込んでいく。

レオパルトの隣で、クロムウエルが被弾。黒煙を吐いて走行不能となる。

そして同じようにケヌ車も被弾。欄干に衝突して停車した。

之字運動をしながら尚も走るレオパルトとクルセイダー。その2両だけは、奇跡的に敵の包囲網を突破することに成功した。敵の練度があまり高くないこともあるが、むしろ運の要素がデカいだろう。

「こちら偵察部隊！北端の敵布陣を突破！今から援護に向かいます！」

『了解！こちらでもここでカタをつけます、指示通りに動いてください！』

音が聞こえる。この角に…

炸裂音。75mm砲を得物とするズリーニイの砲撃は、すんでのところで急制動をかけたパンターの正面装甲を舐める。そして後方から来たクルセイダーがそれを撃ち抜いた。

「ナイス海荷! その調子でお願い!」

『任せてください。まだまだ…!』

市街地を、互いに連携しつつ走り抜ける。時間はあまりない。敵の駆逐戦車隊が再び体勢を整える前に決める必要がある。

「フラッグを囲にします。IV突はパンターの後ろに、レオパルトは敵駆逐戦車隊に陽動をかけてください!」

『了解!』

「『クロスカウンター作戦』展開します!」

その頃、バラトン水産フラッグ車も、似たようなことを考えていた。

あくまでも練習試合。勝ちにこだわるならもつとやりようはあるが、試してみたいことがあった。

自らの作戦や、それを遂行する技量。それを試してみたかった。

「…やるよ、ゆーちゃん！」

「うん、行こう、ちーちゃん」

トウラーンとティーガーが、戦列を離れて2両で敵の追撃に向かう。勝負の行方が決まる、最後の決戦に…

勝負の舞台に選んだのは、すぐそばの一本道。あまり逃げ惑っていても敵に時間を与えるだけだし、ここでも『クロスカウンター作戦』は十分に実行できる。

道路のど真ん中に停車したパンター。その目の前にトゥラインIIIがやってくる。相手の思惑は分からない。しかし、相手もこちらと同じことを考えているのなら――

「撃て!!」

先に号令をかけたのは私だった。パンターの75mm砲が火を噴く。必殺の凶弾は寸分の狂いもなくトゥラインに吸い込まれて…

路地から現れた巨体に弾かれる。ティーガーIだ。そしてティーガーIが放つ88mmの砲弾もまた、パンターを正確無比に照準していた。

しかしそれは、路地から飛び出してきたクルセイダーに当たる。当然だが、クルセイダーからは白煙と白旗…。しかし、ここでひとつ誤算があった。

「これは…煙幕!?!」

クルセイダーに撃ち込まれた砲弾は、煙幕弾であった。たちまち視界を奪われる。何か、来る……！

「いつけええええええええッ！」

オリーブ色の車体が飛び出してきたのは、すぐのことだった。75mmの長砲身をしっかりとパンターの脇腹につきつけている。

北島さんの顔に笑みが浮かぶ。この勝負、勝った、と――

しかしそれはまた、私も同じだった。

「勝つのは、私だ！」

トウラインが砲弾を放つ寸前。後方に隠れていたIV突が、その75mm砲で敵の正面を貫き、白旗が上がる。

『バラトン水産技術学院、トウラインⅢ、走行不能。よって、アウトバーン女子学院の勝

激闘！試錐学園！

試合の余韻です！／ 始動！試錐戦車隊です！

「いやあ…：負けちゃいましたか…：」

照れるように頭をかく北島さんに、私はついつい笑いがこぼれた。

「もう少しで負けちゃうところでした。途中まではされるがままな感じで」

実際、後手後手に回った私たちは綺麗に分断され、合流も多数の犠牲のもとになんとかしたのであって、とても成功と言える結果ではなかった。

相手の作戦はほぼ完璧に決まっていた。最後の直接対決は、きつと本人がやりたかっただけだろう。あのまま大部隊で押しつぶされていたらこちらに勝ち目はほぼ無かった。

「ところで、最初の展開の時…：どうやって三角州まで入ってきたんですか？橋はだいたい抑えてたはずなんですけど」

「ああ、アレは川の浅い部分を通ったんですよ。堰の直後のところですね」

「あ…：成る程。ちよつと考えが及んでなかったですね」

市街地は確認すべきところがいくつもある。今回の序盤の失敗は、私の事前偵察が不

足していたためだ。

「でもまあ、概ねいい感じでしたよ。私が言うことは特にはないです」

アドバイスを、と言われていたので、上から目線ながらキチンと伝えておく。そこらへんのチームの隊長よりはしつかりした作戦が展開出来ているようだ。

「：：：そうですか!ありがとうございます!」

満足げな表情。ともかく、彼女は今後の経験で優秀な隊長になることは間違いなかった。

「また、練習試合よろしくお願いします!」

深々と頭を下げる北島さん。そしてピタラに乗り込んで、自らの学園艦へと帰っていった。

「：：：私も、帰って反省会だなあ」

1週間の時が経った。

「…えっ?」

図書室で、私は驚きの声を上げていた。読んでいるのは、戦車道を専門に扱う新聞『パ
ンツアーウィークリー』、その地方紙であった。

「どうしました?」

後ろからひよこつと顔を出して覗く華蘭さん。そして彼女も驚いたような表情をし
た。

「…戦練專が、負けた…?」

大幅な戦力増強を図り、全国大会への出場を目論んでいた戦練專が、中国地方予選で
まさかの敗退。社会人チームとも真つ向から戦えるような戦力の彼女たちを破った
チームは…

「.: 試錐学園.: !」

地方大会優勝校は、私立試錐学園。私のライバルである越前カンナ.: もといパイルが隊長を務めるチームだ。

「なににな.: 試錐学園は、重駆逐戦車を中心とした主力部隊で敵重戦車部隊を突破、中戦車を中心とした遊撃部隊で敵陣をかき回し、一方的な勝利を挙げた.: !」

ドイツ軍の浸透戦術にも似た戦法だ。重駆逐戦車部隊で敵主力を正面から突き崩し突入、砲塔を持たない重駆逐戦車に代わり高機動の中戦車が背面をとって蹂躪していくということだろう。

「えげつないですねえ.: お金と整備力あってこそその戦術というか」

「重駆逐戦車っていうとヤークトティーガーとかだよ。すごい予算なんだろうなあ.:」

驚くのはそこか、といった感じだが、実際ヤークトティーガーとなると車体価格だけでなく、整備費用、弾薬費、燃料費などもバカにならない。それを運用しているのは全国でも限られた高校だけだ。

「それも『部隊』ですから.: 一杯いるんですかね」

「.: だよ。今年の戦練専って確か、IS-3が2両とIS-2が2両いたよね」

確か編成は、IS—3×2、IS—2×2、T—44—100×2、BT—7×3、ISU—152×1、SU—152×1、SU—100×2、T—34—85×2だったはずだ。プラウダよりも強力であろうこの布陣。たとえ主力を突破しても、残存もかなりの戦力だ。

「うーん…」

唸っていると、カバンの中でマナーモードのスマートフォンが鳴動していることに気がついた。私は図書室を出て廊下で電話を取った。

「はい、三城です」

『もしもし？私、パイルだけど』

パイル。試錐の隊長だ。彼女もパイルと名乗ることには随分慣れたようだ。

『結果、見てくれた？私もクチだけじゃないってこと、分かったでしょ？』

「うん。正直想像以上だった。でもどうしたの？まさか自慢したいだけじゃないでしょ？」

『当たり前よ。今日はアナタに練習試合の申し込みがしくて電話したの』

練習試合…！あの戦練専を一方的に弄んだ試錐学園と…？

『こっちは全国大会を見据えて20両を投入するわ。そっちはそっちでなんとかしなさい』

「…勝負はいつがいい?」

『そっちに合わせるわ。全国大会より前でお願いなね』

「わかった。また日程は追って連絡するよ」

そう言つて電話を切つた。

「…大変なことになった…!」

ガレージに車長だけを集めて、今後について話し合いの場を設けた。

「試錐と練習試合をすると、流石にウチの戦車だけじゃきついよね」

相手は20両。それも強力な車両に精鋭の部隊を乗せてくる。対するこちらは今度

バラトンから受け取る1両を含めても8両だ。

「流石に20対8は厳しいね……大洗じゃあるまいし」

西住みほなら、こんな時でも勝つてしまおうだろう。だけど私は部隊の指揮に慣れてないし……

「だったら、バラトンの人に救援してもらったらどうですか？」

茜ちゃんの一言。しかしそれは、非常に的を射た的確な意見だと言えた。

『それだ！』

後日。アウトバーン学園艦は徳山港に入港。バラトンとの取引に臨む。

横並びに停泊しているバラトンの学園艦から、1両の戦車が降りてきた。それは非常に見覚えのある戦車であったが、同時に少々違和感を覚えるものだった。

「……あれ、T-34ですかね？」

「ですね。でもあれは、57mm砲搭載のT-34-57ですね」

長砲身の高初速砲、ZIS-4を搭載した高火力版T-34。若干装甲厚の面で後期のT-34には劣るものの、総合性能としてはかなりのものだ。

「お久しぶりです、三城さん。頼まれてたモノ持つてきましたよ」

「久しぶりです。これはまた、いいモノを」

「いえいえ。確かに強いですが、上層部のポリシーにそぐわないみたいで、結局使えませんから」

ハンガリー所属の学園艦だから、戦車もハンガリー。まあわからないこともない。

「ちよつとお話したいことがあるんですけど。立ち話も何ですし、ちよつと寄つて行きませんか?」

「?..?はい、では喜んで」

私の誘いに北島さんは笑顔で答えてくれた。

コトン、とカップの置かれる音。漂うコーヒートの香りが、ここがカフェであることを示していた。

「… はあ、試錐学園と、ですか」

「はい。一応妹に連絡してはみたんですけど、モニュメントバレーは今年に一回のアメリカ帰港の時らしくて」

モニュメントバレー学園艦は、アメリカのとある州と企業の協賛により建造された。運営もまたしかりだ。故に学校施設は福岡県に持つものの、母港そのものはアメリカ西海岸にある。

「… そういうことなら、我々も当分は日本近海にいるので… 私たちでいいなら、お力になりますよ」

その瞳と声音は、以前の彼女よりも少し自信に満ちているように感じた。この前の練習試合で自信をつけたのだろうか。何にせよ、協力してくれるとのことでは良かった。

「練習試合の日取りですか？ お客様」

私たち隊長二人が注文していたパンケーキ2皿と一緒に、一冊のファイルを机に置いた女性。長い長い黒髪を高い位置でまとめた彼女は、私にとってかなり信頼の置ける先輩である人だ。

「ありがとうございます、会長… じゃないや、花夏さん」

「別に『マスター』でもいいよ？」

今年の春にアウトバーン校を卒業し、この喫茶店を開いた元生徒会長、樹本 花夏さ

んだ。アウトバーン戦車隊を事務面で牽引し、上層部から予算を引きずり出し、試合の日程を組み、と陰の立役者として頑張ってくれていた。

「…とここでこのファイルは？」

「試錐学園と試合するって聞いてね。お客さんの入ってなかった時間を使ってまとめておいてあげたわ」

「ぱらぱらとめくると、そこには様々な車両データや戦術データ、他にも乗員のプロフィールなどが書かれている。」

「試錐の隊長は三城さんのライバルに当たる子なのね。となると、一段と負けられないんじゃない？」

「そうですね。練習試合とはいえ、負けたくない相手です」

「へへ… 試錐の隊長さんとはそんな関係性があつたんですねえ」

北島さんはナイフとフォークを上手く使い、パンケーキにバナラアイスを乗せて一口。その甘さと冷たさに頬をとろけさせている。

「読めばわかると思うけど… 正直、戦練専よりも無茶苦茶な編成よ。まともにやってちゃ勝てない」

もう一度、車両編成の欄をくまなく読んでみる。そこには予想通り、ヤークトティガーやエレファントなどの重戦車。それだけでなく、T-34-85やT-44-10

0など、遊撃部隊であろう中戦車も多数描かれていた。

「そうですね。： ヤークトティーガー1両仕留めるだけで、普通なら2両くらいは割かないといけないですし」

頭を回すために、まずは糖分摂取だ。パンケーキを口に運ぶと、生地の甘味と、それを引き立てるメープルシロップ。そしてそれらをまとめて引き締めるバナラアイスの相性が最高で、目の前で北島さんがしているのと同じような、蕩けた顔になってしまう。：ま、そこんところは私が考えることでもないし。頑張つてね」

一応客である私たちにペこりとお辞儀をして、花夏さんはカウンターへと戻っていった。

それから私たちは1時間半程作戦を悩みに悩み、具体的な策を見いだせないまま店を出た。

「北島さん、今日はありがとうございました」

「いえ、こちらこそ。あと、私のことは是非『千尋』って呼んでください。そっちのほう
が私もやりやすいです」

「…はい。またよろしくお願いします、千尋さん」

学園艦専用の超大型移動棧橋の向かいに停泊しているバラトン水産学園艦へと迎え
のビターラに乗り帰ろうとする千尋さんに、私は大きく手を振った。

彼女はそれに答えるようにドアから体を乗り出して手を振り、最後には海軍式の敬礼
をした。

… 試合は2週間後の日曜日。とにかく乗員の鍛錬が最優先事項だ。

強い日差しが照りつけるグラウンド。ここでは新たにアウトバーン戦車隊に加わっ
た車両がくつきりと履帯痕を刻み込んでいた。

「：： いい感じですね、操縦も砲撃も、上手いですよ」

T-34-57に乗り込むのは、私たちが現に着ているパンツァージャケットのデザイン・制作も担当した被服科の学生で構成される、被服科チームだ。

『そうですか？でも、まだまだですよね？』

「はい。言ってしまうばまだまだですね。次は演習場で移動目標の偏差射撃を練習しましょうか」

『はいー』

車長を務めるのは、被服科のエース的デザイナーである羽織さんだ。おしとやかで冷静、それでいて向上心を持った非常に優れた乗員である。

彼女たちの練習に付き合うべく、私たち虎さんチームもパンターを発進させる。

「：： どこまで練度を上げられるかなあ」

正直不安だ。だが、やれるだけのことをやるしかない。

この戦い。利益云々ではなく、ただただ負けたくなかった。

鉄と油の匂い。金属の擦れ合う音や、ハンマーで鉄を叩く音の響く工業地帯。

サビとオイルの茶色にまみれたこの空間こそが、試錐学園の学園艦であった。その中でも労働区画であるここ一帯は、この薄暗さから治安が非常に悪い。

そこを軽快な音と共にゆつくりと走るのは、試錐学園の隊長車、同時にフラッグ車であるT-44-100中戦車。このクラスのサイズでこの足回り、そしてこの火力。T-44の車長であるパイルは、時に失敗作と言われることもあるこの戦車を気に入っていた。

確かにこの戦闘力はセンチリオンでも手に入る。しかし、この手のひらに収まるかのようなフィット感。ずっと乗ってきたT-34系列の車両によく似ているからだろうか。一度センチリオンやコメットに乗ったときには感じなかった、愛着のようなものをT-44からは感じているのだ。

少し進んだところで、T-44は進む足を止めた。そこは路地裏の倉庫の前だ。ここで、試錐学園が全国大会に投入する2両の戦車の組立が進んでいるところだ。

飛散したオイルで汚れ曇ったガラスの扉をスライドして開く。そこでは鉄を叩く音

と裁断、溶接の音。あらゆる音が混在していた。

「…あ、隊長。お疲れ様です」

一人の少女の挨拶に続いて、室内の整備士たちが挨拶してくれる。私はそれに手を挙げて返す。

「お疲れ、ローラ。少し休みなよ」

汗をかいた缶コーラを差し出すと、彼女はそれを受け取った。試錐学園の副隊長にして、整備チームの一員であるローラは、色が抜けたような金髪と少し褐色の肌が特徴の少女だ。どこことなく健康さと不健康さが混在するような風貌は、少し世話を焼いてやりたくなる。

「ありがとうございます。でも、もうちよつとなので」

もうちよつと。その言葉を聞いて、私は戦車に目を向ける。どちらも大型の重戦車である。かたや伝説にして悪夢。連合軍を最期まで苦しめた最強の重戦車。

かたや、幻想にして頂点。これが量産されたあかつきには、それまでの劣勢を跳ね除けるだけの力があつたであろう幻の重戦車だ。

少し小さな方…それでも大きいが…は、砲塔が搭載されていかにも戦車らしい見た目になっていた。少し丸みを帯びた砲塔は、その角ばったボディとはアンバランスに見えて非常に調和のとれた美しいデザイン。

そして大きな方は、まだ砲塔は搭載されていない。丸みを帯びたボディに搭載されるであろう超大型の砲塔は、その横でクレーンに釣り上げられようとしていた。

「… いつごろにはできそう?」

「そうですね。急げば明後日には。どうかされたんですか?」

「… 2週間後、練習試合が決まったわ。それにこの子達を投入する」

「いいんですか? 全国大会を前に手の内をバラしたりしちやつて」

確かにそれも懸念材料だ。しかし、使わないことにはその実力は分からない。それにこの難しい戦車たちの運用法も確立すべきだ。そうでなければ、去年の黒森峰が超重戦車という手に余る怪物を有用に使えぬまま撃破されたように、私たちもこの必殺兵器を満足に使えぬまま敗れることになる。

「いいの。… で、この戦車なんだけど… ローラ、貴女が乗りなさい」

「わ、私ですか?」

彼女には副隊長を任せてはいるものの、いつも重戦車部隊の後方で火力と装甲に任せてじわじわと押しつぶすような戦略をとっているだけだ。砲塔を搭載し、柔軟に動く事が要求される戦車は、戦車道を始めて以来始めての経験なのではないだろうか。

「何事も経験よ。練習試合なんだから」

「… 分かりました。頑張ります」

それだけ言うと、彼女はコーラの缶を机に置いて、また作業に戻った。

「：： 2週間、か」

長いようで、短い。この車両たちを使う上での練習を含めればもうほぼ時間は無いようなものだ。

3年間です！

薄汚れた校舎の中で授業を受ける。工業で生計を立てる学園艦であるためにどこにいても油と鉄の臭いがする。オイルが校舎の白い壁を茶色く汚し、工業排水が用水路の水を濁らせる。

私が来た時から、この船はこの状態であった。治安は悪く、痴漢やひったくりが横行している。戦車道チームのメンバーは顔が知れているし、わざわざ気が強いと言われる戦車乗りにちよっかいをかける阿呆もいないから私たちは安全だけれど……それでも、あまり安心できる場所ではなかった。

……こんなところにやって来たのも、全てはこの時のためだった。
3年前の屈辱を晴らすため、私はもう一度、戦うのだ。

「：： 追撃をかけるわよ！全車両、全速前進！」

戦術的有利を作り上げた、私たち出雲付属戦車隊は、中学校全国戦車道大会、その決勝戦の部隊で、因縁の相手である維新中学をじわじわと追い詰めることが出来ていた。しとしとと降り続いていた雨は止み、川はごうごうと唸りを上げて激しく流れている。そんな川を眼下に望む崖を、維新中学の戦車隊を追って突き進んでいた。

私、越前カンナの乗り込むT-34は、敵のM4シャーマン、そしてM3リーに対し、機動的に大きく有利。追撃戦になれば不利ということもないだろう。

その時、崖の途中にある離合用の待避所で、敵副隊長車であるM3リーがスピンターンでこちらに向き直る。相手は機動戦を得意とする源流。その後継者である三城姉妹の妹の方。あまり相手したくない。

75mm戦車砲から徹甲弾が吐き出される。こちらの戦車はそれに翻弄され、2両を失った。進路上に障害物として残ったT-34の残骸を押しつけるのに手間取った私たちは、敵と少し距離を離されてしまった。

「逃がさないで！榴弾を使って敵の進路を塞ぎなさい！」

私はなりふり構わなくなっていたのだろう。榴弾を用いて地盤の弱った壁面を崩し、障害物として利用しようとした。…結果、それは取り返しつかない事故を招いた。

私の乗るT-34から放たれた榴弾はM3の左方に着弾。崖を抉りとり、副隊長車を崖へと放り出してしまった。

「あつ…！」

まるで時間がスローモーションのようだった。M3は土砂と共に宙に踊り、車長はハッチから投げ出されてしまっている。これでは、助かりようがない…

…しかし私は止まらなかった。ここまでやってしまったのだ。もはや後戻りはできないと自分に言い聞かせ、ここで止まって救援をしたいという欲求を抑え込んだ。それが正しかったのかは、結局今でも分からない。

そして一両を残す維新中学を、私は副隊長車と連携して挟み撃ちにした。これなら逃げ場はない。ここで仕留められると。

しかし彼女は、源流に伝わる『緊急被弾経始術』を用いてこちらの砲弾を弾いてみせた。そして副隊長車を仕留めると、旋回してこちらへと突っ込んでこようとしている。

私は徹甲弾を装填し、照準も半ばに放った。その砲弾はM4シャーマンの砲塔を寸分違わず射抜いた。しかし貫通とはならず、迫り来るM4に為す術もなく、撃破されてし

まったのだった。

衝撃が収まり、煙の中私はT―34を降りた。すると目の前のM4にはぐつたりと項垂れる車長の姿があった。その頭部からは、大凡人間から出るとは思えない量の、血。

「…あ

やってしまった。私は、取り返しのつかないことを。

「…あ、ああ…」

言葉にならない悲鳴が、嗚咽に代わり喉から吐き出される。

「ああ… あああああああ」

私は、尊きものを二つも奪ってしまったのか。

「あああああああああああああああああッ
!!!!!!」

ただ、慟哭することしか出来なかった。声にならぬ声が、私の喉を枯らした。

それからというもの、私を取り巻く環境は一変した。進学が決まっていた戦車道の名門校からは合格を取り消され、戦車道チームの皆からは干されてしまった。行き場を無くした私は、自らの殻に閉じこもり、前に進むでもなく、下がるでもなく。ただ時が経つのを待ち続けていた。

そんな私に入学の話を持ちかけたのが、この試錐学園であった。私に『戦車道をする「権利」』を与え、入学を許してくれたのだ。私にとっては光明であった。殻にひびが入る音。私の心に光が差し込む。

しかし、ただひとつ。私の心には大きなしこりが残ったままだった……

『……おい、越前』

「おい、越前！起きろ！」

「へ？あ、はいっ！」

間抜けな声が出た。正確には寝ていたわけではないのだが、そう見えて致し方ないだろう。

「全く……集中しないと単位落とすぞ、お前そんなに頭良くないんだから」

「はい、すみません……」

この学校、こんな治安だが偏差値は異様に高い。授業スピードは早いし、勉強難しいし…… 3年間付いてこれた事が不思議なくらいだ。

……こここのところ、ずっとこんな感じだ。

集中できない。早く戦車に乗りたい。撃ちたい、走りたい。

「……あと少しだ」

私が高校戦車道を続ける意味。それがようやく現実のものとなろうとしていた。

練習試合の一週間前。アウトバーン女子学院のガレージには、いつもとは違う戦車が8両、露天で駐車されていた。

先日の練習試合でも見た、トゥラーンⅢやティーガーⅠ、トルデイⅢにズリーニイなどの、バラトン水産の戦車隊のものだ。

「いいんですか?一週間もこっちにおいて。授業の方は…」

「大丈夫ですよ。私は遠洋漁業の授業を取ってるので。今は近海での漁業実習なんです」

「海洋技術科は、そもそも単位つてもものも殆ど無いですからね。テストで点取れて、実習も真面目にやっつてれば単位が足りないなんてことはないですよ」

千尋さんと優奈さんが言う。そんなものなのか、と感心しながらも、話を続ける。

「では、これから一週間よろしくお願ひしますね」

試合までは一週間。その間、親睦を深めることでチームワークを磨き、共に練習する

ことでお互いの癖や特徴をつかむ。試合で勝つためには重要な事である。
「はー」

陽が沈み、すっかり暗くなったグラウンド。そこを走り回っているのはトルデイⅢとトルデイⅡa、それを率いるレオパルトだ。偵察部隊として活躍してもらおう予定のこの3両には、より綿密なチームワークを要求することとなるだろう。だからこそ、こうして長い時間戦車に乗ってもらい、互いの癖を掴んで欲しかった。

そんな中、私たちはガレージの中で作戦について話し合っていた。

「相手と真っ向から戦うのはまず不可能と考えていいですかね」

「そうじゃないですかね？ T29はともかく、こっちはタイガーでもきついかと」

T29の装甲なら、ヤークトティーガーと真っ向から殴り合うことも不可能ではないだろう。しかしながら、それ以外の車両は装甲厚が圧倒的に不足しており、殴り合い、というわけにもいかない。

「だったら分断ですかね？相手の戦力が分散すればこちらもやりやすいのでは」

茜ちゃんの発案。しかし私は、その案には賛成しかねた。

「高火力戦車は極力集中運用したいですね。分散してしまうと、敵を撃破できるチャンスが減ります」

ヤークトティーガーやエレファントと真つ向から対峙できるのは、T29ただ1両のみ。となると、こちらは高火力戦車を集中運用することで、撃破されきる前に撃破する事が大前提になるのだろう。

「うーん……」

首をかき上げて悩む隊長二人のもとに、優奈さんがクーラーボックスとお皿を片手に歩み寄ってきた。

「……いらでりフレツシユは、如何ですか？」

クーラーボックスからグラスを取り出して、チリン、と鳴らしてみせる。

「うーん…… じゃあ、お願いしようかな。夏紀さんはどうです？」

「えーと、じゃあ、お言葉に甘えて」

グラスを受け取ると、そこに注がれたのは華やかな香りの漂うシャンパンゴールドの液体。しかし気泡はなく、シャンパンの類ではない。

「……これは？」

「ワイ：：　ンツ、もとい、『大人の白ぶどうジュース』ですね」

苦笑いしながら言う千尋さんは、テイステイングするようにワイ：：　もとい、大人の白ぶどうジュースを口の中で転がした。

「：：　ん、今日のも美味しい！」

「良かった。このぶどうジュースは、バラトン水産のフアクトリーで室内栽培されたブドウを使ってるんです。お魚にはやっぱり、白でしょ？」

そう言われて、私も少し口に含んでみる。華やぐブドウの香りと、心地よい苦味。鼻を抜けるアルコールの香りと共に、私の口腔内は果実の深みで満たされる。

「：：　ホントだ、美味しい」

「で、こつちが肴のアクアパッツアです」

白身魚をオリーブオイルや白ワイン等で煮込んだイタリアンな料理。：：　こう見ると、本当にハンガリーらしき皆無である。まあ、内陸国のハンガリーだ。郷土料理に魚というのもおかしい話だから、仕方ないのだろうか：：　

「これ、優奈さんが？」

「はい。料理、好きなので」

白く長い手は腰の位置で重ねられている。彼女のその淑やかそうな印象そのままの、家庭的な女性のようなようだ。

対する千尋さんは、上品ながらもかなりのスピードでグラスを開けている。

「じゃあ、頂きます」

ナイフとフォークを手に、魚を切り分ける。口に運ぶと、オリーブオイルと白ワインの香りに続いて、しっかりと身の詰まった白身魚の甘味が広がる。

魚と貝から出た出汁とトマトの酸味が交じり合うソースも爽やかながら濃厚な味わいを演出し、2口、3口と食べても飽きが来ない。

「ヒラメを使ってるんですよ。たんぱくで、シンプルな料理にいいんです」

夏のヒラメは身が締まっておらずあまり美味しくないと聞いたことがあるが、そんなことは無さそうだ。甘味も噛みごたえもしつかり感じる。これで美味しくないなら、この世に美味しい魚など殆どいないのではないだろうか。

「ホント… 白ワイ」

「大人の白ぶどうジュースですよ」

「… 大人の白ぶどうジュースと、よく合いますね」

こう、大人の事情的な意味で千尋さんに突っ込まれる。これ言ったら多分ダメなやつ。

「… もう一杯もらえますか？」

「ええ、喜んで。ツマミも必要なら作りますから」

優奈さんが笑顔で白ぶどうジュースを注ぐ。ああ、これは…

それから少しして。私が記憶を失っていたのは言うまでもないだろう。

「ううう、頭がガンガンする…。」

よろよろしながらアパートの階段を降りる。降りた先には、いつものように虎さんチームの面々がいた。

「おはよう…。って、どうしたんですか?」

「顔色悪いよ? 風邪ひいた?」

華蘭さんと琴音さんが心配してくれる。すごく申し訳なくなる。

「昨日調子に乗った結果だよ。すぐ良くなると思うから…。」

「あー… めちゃくちゃ飲まされてたねえ」

「いや、むしろあれは自ら飲んでたんじゃ」

「うっ… その話はやめて…」

あの臭いを思い出しただけでこみ上げるものがある。もちろん食道を通って。

「… とりあえず、栄養ドリンクくらいは飲んでおかないと。早く治してくれないと困りますから」

「… 私、買ってくる」

幹葉さんがとてととコンビニへ走っていく。私は縁石に座り込んで彼女の帰りを待った。

彼女がコンビニから帰ってくると、その手には栄養ドリンクとスポーツドリンク。

「ありがと…」

私は栄養ドリンクを一気に飲み干し、スポーツドリンクで流し込む。

「… ふはっ」

さすがにすぐに生き返る、とはいかないが、少しは楽になったかも知れない。

「全く、飲みなれてもないのに無茶するから…」

完全に呆れられている。仕方ないじゃん、美味しかったんだもん。

… と言うのも恥ずかしく、私は飲み干した二つの容器をゴミ箱に捨てて、足早に学校への道を急いだ。

「… 久しぶり。ってほど久しぶりでもないね」

ガレージに入ると、そこには銀髪を揺らす美穂子さんの姿があった。

「どうしたんですか？何か問題でも…」

「いや。ただ、T-34-57が入ったって聞いたから来ただけ。ついでにエンジンと足回りの点検整備しようかなって」

彼女自身、技師としての技術を持っている。仕事なのだから当然とも思えるが、実は経営者とエンジニアというのは、同じ会社の中でも結構縁遠いものだったりする。

例えば自動車などの販売店では、営業と整備士は基本的に別だ。営業マンも多少の知識は持ち合わせているものの、整備士のように自ら工具を握れる者は少ない。

しかし彼女は、どちらを専門に学んでいたわけでもないというのにこの凄腕っぷり。

「ありがとうございます。お言葉に甘えさせてもらいます」

ソ連車両、とりわけT-34は『ハズレ個体』が多い。元々技術力の低い国で大量生産したものであるし、構造もそこまで簡単という訳ではない。例えば精度のトチ狂った照準器だとか、規定馬力に遠く及ばないエンジンだとか。

戦車道用に販売されている中古戦車は基本的に戦後生産の新型装備に換装されているのだが、このT-34-57に関しては長年学園艦の奥で眠っていたものだと聞いた。もしかしたら旧式のままかも知れない。

「観測系は全入れ替えしました。あとサスペンションから先も全部。それ以外は部品清掃してそのまま組んでるので、ちょっとは問題があるかも。でも、全然実用域ですよ」

千尋さんが言う。彼女も整備に携わったのだろうか。

「：： ちーちゃん何もしてないよね?」

答えは否のようだ。

「：： あ、そういえばさ」

美穂子さんが話を切り出す。

「試錐学園と練習試合するんだってね? あそこは凄いや。正直真つ向からやつちや勝ち目ない」

「： そうですね。重駆逐戦車も中戦車も、冗談抜きにぶっ飛んだ性能ばかりです」とすると美穂子さんは少し天を仰いで考え込むと、少し渋い表情で話し出す。

「： 実はね、『ある車両』を試錐学園に納入したの。公正を期す必要のある立場上、どんな車両かは言えないけど：」

彼女がこう言うほどの車両だ。重駆逐戦車たちより、ヤバイ車両が入ったということだろうか？

「： 一度、見ておくことをオススメするわ」

「： 来ちゃいましたね」

「来ちゃったね」

学園艦の艦内にあるトイレの個室内で着替える二人の女子。

山猫さんチーム車長の松岡寿璃、そしてクジラさんチーム車長の各務原茜。寿璃はいつもの流星を象ったヘアピンを、三日月を象ったものにしてている。茜はグラスコード付きのメガネではなく、ただの黒縁をセレクトしている。

事前に用意し、それっぽくシワと汚れをつけた制服に着替える。ベージュと茶色をメインに、少々ダークな配色のこの制服は、試錐学園の制服であった。

「用意できた?」

「出来ましたよ」

隣同士の個室に入る二人は、タイミングを合わせて個室を出た。

試錐学園。広島県は呉を母港とする大型の学園艦である。工作艦明石を象ったそれは、中小企業を多く載せた工業艦で、様々な港に寄港しては貿易を繰り返す。

二人はそんな油と鉄の臭いの充満する学園艦に潜入してきていた。

「すごい……本当に治安悪いんですね。所詮噂だと思ってました……」

「ホントだね。ひつたくりとか多いってのも分かるよ」

犯罪が多い場所というのはそれ相応の雰囲気がある。薄暗い、汚い、臭いとか色々あるけど、この学園艦はその殆どを兼ね備えているのではないだろうか。

「さつさと偵察済ませて、帰ろう」

「ハイ、そうですね」

じやりじやりと土がむき出しの地面を踏みしめて、見知らぬ土地を歩く。

後ろからエンジン音がして振り向いた。そこにはハッチを開いて走るT—34／7
6。

「ミッ〇ーですね」

「うん危ないからやめとこう」

T—34／76は左右のハッチを開いた状態が夢の国のネズミに見えることからそう言われることがある。そんなハッチから顔を出す少女は、パンツァージャケットを纏っていた。

「…戦車道受講者ですかね？」

「ちよつと、ついていってみる？」

のろのろと進むT—34の後ろに続いて、違和感のないように歩く。

「…なんだか、ドキドキしますね」

「スリリングでいいねえ。嫌いじゃないな」

二人共、こんな危険な行動にもノリ気であった。：：最も、そんな二人だから拔擢されたのだが。

「：：お、学校に入っていくね」

「流石にこれ以上追いかけるのはよくないですね。どこか見やすい位置は：：」

T-34はグラウンドの入口から学校敷地内へと入っていく。私たちは一旦学校を離れてグラウンドが見やすい位置を探した。

「：：あそこの木の上にしよっか」

グラウンドのすぐそばにある大樹である。引つ掛かりが多くて登りやすそうだ。寿璃さんはスイスイと登っていく。私もそれに続いてゆっくりと登る。

「：：ほら、よく見えるよ」

先ほどの角度からでは見えなかった、学校の奥にあるガレージが見える。非常に大きい。

「情報通りの戦車がいっぱいだよ。ヤークトティーガーに、エレファント：：。T-44—100もいる」

「情報にない戦車も多々いますね。パンターと…あれは、クロムウエルですか？」
角ばった車体。形状的には確かにクロムウエルに近いが、この車両はクロムウエルではない。

「…コメットだね。コメット巡航戦車」

端的に言うなら、約60km/hで移動する17ポンド砲だ。驚異でない訳が無い。

今から練習の時間なのだろうか、ガレージからは車両が何両も出てくる。

「…お、ティーガーIIがいるよ」

「ポルシェ砲塔ですね。ヘンシエルの方が全然強いのに、何ですかね」

若干投影面積が少ないだろうか？それでもあまり変わりはない。装甲厚は減るし、シヨットトラップは生むし…あまりいい事はない。

だいたい車両は出揃ったようだ。ヤークトティーガーは3両、エレファントが2両。ティーガーIIは1両、それにヤークトパンターが3両いるようだ。

「うーん…これは何ていうか…」

遊撃部隊と思しき中戦車たちもツワモノぞろいだ。T-44-100が1両。T-34-85が4両。先ほどのコメットは2両で、パンターも2両。そして偵察戦車と思

しきM5軽戦車も発見した。

「こう見ると、だいぶ多国籍ですね」

「試錐学園はいろんな国の港に停泊するからかな?」

ドイツ戦車で構成された主力は、恐らくドイツの重戦車至上主義が試錐学園のスタイルにピッタリハマるからだ。対する遊撃部隊は、足と火力のソ連、速さのイギリス、装甲のドイツといった感じだろうか。様々な敵に対応する遊撃部隊としては理想的な布陣とも言えよう。

「でも・・・20両には1両足りませんよ?」

「そうだね・・・そろそろ時間だけど、もうちょっと探してみる?」

「はい」

そう言つて木を降りようとしたときだった。

「あつ」

降りる最中に足を滑らせた私は、ドサつと地面に落ちてしまった。

「・・・あ」

… 言葉が出ない。グラウンドの戦車乗りたちが、私を凝視していたのだ。

『… 侵入者だ!』

サイレンが鳴り響く。見つかってしまった…!

「逃げるよ、早く!」

「は、はい!」

手を引かれて走りだす。

「ごめんなさああああああい!!!」

自然と、そう叫んでいた。

「……偵察の二人、見つかったって!」

「まずいですね……ここまでちゃんと来れますかね」

バラトンとアウトバーンの隊長・副隊長たちも、皆試験学園の甲板上にいた。バラトン水産の保有する飛行艇「U S - 2」に乗り込み、二人の合流を待っている。

電話が鳴る。相手は寿璃さんだった。

「もしもし?」

『もしもし……今、何とか隠れたところです。すぐにそちには着けます』

「……よかった。気をつけてね」

見つかったのは元も子もない。言葉も少なめに電話を切った。

彼女たちは、宣言通り早く戻ってきた。きつと格納庫の裏とかに潜んでいたのだらう。

「ごめん、騒ぎになっちゃって!」

「大丈夫ですよ。じゃあ、さっさと離陸しちゃいます」

操縦を任されている優奈さんがUS-2をゆっくりと加速させていく。

「… 本当はもう一両探したかったんですけどね」

「うう… 申し訳ないです」

その口ぶりからして、きつと茜ちゃんが見つかったのだろう。

「… でも編成は殆ど判明しましたから。帰ってまとめましょう」

「うん。ありがとう、二人共」

浮遊感。US-2が大地… いや、船を離れる。目指すは無論、アウトバーン女子学院である。

「へえ… アウトバーンのメンバーがねえ」

正直意外だった。というか、練習試合程度で事前偵察までするとは。

「… まあ、どうしても負けたくないのは私も同じだけど… 『例のアレ』は見られてな

いのよね?」

「はい、なんとか…」

例のアレ。アレは万が一を考えて戦車隊とは別の場所で試運転を繰り返している。

「… ならいいのよ。別に見られても」

くるりと踵を返して、T-44に歩み寄っていく。

「試錐の戦は『分かっているも防げない』。最強の矛なんだから」

見たところで、何も変わらないのだ。

「… 必ず勝つわ、三城夏紀…!」

ぎゅつと拳を握った。

重たき荷物です！

雨が降っていた。川も氾濫しようかという程の豪雨の中、私は傘も差さずに歩いていった。冷たい雫が体を冷やすが、走る気力も、傘を買う気力も、私には無かった。

心も体も冷えきる頃に、私は目的地へとたどり着いた。

自動ドアが開くと、体を更に冷やす冷房の風。ぶるつと震える体を拭くこともせず、私は施設を奥へと進んだ。

薬品の臭いがする。施設内が嫌に静かなのは私の心持ちのせいなのか、それともここが笑顔で話すような場所でないからなのだろうか。

そんな、病院という施設。私は何を考えるでもなく、エレベーターへ向かう通路を歩いた。

「あ、あの!? そんなに濡れていると風邪をひきますから。患者様に伝染つてもいけませんし、拭いてください」

看護服の女性が私にタオルをかけてくれる。動かない頭で確かに、と思い、くしゃくしゃと頭を拭いた。

エレベーターが脱力しきった体を運ぶ。目指すのは8階。特に重症の患者が入られる、無菌室のある階だった。

エレベーターが目的の階で停止し、私を吐き出すべくドアを開く。しかし、私はそこから足を動かすことができなかつた。

——私のどこに、彼女に会う資格がある？

——何処の誰が、私が会うのを歓迎する？

——ただ恨めしいだけの、私を。

エレベーターの扉が再び閉まり、私を1階へと送り届ける。

…
私は、ダメだな。

「…謝ることも、出来ないなんて…」

涙が浮かぶ。私は、本当に生きていていいのだろうか――

――けたたましいアラームの音に目が覚める。

「……夢……か」

冷や汗でぐっしりと濡れた寝巻きと布団。手早く着替えて、布団を干した。

「……よいよ、嫌な夢じゃね……」

とても嫌な夢だった、と山口弁でぼつりと呟いて。昨日出したばかりの夏服に袖を通す。

――胸が痛い。

病気じゃない。私の不甲斐なさに、胸が締め付けられているのだ。

しかし、ナイーブになっている訳にもいかない。昨日の内に準備していた荷物を担いで、私はアパートを出た。

今の私は、試錐学園隊長、パイル。越前カンナとは決別しなければならない。

アウトバーン女子学院学園艦は、仙崎港に入港した。

「……さてと。試合まではあと2日ありますが、今から試合会場へ向かいます」

16両の戦車の前に、隊員たちが整列する。小ささまざまの、デコボコな戦車隊。その不揃いな戦車たちは、自慢の砲を勇ましく天に掲げている。そんな姿に、私は頼りがいのようなものを感じていた。

「試合会場は、須佐・田万川市街地です。田舎の小さな街ですが、海、山、川と様々な地形を持つフィールドです。今日は各自フィールドの事前偵察をしてください」

皆がこくりと頷いた。

「では、行きましようか」

ぱんつ、と手を叩くと、みんな一斉にマウルティアに乗り込む。今日は自動車科からもう2両借りて4両で出発だ。

16両の戦車と、それを牽くハーフトラック。更にマウルティア4両、合計36両の隊列は、長門市を出発し、島根県との県境に位置する須佐・田万川地区へと大移動を開

始した。

対する試錐学園学園艦は、島根県の浜田港に入港していた。試錐学園のように重戦車多数運用する学校は、航空か鉄道を輸送手段に選ぶことが多い。そちらのほうが費用的にも安全面的にも良いからだ。

試錐学園はそのうち鉄道を選択していた。山陰本線 西浜田駅には、戦車を搭載した貨物列車が、3両の重連状態で待機している。

「ほら、早く積み込んで！待たせてるんだから！」

鉄道輸送用履帯に履き替えた重戦車たちを載せる。一両で70tの化物たちを牽く機関車も楽ではないだろう。ましてこの山陰本線の山なりな線形だ。逆に3両の重連で足りるものなのかと心配になる。

「すみません、お待たせしちゃって」

「ああ、いいのいいの。どーせここらのダイヤなんてスツカスカなんだから」

ハハハ、と笑うのは機関車の運転士さん。今のジョークはどういう心境だったのだろ

うか。

「隊長!準備出来ました!」

「オツケー!じゃあ、お願いします」

「あいよ!さっさと乗りな!」

積み込みが終わると客車に乗り込む。点呼をとって、全員が乗り込んだことを知らせると、機関車3両は先頭車の合図に合わせてゆっくりと進み始める。

合計1000tにも及ぶ列車が、鉄の軋む音を立てて、駅を出発した。目指すは、山陰本線 須佐駅だ。

さらさらと草木が揺れる。みずみずしい山の香りに混じって、香る潮の香り。

山口県と島根県の県境にほど近い場所に位置する須佐町は、豊かな海と山の恵みを受けた、空気の美味しい町だ。そんな須佐の港に私たちはいた。

36両に及ぶ大編成は須佐町の小学校である育英小学校のグラウンドに預けて、マウ

ルティアに分乗して移動してきた。

今は少し遅い昼食。須佐町の名産であるケンサキイカ『男命イカ』みことのお刺身に舌鼓を打ちながら、ゆるりと流れる海辺の時間に癒されていた。

「んーっ！甘い、美味しい！」

学園艦は、様々な地方から生徒がやってくる。今私の隣で顔をとりけさせている涼子さんも、目の前でぴくぴくと動く新鮮なイカに興味津々の幹葉さんも、他の地方からやってきている。

「…おお、張り付く…」

まだ動くゲソを口に入れた幹葉さんは、その不思議な食感に驚きつつも、涼子さんと同じくとろけた顔を見せた。

「やつぱり、男命イカは新鮮じゃないと」

「そもそも、生きてないケンサキイカは男命イカじゃないんだけどね」

須佐で水揚げされて、活きている状態のケンサキイカが男命イカである。死んだ時点でそれはただのケンサキイカなので、生簀からあげたばかりのこれは、男命イカを極めたものだろう。

私もゆつくりと色を変える、半透明な身を箸でつまむ。少し醤油をつけて口に運ぶと、新鮮故のコリコリとした食感と、濃厚な甘味が口の中に広がる。

「んー…おいしい」

続けてご飯を書き込むと、ご飯の温度でイカの甘味が引き立つ。甘味の強い刺身醤油との相性も抜群で、思わず顔がとろけてしまうのが分かる。

「確かに…これは、すごい美味しい」

漁業に携わる千尋さんも言う。イカを豪快にすくいあげると、軽く醤油をつけて一気に食べる。ワイルドな食べ方だが、満足感はかなりのものだろう。

「…うん、すごい濃厚な味。私、気に入ったよ」

ぐつ、と親指を立てる。千尋さん、すごい笑顔だ。

「…さて。昼食をとったら、一度育英小に戻って、事前偵察に向かいます。皆さん自分のチームの戦車で、ワイルド内を動き回ってみてください。作戦に使えそうな場所を見つけましょう」

『はー!』

今回の試合会場は、主に3つの市街地と山岳で構成されている。最も西側が須佐町。ここは背の低い民家が立ち並ぶ漁師町で、視界は比較的良好だが路地が狭く戦車が通れる場所は限られる。

真ん中は江崎。ここは他と比べて小さな町だが密度はかなりのもの。そして港にかかる橋も重要なポイントかもしれない。

そして東側が田万川町。川沿いである関係から非常に平らな地形であり、遮蔽が取りにくい。ここで敵の主力と鉢合わせるのは防ぎたいところだ。

山に入ると、起伏が激しくお互いに進軍に苦勞する。足の速さという利点を殺してしまふため、こちらも得策とは言えない。逆に追う立場になれば、山に追い込むことで一方的な有利を取れる可能性もある。

「：。今回は出来るだけ須佐側で戦いたいね。田万川に行くと相手の独壇場だから」「そうですね。こつちも平らだと、こつちはT29でも危ういかもしれません」

T29は確かに頑丈だ。しかし砲塔意外は思ったより普通の重戦車で、ヤークトティーガーの砲撃を真正面から受け止められるほどの物ではない。それに、こちらに平野で打ち合える車両なんてT29とティーガーIくらいのもんだ。得策とは言えない。「逆に須佐側なら、こつちの足と小回り、車体の小ささを活かしてかく乱できるかもね」

全国大会において、大洗が黒森峰に取った戦術と同じ。市街地を使った分断が出来る。街中に引きずり込めば、その幅や高さ、取り回しの悪さが邪魔をしてまともに動けなくなるだろう。

「… 射線も通らないね」

その装甲も砲も無力化し、こちらの機動力は一層引き立つ。出来ればこの市街地を最終決戦場としたいところだ。

「でも、そんなのは敵も承知のはず… 相当頑張らないと引きずり込むのは無理か」

「何なら江崎の町でもいいと思う。主力を国道に配置して敵の主力と交戦、そのうちに回り込んで遊撃隊と交戦… みたいなの」

「成る程。いざとなれば撤退して須佐の街に逃げ込めば形勢逆転もあるね」

保険をかけたつ攻められる。いい戦略だろう。

「よし、じゃあ基本はそれでいこう」

「… とりあえず、おやつ食べない? 私お腹空いちやつてさあ」

琴音さんがぼやく。確かに、昼食から3時間が経って小腹が減ってきた頃だ。

「あ、さつき須佐駅の前で買ってきた柚子まんじゅう、食べていいよ」

「じゃあ、道の駅にでも止めて休憩にしようか」

「賛成!」

虎さんチームは、田万川の道の駅にパンターを止めて休憩の時間とした。

夜。すっかり暗くなった町で、私たちはちよつとした宴会をしていた。

「お疲れ様でーす！」

『お疲れ様ー！』

グラスが音を立てる。今日はちゃんとアルコールの入っていないお茶だ。

長机には海産物の数々。どれも磯の香り漂う新鮮なもので、若干グロテスクなものから目にも鮮やかな美しいものまで様々だ。

「…これ、何？」

「ああ、これね。これは『地蔵の手』…亀の手とも言っただけだね。このへんではポピュラーな貝だよ」

まるでツメのような貝の根元には、皮膚のような謎の部位がある。始めて見る人からすれば、結構えげつない見た目をしているだろう。

「この足を剥いてね…ここを食べるんだよ」

萩市民である琴音さんが、寿璃さんに教える。言われたように寿璃さんもひとつ摘み取り、皮膚のような部位をつまんで千切り、くるりと剥いてみせた。

そして、ぱくり。口にすると、彼女の顔は途端に笑顔になった。

「… おお! 美味しい! こんなにグロイのに!」

「あはは。確かにグロいね。でも美味しいでしょ?」

「うん、予想外だよ!」

止まらない、といった感じで、地蔵の手の塩ゆでを口に運んでいく。中の桃色の肉は特徴的な味で、ぶわつと広がる磯の味の中に、ほんのりと甘味を感じる。後引く柔らかな苦味も相まって、おつまみにぴったりなのだ。ビールによく合う。

そんなみんなを横目に、私と千尋さんは今日皆が見て回ったことで手に入った情報をまとめていた。

「山岳方面も平坦な箇所あり… 一部は道も広く進軍に適している」

「成る程。事前偵察に向かう軽戦車たちは、海岸か山岳のどちらかを行く感じになりそうですね」

まとまった情報は、クリップボードに挟んだルーズリーフに書き込んでいく。

「須佐大橋からは須佐が一望できる。偵察に使えるかもしれない」

「うーん…… 戦場から離れすぎますね。終盤にトルデイとか残ってたらありかも」

須佐大橋は、須佐の街の南側にある唐津谷をまたぐようにかかっている橋だ。何とか街が見えるが、いくらなんでも距離があるし、結局街の中までは見えない。

「田万川のゴルフ場は、広く起伏にも富んでいるため重戦車とも何とか交戦できそう」
「成る程…… こちらの重戦車が一気に潰された場合に有効かもしれないですね」

砲火力と装甲で劣る以上取りたくない戦略だが、どうしてもという場合もある。頭の片隅に置いておこう。

「…… まあ、こんなものですね」

「作戦の根幹は、夕方夏紀さんが言っていた作戦で？」

「はい。主力部隊には無理をさせてしまいましたが、それしかないと思ってます」

主力を泳がせたまま遊撃部隊と戦うのも、遊撃部隊を泳がせたまま主力と戦うのも絶対にダメだ。となると、どちらも同時に相手するしかない…… 厳しいだろうが、これしかないと思っている。

「…… まあ、なんとかかなりですよ。さ、私たちも食べませんか？」

「…… そうですね」

コップを手に、小さく乾杯をした。

宴会も終わり、お風呂に入るために田万川温泉へとやってきた。

一日中着ていたパンツアージャケットを脱ぐと、潮の香りが染み付いていることに気づいた。それに結構汗をかいたからか、インナーにもちよつとばかしシミができていた。

下着も脱いで、忘れずに黒の眼帯を外す。この下は痛々しい傷で、あんまり見せたいものでもない。開かない目。私自身、この傷を見ることはあまり好きでなかった。

「はー：：汗でべたべたです：：」

「しっかり落として、早く寝よう」

隣では華蘭さんと涼子さんが服を脱ぐ。二人共、おっぱい大きいなあ：：

ぺたつ、と胸に手を当てる。残念な感触。

「…ぐう」

唸る。

「大丈夫ですよ。そういうのも需要ありますから」

露出した肩に手が置かれて、ビクツと驚いた。

「華蘭さん、それ、励ませてないよ…」

浴場のドアを開くと、それなりの広さの温泉。海沿いだからか、少し塩の香りのするお湯だ。

とりあえず体を流す。お湯が体を伝っていく感触。気持ちいい。

「背中、流しましょうか？」

千尋さんが言う。

「…お願いしようかな」

ごしごしとタオルで背中をこすられる感触。痛気持ちいい。

「このくらいで大丈夫ですか?」

「あ、はい…。気持ち、いいです…。」

力の抜けた声が出る。まるでマッサージでもされているかのような感覚だ。

「今回の試合…。どうしても勝ちたいんですよね?」

いきなり質問される。私は少し言葉に詰まった。

「…。何がある訳でもないんです。ただ、昔のライバルだから負けたくない…。それだけですよ」

本当にそれだけだ。周りからは復讐心だの仕返しだのと言われたが、全くそんなことは考えていなかった。危険の伴うスポーツなんだから、それで相手を責めるのはおかしい話だろう。

結果、私が二つの大切なものを同時に失ったというだけ。今までの戦車道史においても、一度や二度の話じゃないだろう。わざとなら話は違うが、これは事故。仕方のないことだ。

「むしろ…。私は罪悪感を感じてます。私の不注意のせいで、相手の未来は奪われた…。私があの時車内に入っていれば、私はこうならずに済んだんですよ」

右目を撫でる。もう痛みはないが、今はあるはずのない眼球がずきずきと痛んだ。

きつと私の心が、その時の痛みをフラッシュバックさせているのだろう。

「：： なら、全力で試合をして、勝って、謝ればいいんです。きつと相手も同じことを思ってますよ」

「：： そうかな」

「そうです」

彼女は即答した。確かにそうだ。パイルだつて、私に傷をつけたことに負い目を感じているはずだ。そうでなくては、私の気持ちとはともかく、人間として余りにも非道だ。

「：： だからまずは、お互いの全力をぶつけましょう。私も全力で協力しますから」

「：： はい、お願いします」

「じゃ、流しますね」

シャワーがかけられる。温かいお湯が、私の心と体を洗い流した。

皆が上がった露天風呂で、私は一人月を見上げて考え事をしていた。

「：： 恨み、か」

復讐心。最初の頃は無かった訳ではない。理不尽に奪われた未来に、怒り狂ったこと

もあつた。しかし、年をとつたからだろうか。今ではその気持ちも息を潜めていた。

「…そんなもの、とつくの昔に捨ててるよ」

私が戦車道に復帰できた理由。夏摘と会うという目的が出来たことが一番だが、既に復讐心を捨てていた事が大きな理由だろう。第一、復讐したいなら戦車を降りたりしない。

「カンナ… 貴女はどうなの」

私から奪つたものの代償は既に支払っているはずだ。私に対する気持ち… 心の有り様というか。彼女はどうか考えているのだろうか。

「… わかんないや」

私の心は、この温泉のように、温かくも、少し塩っぱくなっていた。

田万川町にある多磨小学校。そこにはアウトバーン校と同じように、試錐学園がキャ

ンプを構えていた。校舎の中、一人月を見上げているのは、パイルであった。

「……はあ」

ため息。ここに来てからため息ばかりだ。

「……馬鹿だなあ」

壁にもたれる。私の心の小ささに嫌気がさしていた。

「ただ、『ごめん』って言うだけなのに……」

私には、出来なかった。

プライドが邪魔をしたわけでも、申し訳なく思っていなかった訳でもない。

ただ、怖かったのだ。

彼女の怒る様が頭に浮かんで。私は病室に近づくこともできなかった。

「……今度こそ」

見下ろすと、グラウンドには20両の戦車。中学校の時に比べれば幾分大所帯になった。それでも、私の心は未だ中学校3年生の夏のまま。

「勝つ。勝つて、胸を張って言うんだ」

『ごめんなさい』。ただその一言のために、私は3年間を戦車に投資した。試合まではあと1日。たった24時間とちよつとが、嫌に長く感じた。

思惑です！

全国大会 中国予選の覇者であり、近年めざましい勢いで力をつけてきた、試錐学園。対するは一騎打ち最強車長、三城夏紀が率いる、アウトバーン女子学院。

この練習試合は、名だたる有名校たちにとつても、放つておけないカードであった。

陽が昇つて間もない海岸。シルバーのスーパーカーが、白銀に輝く陽光を弾き輝いていた。そのそばには、柔らかな印象を受けるロングスカートの女性と、オレンジの髪を後ろにまとめた背の小さな少女。

「綺麗なところですね。ちよつと遠いですけど、壮さが伺えます」

聖グロリアーナ女学院の隊長を務める、オレンジペコだ。2年生ながら隊長を任されているのは、前任であるダーズリンからの厚い信頼があつてのこと。

「そうですね。降りれるようだし、近くまで寄ってみる？」

「……ダーズリン様、ヒールでこの遊歩道を降りるのは無理があるんじゃない？」

「……それもそうですね」

オレンジペコにダージリンと呼ばれた女性。元聖グロリアーナ隊長のダージリンだ。かつて西住まほと並び最強格の隊長であると称された彼女も、このカードに興味を持ち観戦にやってきた一人である。

「：： じゃ、次はどこに行こうかしらね」

「：： 決めてないんですか」

二人は銀色のスーパーカー、アストンマーティン DBSクーペに乗り込み、『千畳敷』と呼ばれる、須佐ホルンフェルスを後にした。

須佐湾を一望する山、高山。須佐之男命が朝鮮半島へと赴く際に、この高山から海路を望んだという言い伝えから神山、それが転じて高山となったという。ホルンフェルス断層もこの高山の一部であり、そして高山そのものも協力的な磁気を帯びた磁石石として、国の天然記念物に指定されている。

そんな高山の頂上、展望台には、まだ幼さの残る顔立ちにどこか歴戦の兵士にも似た貫禄を感じる少女、そして幼いというよりはあどけない、茶髪の少女がいた。

国際強化選手にして大学選抜チームのエース、西住まほと、その妹であり軍神の名を欲しいままにしている西住みほだ。

「確かみほは：アウトバーンの隊長とは知り合いなんだったか？」

「あはは、知り合いつて程じゃないよ。ちよつと話したことがあるだけ」

三城夏紀。みほと同じで人物的特徴はあまり濃くなかった。界限では『独眼』などという異名がついているが、その実はただ片目を失った少女であった。

「すごいな、あの子は。ハンデイを背負つてもこの強さ」

片目が見えない。盲目でないだけマシとはいえ、距離感だとか視野は必然的に健常者に劣る。右側の視野が大幅に欠けているということは、右側からの敵の接近に気づきにくいということでもある。

「何処かで聞いたことあるんだけど、盲目の人つて音とか振動で周りの状況がある程度分かるんだつて。三城さんもそうなんじゃないかな？」

五感のうちの何かを失うと、他の感覚が研ぎ澄まされるという。戦車道においてそれは、恐らく『直感』に変換されて役に立つはずだ。

「：： 私たちには、理解できない世界だな」

「：：： そうだね」

いくら頭で理解しても、その人の気持ちにはなれない。健常者である私たちは、ただ

理解することしか出来ない。

風が吹いて、草木が揺れる。揺られた木のむこうに、はるか向こうまで広がる水平線が見える。

「……じゃ、行くか」

「うん」

最近には気にしていなかったのに、ここ数日はずっと右目が痛む。

試合前日ということで休養に当てることになっているが、私は防波堤の先で腰を下ろして、緩やかな波をぼんやりと見ていた。

須佐湾の穏やかに流れる時間。やっぱり田舎は良い。

漁船が港を発つ。大きく手を振ってみると、漁師のおじさんたちが振り返してくれた。

… きつとこの右目の痛みは、ずっとくすぶっていた感情が再び燃え上がり始めたことを示しているのだろう。

それは、怒りでも復讐心でもない。ライバル意識である。

ブリテンのヴィヴィアンさんも、戦練専の越前さんも、バラトンの千尋さんも、そして、モニュメントバレーの夏摘も。皆ライバルと呼んでいい実力の持ち主だった。

しかし、本当の本当にライバルと呼べるのは、パイル… いや、越前カンナただ一人だろう。

小学校からずっと、私と競い合ってきた。

お互いに隊長になって、同じ試合に出て、戦って…

私が成長できたのはきつと彼女のおかげだろう。

「… んー… っ」

大きく伸びをした。潮の香りが肺を満たす。

「… 帰ろっ」

びよんつと立ち上がる。唐突に戦車に乗りたくなつた。皆いるかな。

港を離れて田舎の割には広い道を歩く。そんな時、後ろから一台の車が走ってきていることに気がついた。重厚なエンジン音と、ロードノイズ。タイヤの太いSUVタイプの車だろうか。

振り返ると、つや消しブラックのSUV、メルセデスベンツ G63 AMGが私の横に停車するところであった。

降りてきた女性は、二人とも見覚えのある人物だった。

「……西住さん」

そこには茶髪と黒髪の姉妹。かの有名な西住流の後継ぎである西住姉妹が立っていた。

「来ていたんですね」

「はい。やっぱり、気になるカードですから」

全国大会を戦う大洗女子学園にとって、試錐学園の戦いは気になるところがあるはず

だ。しかもこの時期の練習試合では、全国大会用の新車を投入することも多い。偵察は無駄にはならないはずだ。

「……初めまして。西住まほだ」

「三城夏紀です。何度かテレビで拝見しましたが……すごい戦いをしますよね」

「はは、ここ最近、もっぱらみほの影響だよ」

一部のメディアでは『新派西住流』と表現される西住みほの戦車道。正統派西住流のように正面突破が叶わない場面において、新派西住流は想像を絶する強さを発揮する。

正統派の代表格であった西住まほは、みほの突拍子もない戦術の影響を受け、凝り固まった西住流を変革しようとしている。簡単なことではないが、彼女の手腕にかかれれば一代にして成すことも可能だろう。

「……キミも、面白い戦いをするな」

「……そうですかね？」

自分でも分かっていた。ここまで個人技を尊重する流派は少ないだろう。近接戦闘に特化し、戦車の性能を100%以上に引き出すことを得意とする源流は、戦車道流派の中でも異端だ。

「だが……どことなく、みほに似ている気もする」

それは意外だった。みほと違い、少数を指揮するのに特化している私は、小隊を更に

分割し、各個の性能的長所を活かして戦うようにしてきた。それが奇しくも似た、ということなのだろうか。

「… 追い詰められて真価を発揮する。『一発逆転の流派』といったところか」

「そう… かもしれないね」

源流は、根本は西住流と似たところがある。『ひたすらに前進を良しとする』『性能を以て押し切る』『長所を徹底的に活かす』。それぞれ解釈は違えど、根本の思想は同じなのだ。

「ただ、一つアドバイスをするなれば…」

顎に手を当てて考え込んだような表情を見せるまほ。慎重に言葉を選んでいるのだろう。

「… キミは戦士であって策士ではない。もつと俯瞰的に考えねば、手遅れになることもある」

「… 肝に銘じます」

私自身の戦闘スキルは褒めてもらえた。しかし、部隊の指揮となると話は違う。個々の戦闘力よりもチームワークが求められる状況で、私の指揮能力不足が浮き彫りになるのだろう。

「応援してるからな。頑張ってくれ」

「うん。頑張ってるね、三城さん」

「……ありがとうございます」

頭を下げた。大学選抜のエース、私からすれば大先輩だ。そんな彼女からのアドバイスを肝に銘じて、私は更に足早に、育英小学校へと急いだ。

多磨小学校のグラウンド。多数並ぶ大型の戦車のうち、ティーターII ポルシエ砲塔の側面装甲を優しく撫でる少女の姿があった。

試錐学園の副隊長を任された一年生、ローラである。試錐学園の戦車整備に携わる彼女も、パイルほどではないにせよ、この戦いにそれなりの意味を見出していた。

「……今回投入の二両。ノントラブルで走りきれればいい方かな」

一両は、このティーターII ポルシエ砲塔。部品取り用のジャンクとしてガレージに眠っていたティーターIIの車台。それに安価で市場に回収していたポルシエ砲塔を載せたものだ。ショットトラップという最大の泣き所を持つが、そもそも重駆逐戦車を率

いるために採用した戦車だ。最前線で戦うことはないだろう。

もう一両は前からちよつとずつ組立を進めていた秘密兵器である。今もカバーをかけて嚴重に保管している。この車両のトラブルシュートと、使用方法の研究を目標しての今回の投入である。全国大会までに強いところ、弱いところを洗い出しておかねば。特異な車両だけに、実戦を重ねることが必要だと考えていた。

「……はあ……大丈夫かなあ」

正直、この二両に労力の殆どを費やしてしまったため、新たに導入した他の戦車は外部機関に任せきりなのだ。特にM5軽戦車やコメット巡航戦車など、不安な車両も多々ある。

「……ま、何とかなるでしょ」

もうここまで来てしまった。となると後は運任せである。壊れやすいドイツ戦車。何事もなく終わることを祈りつつ、ざらつく装甲板をそつと撫でた。

そして、試合当日がやってきた。絡み合う思い。向かい合う視線に様々な心を感じ取りながら、私はゆっくりと歩み出た。

「只今より、アウトバーン女子学院 対 私立試錐学園の練習試合を開始します。双方、礼！」

『お願いします！』

頭を上げたツインテールの少女に歩み寄る。

「… 今日も負けないよ、パイル」

「私だつて負けるつもりはない。正々堂々勝負しよう」
ぎゅつと握った手。少し震えている気がした。

私たちのスタート地点は、キャンプを設営していた育英小学校。同時にここがステーションの西端でもある。

そこには、私たちの車両の全てが並んでいた。今日限りの連合チームである。

アウトバーン女子学院からは、パンター中戦車G型仕様、レオパルト軽戦車、IV号突撃砲、クロムウエル巡航戦車、クルセイダー巡航戦車、四式軽戦車、T29重戦車、そして新車であるT-34-57駆逐戦車。

バラトン水産からは、トウラーンIII中戦車、ティーガーI重戦車、IV号戦車H型が二両、ズリーニイI突撃砲、ズリーニイII突撃砲、トルデイIII軽戦車、トルデイIIa軽戦車。

両チーム合わせて合計16両。結構な大所帯になった。

「各チーム、準備はどうですか?」

『こちら山猫。偵察班はいつでも出れるよ』

レオパルトとトルデイ二両で構成される偵察班。初期偵察は今回のカギにもなる。

彼女たちには頑張ってもらう必要がある。

『こちら主力部隊です。特に問題はありません』

主力部隊は、重戦車と駆逐戦車を中心に編成されている。部隊長にはティーパーの車長である優奈さんを指名した。彼女たちの頑張り次第で戦況は大きく変わる。今回の防衛の要である。

「遊撃部隊、全車準備完了とのことですよ」

華蘭さんからの報告。フラッグ兼隊長車、そして部隊長を兼任する私たち虎さんチーム。忙しくはあるが、遊撃部隊には副隊長である千尋さんのトゥランⅢもいる。いざとなれば頼ることも可能だ。

「……えー、この戦いは、ごく個人的に負けたくありません。そのために、皆さんの助力が必要です」

ぎゅつと拳を握り締めた。ずきりと一瞬痛んだ右目。それもすぐに気にならなくなった。

「……皆で、勝利を掴み取りましょう」

『副隊長、依存なしでありますっ！』

元気に返事したのは千尋さん。きっと自分が副隊長を任されたことを誇張したかったのだ。

「：： よろしくね、副隊長さん」

手を振ると、彼女も手を振り返した。

「では、まずは手はず通り。偵察隊は全速で前進、遊撃部隊はゆつくりと森のルートを進みます」

地図に目を落とす。今回のマップは狭い。接敵はすぐだろう。

「：： パンツァー・フォー！」

強固なる戦車隊です！

戦車前進の合図と共に、16両の鉄馬たちが心臓の唸る音と共に動き始める。それはゆっくりと3つの部隊へと隊列を変える。偵察車3両は車列を飛び出して全速で前進を開始した。

「このまま国道を進んで、江崎まで進むよ。接敵したらそのままやり過ごして退避ね」
『了解！』

ハンガリーが産んだ新鋭戦車トルデイシリーズの最終系であるトルデイⅢと、トルデイⅡをそれに準ずる仕様に改造したトルデイⅡaを従えて、オリーブグリーンのレオパルト軽戦車が駆ける。

今回の任務は初期偵察。もし敵偵察車両が単独であれば、そのまま戦闘に入るのもありかもしれない。

比較的道幅の広い国道を進む。緩やかな勾配を昇って峠を越えれば、江崎はすぐそこだ。敵の遊撃部隊の動き次第でもあるが、互いの速度から考えて江崎周辺で敵部隊を発見することになるはずだ。もしかしたらM5軽戦車が単独で偵察に来る可能性もある。しかしその場合は撃退すればいい。性能上、3両でかかれば倒せない敵ではない。

峠を越える。勾配を下ると、しばしの平坦路。両側を田に挟まれたのどかな風景だが、この風景のどこから凶弾が飛来するか分からない以上気は抜けない。相手には高速・高火力のコメット巡航戦車もいる。不安要素を拭い切ることにはできないのだ。

「……敵発見！M5軽戦車！」

コーナーを抜けると、江崎の街に入る道と、田万川へ向かう国道の交点。そこにちょうど駆け込んできていたM5軽戦車がいた。M5軽戦車の車長はこちらを一瞥するとM3 37mm砲を一発、照準も程々に打ち込み右折、港方面へと撤退していく。

「深追いしすぎないように追撃するよ！」

こちらも左折。偵察力はこちらの唯一のアドバンテージ。相手の目は潰せるときに潰しておきたい。

江崎の港には、街の規模に見合わない大きな橋が架かっている。その橋の根元にある漁港に、M5軽戦車が滑り込む。こちらも陣形を整え、トルディIIaを先頭に追う。敵陣に近い場所で戦っている以上、警戒を怠ってはならない。この偵察隊の隊長車であるレオパルトを挟み込むように守っているのだ。

漁港の道路は格子状になっている場合が多い。小規模な漁港である江崎の港も例外ではなく、そんな単調かつ空き地の多いフィールドを、M5軽戦車はその軽やかな足取

りで駆け抜けていく。

「挟み撃ちにしよう！3号車、右に展開して！」

3号車……トルデイⅡaが右折し、隣の道路へと進路を変える。前に行くM5軽戦車の左側に機銃を撃ち込み、右折に誘導する。相手もそれを分かっているだろう。きつとトルデイⅡaに照準を合わせているはずだ。

M5軽戦車が右折。建造物の影に消える。こちらもトルデイⅢを先頭に右折する。

その瞬間、目に入ったのはM5軽戦車の正面装甲だった。

「……まづい！避けて!!」

トルデイⅢは左に舵を切った。ドリフトの姿勢だったトルデイⅢは弾き返されるように左に吹っ飛び、同時にM5軽戦車の37mm砲に討ち取られる。スピンしながら吹っ飛んだトルデイⅢは海に落ちるギリギリのところまで縁石にぶつかって歩みを止めた。

飛び出してきたトルデイⅡaがM5軽戦車に40mm砲を撃ち込む。相手もさすがに軽戦車。装甲はいとも簡単に貫かれ白旗が上がる。しかし、それと同時にトルデイⅡaも白旗を上げたのだった。

「な……何処から……!?!」

よく見ると、正面の漁港施設に、布を被せられた物体があることに気がついた。

「……撤退、撤退ッ!」

悪い予感がした。その予感は的中し、その物体からは長身の砲弾が撃ち出された。

「あれは……」

布を被せられた物体は、のそりと動いてその正体を明かす。箱型の車台に搭載されるのは新型の砲塔と、短縮された17ポンド砲、77mm高初速砲。イギリス巡航戦車の極み、コメット巡航戦車であった。

さらに状況は悪く、橋の向こうから遊撃部隊の本隊が現れる。このままではいいように撃ち込まれてしまう。とにかく逃げるしかない。港を離れて沿岸を駆け抜ける。橋の上から遊撃部隊のT-34-85が何両か狙っているのがわかったが、こっちは全速だ。そう簡単に当たるものではない。

「……何とか逃げ切ったけど、こりやマズイなあ……」

トルデイ2両は火力も装甲も不足気味ではあるが、コメットやT-34くらいなら何とか相手できる性能はある。こちらはただでさえ数の利を取られているのだ。2両も失ってしまったのは痛い。

「成る程：：分かりました。こちらにも急いで向かいます」

偵察部隊壊滅の一報を受けた遊撃部隊は、予定を早めて前進する。レオパルトが撤退するルートを逆走するように進めば、敵部隊と高確率で鉢会えるからだ。

「地味にコメットが厄介だね：：こっちの車両も、T29とティーガー以外はスパスパ抜けちゃう威力だし」

琴音さんの言うとおり、コメットが非常に脅威だ。もちろん他の車両も強力だが。重駆逐戦車隊に気を取られて、こちらの対策を疎かにしてしまったかもしれない。

「ともかく：：主力部隊がどこまで持つてくれるかで、この戦いはだいぶ変わるよ」

敵遊撃部隊と主力部隊が合流してしまうと、いつものパターンに持ち込まれて一気にやられる。今回の戦術はそれを防ぐためのもので、主力部隊を足止めすることが大前提だ。敵主力は相当な戦闘力だ。突破とまでは言わないまでも、十分な時間足止めができないと、勝ち目はかなり薄くなる。

『こちら主力部隊。目的地まではまだかかります』

「了解。遊撃部隊は高山麓を全速で前進中」

『山猫、R305交点を左折、山岳に入ります』

「山猫さんは警戒を厳に、偵察を再開してください。安全を確保しつつ、敵遊撃部隊の所在を突き止めてください」

『山猫、了解!』

ここまで敵主力が発見できていないことを考えると、恐らくこちらの読み通り、北浦街道を西進しているのだろう。予定通り行けば、接敵は先ほどの江崎の交差点になるはずだ。

それまでに敵遊撃部隊を発見し、こちらの遊撃部隊とぶつけて足止めをしたい。そうなれば後は・・・何とかするだけだ。

「ただ、定石通りじゃ勝たせてはくれないんだよね・・・」

セオリー通り。それも間違いではないが、この戦力差だ。セオリー通りになんてしていたら勝ち目は無いだろう。もっと奇を銜った戦術、もっと裏をかけた戦術が必要だ。

「今は、とにかく前進しか無いと思いますね」

華蘭さんが言う。確かに、今回の戦場は非常に入り組んでいる。射線の通る場所が少ないため、あまり周りを気にせずに前進できるという良さもある。

「そうだね。まずは前進あるのみ。敵遊撃部隊を補足します!」

「敵レオパルトは退却した。こちらはそのままレオパルトを追撃する」

『了解しました。本隊は予定通り江崎交点まで前進します』

比較的高速の戦車が揃う遊撃部隊。装甲が厚く車体も大きいパンターを先頭に、装甲の薄いコメットとフラッグであるT-44-100を挟む。そして後ろからT-34-85が4両という編成で、レオパルトが退却していった沿岸線を進軍してゆく。

「こちらの思惑に気づかれていたら厄介だけど……まあ大丈夫でしょう」

キューポラに体を預ける。強い潮風が髪を揺らす。

主力部隊は北浦街道を西進、敵主力を発見、突破することを目指す。対するこちらは敵遊撃部隊と接触し交戦、ゆつくりと時間をかけて仕留めていけば火力と装甲で勝るこちらは有利に戦えるはずだ。

カーブを抜けて視界が開けたとき、レオパルト軽戦車の姿が民家の影に発見できた。「停止。体勢を整えつつ交戦準備」

パンターを先頭に、部隊は戦闘準備を開始。山肌に側面装甲を隠すパンター。それに

続いて各車飛び出す準備を整えた。

隊列が出来上がる頃、向こうも街道から顔を出して砲撃を開始。こちらも応戦を開始する。

「各車発砲自由。フラッグを優先目標にしなさい」

その号令に合わせて各車がタイミングをずらして砲撃を開始する。75mm砲が、77mm砲が、85mm砲が、100mm砲が各々火と煙を噴く。民家や山肌に着弾し、土煙を上げる。

「やつぱり来てた!各車、落ち着いて砲撃を開始!」

体勢を整えられなかったこちらが不利だ。まとまりのある砲撃を繰り返す相手に対し、こちらは散り散り。効果的とはいえない。

パンターの正面装甲をコメットの77mm高初速砲の砲弾が叩く。火花と鉄粉を散

らしたその砲弾は、そのままはじかれて海面に波を立てた。

こちらの砲弾も、相手の巧みな防御体勢の前に効果的な一撃を与えることができなかった。

『こちら主力部隊！江崎交点にて敵主力を発見、交戦開始してます！』

「了解しました！無理しすぎずに、押してくるようだったら市街地に退避を！」

『了解です、可能な限り引きつけておきます！』

優奈さんからの通信。ティーガー率いる主力部隊が敵と交戦を開始したという。

「主力が交戦を開始しました！後はこちら次第です！」

『うー…きつついねえ』

舞花がいつになく弱気である。それもその筈、相手はこの大所帯。高校戦車道で最も豪華かもしれない編成だ。対する舞花は相手の装甲を貫くには貫通力に難のある砲と、どこに当たっても抜かれる装甲のクロムウエル。それでも強気でいられるなら、図太いなんてモンじゃない。

『このままではダメですね。何とかしないと…』

千尋さんも言う。確かにその通り、こうして撃ち合っている間は、こちらに利は存在しないのだ。

民家の影に車体を隠して、敵主力との真つ向からの撃ち合い。こうしてしつかりと車体を隠しているうちは当たる心配は殆ど無いだろう。重戦車たちは『昼飯の角度』を取れているし、しばらくは問題ないはずだ。

鐘を突いたかのように、反響音が砲塔内に響き渡る。T29は砲塔が非常に頑丈であるため、ヤークトティーガーの12・8cm砲であっても貫通の心配は無いであろう。敵の編成は、先頭からヤークトティーガーが3両。エレファントが2両、ヤークトパンター3両の後ろにティーガーIIが控えている。どの砲弾でも駆逐戦車たちは簡単にやられてしまうだろう。

ズリーニイIの撃ち出した75mm砲弾は上手く後続のヤークトパンターの正面装甲を叩くが、撃破とは行かず。逆にこちらのズリーニイIIがティーガーIIの8・8cm砲弾を浴び、撃破されてしまう。

「くう… やっぱり、キツイか…？」

相手はじわじわと距離を詰めている。やはりそう簡単に足止めはくらってくれそう

にない。であれば、こちらの行動も自然と限られてくる。

「：： 仕方ない。私の号令で、一気に市街地に退却します。各車準備を」

敵を市街地に引きずり込んでの戦闘。相手は背中を見せればやられてしまうため、好む好まざるに関わらず応戦する必要がある。

「：： 全車退却！」

相手のヤークトティガーの装填タイミングを見計らい各々市街地へと逃げ込んでいく。そして敵の主力部隊もそれに続き、戦闘は視界の広い国道から、狭く入り組んだ市街地へと移っていく。

国道から江崎の街を見下ろすことはできる。しかし敵車両では伏角が足りず、砲撃を加えることは出来ない。よって敵重駆逐戦車たちはこちらの遊撃部隊を追撃し、市街地へとゆっくり侵入してくる。

そんな敵部隊を、家のガレージにすっぽりと収まって待つ一両の装甲車両。アウトバーンのIV号突撃砲だ。少しでも防御力を稼ぐために、冬季杯のときと同じくシユルツェン、そしてコンクリート装甲を装備している。

「せめて敵のヤークトティガーを一両は仕留めたいね。：： そうすれば先輩たちの役に立てるはずだよ」

この狭い道だ。戦車が一両行き足を止めるだけで簡単にふさがってしまう。それにヤークトティーガーの驚異的火力と装甲を真正面から叩くのは不可能に近い。こういう有利な条件があるときに、可能だけ仕留めておきたいものだ。

…ぎゅらぎゅら。音が聞こえてきた。そして振動。

…あずき色のボディが見えた。

「撃て!!」

IV突の75mm砲が火を噴き、ヤークトティーガーの側面に砲弾を叩き込む。鉄が貫徹される軽快な音と共に、戦闘不能を示す白旗が上がる。いかに重装甲の重駆逐戦車とはいえ、10mとないこの至近距離で側面に75mm砲の直撃をもらって耐えることは出来なかったようだ。

当然正面を塞がれる格好になったIV突はそのままバックして民家を突破。港湾施設へと飛び出した。

そこへ民家を突き破って追撃に来たのは敵のヤークトパンター2両。かなりの速度でこちらへ突っ込んでくる。

「どっしりしよう。防御、防御!」

車体を傾斜させる。右側面に装備しているシウルツェンが砲弾の持つベクトルを捻

じ曲げて弾く。こちらも黙っているわけにはいかない。敵に突っ込んで、半ばドリフトするように背面を取る。ヤークトパンターはこちらに合わせて旋回をするものの中に合わず、1両を75mm砲の餌食とした。

その瞬間、車体が大きく揺られる。弾かれる……いや、吹き飛ばされるような衝撃と共に、民家に叩き込まれる。土煙と木片を頭上から思い切り被り、IV突は白旗を上げた。ハツとなった茜は、ハツチを開けて鼓動を止めた自車の状況を確認した。すると、無傷であったはずの左側面に、大きな被弾跡があることに気が付く。それも、通常弾かれるシウルツェンをそのまま巻き込み、車体装甲と共に貫通している。

カーボン層により砲弾は車外で止められた。しかしその衝撃は激しく、無線機が損傷してしまつたらしい。被撃破の報告もままならない。

その時、視界に捉えた。橋の上、謎に包まれていた、最後の1両を。

民家突き破って尚も進軍を続ける敵主力部隊。こちらも密集し、一気に叩くことで被害を最小限にとどめることとした。各個撃破では数で劣るこちらが不利だ。地の利を活かして一気にケリをつけたい。

「敵が見え次第発砲自由。ヤークトティーターとエレファントを優先的に狙ってください」

驚異度の高い重駆逐戦車から仕留めることとして、敵の到来を待つ。

……街道の角に見えるジャーマングレーの重駆逐戦車 エレファント。それに私たちの火砲が集中的に浴びせられる。

……それでも撃破判定は出ない。流石の装甲厚だ。正面からではビクともしない。

敵は尚も進軍。こちらとの距離を詰めながら、微速ながらも行進間射撃で攻撃を続け続ける。

「ひえく……怖いねえ、やっぱデカイってスゴイ」

T29の車長である瀬玲奈が言う。語彙力不足であるが、彼女の言わんとしていることは正しい。大きいとは、それだけで圧迫感がある。性能だけでなく、精神的にも重駆逐戦車は驚異であった。

本能的にか、じりじりと後退を始める。敵も当然だがそれを追いゆつくりと迫る。

…その時だった。

後方で、激しい音と共にズリーニーIが火を噴いた。車体は後部が激しく損傷し、民家へと叩きつけられている。

「な、何が…?!」

砲撃は右方…すなわち海からだ。優奈がキューポラから顔を出して後ろを振り返ったとき、彼女は声を失った。

「あ…あれは」

絶妙に丸みを帯びたボデイ。重装甲の上に曲面を描くそれは良好な被弾経始で高い防御力を実現している。

そしてそのボデイに搭載されるのは、角ばった大型の砲塔。そこにはドイツ最強の火砲、55口径 12・8cm KwK44戦車砲と、36・5口径 7・5cm Kw

K44戦車砲を同軸搭載している。

即ち、かの超重戦車『マウス』と全く同じ砲塔である。

「: : E—100: : 超重戦車: : !!」

敗北を喫したドイツが産み落とした遺産。史上最強の超重戦車が、そこにはいた。

反撃の狼煙です！

12. 8cm砲が吠える。既にT29重戦車、ティーガーI重戦車を残すだけとなっていた主力部隊に、2方向から一撃必殺の凶弾が次々と飛来する。

民家に当たれば、榴弾でもないのに木っ端微塵に碎かれる。路面に当たればアスファルトが抉り取られ、装甲の厚い箇所を防ぐことが出来ても凄まじい衝撃に揺さぶられる。

「ちよ… ちよつと！E—100とか聞いてないよ！」

「どうしましょうか… これ」

相手の主力部隊は健在。ヤークトティーガー2両、エレファント2両、ヤークトパンター2両、ティーガーII1両。戦力差は明らかであった。

「どつちも側面晒したら一発ですね…！」

「正直、ここから生きて出られるとは思えないね」

味方の援護は期待できない。こちらは圧倒的戦力差。おまけに側面を取られている。逃げ込める道も場所もない。逃げるなら正面の敵を突破せねばならない。

「正面から撃ち合ったら、いくらT29でも貫通はキツイよ」

「ティーガーじゃまず無理でしょうか」

相手の正面装甲は凄まじい堅さだ。正面切って撃ち合うのは得策ではない。

「…じゃあ、少しでも多く数を減らしておきます?」

「…いいね。何か案があるの?」

優奈さんは少し逡巡した。それほど無茶な作戦なのだろう。

「…こちらの主力を差し出すことになります。かなりの戦力低下になるかと」

T29とティーガーI。こちらの戦力としては最大の2両であろう。仮にここで敵主力を2両で壊滅させたとして、相手は遊撃部隊全てとE-100を残してしまう。それに、勿論敵主力を全て倒すなど不可能だ。

「…小隊長より隊長。作戦実行の許可を」

『…分かりました。可能な限り多くの車両を撃破してください。最優先目標はヤークトティーガーとエレファント。可能ならティーガーIIも狙ってください』

「了解。全力で当たります」

「このままここで押さえつけているだけで勝てる。このまま……」

こちらの遊撃部隊は凶悪な車両がそろい踏みだ。こちらが突破されなければまず負けはしないだろう。陣形を変えず、敵が姿を現した時だけ射撃する。それだけで効果がある。

ティーガーIIのキューポラから顔を出すローラは、髪についた砂塵を振り払った。その時民家の影から敵影。砲撃自由の指示を下されている指揮下の部隊が敵を撃つ。

弾雨の中、の反りと姿を現したT29。その砲はこちらの部隊の目の前の民家へと指向されている。

「……何か来るぞー！」

悪い予感がした。今まで反撃をしてこなかった敵が、いきなり砲撃を行ったのだ。少し姿を晒すだけでもリスキーなのだ。何かが来ると思っているだろうか。

撃ち込まれた砲弾は民家に突入すると、爆音を立てて爆ぜた。榴弾だ。

コンクリート製の家屋が倒壊する。視界を覆う砂塵。思わず顔を覆った。

「今です!」

「ああ、任せてよ!」

優奈の合図で、瀬玲奈の乗るT29は前進した。砂塵の中であるが、照準する必要はない。ただ前進すれば良いのだ。

E-100のものだろう。当てずっぽうの盲射が砂塵の煙幕に風穴を開ける。しかしその砲弾は民家に穴を穿つだけ。既にT29とティーガーIの2両は目標地点へ到着していた。

「『天号作戦』行きます!!」

日本海軍の発令した最後の海上戦闘作戦、天号作戦。その沖縄方面作戦である天一号作戦では、戦艦大和を座礁させ固定砲台とし、陸上戦闘を行うことを考えていた。それになぞらえての『天号作戦』だ。

先ほど崩した民家でできた瓦礫の山。乗り上げたT29はそのままウイリーのような状態となり敵部隊の目の前へと現れた。

「な…何…ッ!?う、撃て、撃てーッ!」

ローラも応戦しようとするが、咄嗟のことで照準が追いつかない。その間にもT29は重力に任せて姿勢を戻そうとしている。

「先頭車、下がれ——」

その声も虚しく、T29は先頭車 ヤークトティーガーの砲の上に、乗り上げた。

砲をへし折られ、超重量に伸し掛られたヤークトティーガーは白旗を上げる。味方車両の上に乗る敵に砲撃を加えるものの、ヤークトティーガーの車体で遮蔽を取られ、撃てるのは良好な被弾経始の砲塔だけ。虚しい音を立てて弾かれる。

砲を指向し、後続のエレファントの天板を撃ち抜く。

「仕方ないか…私が仕留める!」

ティーガーIIが塀をなぎ倒して車列を追い越し、先頭へ躍り出る。

砲塔を旋回させ、その側面に8・8cm砲を突き立てた。

見上げたT29の砲塔。

敵の車長が、笑っている……!?

側面装甲に砲弾が吸い込まれる。黒煙と共に白旗が上がる。

しかし、それだけでは終わらなかつた。瓦礫の山を踏み越えて、ティーガーIが出てきたのだ。

「くっ……まだやるか!」

後退しようとするも、一瞬間に合わず。ティーガーIIを踏み越えてティーガーIが味方エレファントの側面に8・8cm砲を突き立てた。

超重量のティーガーIIが、がりがりと言を立てて信地旋回する。敵ティーガーIはヤークトパンターにも手を出そうと砲塔を旋回させていた。

「させない……ッ!」

ティーガーIIがティーガーIに放った砲弾。空を斬り、ティーガーIの後部に吸い込まれ……

そうなところで、ティーガーIは回避行動を取った。そしてその砲弾は味方のヤークトパンターの車体下部に当たり……

「あつ!？」

白旗を上げた。試合中、最もやってはならないミス、誤射だ。誘導されたとはいえ、最悪の失態を犯した。

ヤークトパンターがもう一両仕留められたところで、今度こそティーガーIIのアウト・アハトが敵を仕留めた。

「…こちら副隊長車、主力部隊はヤークトティーガー、ティーガーII、E-100各一両とヤークトパンター2両を残し崩壊しました。申し訳ありません…」

『…過ぎたことは仕方ないわ。こちらに加勢して頂戴』

「…了解しました。直ぐに向かいます」

パイルはローラを責めることはしなかった。だが、誰よりもローラ自身が自分を許せずにいた。

「…この失敗、取り返さなきゃ」

『こっちは全滅しました。ごめんなさい…。後は、お願いします』

「ありがとうございます。敵主力が大幅に減って、やりやすくなりました」

正直、このメンバーで敵重駆逐戦車を相手するのは骨が折れる。ここで仕留められたのはラッキーだろう。こちらの重戦車2両をベットした価値は十分にあった。

「でも…。ここからどうするか」

相手の遊撃部隊は無傷。こちらにも変わらないが、トルデイ2両を失っているため戦力上は水を開けられている。となると、こちらの優位はただ一つ。それを活かすしかない。

「… 巖島さん、一つお願いがあります」

『はい、何なりとどうぞ』

「偵察をお願いします。山を突っ切って、江崎市街地を。敵に発見されないよう細心の注意を払ってください」

『分かりました。任せてください』

美術部チームは、この短期間で目覚ましい成長を遂げていた。扱いにくい日本戦車をうまく手懐け、良いところを伸ばし、悪いところを抑える。突出して上手い訳では無いが、

かけた時間を考えればかなりの練度と言えた。

ケヌ車が旋回し、山の中へ突っ込んでいく。道が少ない田舎だけに、こうした道なき道を進むことも必要になる。こういった不整地では独立懸架式のサスペンションが、接地力で優位に立てる。

「…さて、ここからが本番だね」

ケヌ車の偵察結果を見てみない事にはなんとも言えない。だが、ここからは攻めの姿勢で行かないと、守りに入っては数的不利で一気にやられてしまう。

「まともにとりあう必要はないよね。だってこの試合、フラッグ戦なんだし」
「相手のT-44をうまく分断して、タイマンに持ち込めば…」

全国大会決勝の、あんなチームと同じ戦法だ。しかしこの街、なかなかそれに適した場所がない。海に面している為見通しが良く、山がちな地形のため平地も少ない。

…いや、一箇所思いついた。しかし、かなり距離がある上に結構狭い。それに、かなりリスキーであった。

地図を開き、指で道をなぞっていく。そして、ある箇所で指を止めた。

「…ここなら、なんとか」

「そこですか!?そこは…難しいんじゃないか…」

華蘭さんは不安げだ。それもその筈、そもそも戦車戦をするような場所ではない。

「……でも、夏紀さんの判断に従います。どうしますか」

「……それでいいこう。なら、その前にやることがあるね」

「邪魔な車両が幾つかあるね。どうする?」

顎に手を当てて考え込んでいたとき、無線機から敵島さんの声が出た。

『現在、江崎の街が見渡せる位置にいます。主力残存は遊撃部隊と合流するつもりですよです。E—100は移動していません』

「……分かりました。だったら……千尋さん、お願いがあります」

『何ですか?もしかして、アレをとっ捕まえるの?』

「……はい。千尋さんにはE—100の撃破を狙ってもらいます。随伴に何両かつけましょうか」

『うーん……T—34を頂戴、そしたらなんとかしますから』

「分かりました。羽織さん、初めての任務がE—100の撃破なんて、大変だと思えますが……精一杯の『自己表現』をしてきてください」

『……分かりました。やれるだけの事はやってみます』

千尋は、キューポラから顔を出して、チャンスは今か今かと待っていた。

「飛び出すタイミングは、敵が発砲した直後……」

装填のタイミングを狙う。まずはE-100の元にたどり着く必要があるのだ。

敵の先頭車両、パンターが、その75mm砲から煙を噴き出した瞬間。

「行くよー！」

『はいー！』

トゥラインIIIとT-34-57、そしてバラトンのIV号戦車H型が隊列を飛び出した。

飛び出すなり、トゥラインの75mm砲から一発の砲弾が撃ち出される。それはパンターの砲塔に着弾し、白煙を吹き出す。

煙幕弾だ。千尋が最も得意とする戦術、煙幕を用いた突撃。それなら、この状況下で

も成功する可能性が十分にあった。だが、念には念を、もう一つ保険をかけていた。

『煙幕です!前が見えません!』

「前方に警戒しなさい!見えたら即刻、撃つのだよ!」

結局、1車線しかないのだ。何とか隙間を通れたとして、後続が撃破できる。

煙の幕から、砲身が覗く。

同時にパンターの砲手は砲撃していた。しかし、そこで討ち取った獲物は、予想していたものとは違った。

煙幕の中から飛び出してきたのは、白旗を上げたIV号戦車であった。相当な勢いのついていた車両はパンターに正面からぶつかり、隊列を大きく後方へ押しした。

玉突き事故のように間隔の詰まった隊列。高火力の戦車を多数配置していたため、長砲身が引つかかって砲塔旋回が困難になっていた。

「くっ… 後続車！早く下がりなさい！」

刹那、煙の中からトゥランⅢ、そしてT—34—57が飛び出す。

その2両は、極至近でこちらに照準をつけていた。撃ち出された凶弾はコメット1両、そしてT—34—85 1両を捉えた。

「… 追わなくていいわ。どうせ後続と挟み撃ちできるんだから」

そう考えた。しかし、それにも大きな誤算があったのだった。

「よし、うまくいった！」

羽織は、T—34—57の砲塔内でガッツポーズをした。砲手を兼任する彼女、最初の獲物はコメット巡航戦車であった。

『まだ油断しちゃだめだよ。第二波来るから』

そろそろ敵重戦車と遭遇する頃だ。しかし、こちらにも既に先手を打ってある。

カーブを曲がると、敵のヤークトティーガーが見えた。急制動をかけると敵の大経の砲弾は空を切った。しかし、このまま押し込まれると勝ち目はない。

その時、ヤークトティーガーの車体上面で砲弾が爆ぜる。光、音、そして煙とともに液体が飛び散るように装甲が貫通され、ヤークトティーガー最後の1両は往き足を止めた。

「… ナイスタイミング！」

斜面を駆け下りてきたのは、アウトバーンのケヌ車だった。偵察を終えて援護に来たのだ。先ほどヤークトティーガーに撃ち込んだのは夕弾。条件さえ整えば、従来を大きく上回る貫通力を発揮する、成形炸薬弾だ。

『お安いご用でしてよー！』

砲塔から顔を出してこちらに微笑んで見せた敵島。そんな彼女のケヌ車を追い越し、さらにヤークトティーガーの横をすり抜けるように追い越していく。

トゥラインとT-34-57を照準しようとしてティーガーが旋回するのを見て、すかさずにケヌ車が顔を出す。先ほどの成形炸薬弾ならば、この距離でも側面は十分に貫通できる。ティーガーは旋回を諦め、そのまま過ぎていく敵を見送った。

『早く行きなさい！ここは私が！』

「ありがとう！…じゃあ、行きましょう！」

『うん。E-100…必ず仕留めて、勝利に繋げる！』

2両の戦車は、E-100の鎮座する橋へと全速で向かう。ニュービー2両での、ジャイアントキリングが始まろうとしていた。

大物喰らいです！

敵遊撃部隊と主力残存を何とか躲し、トウラーンⅢとT-34-57は江崎の街へと戻ってきた。しかしながら、相手は単体での戦闘力は恐らく大戦最強であろうE-100。こちらが優秀な火力を持つ2両だとはいえ、相手をするには設計の古さが足を引っ張るところだ。

「とりあえず、準備するから待つてね」

港湾の建造物に遮蔽を取ってE-100との戦闘に備える。味方部隊の為にも早く撃破したいのだが、攻め急いでこちらが全滅しては元も子もないのだ。

羽織はT-34から降り、建造物の窓からE-100の姿を見た。E-100は先ほどから若干位置を変え、味方部隊に砲撃を加えている。

少し下がると、12.8cm砲が轟音とともに必殺の砲弾を撃ち出す。それはこちらからは見えぬ山の向こうへと飛翔し、爆発音を立てる。

『こちらIV号、撃破されました！』

『Iブロック後退します！』

味方はE—100からの砲撃により後退を余儀なくされている。あまり時間はなさそうだ。

「準備できたよ、行こう！」

「はい！」

千尋がモヒカン状になっているトゥラーンの砲塔によじ登る。それを見て羽織もT—34のピロシキ型砲塔へと滑り込んだ。

E—100の砲、即ち12.8cm KwK44 L/55はその大火力と引き換えに非常に長い装填時間を要する。相手が撃った瞬間に飛び出せば、10秒ほど稼げる。そこからは技術と、運だ。

炎と煙。地面が揺らぐような轟音を聴くと同時に、私たちは操縦手の背を蹴った。急加速。トゥラーンIIIもT—34—57も、お互いにかなり高機動な戦車だ。そのトラックションがアスファルトを抉り、それは砂塵と化す。港を飛び出すと、橋のたもとへと駆け込む。

E—100の車長はすぐにこちらの存在に気づいた。キューポラの中に戻ると、その

トラックほどはあるであろう砲塔がゆっくりと旋回を始める。

しかし、行足を止める訳にはいかない。しっかりと相手を照準し、全速で前進する。

2車線の橋を、2両並んで前進。そして、E—100の砲塔が旋回しきる直前、T—34—57は羽織の指示で停車する。当然、E—100はT—34—57に照準する。

「：： お願いますッ!」

T—34—57が発砲する。その砲弾はE—100の車体と砲塔の境界線を寸分違わず叩いた。

同時にE—100の12・8cm砲が吠えた。轟音が響き、ほぼ同時にT—34—57は後方へ弾き飛ばされ、転覆、欄干を押しつぶして、落下寸前で停止した。

T—34—57の砲弾は貫通しなかった。：： 否、元より貫通させる必要はなかった。

E—100は砲塔正面、ターレットリング部からぼうぼうと吹き出る白煙により白く染まった。

「チィッ：： 煙幕か!」

煙幕弾だ。躍進射撃で正確に照準し、その長砲身57mm砲を以てターレットリング部に煙幕弾を撃ち込んだ。貫通こそしなかったが、重装甲の砲塔と天板に挟まれて身動

きの取れなくなった煙幕弾は、砲塔下部で発煙を始めたのだ。

そして、その発煙弾が及ぼす影響は、それだけではなかった。

『車長！砲塔が：： 砲塔が旋回できません！』

「何だつて!?!クソツ、後退だ！車体後部を欄干にピッタリつける！」

発煙弾は砲塔と天板の隙間を押し広げてしつかりと食い込んでいた。その砲弾が抵抗となり、砲塔の旋回を妨げているのだ。これは、残された千尋にとって嬉しい誤算であつた。

「行くぞ！『まゆずみ 黛 作戦』!!」

黛作戦と命名したこの作戦。それは、ある軍艦の戦術を参考としたものだ。

煙に向かつて突撃するトゥランIII。千尋はその砲塔上に何とか立ち、カウボーイのように輪を作ったワイヤーを投擲した。それは煙幕からただ一つ姿を見せていた自慢の12.8cm砲をしつかりと捉えた。

千尋は砲塔の後ろに隠れ、しつかりと車体に掴まる。落ちたら冗談抜きで、死ぬ。

トウラインがE-100とすれ違った時、ワイヤーが12.8cm砲の根元へと達した。刹那、トウラインIIIはE-100の砲塔正面右側の角を支点に、E-100に向かつて急激に引つ張られる。履帯性能、そして旋回性能をはるかに凌駕する旋回。大日本帝国海軍の飛行艇母艦、『秋津洲』の艦長、黛治夫が船員とともに考案した、『秋津洲流戦場航海術』のうちの1つを参考にしたものだ。

E-100を中心に、接近しながらドリフトするトウラインIII。ちょうど後方に回ったところで正面装甲が後部装甲と衝突する。即ち、砲が後部に突き立っている状態だ。

「撃てエエエツ!!!」

車外からでも車内に聞こえるよう、腹から搾り出すように叫んだ千尋。その号令とほぼ同時に、トウラインIIIの43M 75mm砲は雄叫びを上げた。

ギイギイと鉄の啼く音をたて、直後に煙と炎を噴いてE-100は力尽きた。超重戦車の中戦車クラス2両で仕留める。2両の乗員の戦車道歴の短さを考えれば、近代まれに見るジャイアントキリングであった。

『なんとかやったよ…。これからどうすればいい?』

偉業を成し遂げた千尋さんは、ワイヤーを外すとすぐに橋を降りた。こちらから射線が通ってしまったためだ。

「ケヌ車と合流して、敵主力部隊を田万川地区に引き込んで欲しいんですが、お願いできませんか?」

『分かった。やってみる』

千尋さんは二つ返事で了解してくれた。私はその返事を聞いて、作戦を次の段階へ移行する。

「遊撃部隊改め主力部隊は、最終目標地点であるHF地点へ向かいます。HF地点では、敵戦力をT-44の1両に絞り込みたいです。挑発と伏撃で敵を分断してください。フラッグが1対1で仕留めます」

『了解しました。じゃあ敵のコメットは頼まれようかな』

『じゃあ、アタシと海荷でT-34-85を引き付けるよ』

方針が決まった。敵主力、即ちティーパーIIとヤークトパンター2両をケヌ車とトゥラインIIIで分断する。

そしてHF地点へ向かう間に、レオパルトがコメットを、道場破りの2両がT-34を引受け、最終的にパンターとT-44が残る。そしてパンターを私たち虎さんチームが仕留めて、T-44との最終決戦に臨む。

「では、行きましよう。全速で撤退!」

『了解!』

「敵は撤退を始めたか? ローラ、そっちはどうなってる?」

『こちらケヌ車が動き始めました。敵の作戦が発動したと考えて間違いないかと』

ローラが率いる主力部隊も、ケヌ車が動いたことで自由になる。しかし、ケヌやトゥラインも放っておくことはできない。

「: : ローラはこちらのパンターを連れて、ケヌ車とトゥラインIIIを仕留めて頂戴。こちらのことは気にしないでいいわ」

『いいんですか？こちらの戦力は足りていますが……』

「無砲塔戦車では高機動の車両は相手しにくい。旋回砲塔持ちがもう少し必要だと思うわ」

『ありがとうございます。では、戦力をお借りします』

「こちらのパンター2両を主力部隊に削いだ。それほどまでに、今はトウラーンⅢを驚異と認識していた。

「まさか、E-100がたった2両にやられるなんてね」

確かに、超重戦車は機動戦に弱い。しかし、あれだけ見通しが良く、高所の利もあったのだ。それが中戦車2両に仕留められるとは考えてもみなかった。

「中隊、全速前進。敵を追い込みます」

敵部隊は舗装された細い山岳路を通って須佐方面へと撤退していく。何か思惑を感じないでもなかったが、今は攻めるときだ。T-44-100を先頭に、沿岸を離れ山岳路へと進入していく。

山道を上り、平坦路に出たところ。逃げるアウトバーン戦車隊に追いついた試錐学園戦車隊。そんな彼女たちを密かに狙う存在があった。

T-44、コメット、そしてT-34と縦に並んで進行する試錐学園戦車隊。その後方に、ビニールハウスを突き破って飛び出してきた戦車がついた。四角いボディと砲塔、大きめのリベットが特徴的なクロムウエルだ。最後尾のT-34-85を手始めに1両屠ると、再びビニールハウスに戻っていく。

「クロムウエルか……誰か頼めるかしら」

『私たちが行きます』

手を挙げたのはT-34-85の車長。2両でクロムウエルを相手しようというのだ。

「わかった、任せるわ」

離れていくT-34。振り返らずに、車列は速度を上げていく。

「ほいきた！狙い通りだな！」

『油断しちやダメだよ』

クロムウエルを追って、T―34の1両がビニールハウスに突入する。それを俯瞰しながら、ゆつくりと照準するのは、高台に陣取ったクルセイダーだ。砲が唸るが、それなりに距離がある上に頑丈な砲塔に直撃したため弾かれてしまう。

急いで装填すると、クルセイダーは前進して急坂を下る。そして眼下の道路を走っていたT―34―85の正面に滑り込む。

『…取った！』

ターレットリング部への直撃弾。1両を仕留めたが、足を止めたため、もう1両に撃破されてしまう。

「ヤロー、よくも！」

その場を離れようと速度を上げたT―34―85。舞花は無理に追うことをしなかった。T―34の向かう先はヘアピンカーブ。立ち回り次第で先が取れる。T―34の動きを予想して、鬱蒼と生い茂る山に踏み込んでいく。

遠くでエンジン音とスキル音が聞こえる。ディーゼルエンジンを搭載するT―34は少々エンジン音がうるさい。遠くからでも相手の動きが手に取るように分かった。

「…成る程、こっちに来るか…行くぞ」

T—34の進路上に向かってクロムウエルは前進する。草木を分けて、速度を上げていく。

「……吶喊！」

茂みから飛び出したクロムウエルは、T—34—85の側面に思い切り体当たりを食らわせた。そしてそのままT—34を押し、斜面へ飛び出していく。

その先は、農業用の貯水池。飛沫を上げて2両の戦車が水中へと落下する。そして電装系をショートさせた2両はそのまま白旗を上げた。

その頃、千尋と羽織のトウラインⅢとケヌは、敵の重戦車たちを引き連れて田万川地区へと逃げ込んでいた。絶えず之字運動を行い、敵の射撃をなんとか凌ぐ。平野になつていゝ田万川は重戦車に有利なフィールドだ。ここでいかに逃げ回り時間を稼げるか、それが千尋たちに課せられた任務である。

『追ってきますね…』

「そうだね。でも、ここまで引き剥がせば、もう本隊とは合流できないでしょ」

本隊とは逆方向に全速で逃走している。引き返しても既に追いつくことはできないほどの距離だ。北浦街道から左折し、川沿いを海へ向かってひたすら進む。そして細い道を通り抜けると、砂浜へと出てきた。田万川キャンプ場に隣接する海水浴場だ。

「…」なら、こっちが有利だよ」

相手の車両に比べてこちらはいくらか軽い。足を取られる砂浜では、その軽さが大いに活きる。

「巖島さん、タ弾の残数は？」

『2ですね。それが尽きたらもう陽動くらいしかできません』

「分かりました。じゃあ、パンターを最優先に狙ってください。ティーガーは、私がやります」

丘のようになっていいる砂山を超えて、遮蔽を取る。ケヌ車に装備されているタ弾は、距離減衰がほぼ無い。こういう広い場所の方が向いているのだ。

トゥランが派手にドリフトしながら砂山から顔を出す。75mm砲はシャワールームに直撃して木片をばらまく。それを見た敵のパンター、そしてティーガーが砲を唸らせた。

その3発は砂山に吸い込まれ、砂塵を巻き上げる。そのスキにケヌ車が砂山の頂上から、タ弾でパンターの正面装甲を垂直に撃ち抜く。パンターは撃破され、煙と白旗を上げた。

『まず一つ、ですわ!』

「ナイス!今度は、私の番かな?」

再び遮蔽を取り、全速でターン。巻き上げた砂に敵が警戒したところでまったく逆方向へ全速で走り、砂山からジャンプ。狙うはヤークトパンターだ。

着地と同時に旋回しつつ停止。揺動が収まったところで75mm砲がヤークトパンターの側面装甲に弾痕を穿つ。しかし、もう1両のヤークトパンターがトウラインIIIを撃ち抜いた。

そのタイミングを敵島は逃さなかった。砂山からジャンプしつつ飛び出したケヌ車は、1度停止してタ弾によりパンターを撃ち抜く。そして更に前進、ドリフトしながらも装填し、徹甲弾でヤークトパンターの後部に決定打を撃ち込んだ。

「: : やりました!」

ケヌをティーガーIIのアハト・アハトが仕留める。しかし、敵島の任務は既に終わっていた。ティーガーIIの足では、もう戦力外の距離にいるのだ。

「∴ 勝負に勝って、試合に負けたって感じね。後はお願いします、隊長」

「じゃあ、頑張つてね、なっちゃん隊長！」

レオパルトは戦列を離れた。後ろから猛烈な速度で迫るコメットと対峙するためだ。『お願いします。∴ 後は、任せてください』

山を抜けて須佐湾に面した海岸線へと出てきた。そこで、レオパルトは山に突入して敵の到来を待つ。

T-44が駆け抜けていく。その後続、コメットが通り過ぎる寸前。レオパルトはコメットの目の前に飛び出した。左方が海のため、コメットは右に回避行動を取った。田んぼに突っ込むコメットに対し、舗装路の上から砲撃を浴びせていく。

「一発でも当たったらおじやんだ。気合入れろ——ッ！」

相手の砲は短縮されているとはいえ、英国最強の17ポンド砲だ。こちらの装甲など関係なく、何処に当たっても抜かれるだろう。砲口を見て、敵の照準を確認する。そして照準されたと予想したタイミングで操縦手の背を蹴り、減速を指示する。

ぐつと前方に荷重が移動する。捻りばね鋼のサスペンションとオーバードラッグ式の転輪が、軽戦車としては重たい部類の車体をしっかりと支える。ジャーマングレーの車体に描かれた勇ましい山猫の識別マークが、陽光を反射して、さながら鋭い眼光を放っているようだ。

加速しながら、自らも田んぼに踏み入る。1年半、伊達に源流の教えを受けてきたわけではない。機動戦にはそれなりの自信があった。

「しつかり寄せて！極至近での戦闘はこっちが有利だから！」

目と鼻の先をコメントが掠めるようにすれ違う。そして土を巻き上げながら旋回、再びすれ違う。互いの砲撃を紙一重で回避しながら、チャンスを待つ。

履帯と履帯が触れて火花が飛び散る。砲と砲が触れ合い、お互いの砲撃をいなしにくく。

「くっ…： そう簡単にはいかないか！」

1度後退する。コメントも同じことを考えたか、一旦距離を取った。そしてまるで椅子取りゲームでもしているかのように、ぐるぐると旋回する。お互いの出方を探ってい

るのだ。

車長と車長の目が合う。睨むような眼光でなく、お互いを認め合うかのような、熱い視線が交わされる。

「…前進！」

時を同じくして、コメットも動いた。旋回の中心に向かってドリフトしながら接近する。そして正面装甲同士が触れ合う瞬間、レオパルトは急制動をかけた。それに対しクロムウェルはその高初速砲をレオパルトの正面装甲に強く撃ち込んだ。

レオパルトが白旗を上げる寸前。コメットは急制動により前のめりになっているレオパルトの正面装甲をランプにバレルロールし、転覆して着地した。そして、白旗を上げる。

「… なっちゃん隊長、こっちは何とかなったよ…。」

旗をたなびかせる2両。100mm砲が時々放たれ、路面に弾痕を穿つ。パンターは之字運動でそれを回避しつつ、HF地点を目指す。

振り返れば、睨みつけるような表情でこちらを見るパイル。しかしその瞳に恨みの表情は見えなかった。少なくとも、私には。

「……決着をつけよう、今日こそ」

右目に痛みを感じる。かつてを思い出しているのだ。

2両の戦車は、海風を切り裂いて、決戦の舞台——須佐ホルンフェルス断層へと向かう。

決戦の海岸です！

逃げるパンターを追って、試合会場である須佐・田万川地区の北端まで来てしまった。車両は正反対である田万川に取り残された副隊長車、ティーガーIIを除けばフラッグのT-44-100、1両のみ。そして相手も、青い旗をたなびかせるパンターD型改G型仕様ただ1両。未だお互いに正面きつての戦いをしていないので、無傷に近かった。「どこまで行くつもりかしら。このまま行けば、突き当たりは」

須佐ホルンフェルス断層。須佐町が誇る大断層だ。とはいえ、地理的にはただの岬。広場もなければ遮蔽もない、戦闘において有利を取れるような特徴の無い場所である。

次第に強くなる風。峠を越え、晴天の下でも荒れ狂う日本海が見えた。

今日は風が強い。黒いツインテールが風に揺れ、メガネがずり落ちる。中指で位置を正すと、敵のフラッグ車を見つめた。そのキューポラには、ショートテールが躍る少女。パンターを追って岬まで出てきた。ここまで来れば、もはや逃げ場はない。ここで決着を付ける。

そんな時、パンターが急に速度を落とした。いや、停止したのだ。

こちらは発砲しながら停止行動をかけるが、一瞬遅かった。砲弾は側面のスカートをも

弾き、止まりきれなかったT-44はそのままパンターに衝突、衝撃で向きを変えながら減速する。

「あっ……！」

しかし、T-44は止まらなかった。戦車としては軽い部類に入るであろうT-44も、そうは言っても32tのボディ。そう簡単には止まらないのだ。

一瞬、私が犯した過ちを思い出した。

宙に投げ出されるM3中戦車。頬を伝う冷や汗を知らながら、私は前進をやめることができなかつた。

これは、その焼き直しだというのか……？

T-44は重力に従い、崖を滑り落ちる。そしてパンターは何を思ったかそれに続く。

ガタガタと激しい衝撃に襲われながらも、しっかりと体を支える。履帯が切れないように方向を修正し、まっすぐと降りる。大丈夫、このまま行けば水没することはない。

一層激しい衝撃に襲われて、それつきり衝撃が収まる。どうやら下りきつたようだ。

辺りを見回すと、なんの邪魔も入らないであろう平地。広くはないが、戦うことが出来ない程でもない。

「…機動戦か…」

この狭さでは遮蔽を取ることにも逃げることにも叶わない。ただボディを擦り合い、砲を弾き合うインファイトを演じる他にないだろう。

このシチュエーションを狙っていたのだ。源流が最も生きる戦場を。

…だが、私は逃げない。恐れない。諦めない。

「…決着を付けよう！」

ハツチを開いた。打ち付けた波の飛沫が頬を打つ。キツと、パンターの車長を見つめた。

「…上手いききましたね」

「ふう…ひやひやしたよ、全く…」

誰がこんな戦法を思いつこうか。緊急被弾経始の応用を戦車です。そして弾いた戦車を崖下に落とす。使う場所を誤れば大事故だが、今回の狙いはあくまで有利な状況を作ることだった。

「……」

キューポラから相手の車長、パイルを見つめる。彼女は圧倒的不利をわかっているが、疎むことも、諦めることもしていない。ただ『油断していたら首元に噛み付くぞ』と言わんばかりのプレッシャーを放っていた。

「……行くよ、準備いい?」

乗員たちに尋ねる。無論、その返答は分かりきっていたが。

「勿論。いつでも大丈夫です」

「全然オツケー!うずうずしてるくらいだよ」

「私も行けます」

「いつでも全速出せるよ!」

……頼もしい。彼女たちは私の、最高のパートナーだ。

「パイル……いや、カンナ！」

叫ぶ。波とエンジンの音にかき消されないよう、大きな、大きな声で。

「……この期に及んで何よ！」

「……ここで決着を付ける。準備はいいか！」

これは、決闘だ。お互いの過去を精算するために。償いへの第一歩を踏み出すために。

そのためにまずは、過去と決別しよう。この砲弾の応酬を以て、お互いの気持ちのやりとりをしよう。

「望むところよ！いつでもかかってらっしゃい！」

彼女はメガネを外した。飛沫で前が見えなくなること嫌ったのだろう。私はそれを見届けると、車内に戻る。

カンナが車内に戻ったのを確認して、戦闘開始の『挨拶』をする。

パン！と掠れた音が響く。互いに砲塔を打ち据えた砲弾。こちらは防盾に、相手は優秀な被弾経始を持つ側面に弾かれる。

前進。エンジンが唸りを上げる。岩に張り付いている苔や二枚貝を踏みしめて、履帯が回転を始める。

装填手が砲弾を押し込む。閉鎖機が降りて空間を隔て、砲手が砲塔を旋回させる。車体の安定を待たずに撃ち出された砲弾は、T-44の正面装甲を斜めに叩いた。

車内空間と砲弾サイズの関係から、装填時間はこちらに分があつた。火力はあちらが優勢。取り回しのことを考えれば、繊細な設計のパンターの方が優秀だろう。しかしながら、それよりもはつきりとした差があつた。車体性能、砲性能の差を霞ませるほどのものだ。

…単に、戦術の差である。源流を継承する私は機動戦に強みを持つ。対するカンナは無流派。良くも悪くも決まった型を持たない。それ故に不利を背負っている。

何とか対応するが、それでも戦闘力の差が出る。急旋回からの砲撃や、ぶつけ合い、逸らし合いにおいてこちらの乗員の方が一枚上なのだ。

距離を取って、車体の小ささと火力の高さを活かそうとT-44が後退する。それを側面に回り込む軌道で阻止し、再び車体をぶつけ合う。この戦法は源流以外では基本的に推奨されない。車体に負荷をかけすぎためだ。

「このまま圧倒するよー!」

このまま戦局はアウトバーン優勢に進むと思われた。戦っている本人たちもそう

思っていただろう。そこで、操縦手から悲痛な方向が入る。

「いっ…… 1速がイカれた！」

「……ぬるい」

カンナは相手の動きが鈍ったことに気がついた。エンジン音は低く唸り、初速があからさまに落ちていく。何かの戦略か。だが、この戦況でそんなハツタリを使う必要性がないこともまた事実だった。

「……トラブルが出てるのか」

候補は様々あるが、有力なのは1速のギヤトラブル。後期生産型の改良トランスミッションとはいえ、繊細な設計である変速機は壊れやすい。ここに来て源流の機械をいたわらない戦闘が裏目に出ている。

「…… 一気に畳み掛けるわ！前進、懐に潜りなさいッ！」

T-44が砲塔を旋回しながらパンターの側面を取る。動きのぬるい今なら行ける。しかしパンターは1速が使えない代わりにリバースギヤを用い、スピーディな被弾経始の体勢を取った。100mmの凶弾はスカートに弾かれる。

リバースギヤは変速比が大きい。というのも、どんな車両でも後退時に速度は要求しないことが多いからだ。初動はトルクの大きなギヤの方がスムーズに動ける。そのため1速に次いで変速比の大きいギヤになっているのだ。

大きな駆動力に変換する1速が死んでしまった今、その代わりになり得るギヤはリバースギヤしかない。しかし、それは立ち回りの上で圧倒的な不利を産むことになる。「相手はジリジリ下がるしかできないわ!正面から何度も仕掛けて、追い詰めるわよ!」カンナは果敢に攻めた。その圧倒的優位の牙城を崩さんと。視力不足で霞む視界も、飛沫が目に入って痛いのも気にせず、進行方向、旋回方向を指示し続けた。

そして、もう一步のところまで追い詰めた。パンターの後方には既に2mほどのスペースしかない。もう一步下がれば、海だ。

一際高い波が打ち寄せて、視界を奪う。しかし、あと一步だ。もう届く。その喉元にZIS-100を突きつけることができる。自分の過去と、決別できる。

「前進ッ!!」

ただがむしやらに命令した。手が届くと信じて。

直後、目まぐるしく戦局が動く。衝撃、縦G。履帯が擦れ合う音、砲が吠える音。水しぶきを浴びながら、2両の戦車がまるで泳ぐかのようにぬるりと動いた。

直後に、車体を大きく揺さぶる衝撃。砲塔を撃たれたのだ。しかし貫通はしない。こちらの砲撃も貫通していないらしい。眼を擦り、再び開いた。

「履帯損壊! 思い通りに動けません!」

「動く方に動かし! ちゃっちゃと敵に正面を向けるんよ!」

片方の履帯が先ほどの機動で切れたらしい。無理に旋回して、正面を晒す。

ゴトン。砲弾が装填され、閉鎖機が閉まる音が、やけにゆつくりを感じる。

砲塔が旋回される。上下方向にも微調整され、照準が整う。相手の砲口を紅い炎が塗りつぶす。それとほぼ同時に、こちらの砲も最後の一撃を与えんと吠えた。

カシャン。試合の終わりを告げる音に、私は全身の力が抜けてしまう。

撃ち抜かれたターレットリング部。砲塔からは黒く汚れた白旗が上がっていた。

『T-44-100中戦車、走行不能!アウトバーン女子学院の勝利!!』

泣くも叫ぶもできずに、私はただ脱力していた。全て出した。負けた。

…なら、それでもいいのかな、と。

向かい合い、同じく白旗を上げるパンターの車長の笑顔を見て、私はそう思った。

熱いほどに地面を灼く太陽。岩場に座り込む二人の車長。

「…お疲れ様」

「：： うん」

車内から持ってきたスポーツドリンクをカンナに渡すと、受け取って一気にあおつた。塩水が口に入ってきて喉が渴いたのだ。私も同じくで、一気に飲み干した。

「：： ぷはっ」

横を見ると、カンナが私を見つめていた。何か言いたげな顔で。

私もそれを見つめていた。しばし、沈黙が流れる。

波の音に続いて、彼女が口を開いた。

「本ツ当に：： すみませんでした!!」

そう言つて、土下座をしたのだ。

「待つて、そんな土下座なんて：： 顔を上げてよ」

「嫌だ。こうしないと、貴女が許しても私が私を許せない」

顔を伏せたままカンナが言う。こう言い始めるとテコでも聞かないところがある。

「… もう、怒ってないからさ。本当に。だから顔を上げてよ」

「慈悲なんていらぬから。怒って頂戴」

「本当に、怒ってないんだってば。あれは事故。私はもう割り切ってる」

それを聞いて、彼女は顔を上げた。割り切ったことを蒸し返すのも良くないと思ったのだろう。その通りだ。

「本当にいいの…？ 私がやったこと、償いもせずに許されていいことじゃないと思うんだけど…」

「いいんだって。ここでカンナを怒っても無意味でしょ」

それは本当に何の意味もない行為だ。苛立つてもない行為の償いをさせたところで、それは私もカンナを得しない。それよりも彼女とは有意義な会話をしたいと思った。

「最後の方。いきなりアグレッシブになったよね。あれってどうして？」

「… あれは、そちらの動きが鈍ったのを感じたからよ。貴女のパンター、1速が壊れてるんじゃないか？」

口調が戻っている。もうこれ以上謝る気は無いようだ。

「よく分かったね。確かに1速が壊れて使えなくなってた。リバーズで何とか対応して

たけど…… 苦しかったね」

「いや、よく捌ききったものです。感服しました」

実際、どうしてアレが捌けたのか自分でもわかっていない。右から左から激しく責め立てて来るし、最後には土俵際まで追い込まれたし。涼子さんの機転で立場を入れ替えるまでは負けを覚悟していた面もあった。

「…… あのさ」

「はい」

言おうと思っていた言葉、今言おう。私のモヤモヤとした気持ちを一言で表現するなら、これしかないと思った。

「これからもずっと、一番のライバルでいてよ」

「…… ええ、勿論」

涙がこぼれそうなほどの笑顔を見せて、彼女は微笑んだ。シガラミを振り切つて、彼女とは良きライバルでありたいと、再び願うのだった。

戦闘不能になった試錐の車両たちが、続々と列車に積み込まれていく。E—100だけは積み込めないのです、砲塔だけ載せて車台は船舶で輸送するらしい。

「今日は試合を組んでくれてありがとう」

「いえ。こちらにも有意義で、課題の残る試合でした。戦車の性能に頼ってばかりではないわね」

微笑む彼女は、既にほの暗い一面と決別していた。色々なものを振り落とした彼女は、中学時代私とライバルだった越前カンナそのものだった。

「今度、戦練専とエキシビジョンマッチをするらしいわね」

「うん。そろそろ詳細の連絡が来ると思う」

「ウチの妹をよろしくね」

妹。そう言われて戦練専のことを思い浮かべた。隊長である越前紀伊と彼女の容姿が重なって…

「姉妹だったんだ」

「知らなかったの？ てつきり知っているものだとはかり思ってたわ」

確かに、色違いみたいに似ている姉妹かもしれない。髪型も、メガネをかけていることも似ている。これで彼女が無流派、妹の紀伊が島田流だというから驚きである。

「私も全国大会目指して頑張るから。貴女も頑張りなさい、冬季杯、今年はどうするの？」

「今年も出るけど、私は乗らない。次世代たちに任せるつもり」

このことは後輩に言っていないので耳打ちで。彼女はクスリと笑う。

「…… 大変ね」

「…… お互いにね」

彼女は踵を返す。客室の入口に片足を踏み込んだところで歩みを止めた。

「次はどこで出会うかしらね」

「…… 大学？ 社会人かもね」

「ははっ、楽しみにしてるわよ。強くなつて、かかってくるなさい！」

「カンナこそ。退化したら承知しないからね」

くすりと笑うと彼女は今度こそ客室へと入っていった。

煙を噴いて重連の貨物列車が進む。私たちは手を振ってそれを見送った。

「どうでしたか? パイルさんとの試合は」

「有意義だったよ。私も、肩の荷が下りた気分」

萩市街地に向かうマウルティアの荷台。疲れきったメンバーたちが眠りに落ちていく中、華蘭さんと私は最後部で風を浴びていた。

「… 夏紀さんのそんな笑顔、初めて見た気がします」

「そう? いつもと同じだと思っただけど」

「良くも悪くも、吹っ切れたって感じですよ」

夕日が日本海に沈んでいく。澄み渡るエメラルドグリーンの海は、陽の光を受けてオレンジに染め上げられていた。先ほどまで強かった風は凪になり、海面は穏やかに揺れていた。

「… 私たちの世代も、もう少しだね」

「はい。でも、私たちに出来ることはまだまだありますよ」

カタカタと履帯が地面を踏みしめる。心地よい振動に、ゆっくりと眠気が迫ってくる。

「……おやすみなさい」

「……うん」

私は陽の光に眠気を誘われて、ゆっくりと眠りに落ちた。

終止符の試合です!

ジリジリと肌を焼くような灼熱の炎天下。一両の鉄馬が山を駆け下りていた。

「居ない……隠れたかな……」

ジャーマンガレーに塗られたパンター。焼けるように熱い砲塔に設けられたキューポラから顔を出して、周囲の偵察を行う。

「敵車両は全幅は小さいですが車高が高いですから、隠れているというのは考えにくいと思います」

「でも、これだけ深い山だし、土もかなり柔らかい。掘るのは簡単だから、掩蔽壕を作ったのかもよ?」

「敵の乗員4名のうち、操縦手と車長は流石に車両を離れないと思う。穴を掘るには時間も人数も足りない」

「……やっぱり、敵は動いていると考えるのが妥当じゃない?」

乗員の皆が意見を出してくれる。その意見は概ね私の考えと同じだった。

「だよね。だったら動いて探さなきゃ」

「でも、あまり動きすぎると敵に見つかるんじゃない?」

「相手の砲はこつちを容易く貫通出来る。停止するのは得策じゃないね」

一際大きな段差を乗り越える。涼子さんが軽く減速したおかげで多少はマシだが、車内を大きな衝撃が襲う。

「おつと……ごめんよー」

「大丈夫です。街道に出たので、ここを下りましょう」

舗装されていない道路に出た。山を縫うように山頂へ向かう林道だ。麓方面へ動き始めて、しばらくしたとき。

「……！ 停止！ 被弾経始を！」

「了解っ！」

停止と同時に車体が斜めに傾斜される。その瞬間に側面を舐めるように叩く弾丸。シウルツェンが弾け飛び、重苦しい音を立てて地面を滑走した。

「見つけた、夏摘！」

……何故、私たちがこんな試合をしているのか。話は、2週間ほど遡る。

「ただいまー」

「あ、おかえり。早かったね」

「寄港がちよつと早くなつたから、一本前の電車に乗れたんだ」

重そうなボストンバッグを下ろしたのは、妹の夏摘だ。取り出したタオルで汗を拭くと、机を挟んで私の向かいに座る。

「夏休みも半ばだね」

「残りはどれくらいこっちにいますの?」

「ずっといられるはずだよ……確か」

スマートフォンを叩いて軽くうなずいた。予定は記憶していた通りだったのだろう。

「私たちもそろそろ引退だね。お姉ちゃんも冬季杯には出るの?」

「今回は出ないよ。後輩に任せるつもり」

「やつぱり? 私もなんだ。じゃあ公式戦はもう無いね」

「……あー、そっかあ……もう公式戦無いのか」

言われてみればそうだ。全国大会とその予選は終わったし、秋は空白期間。冬に控える冬季杯まで、私たちが出られるような大会は無い。

「なんか、さみしいね……何か出とくんだったかな」

その時、ポケットで鳴動するスマートフォン。チャット型SNSのグループへの招待だった。

「ひと試合、一緒にやらない？」

グループの名前は『引退試合』。そこには私の知るメンバーがそろい踏みだった。

その数日後。アウトバーン女子学院学園艦の甲板上にある喫茶店に、虎さんチームの面々は集まっていた。

「へえ……引退試合ですか」

「いいね。確かにこれで引退は何か寂しいし」

華蘭さんと涼子さんは賛同。その横でパンケーキをつづいている幹葉さんもこくこくと頷いている。

「私もいいと思う。ちなみに相手はどこ?」

「琴音さんは疑問を呈した。私はそれにグループブトックのメンバーを見せることで答える。」

参加チームは全部で6チーム。それぞれ隊長車のみが出場する。

主催となる、モニュメントバレー田園高校。

私たち、アウトバーン女子学院。

全国大会へも出場した強豪、試錐学園。

冬季杯の主催校、戦練高等専門学校。

アウトバーンの姉妹校、バラトン水産技術学院。

隠れた強豪、ブリテン高校。

どこも一級品の戦闘力を持つチームで、混戦が予想される。

「うひゃー……これはまた、豪華な」

「うん。それこそ冬季杯の決勝で戦ってもおかしくないようなチームばかりだよ」

それこそ、モニュメントバレーは冬季杯の決勝で戦った相手だし、ブリテンには敗北を喫している。試錐なんて全国大会でも善戦した強豪だ。

「最後にこんな豪華なメンバーと戦えるなんて……思ってもみなかったね」
「ですね。こんな機会、逃す手は無いですよ」

虎さんのみんなはやる気に満ちていて助かる。予定もあるだろうし、交渉が必要だと
思っていたのだが。

「じゃあ、1週間後に試合ね！ 頑張ろう！」

「おーっ！」

そんなこんなで、試合への参加が決まったのだった。

その翌日。広島県にある大きなビルの前で、私は深呼吸をした。

「ふうー……っ。大丈夫、別に緊張することはない……」

水色のリボンを整えて、オフィスのガラスで自分の姿をチェックする。髪も顔も、服
装も。全てよどみなくいつもの自分だ。

我さきにと高まる心音を宥めて、自動ドアをくぐる。受付の女性が立ち上がり会釈を

してくれましたので、私もそれに会釈を返す。

「ようこそ、アサギ・パンツアーワークへ。本日はどういったご要件でしょうか」

「えっと……麻木さんはいらつしやいますか。面会の約束があるのですが」

「少々お待ちください」

そう伝えると、受付の女性は手元の資料を確認する。そして受話器を取って電話をかける。恐らく内線であろうそれは、端的に要件を伝えるとすぐに切られた。

「そちらのエレベーターに乗られて、11階で降りられましたら社長室となっております」

「ありがとうございます」

まるで企業の面接のようで緊張する。まあ、実質面接とあまり変わりはないのだが。

11階を知らせるベルが鳴る。開いたドアから降りると、廊下の奥に木製の大きなドア。かけられた札が、ここが会議室であることを示していた。

唾を飲み込んで、呼吸を整える。ドアをノックすると艶のある声で『どうぞ』の返事。

「失礼します……」

「あは、いらつしやい。そんなに畏まらなくてもいいのに」

そこには仕事だからか、銀髪をポニーテールにまとめた美穂子さんがいた。スーツ姿もカチツと決まっっていて、出来るキャリアアウーマンっぽさが滲み出していた

「まあ座つてよ。お茶は……いつか。そんなに長くないから」

ローテーブルを挟んだソファに腰掛けると、向かいに美穂子さんも座る。

「遠かったでしょ。山口から電車？」

「いや、今は呉に寄港してるので」

「そうなんだ、知らなかった。そのついで？」

「寄港日に合わせて予定を組んだんですよ」

足を組みかえるその所作にも、スタイルの良さからくるエレガントさを感じる。これも若くして社長を任される彼女の、一種の才能だろう。

そして私の胸元にささやかに佇む3%ほどの勾配を見て、溜息。

「そういえば今度、試合やるのね？ バーバリーが浮ついた調子で電話をかけてきたから」

「ああ、はい。この辺の強豪校たちの隊長チームで」

「ふーん……面白いことを思いつくものね」

美穂子さんは途端にニヤニヤし始めた。きつと何か悪巧みをしているのだ。

「……おっと。それよりも本題ね。どうする？ 例の話は」

「今のところ、かなり前向きに検討してます。余程のことがない限りはお世話になるかと」

「そう。それは良かったわ。この話、夏紀が乗らないワケはないと思ってたから」
「……どうして、そう思うんですか？」

「だって、私とアナタはともウマが合うじゃない。きっと上手くいくわ」

「——アサギ・パンツァーワーク技術部は、いつでも『三城夏紀隊長』を迎えるわ」

ふと目が覚めて、うんと伸びをした。降ろしたカーテンを少し上げて外を見ると、既にすっかりと明るくなっていた。スマートフォンで時刻を確認すると、午前9時。

「んっ……う」

立ち上がって、客車を出る。最後部のデッキに出ると、そこからは燦然と輝く太陽と、それに照らされたススまみれの愛車たちが見える。

「……そっか、そうだったな」

鮮明に蘇る記憶。全国大会の壁はやはり厚く、これだけの戦力を用意しても敵わなかった。愛機であるT-44-100はその最前列に、静かに佇んでいた。

「まだまだ、甘かったって事かな」

全国大会。日本各地の猛者たちが集まるそのステージで、私は圧倒的性能差を持ちながらそれを活かせず、敗北を喫した。地方大会では通用した技術も、全国のステージではまだまだ稚拙であったということ。認めてしまえば呆気ない事実だ。

「どうしました？ 隊長。お体が優れませんか？」

声をかけてきたのは、副隊長を任せていたローラだ。普段は綺麗に整っている金髪も、夜通しの自動車移動であちこちが跳ねている。

「いや、感傷に浸っていたのだけど、その必要もないなって思っていたところよ」

「……？」

ローラが頭の上に『？』を浮かべているのを見て、少しクスツときてしまう。

「……この全国大会、得るものはあつたかしら」

「はい。敗北は教訓になります。これを活かし、来年の全国大会で雪辱を晴らすのが、私たちの仕事……そうですよね」

「……うん。期待してる」

これで私の公式戦は最後だけれど。全国大会、そして冬季杯で、この雪辱を晴らしてくれる。この後輩たちなら、そう信じられる。

今年から大幅な増車を行った戦練高等専門学校。その演習場である下関市街地を駆け抜ける、1両の戦車。少し歪な薄型の砲塔を持つ中戦車だ。

「慣らしもいい感じに終わってきたかな。どう?」

「いい感じ。ミツシヨンの入りも良くなってきたし、モタつく感じもないね」

新車ということで、慣らし走行の最中であった。慣らしが終わらないと全ての性能を発揮することは出来ないし、無理をすると破損の原因になる。戦車だけでなく、乗り物界の常識とも言えるかも知れない。

この新車、非常に良い動きをする。軽快な足回りと優秀な砲を前型から受け継ぎつつ、力の受け流し方や負荷のかかり方に無理がなくなつて、精度がさらに向上している。

「あつ、ここは……」

海峽ゆめタワーのたもと。冬季杯にて、こちらの主力であるIS-3が軽戦車であるレオパルトに撃破された場所だ。戦車を宙吊りにするなんて発想は、形式ばった戦車道しか知らない私には予想も出来なかった。

霧という不確定要素があつたにせよ、あの戦果が無ければアウトバーンが私たちに勝つことは不可能だつただろう。それほどまでに勝利に自信があつたとも言える。

「懐かしいなあ、もう半年前か」

この下関市街地を、エンジン音が、砲声が、摩擦音が彩り、世界各国の戦車が駆け巡った祭典から、半年。懐かしさを覚えつつも、どこか最近の記憶のようで。

「あと、半年」

既に体が疼いているのが分かる。あと半年で、あの熱狂が帰ってくるのだ。

「でも、三城姉妹も、ヴィヴィアンさんもないんだもん」

去年、試合を盛り上げてくれた立役者達は、今年の出場を見送るだとか、あるいは既に卒業しているだとかで、もうこの場で戦うことはない。淋しいが、新たな出会いが楽しみでもある。

「冬、まだかな」

乾いた甲板上を撫でる風。畑の砂を巻き上げて立つ砂埃が、『砂塵の戦車隊』の所以。そんな砂埃の中で、ゴーグルを当てて遠くを見つめる少女。

「隊長、痛くないんですか?」

「大丈夫。それよりもこの車両のテスト中なんだから、計器に集中して」

傾斜された正面装甲と曲線的な砲塔、そして長く伸びた砲が特徴的なM4シャーマンの派生車両、シャーマン・ファイアフライ。エース車両として第一線で戦うこの車両を、この度新型に変更した。

製造式の丸いボディから溶接式の平らなボディへ。低下した防御力を追加装甲で補った。そしてエンジンを従来の星型30気筒という気が狂ったようなものからフォード製のV8液冷エンジンへ換装してある。即ち、色々な仕様からニコイチしたいところ取り仕様だ。

「にしても、『シャーマン VC ファイアフライ改 V8』なんてよく審議通りましたね……」

「最近の戦車道連盟はそのへん甘いからね。カールの件で……」

色々な車両の認可が通りやすくなっているのも事実。カールに比べれば、こんなエンジン換装程度の改造はおりこう過ぎるくらいだ。

「煙や異音は無し……防塵も、ちゃんと出来てるね。操縦手はどう？」

「全然オツケーです。心配されてた油温、水温ともに安定してますよ」

「そっか。ならよかった」

冬季杯に向けて、後輩たちが楽な環境を作つてやろうと努力してきた。その一つがここで実つたことになる。

「……冬季杯、か」

半年前を思い出す。今の私を作つた試合だ。冬季杯が無ければ、お姉ちゃんと再開する事はなかった。

ふと風が止んで、砂嵐が晴れた。青々とした植物に彩られた甲板にポツリと佇む戦車は、さぞ絵になっていることだろう。遠くを見れば、微かに見える日本の本土。

「楽しみだな。みんな、強くなってるんだらうな」

半週間後に迫る引退試合。各々がそれぞれの想いを抱いて、戦いに臨む。